

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 219

鍛冶屋D遺跡

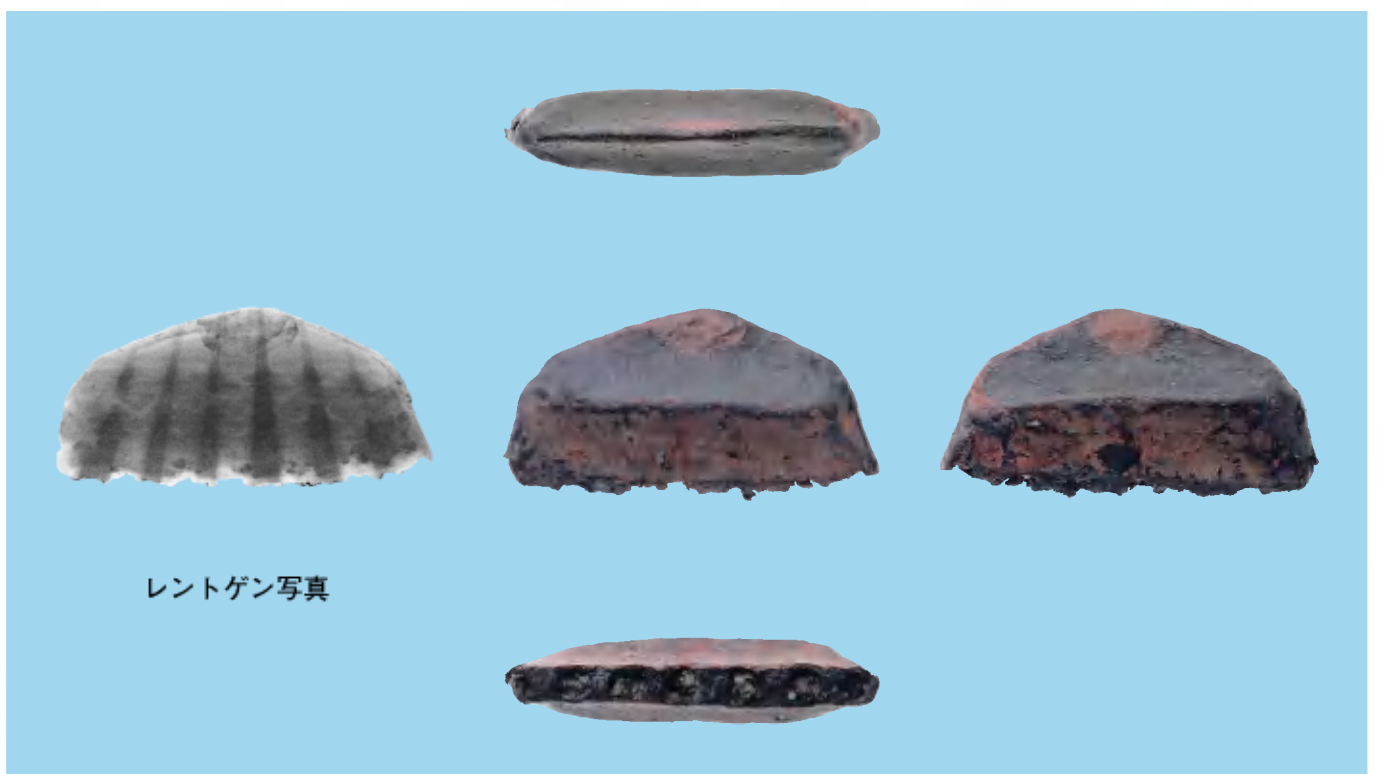
主要地方道佐伯長船線(美作岡山
道路)道路改築に伴う発掘調査6

2009

岡山県教育委員会



1 調査区（空撮、南から）



2 縄文時代の豎櫛（流路 17 出土）



1 竪穴住居 1 (空撮)



2 井戸 1 (北東から)

序

本報告書は、主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）道路改築のうち山陽道以南のアクセス道の整備事業に伴って平成17・18年度に実施した岡山市瀬戸町（旧赤磐郡瀬戸町）鍛冶屋地内の鍛冶屋D遺跡の発掘調査の記録です。

美作岡山道路は、中国縦貫自動車道・山陽自動車道等と県内循環型高速自動車網を形成するために県東部を南北に結ぶ地域高規格道路として計画されたものです。

この計画について岡山県教育委員会では、埋蔵文化財保護の観点から、道路建設に先立ち県の担当部局との協議を重ねてまいりましたが、工事掘削等によって現状保存が困難な遺跡については、発掘調査を実施し、記録保存の措置を行うことになりました。

発掘調査の結果、鍛冶屋D遺跡では、調査区ほぼ全域で砂礫で埋没した縄文時代の自然流路が多数検出され、そのうちの一つである縄文時代晩期の流路からは、土器や石器、トチ・ドングリなどの種実や大小の流木等とともに、漆塗りの竪櫛が出土しました。

竪櫛は、黒と赤の漆により塗り分けられており、この時期の竪櫛としては県内2例目の貴重な発見となりました。また、弥生時代では、竪穴住居、掘立柱建物、土壙等のほかに用水路と灌漑施設と考えられる溝、杭列を検出しています。竪穴住居は、壁や床面は削平されていましたが、住居を取り囲むように巡る溝が検出される数少ない貴重な事例となりました。

これらの調査成果を掲載した本書が、学術研究に寄与できるだけでなく、地域の歴史解明や埋蔵文化財の保護・保存のために活用される事ができれば幸いに存じます。

発掘調査の実施と報告書の作成にあたりましては、埋蔵文化財保護対策委員会の委員の方々から有益な御指導と御教示を賜りました。また、岡山県備前県民局、旧瀬戸町教育委員会等の関係者各位、並びに、地元の方々から多大な御理解と御協力を賜りました。末筆ながら記して厚く御礼申し上げます。

平成21年3月

岡山県古代吉備文化財センター
所 長 藤 川 洋 二

例 言

- 1 本書は、主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）地方特定道路整備事業（アクセス道：山陽道以南）に伴い、岡山県教育委員会が岡山県備前県民局建設部の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した鍛冶屋D遺跡の発掘調査報告書である。また、主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）道路改築に伴う発掘調査報告書の第6冊目に当たる。
- 2 鍛冶屋D遺跡は岡山市瀬戸町（旧赤磐郡瀬戸町）鍛冶屋446ほかに所在する。
- 3 発掘調査は、平成17年度に鍛冶屋D遺跡Ⅰ区の本調査と同遺跡Ⅱ区の確認調査を、岡山県古代吉備文化財センター職員、中野雅美・山磨康平・二宮治夫・大橋雅也・小松原基弘・小嶋善邦・米田克彦・團奈歩・山崎孝盛が担当して実施した。また、平成18年度に鍛冶屋D遺跡Ⅱ区の本調査を同センター職員、平井泰男・山磨・二宮・小松原・河合忍・石田爲成が担当して実施した。調査面積は総計13,890㎡である。
- 4 発掘調査および報告書作成にあたっては、「美作岡山道路建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」を設け、次の方々を委員を委嘱した。保護対策委員各位からは、有益な御指導と御助言をいただいた。記して深謝の意を表す次第である。
 - 角南勝弘（美咲町教育委員会）＜平成16年度から＞
 - 土居 徹（津山市田邑公民館）＜平成15年度まで＞
 - 富岡直人（岡山理科大学総合情報学部）＜平成17年度から＞
 - 野崎貴博（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター）
 - 間壁忠彦（倉敷考古館）
 - 松木武彦（岡山大学文学部）＜平成16年度まで＞
- 5 本書に関係する遺物等については、下記の諸機関に同定・分析・測定を依頼し、有益な教示を得た。また、土壌分析・年代測定・種実同定の結果については、本書付載に掲載した。
 - 土壌の花粉分析・植物珪酸体分析 パリノ・サーヴェイ株式会社
 - 杭・煤・種実の年代測定、種実同定 株式会社古環境研究所
- 6 本書の作成は、平成18年度に平井、平成19年度に山磨が岡山県古代吉備文化財センターにおいて担当して実施した。
- 7 本書の編集は平井、山磨が担当し、執筆は平井・山磨・大橋・河合・石田が分担し、文責は各項目の文末に明記している。
- 8 遺構写真については調査担当者が撮影し、遺物については、江尻泰幸氏の協力と援助を得た。
- 9 出土遺物および図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

凡 例

- 1 本書に用いた高度値は海拔高であり、方位は平面直角座標第Ⅴ系（世界測地系）の座標北である。図中の座標値および報告書抄録に記載した経緯度は、世界測地系に準拠している。
- 2 本書に掲載の遺構および遺物実測図の縮尺は個別に明記している。
- 3 遺構全体図のなかに示す遺構名は、次のように略称を用いた。
 竪穴住居：住 掘立柱建物：建 土壇：土 柱穴列：柱 流路：流
- 4 本書に掲載した遺物番号については、土器、鉄器、石器、木器、骨製品に分けて通し番号をつけ、鉄器、石器、木器、骨製品については、次の略号を付している。
 土製品：C 石器：S 金属器：M 木製品：W 骨製品：B
- 5 掲載した土器のうち中軸線の両側に白抜きのあるものは、小破片で、口径復元に不確実性があることを示している。
- 6 遺構の堆積土層と土器観察表に示した色調は、基本的に『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・（財）日本色彩研究所色票監修）に準拠している。
- 7 第2図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「万富」・「備前瀬戸」を複製・合成・加筆したものである。
- 8 時代・時期区分は一般的な呼称を用い、特に統一していない。また、西暦による年代なども併用している。

目 次

巻頭図版

序

例 言

凡 例

本文目次・図目次・表目次・図版目次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 発掘調査の経緯と経過	5
第1節 発掘調査に至る経緯	5
第2節 発掘調査および報告書作成の経過	5
第3節 発掘調査および報告書作成の体制	7
第3章 発掘調査の概要	9
第1節 調査区の概要	9
第2節 I区の調査	10
1 縄文時代の遺構・遺物	10
2 弥生・古墳時代の遺構・遺物	16
3 古代・中世の遺構・遺物	29
4 近世以降の遺構・遺物	44
第3節 II区の調査	47
1 縄文時代の遺構・遺物	47
2 弥生・古墳時代の遺構・遺物	65
3 古代以降の遺構・遺物	92
第4章 まとめ	93
付載1 鍛冶屋D遺跡古代水田の自然科学分析	104
付載2 鍛冶屋D遺跡における放射性炭素年代測定	111
付載3 鍛冶屋D遺跡における自然科学分析	115

図版

報告書抄録

目 次

第1図	遺跡位置図 (1/1,500,000)	1	第40図	土壇 4・5・6 (1/30)	31
第2図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2	第41図	土壇 7・8・9 (1/30)	31
第3図	調査区位置図 (1/20,000)	4	第42図	土壇10・11・12 (1/30)	32
第4図	調査区位置図 (1/5,000)	9	第43図	土壇13・14・15・16・17 (1/30)	33
第5図	流路1 (西壁) (1/80)・出土遺物 (1/4)	10	第44図	集石1 (1/30)	34
第6図	I区縄文時代遺構全体図 (1/1,000)	11	第45図	井戸1 (1/30)・出土遺物① (1/4)	34
第7図	流路2 (1/80)・出土遺物 (1/4)	12	第46図	井戸1出土遺物② (1/2・1/4・1/6・1/12)	35
第8図	流路3 (1/60)	12	第47図	たわみ4 (1/30)	35
第9図	流路3出土遺物 (1/4・1/2)	13	第48図	溝25・26・27 (1/30)	36
第10図	流路4、溝14・15 (西壁) (1/60)	13	第49図	溝28 (1/30)	36
第11図	流路5 (西壁) (1/80)	13	第50図	溝29・30 (1/80)	37
第12図	流路6出土遺物 (1/4・1/6)	14	第51図	溝29・30出土遺物 (1/4・1/3)	37
第13図	その他の出土遺物 (1/4・1/2)	15	第52図	溝32 (1/60)	38
第14図	土壇1 (1/60)	16	第53図	溝34 (1/60)	38
第15図	土壇2 (1/60)・出土遺物 (1/4)	16	第54図	溝35 (1/60)・出土遺物 (1/4)	38
第16図	I区弥生・古墳時代遺構全体図 (1/800)	17	第55図	たわみ5、水田2 (南壁) (1/80)	38
第17図	土壇3 (1/30)	18	第56図	溝33、土手状遺構1 (東壁) (1/80)	39
第18図	たわみ1 (1/30)	18	第57図	土手状遺構1 (西壁) (1/60)	39
第19図	たわみ2出土遺物 (1/4)	18	第58図	流路8 (1/30)	40
第20図	溝1 (1/30)・出土遺物 (1/4)	18	第59図	流路9・10・11 (東壁) (1/60)	40
第21図	溝2・3 (1/30)・溝2出土遺物 (1/4)	19	第60図	流路11・12 (1/30・1/60)	41
第22図	溝4 (1/30)	20	第61図	流路13・14 (東壁) (1/80)	41
第23図	溝5・6・7 (1/30)	20	第62図	その他の出土遺物① (1/3)	41
第24図	溝8・9・10 (1/30)	21	第63図	その他の出土遺物② (1/4)	42
第25図	溝11 (1/60)・出土遺物 (1/4)	21	第64図	その他の出土遺物③ (1/4)	43
第26図	溝12・13 (1/30)	21	第65図	土壇18 (1/30)	44
第27図	溝16・17・18 (1/30)	22	第66図	井戸2 (1/30)	44
第28図	溝21出土遺物 (1/6)	22	第67図	I区近世以降遺構全体図 (1/1,000)	45
第29図	溝19・20・21・22・23・水田1 (1/200)	23	第68図	溝36 (1/60)	46
第30図	溝24 (1/200)	23	第69図	溝37 (1/60)	46
第31図	溝19・20・21・22・23、水田1 (1/60)	24	第70図	その他の出土遺物 (1/3)	46
第32図	溝21 (1/40)	24	第71図	土壇19 (1/30)・出土遺物 (1/4)	47
第33図	溝19・20・21・23・24出土遺物 (1/4・1/2)	25	第72図	II区縄文時代遺構全体図 (1/800)	48
第34図	溝19・21・22・23・24、水田1、流路6 (西壁) (1/80)	26	第73図	流路15・16 (1/80)	49
第35図	溝24、流路6 (1/60)	27	第74図	流路17・25・27 (1/100・1/60)	50
第36図	流路7 (1/80)・出土遺物 (1/4)	27	第75図	流路17出土竪櫛 (1/2)	51
第37図	その他の出土遺物 (1/4)	28	第76図	流路17出土遺物① (1/2)	51
第38図	I区古代・中世遺構全体図① (1/800)	29	第77図	流路17出土遺物② (1/3)	52
第39図	I区古代・中世遺構全体図② (1/800)	30	第78図	流路17出土遺物③ (1/4)	53
			第79図	流路17出土遺物④ (1/4)	54

第80図	流路17出土遺物⑤ (1/4)	55	第118図	土壇32 (1/30)・出土遺物 (1/4)	76
第81図	流路17出土遺物⑥ (1/4)	56	第119図	土壇33 (1/30)・出土遺物 (1/4)	77
第82図	流路17出土遺物⑦ (1/4)	57	第120図	土壇34 (1/30)・出土遺物 (1/4)	77
第83図	流路17出土遺物⑧ (1/4)	58	第121図	土壇35 (1/30)・出土遺物 (1/2)	77
第84図	流路17出土遺物⑨ (1/4)	59	第122図	土壇36 (1/40)	78
第85図	流路17出土遺物⑩ (1/4)	60	第123図	土壇37 (1/30)	78
第86図	流路18 (1/100)	60	第124図	土壇38 (1/80)	79
第87図	流路18出土遺物 (1/2)	61	第125図	土器溜り1出土遺物 (1/4)	79
第88図	流路19 (1/60)	61	第126図	溝38・39 (1/30)・溝38出土遺物 (1/2)	79
第89図	流路20 (1/60)	61	第127図	溝40 (1/20)	79
第90図	流路21出土遺物 (1/4)	61	第128図	溝41 (1/30)・出土遺物 (1/4)	80
第91図	流路21 (1/60)	62	第129図	溝42 (1/30)・出土遺物 (1/4)	80
第92図	流路22 (1/30)	62	第130図	溝43・44 (1/30)	80
第93図	流路22出土遺物① (1/4)	63	第131図	溝45・46・47 (1/60)	81
第94図	流路22出土遺物② (1/4)	63	第132図	溝48・49・50 (1/60)	82
第95図	流路23出土遺物 (1/4)	64	第133図	溝48・50出土遺物 (1/4)	82
第96図	その他の出土遺物 (1/2・1/4)	64	第134図	溝51 (1/60)	82
第97図	竪穴住居1① (1/60)	65	第135図	落ち込み1 (1/60)	82
第98図	竪穴住居1② (1/100・1/40)	66	第136図	落ち込み2 (1/60)	82
第99図	Ⅱ区弥生・古墳時代遺構全体図(1/600・1/200)	67・68	第137図	流路24木材出土状況 (1/30)	83
第100図	竪穴住居1出土遺物 (1/4)	69	第138図	流路24・25 (1/60)	83
第101図	建物1出土遺物 (1/4)	69	第139図	流路24・26 (1/60)	84
第102図	建物1、柱穴列1 (1/60)	70	第140図	流路24出土遺物 (1/4・1/2)	85
第103図	建物2 (1/60)	71	第141図	流路25出土遺物① (1/3・1/2)	85
第104図	土壇20 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)	71	第142図	流路25出土遺物② (1/4)	86
第105図	土壇21 (1/40)	72	第143図	流路27出土遺物① (1/3)	86
第106図	土壇22 (1/40)	72	第144図	流路27出土遺物② (1/4)	87
第107図	土壇21出土遺物 (1/2)	72	第145図	流路27出土遺物③ (1/4)	88
第108図	土壇23 (1/30)	73	第146図	流路27出土遺物④ (1/4・1/2)	89
第109図	土壇24 (1/30)	73	第147図	流路28出土遺物 (1/4)	90
第110図	土壇25 (1/40)・出土遺物 (1/4・1/2)	73	第148図	流路28 (1/160)	91
第111図	土壇26 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)	74	第149図	流路29 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)	91
第112図	土壇27 (1/30)	74	第150図	Ⅱ区古代以降遺構全体図 (1/1,500)	92
第113図	土壇28 (1/30)・出土遺物 (1/4)	74	第151図	溝52・53・54 (1/30)	92
第114図	土壇29 (1/30)・出土遺物 (1/4)	75	第152図	縄文時代晩期中葉の土器 (1/8)	94
第115図	土壇30 (1/30)	75	第153図	住居外周溝の事例① (1/300)	97
第116図	土壇31 (1/60)	75	第154図	住居外周溝の事例② (1/300)	99
第117図	土壇31出土遺物 (1/4)	76	第155図	住居外周溝の事例③ (1/300)	100

表 目 次

第1表	文化財保護法に基づく提出書類一覧	8	第3表	遺物観察表	129
第2表	外周溝または周堤を確認した竪穴住居一覧	96	第4表	新旧遺構名称対照表	140

図 版 目 次

- 巻頭図版 1 1 調査区（空撮、南から）
2 縄文時代の竪櫛（流路17出土）
- 巻頭図版 2 1 竪穴住居 1（空撮）
2 井戸 1（北東から）
- 図版 1 調査区（I区）（空撮、北西から）
- 図版 2 1 井戸 1（北東から）
2 井戸 1（北東から）
3 井戸 1（北東から）
- 図版 3 1 井戸 2（南東から）
2 溝 2（北東から）
3 溝 3（北東から）
- 図版 4 1 溝 4（東から）
2 溝 5（北から）
3 溝 5 礫堆積状況（北から）
- 図版 5 1 溝 9・10（南西から）
2 溝 11（北西から）
3 溝 17・18（南東から）
- 図版 6 1 溝 19～23（南東から）
2 溝 19～23（北東から）
3 溝 21 杭列（東から）
- 図版 7 1 溝 21 杭列（南から）
2 溝 24（北西から）
3 水田 1 下面（東から）
- 図版 8 1 水田 2（西から）
2 流路 6（西から）
3 流路 6 東壁（南から）
- 図版 9 1 流路 6 杭列（南東から）
2 流路 9・10（北東から）
3 流路 12 東壁（南西から）
- 図版 10 I区出土遺物①
- 図版 11 I区出土遺物②
- 図版 12 I区出土遺物③
- 図版 13 1 流路 15（南東から）
2 流路 17（南から）
3 流路 17（南から）
- 図版 14 1 流路 17（南西から）
2 流路 17（南東から）
3 流路 19・28（北西から）
- 図版 15 1 流路 21（南から）
2 流路 22（北西から）
3 流路 23（北から）
- 図版 16 1 竪穴住居 1（空撮）
2 竪穴住居 1（南から）
3 建物 1・柱穴列 1（南から）
- 図版 17 1 建物 2・溝 48・49・50（南から）
2 土壇 19・21・22（北東から）
3 土壇 25（北西から）
- 図版 18 1 竪穴住居 1 中央穴（南東から）
2 竪穴住居 1 P 5（東から）
3 土壇 19（南から）
4 土壇 23（北から）
5 土壇 26（東から）
6 土壇 27（南東から）
7 土壇 29（西から）
8 土壇 30（西から）
- 図版 19 1 土壇 32（西から）
2 土壇 34（東から）
3 土壇 36（北東から）
- 図版 20 1 溝 46（東から）
2 溝 47（西から）
3 溝 49（西から）
- 図版 21 1 流路 24（北西から）
2 流路 24・25（北から）
- 図版 22 1 流路 24 木材溜り（北西から）
2 流路 24 東壁（西から）
3 流路 24・26（北東から）
- 図版 23 1 流路 27（北から）
2 流路 27 土器溜り（北から）
3 流路 27 土器溜り（西から）
- 図版 24 1 流路 28（南から）
2 流路 29（南東から）
3 落ち込み 1（西から）
- 図版 25 II区出土遺物①
- 図版 26 II区出土遺物②
- 図版 27 II区出土遺物③
- 図版 28 II区出土遺物④

第1章 遺跡の位置と環境

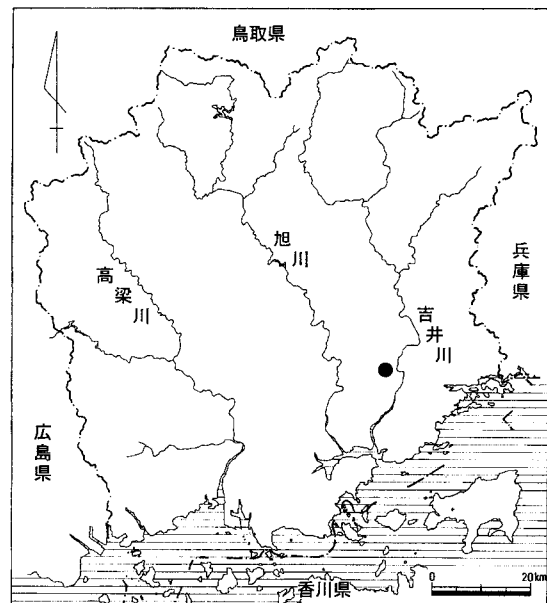
鍛冶屋D遺跡は、岡山市域の東端部にあたる岡山市瀬戸町鍛冶屋117番地および460番地ほかに所在する。調査時には赤磐郡瀬戸町鍛冶屋で、平成19年1月22日付で岡山市に編入合併となった。遺跡の所在する旧瀬戸町鍛冶屋は、明治22年には磐梨郡内の吉岡・太田村に属し、明治33年に赤坂郡と磐梨郡との合併により誕生した赤磐郡となり、昭和7年には万富村、昭和26年に万富町、その後、一部の分離編入を経て、昭和30年の周辺4町村が合併し瀬戸町となり今日に至っていた。今回の平成の大合併により岡山市に属することとなった。

遺跡の所在する鍛冶屋地区は、岡山県南東部の南北1.5km、東西2kmほどの狭小な盆地状の平野部に位置する。東側には岡山県下三大河川の一つである吉井川が北から南にS字状に貫流し、平野南半には東流する瓜生川が万富付近で吉井川に合流している。平野北側には、大盛山（標高350.9m）・大森山（標高241.9m）の山塊が連なり、南には三谷山（標高200m）・龍王山（標高177.4m）の山塊により画されている。西は狭小な浅い谷により旧瀬戸町中心部の沖積低地に繋がり、岡山の平野部へと至る。

旧瀬戸町内の遺跡は、平成10年度より行われた県教委による詳細分布調査による成果では、旧石器時代以降の遺跡が現在369か所周知されている。そのうち旧町域北東部にあたる当遺跡を含む万富地区では、170か所の遺跡数が知られている。その内訳は古墳時代と古代、中世の遺跡が顕著である。旧町域内での本格的な発掘調査は、昭和48年から行われた団地造成に伴う陣場山遺跡群の調査である。その後、山陽自動車道、美作岡山道路、圃場整備、団地造成等での緊急調査や史跡整備に伴う万富東大寺瓦窯跡の発掘調査が行われている。

今回調査を行った鍛冶屋D遺跡周辺部では、塩納成遺跡から旧石器時代の遺物が出土し、付近からも旧石器から縄文時代の石器が出土している。弥生時代には、同じく塩納成遺跡(第2図36、以下同)での調査から弥生時代中期を中心とする竪穴住居、建物、溝、土壇等の集落跡を検出し、石器の製作所跡であることも判明した。平野周辺部の丘陵では、中期以降の弥生土器の散布地や石器の採集地が坂根、宗堂等で点々と周知されている。千種山周辺でも古くより石器、土器が採集されている。南方片山では、昭和38年の調査で壺棺が出土し、方形台状墓も発見されている。この他、市境の徳富(旧熊山町)の仲尾古墳群、宗堂の新田山(47)等に方形台状墓と見られる墳墓群が築かれている。

古墳時代前半期には弥生時代後半期の墳墓群に引き続いて丘陵部に古墳群が築かれている。前方後円墳は未確認であるが、宗堂の妙泉寺跡(43)には、兵庫産竜山石の石棺が手洗いと題目石に転用されている。



第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000)



- 1.塩納森井先遺跡 (古代～近世) 2.弥上古墳 (古墳、陶棺) 3.経畦古墳 (古墳、径19.5m) 4.扇畑窯跡 (鎌倉) 5.尾坂北古墳 (古墳、陶棺) 6.辛音口古墳 (古墳、陶棺) 7.辛音口製鉄遺跡 (時期不明) 8.西奥行宮窯跡 (鎌倉) 9.倉谷窯跡 (鎌倉) 10.辛音口窯跡 (鎌倉)
- 11.一の谷製鋼跡 (鎌倉) 12.肥前格坊窯跡 (鎌倉) 13.建旗窯跡 (鎌倉) 14.仲尾古墳群 (古墳、9基) 15.山の谷古墳 (古墳) 16.保木城山城跡 (室町) 17.岩尾古墳群 (古墳、30基) 18.丸尾奥池遺跡 (平安・鎌倉) 19.松尾窯跡 (鎌倉) 20.保木池じり遺跡 (室町?)
- 21.保木西遺跡 (室町?) 22.保木風呂屋遺跡 (鎌倉、館跡か) 23.西ヶ坪古墓 (鎌倉・室町) 24.保木城の砦跡 (弥生～室町) 25.経塚墳墓群 (弥生、特殊壺・特殊器台) 26.東大寺瓦窯跡 (鎌倉) 27.万宮上の山窯跡 (鎌倉) 28.上の山遺跡 (弥生～室町) 29.千種山遺跡 (弥生～江戸)
- 30.鍛冶屋D遺跡 (縄文～江戸) 31.大井西池遺跡 (弥生～奈良、三彩) 32.横の坊遺跡 (製鉄、鎌倉) 33.五反河内製鉄遺跡 (時期不明) 34.吉岡廃寺 (奈良) 35.大谷窯跡 (鎌倉) 36.塩納成遺跡 (旧石器～室町) 37.妙見堂遺跡 (鎌倉) 38.勘定口2号墳 (陶棺、鉄滓) 39.七ツ石1号墳 (古墳) 40.勘定口窯跡 (鎌倉) 41.塩納大日遺跡 (平安・鎌倉、館跡?) 42.ばかし窯跡 (鎌倉) 43.石棺 (竜山石) 44.散布地 (製鉄跡、鎌倉) 45.妙興廃寺 (飛鳥・奈良) 46.夏井遺跡 (平安～江戸) 47.新田山古墳群 (弥生、古墳5基)
- 48.馬塚遺跡 (古墳・鎌倉) 49.片山古墳群 (弥生・古墳9基) 50.散布地 (古代) 51.金山遺跡 (製鋼、鎌倉～江戸) 52.五反田廃寺 (飛鳥) 53.寺山古墳群 (古墳2基) 54.薬菰古墳群 (古墳5基)

第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

後期古墳は、保木の旧熊山町境には横穴式石室墳が20基以上の群集をなし、鍛冶屋の標高250m付近の旧熊山町加山境には地区最大級の直径約19m、高さ3m程の経畦古墳（横穴式石室）(3)が築かれている。後期の古墳分布は、前半期古墳とは際だった特色をなしている。

古代においては、備前国磐梨郡のうちの礪名郷に比定されている。ただこの付近の備前東部地域は8・9世紀代の文献によると複雑に郡名、郡境が変更された地域としても周知されている。もともとは上道郡に属し、その後、和気郡の前身である藤野郡に編入され、788(延暦7)年和気郡のうちの吉井川以西の和気、石生、珂磨、肩脊、礪名、物理の6郷を割いて磐梨郡がたてられたものである。中世には吉岡荘に属し、15世紀には三昧院領であったことが記されている。

この地区には、古代寺院跡が3か所知られており、また、窯業と鉄生産という二つの産業が集中し行われていることも特徴としてあげられる。寺院跡の一つが当該遺跡の北側に隣接の白鳳時代創建の吉岡廃寺(34)である。調査結果では一町四方の寺域をもち、法隆寺式に近い伽藍配置を想定し、平安時代初めまで存続したことが明らかになっている。その一角には瓦窯も知られている。

窯業では、古墳時代後半以降の須恵器生産地の一つである磐梨古窯跡群の一角に所在し、地区北側の大森山と大盛山南山麓に中世前半期に集中する窯跡が現在12か所確認されている。万富には、国指定遺跡の万富東大寺瓦窯跡(26)が知られており、史跡整備のための確認調査から計10数基のロストル式平窯が確認され、付属する建物、工房や備前焼窯、土師質焼成窯も検出されている。

また、旧瀬戸町内の広い範囲で鉄生産が行われたことを示す鉄滓の散布も数多く知られている。調査件数が少なく時代の特定は難しいが、隣接する旧熊山町では、古墳時代後半期(6世紀後半)の弥上古墳や小丸山古墳の前方後円墳から鉄滓が確認されている。土井遺跡では、同時期の製鉄関連の鉄滓を伴う焼土壙、竪穴住居が、吉井川左岸の猿喰池遺跡では7世紀代に比定される製鉄炉の遺構が検出されている。当該地域にも、保木、多田原、鍛冶屋、塩納、宗道、森末等の丘陵部に鉄滓の散布地が知られ、古墳時代後半から中世にかけて鉄生産が盛んであった地域の様子がうかがわれる。また、鍛冶屋付近は古備前刀の吉岡一文字派の居住地であったとも伝えられている。南方の金山遺跡(51)は、近くに銅の採鉱跡があり中世の精錬跡と周知されており、大森山山塊からも銅生産関連の銅滓の散布が知られている。

鍛冶屋D遺跡の所在する当地域は、山塊と河川により画された狭小な地域にもかかわらず、古墳時代後期には古墳の築造が顕著となり、古代には複数の寺院の存在や磐梨郡の官衙跡と推定される散布地が知られ、政治経済の中核地をなしていたと推察される。また、古墳時代以降の磐梨古窯跡群の一角でもあり、鉄および銅の生産遺跡も数多く知られ、窯業と鉄・銅の生産遺跡においても特色ある地域をなしている。

(山磨)

なお、この章は、2007年に岡山県教育委員会が発行した「塩納森井先遺跡」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』211)「第1章第3節地理的・歴史的環境」を一部修正し、再録したものである。

主要参考文献

- 岡山県赤磐郡太田村・吉岡村立千種尋常高等小学校組合『太田吉岡村誌』1924
 荒木誠一『改修赤磐郡史』赤磐郡教育会 1940
 永山卯三郎『岡山県農地史』岡山県 1952
 『岡山県市町村合併誌』総編 岡山県 1960
 石井寛監修『岡山県の地理』1978
 瀬戸町史編纂委員会『瀬戸町史資料集』瀬戸町 1984

第1章 遺跡の位置と環境

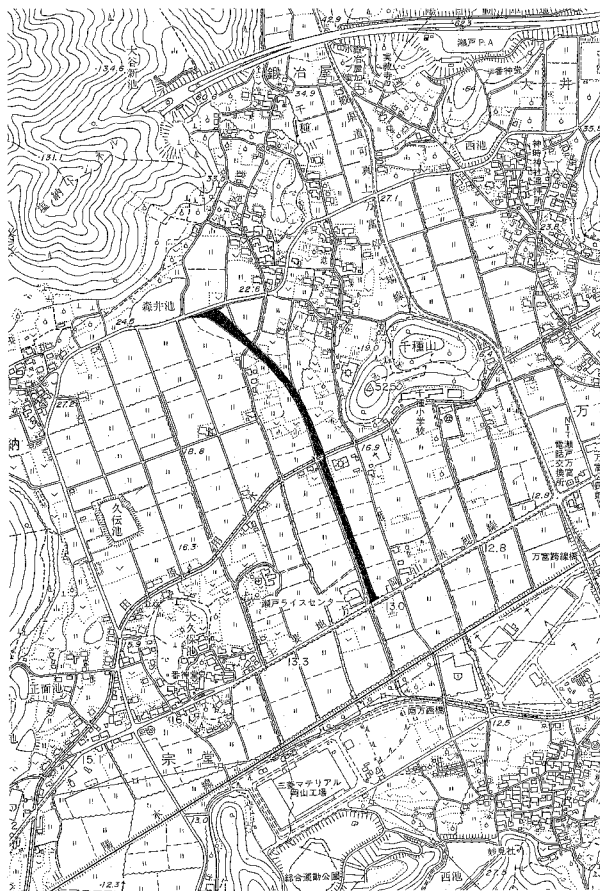
瀬戸町史編纂委員会『瀬戸町誌』瀬戸町 1985

吉田晶『吉備古代史の展開』塙書房 1995

「塩納成遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』187 岡山県教育委員会 2005



吉岡麿寺の塔心礎（岡山市立万富公民館）



第3図 調査区位置図（1/20,000）

第2章 発掘調査の経緯と経過

第1節 発掘調査に至る経緯

岡山県は、県北部の中国縦貫自動車道と県南部の山陽自動車道の開通を受けて、これらの道路と県内循環高速道路網を形成するための一環として、県東部を南北に結ぶ地域高規格道路として、岡山県の東部、赤磐郡瀬戸町（現岡山市瀬戸町）の山陽自動車道と勝田郡勝央町の中国自動車道とを結ぶ美作岡山道路建設を計画した。

この計画の報告を受けた岡山県教育庁文化課（現文化財課）では、路線決定段階の平成4・5年度に、建設区間の一部である瀬戸～吉井間の詳細遺跡分布調査を実施し、その後の事業進展に備えた。平成8年度には、熊山インターチェンジ（仮称）～吉井インターチェンジ（仮称）間の延長約11kmについて路線が決定したのに伴い、事業主体者である岡山県東備地方振興局（現備前県民局東備支局）との本格的な協議を開始した。その結果、熊山インターチェンジ（仮称）～吉井インターチェンジ（仮称）間に所在する遺跡について、岡山県東備地方振興局長から文化財保護法第57条3（現第94条）に基づく発掘の通知が提出され、用地内の遺跡については工事着手前に発掘調査を実施し、さらに調査の結果重要な遺構などが発見された場合は別途協議することとなった。

美作岡山道路に伴うその後の遺跡の取り扱いについては、この発掘通知文書に基づいてそれぞれ対応が行われ、平成9年度から順次発掘調査が実施されることとなった。

さて、本報告書に掲載した鍛冶屋D遺跡については、美作岡山道路のうち、瀬戸インターチェンジ（仮称）に至るアクセス道路建設に伴う発掘調査であり、平成16年度に、用地買収などの条件整備が進んだことから、岡山県教育庁文化財課と備前県民局との間で協議が行われた結果、平成18年度から発掘調査を実施することとなった。

事業名称は、主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）地方特定道路整備事業（アクセス道：山陽道以南）に伴う埋蔵文化財発掘調査事業である。（平井）

第2節 発掘調査および報告書作成の経過

調査対象地のほぼ北半分（本報告書のI区、発掘調査時点では1～5区と呼称していた）については、周知の遺跡（『改訂岡山県遺跡地図』では遺跡名はついていなかったが、調査に際し「鍛冶屋D遺跡」と命名した）の範囲内で、須恵器や土師器・備前焼などの散布地とされていた。

平成16年度の県文化財課と事業主体者との協議では、道路建設予定地の現状の多くは水田の一部であり、水路や稲作付け中の水の確保などから長期の作付け停止は困難であることが示されたため、本調査のための資料を得る目的である事前の確認調査は実施せず、平成17年度に本調査を実施することとなった。確認調査が実施されなかったことにより、遺跡の内容が十分に把握されていなかったため、調査工程に苦慮せざるを得ないという影響が及んだ。

一方、道路建設予定地のほぼ南半分（本報告書のⅡ区、発掘調査時点では6・7区と呼称していた）については、周知の遺跡の範囲内ではなかったが、県文化財課では、周知の遺跡範囲に隣接していることから事前の試掘調査が必要であると判断し、平成17年度に実施する北半分（Ⅰ区）の本調査期間中に試掘調査を実施し、その調査結果により取り扱いを協議することで事業者と合意した。

1 平成17年度の調査

平成17年度の調査は、まず南半分（Ⅱ区）の試掘調査から実施した。理由は、新たに遺跡の広がり確認された場合、平成18年度に本調査を実施するためには、できるだけ早急に資料を得る必要があったためである。試掘調査は平成17年度の4月に実施し、調査員3名が担当した。その結果については、『岡山県埋蔵文化財報告37』（岡山県教育委員会 2007年）に報告しているが、道路建設予定地全域に縄文時代と弥生時代を中心とする遺構・遺物が存在していることが明らかとなった。この結果を受けて、県文化財課は事業者と発掘調査を実施するための条件整備などについて協議を行い、平成18年度のうち稲の作付けが終了する11月から本調査を実施することで合意した。

一方、北半分（Ⅰ区）の調査は、平成17年5月から平成18年3月まで実施した。調査員は2班体制で、9名が担当した。おもに、縄文時代から中世に至る遺構・遺物を検出したが、遺構密度は高くなかった。遺跡の基盤土層は北側から流れ込んで堆積した砂礫層が主体で、縄文時代の流路の調査では湧水対策に苦慮した。

2 平成18年度の調査

平成17年度の協議結果に基づき、南半分（Ⅱ区）の調査は平成18年度11月から平成19年3月まで、調査員は6名の2班体制で実施した。北半分とは異なり比較的安定した沖積土層の基盤層が確認され、弥生時代の竪穴住居や掘立柱建物、土塙、溝などが多数確認されたことから、弥生時代中期中頃を中心とした集落域として利用されていたことが明らかとなった。ただし、縄文時代後期～晩期には大きく蛇行する自然流路がいくつも検出され、この地区でも湧水対策に苦慮することとなった。

埋蔵文化財対策委員会は、平成17・18年度の発掘調査期間中に4回開催した。各委員に発掘調査状況を報告し、指導助言を受けた。

3 報告書作成

報告書作成については、平成18年度の6月から10月の期間に、調査員1名が平成17年度本調査分（本報告書のⅠ区）の整理作業を実施するとともに、平成19年度の4月から8月および1月から3月まで調査員1名が平成18年度分（本報告書のⅡ区）の整理作業を、いずれも岡山県古代吉備文化財センターにおいて実施した。なお、石器の石材同定については、鈴木茂之氏（岡山大学理学部）に協力していただいた。（平井）

4 日誌抄

平成17年度

5月2日(月) 調査準備、資材搬入。
5月6日(金) Ⅰ区調査開始。
7月7日(木) 埋蔵文化財保護対策委員会開催。
11月14日(月) 埋蔵文化財保護対策委員会開催。
2月14日(火) 埋蔵文化財保護対策委員会開催。
3月3日(金) 調査区全景空撮。

3月17日(金) Ⅰ区調査終了。資材撤収。

3月30日(木) Ⅰ区図面・遺物など確認作業終了。

平成18年度

4月3日(月) Ⅰ区報告書整理作業開始。

10月31日(火) Ⅰ区報告書整理作業終了。

11月1日(水) 調査準備、資材搬入。

11月6日(月) Ⅱ区重機による表土掘削開始。

11月13日(月)Ⅱ区調査開始。
 2月6日(火)調査区空撮。
 2月14日(水)埋蔵文化財保護対策委員会開催。
 3月16日(金)Ⅱ区調査終了。資材撤収。
 3月30日(金)Ⅱ区図面・遺物など確認作業終了。

平成19年度
 4月2日(月)Ⅱ区報告書整理作業開始。
 8月31日(金)Ⅱ区報告書整理作業休止。
 1月4日(金)Ⅱ区報告書整理作業再開。
 3月31日(月)Ⅱ区報告書整理作業終了。

第3節 発掘調査および報告書作成の体制

平成17年度(発掘調査)

岡山県教育委員会

教育長 宮野 正司

岡山県教育庁

教育次長 釜瀬 司

文化財課

課長 芦田 和正

参事 田村 啓介

総括副参事(埋蔵文化財班長)

平井 泰男

主任 小林 利晴

主事 金出地敬一

岡山県古代吉備文化財センター

所長 松本 和男

次長(総務課長) 内田 猛

参事 平松 郁男

参事 高畑 知功

〈総務課〉

総括副参事(総務班長) 若林 一憲

主任 小川 紀久

〈調査第三課〉

課長 中野 雅美
(調査担当)

総括副参事(第二班長) 山磨 康平
(調査担当)

副参事 二宮 治夫
(調査担当)

主査 大橋 雅也
(調査担当)

主査 小松原基弘
(調査担当)

主任 小嶋 善邦
(調査担当)

主事 團 奈歩
(調査担当)

主事 米田 克彦
(調査担当)

主事 山崎 孝盛
(調査担当)

平成18年度(発掘調査・報告書作成)

岡山県教育委員会

教育長 門野八洲雄

岡山県教育庁

教育次長 神田 益穂

文化財課

課長 高畑 知功

参事 田村 啓介

総括副参事(埋蔵文化財班長)

光永 真一

主任 小林 利晴

主任 金出地敬一

岡山県古代吉備文化財センター

所長 松本 和男

次長(総務課長) 安西 正則

参事 岡田 博

副参事 中島 謙次

〈総務課〉

総括副参事(総務班長) 若林 一憲

主任 小川 紀久

〈調査第三課〉

課長 平井 泰男
(報告書・調査担当)

第2章 発掘調査の経緯と経過

総括副参事（第一班長） 内藤 善史
 調査第二課総括副参事（第二班長） 二宮 治夫（調査担当）
 副参事 山磨 康平（調査担当）
 主任 小松原基弘（調査担当）
 主事 河合 忍（調査担当）
 主事 石田 爲成（調査担当）

平成19年度（報告書作成）
 岡山県教育委員会
 教育長 門野八洲雄
 岡山県教育庁
 教育次長 神田 益穂
 文化財課
 課長 藤井 守雄

参事 田村 啓介
 総括副参事（埋蔵文化財班長） 光永 真一
 主任 小嶋 善邦
 主任 金出地敬一

岡山県古代吉備文化財センター
 所長 高畑 知功
 次長（総務課長） 小林 勝
 参事 岡田 博
 副参事 中島 謙次（総務課）
 総括副参事（総務班長） 若林 一憲
 主任 福池 光修（調査第三課）
 課長 平井 泰男
 総括副参事（第一班長） 浅倉 秀昭
 副参事 山磨 康平（報告書担当）

第1表 文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財試掘・確認調査の報告

文書番号 日付	周知、周知外	種類および名称	所在地	面積（㎡）	原因	包蔵地の有無	報告者	担当者	期間
岡吉調 第75号 H17.5.19	未周知	集落跡・水田	赤磐郡瀬戸町 鍛冶屋117ほか	50	道路	有	岡山県古代吉備 文化財センター 所長	中野雅美・大橋 雅也・米田克彦	H17.4.11～ H17.5.12

埋蔵文化財発掘の通知（第94条／旧第57条の3）

文書番号 日付	種類及び名称	所在地	面積（㎡）	目的	通知者	期間	主な指示事項
教文理 第6号 H9.4.4	散布地・集落跡・城館跡・社 寺跡・古墳・その他の墓	赤磐郡熊山町 可真下ほか	1,130,000	道路建設	東備地方振興局長 佐藤直之	H9.未定～H17.3.31	発掘調査

発掘調査の報告（第99条／旧第58条の2）

文書番号 日付	種類及び名称	所在地	面積（㎡）	目的	主体者	担当者	期 間
岡吉調 第70号 H17.5.12	鍛冶屋D遺跡	赤磐郡瀬戸町 鍛冶屋460ほか	8,800	道路建設	岡山県古代吉備文 化財センター所長	中野雅美・大橋雅也・米田克彦・ 山磨康平・二宮治夫・小松原基弘・ 園奈歩・小嶋善邦	H17.5.2～ H18.3.31
岡吉調 第2013号 H18.11.2	鍛冶屋D遺跡	赤磐郡瀬戸町 鍛冶屋117ほか	4,900	道路建設	岡山県古代吉備文 化財センター所長	平井泰男・山磨康平・二宮治夫・ 小松原基弘・河合忍・石田爲成	H18.11.1～ H19.3.31

埋蔵文化財発見通知（第100条／旧第61条）

文書番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
教文理 第237号 H17.5.19	縄文土器・弥生土器・須恵器・ 土師器・陶磁器・石器 1箱	赤磐郡瀬戸町 鍛冶屋117ほか	H17.4.11～ H17.5.12	岡山県教育委員会 教育長 宮野正司	岡山県知事 石井正弘	岡山県古代吉備文化財センター
教文理 第1321号 H18.3.20	縄文土器・弥生土器・須恵器・ 土師器・陶磁器・石器・鉄器・ 木器・銭貨・獣骨 38箱	赤磐郡瀬戸町 鍛冶屋446ほか	H17.5.1～ H18.3.17	岡山県教育委員会 教育長 宮野正司	岡山県知事 石井正弘	岡山県古代吉備文化財センター
教文理 第1368号 H19.3.29	縄文土器・弥生土器・須恵器・ 石器・木製品 46箱	岡山市瀬戸町 鍛冶屋117ほか	H18.11.6～ H19.3.16	岡山県教育委員会 教育長 門野八洲雄	岡山県知事 石井正弘	岡山県古代吉備文化財センター

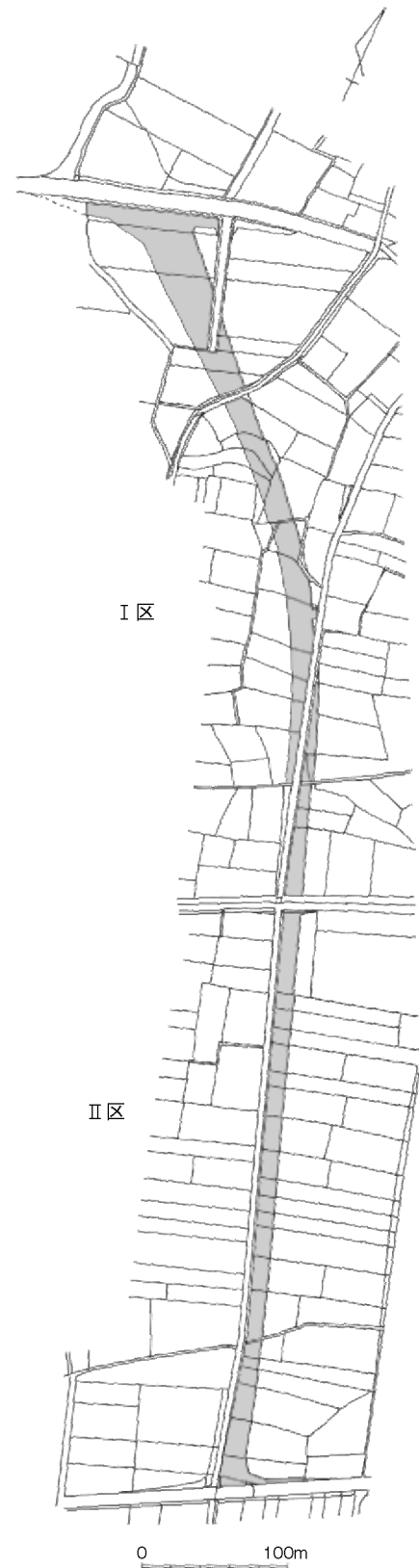
第3章 発掘調査の概要

第1節 調査区の概要

平成17年度調査区をⅠ区、平成18年度調査区をⅡ区として報告する。Ⅰ区は北東の谷部から土石流として流れ込んだと思われる砂礫層が堆積している。これらの時期は不詳だが、縄文時代晩期においても大小の自然流路が確認されることから安定した地勢とはなっていないと思われる。ただし、少量ではあるが縄文時代後・晩期の土器・石器が流路内から出土することから、周辺部（おそらく北東部の現在鍛冶屋集落付近）には当該期の集落の存在が想定できる。

弥生・古墳時代には少数ではあるが、土壌・溝などを検出した。出土土器からは、弥生時代後期前半、古墳時代前期・中期が確認できるが出土量は少ない。溝が多いことなどから集落の周辺部と考えられる。古代には北隣に吉岡廃寺が位置しており、硯や瓦塔、緑釉、灰釉といった特徴的な遺物が出土しているが、明確な遺構は検出できなかった。中世では現在の地割に沿った土手状遺構を検出しており条里制地割との関連が注目される。

Ⅱ区の調査では、流路内で縄文時代晩期土器（少量の中期・後期を含む）を多く出土した。また、県内2例目の縄文時代竪櫛の出土が注目される。微高地上には1基ではあるが晩期の土壌が存在することや土器が流路の肩部に土器溜り状に出土していることから、調査区は晩期の集落の一部と考えられる。弥生時代中期中頃には沖積地として安定し、小規模ではあるが居住域となっていたことが竪穴住居や掘立柱建物の存在から想定できる。検出した竪穴住居には壁や床面は残っていないが、周囲にめぐらされていたと思われる溝が部分的ではあるが確認できたことは重要であろう。古墳・古代・中世・近世の遺構・遺物は少なく、居住域とはなっていないようである。（平井）



第4図 調査区位置図 (1/5,000)

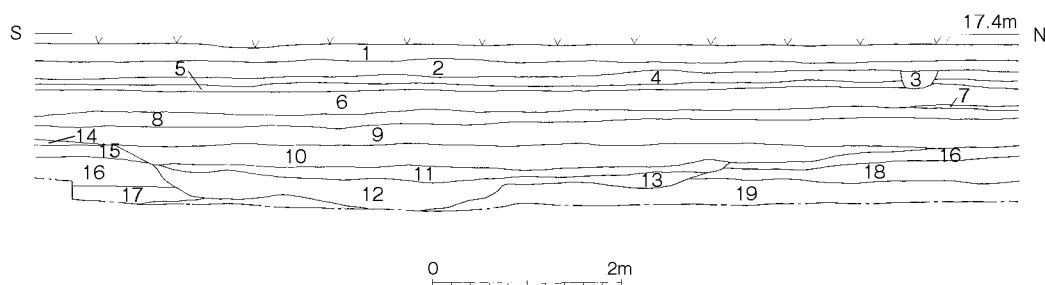
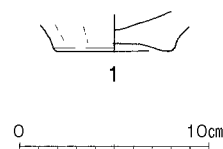
第2節 I区の調査

1 縄文時代の遺構・遺物

流路1 (第5・6図)

I区中央付近で確認された東西方向の流路である。深さ60cmほど、幅9mほどを測る。底面の海拔高は、15.55mを測る。西方から東方へと流れていたと推測している。

底部には砂礫を含む灰色粗砂が堆積しており、一定の水量が想像される。この粗砂から1の甕底部が出土したことから、ここで縄文時代の遺構として記載したが、最上層が埋没するのは細片の出土遺物からではあるが弥生時代後期段階である。



- | | | |
|-------------------------------|-------------------------------|---------------------------|
| 1 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土 (現耕作土) | 8 黒褐色 (10YR3/1)粘質土 | 15 灰オリーブ色 (5Y6/2)粘質土 |
| 2 灰色 (5Y4/1) 粘質土 | 9 暗褐色 (10YR3/3)粘質土 | 16 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土 |
| 3 暗渠 | 10 灰オリーブ色 (5Y5/2) (流路1) | 17 灰色 (10Y5/1) 粗砂 (礫多) |
| 4 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土 (下にFe) | 11 灰色 (10Y5/1) 粘性微砂 (流路1) | 18 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土 |
| 5 灰色 (10Y5/1) 粘質土 | 12 灰色 (7.5Y5/1) 粗砂 (礫多) (流路1) | 19 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土 (固い) |
| 6 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土 (固い) | 13 オリーブ黄色 (5Y6/3) 粘質土 | |
| 7 黒褐色(10YR3/2)粘質土 (礫多) | 14 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質土 | |

第5図 流路1 (西壁) (1/80) ・出土遺物 (1/4)

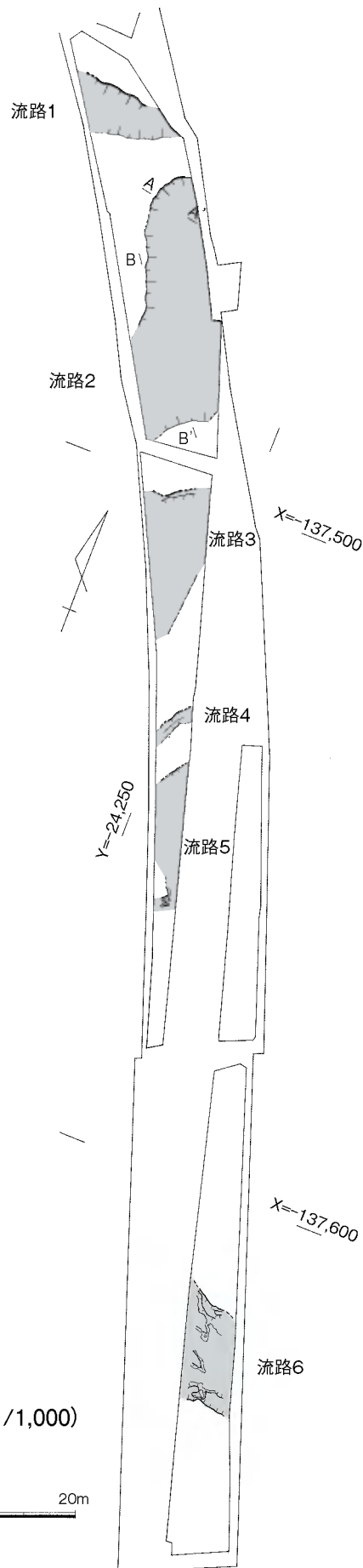
流路2 (第6・7図)

流路1の南側で蛇行しながら南北方向に伸びる自然流路である。深さ100cm、底面の海拔高は15mほどを測る。底部には大きく2層の砂礫を含む粗砂層が確認され、この層界に鉄分が沈着し、堆積段階の差を示す。なお、上層の粗砂層がより大きい礫を混在し、流量の差が推しはかれる。また、A-A'断面7層中に示すように流木も多く含む。粗砂層からは2～6の縄文時代後期～晩期の深鉢が出土していることから、この段階に流れた自然流路と判断した。2は外面に沈線と円形刺突が施されている。器壁の摩滅が激しい。3は二枚貝による調整の後、横方向の爪形文と斜め方向の刺突文、4は口唇部に刻目、5の外面は縦方向の刺突文で飾られる。6は器壁の摩滅が著しいが、横方向の爪形文が施されているようである。

(大橋)

流路3 (第6・8・9図)

流路2の南東にほぼ平行するように流れる自然流路である。底面の海拔高は14.9mを測り、最下層には他の流路と同様、多量の礫を含む粗砂層が堆積している。この上位に炭化物、葉などの植物遺体を



第6図
I区縄文時代
遺構全体図 (1/1,000)

0 20m

多く含む粘土質層が堆積しており、この層位から、細片が多いが縄文時代晩期の遺物が比較的多く出土している。図示したのはこのうち、7～10とS1・S2のサヌカイト製の石鏃である。7・8の端部内面には凹線が、9・10の外面には沈線が施されている。これらの出土遺物から流路3がこの時期に流れていたと推測している。(大橋)

流路4 (第6・10図)

流路3の南方、南北方向に向く流路である。幅150cm、深さ約20cm、底面の海拔高は15.2mである。第10図12層に示すように、礫を含む灰色粗砂で埋没しており、この上位を9層黒褐色粘質土が覆っている。この黒褐色土は、周囲の土層比較から古墳時代前半段階の堆積時期が考えられる。流路の時期は不明確であるが、少なくともこれ以前であり、埋積している礫の他の流路との類似状況から縄文時代後～晩期としてここで扱った。(大橋)

流路5 (第6・11図)

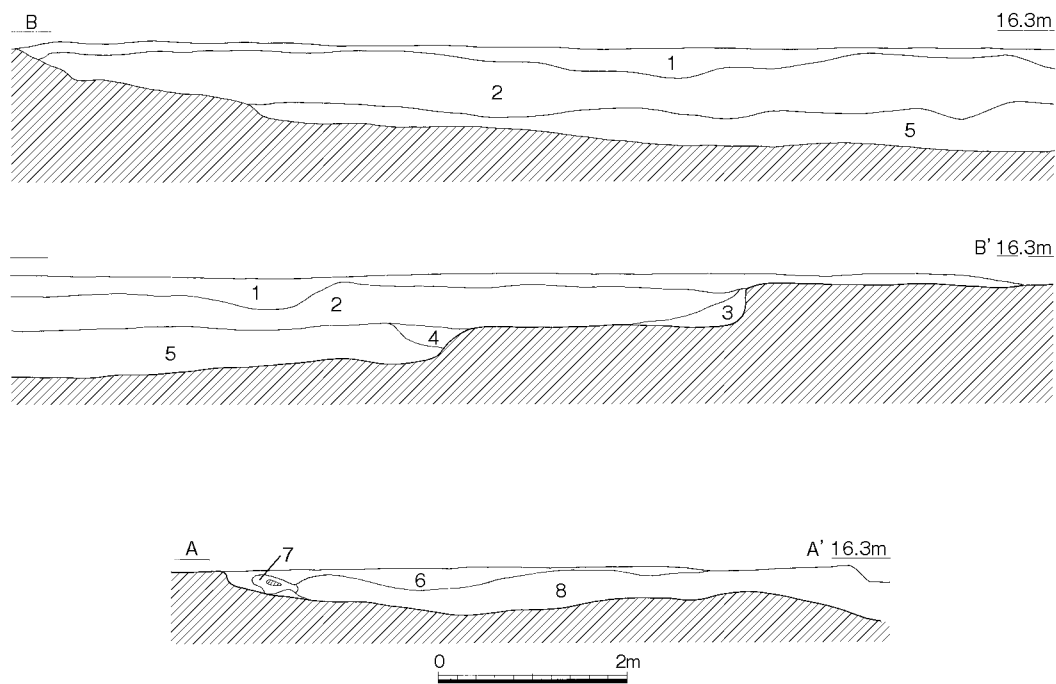
流路4の南東側に平行し幅20mにも及ぶ幅広く流れる自然流路である。南端部では、二股に分かれている。底面の海拔高約14.7mを測り、他の流路と同様、礫を多量に含む粗砂層で埋没している。流路上位は流路3同様、黒褐色ないし褐灰色粘質土で覆われている。

以上、この一帯は流路1～5で示されるように、縄文時代後期～晩期にかけて数条の自然の濁流がこの周囲を流れ、徐々に堆積が進み地形を形成していったものと理解される。

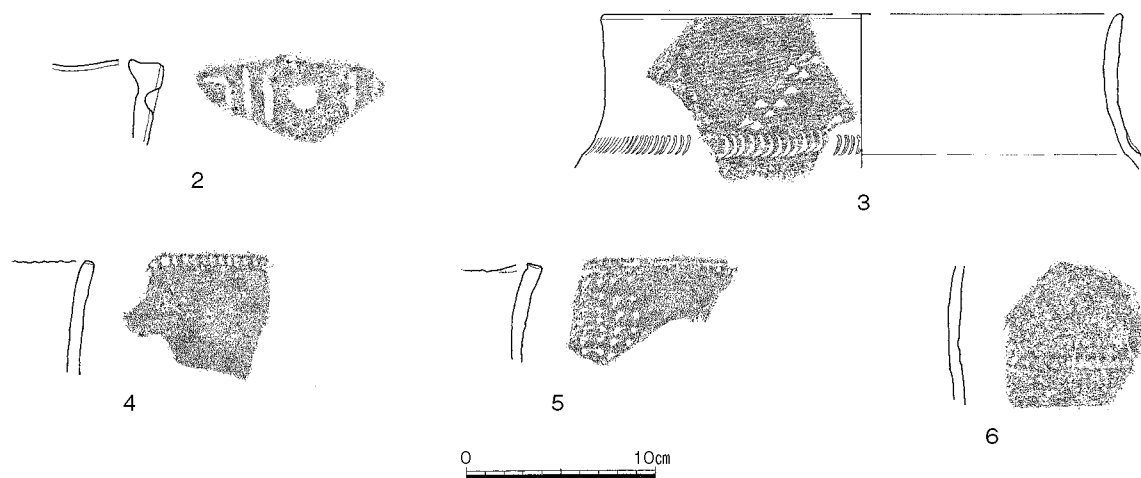
(大橋)

流路6 (第6・12・34・35図、図版8-2・3、9-1)

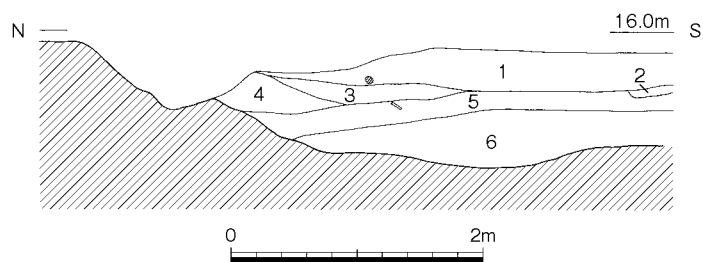
I区南端近くに、東西方向に流れる流路である。流路2～5が基本的に南北を指向するに対して、これらに直交する。幅約18m、深さ約1mほどあり、底面の海拔高は13.4mを測る。後述する溝24と重複し、流路6の埋没



- | | | |
|---------------------------|---------------------------|-----------------------|
| 1 明黄褐色 (2.5Y6/6) 粘質土 (固い) | 4 オリーブ灰色 (5GY5/1) | 7 灰色 (N4/) 粘質土 |
| 2 灰色 (N4/) 粗砂 (礫多) | 5 灰色 (7.5Y4/1) 粗砂 (固い、礫多) | 8 灰色 (10Y5/1) 粗砂 (礫多) |
| 3 オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 粘質土 | 6 黄褐色 (2.5Y5/4) 粘質土 | |

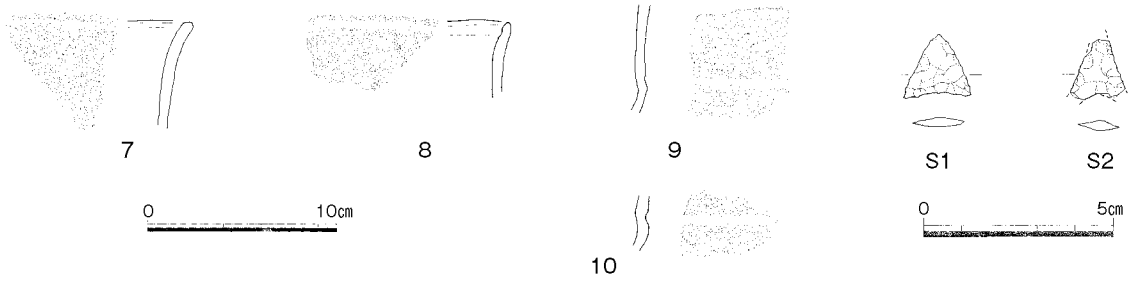


第7図 流路2 (1/80) ・出土遺物 (1/4)

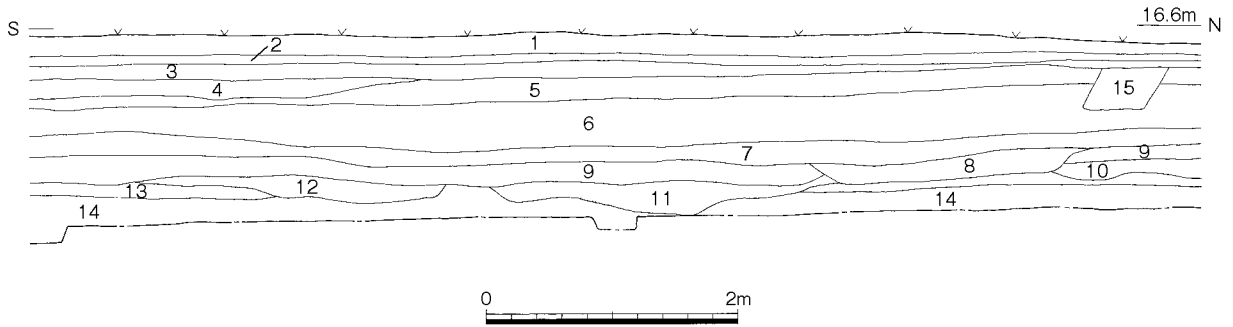


- | |
|-----------------------------|
| 1 明黄褐色 (10YR7/6) 粘質土 |
| 2 灰色 (5Y4/1) 粘性微砂 |
| 3 にぶい黄褐色 (10YR6/4) 粘質土 (固い) |
| 4 明褐色 (7.5YR5/6) 粘質土 (固い) |
| 5 灰色 (5Y4/1) 粘質土 (有機物、葉、炭多) |
| 6 灰色 (5Y5/1) 粗砂と礫多 |

第8図 流路3 (1/60)

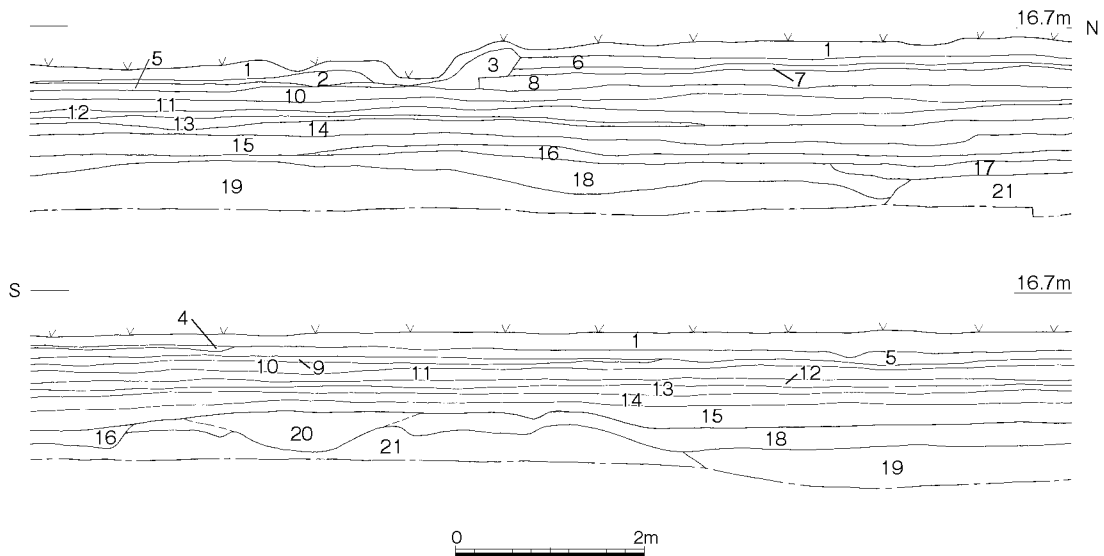


第9図 流路3出土遺物 (1/4・1/2)



- | | | |
|---|---------------------------|----------------------------|
| 1 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土 (現耕作土) | 7 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土 (固い) | 11 灰色 (5Y5/1) 粘性細砂 (溝15) |
| 2 灰色 (5Y5/1) 粘質土 | 8 灰色 (N4/) 粘質土 (固い) (溝14) | 12 灰色 (5Y4/1) 粗砂 (流路4) |
| 3 灰色 (10Y5/1) 粘質土 | 9 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土 | 13 明黄褐色 (2.5Y6/6) 粘質土 (固い) |
| 4 灰褐色 (7.5YR4/2) ~ 褐色 (7.5YR4/3) 粘質土 | 10 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土 | 14 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘質土 (固い) |
| 5 にぶい黄褐色 (10YR5/4) ~ 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 | | 15 暗渠 |
| 6 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土 | | |

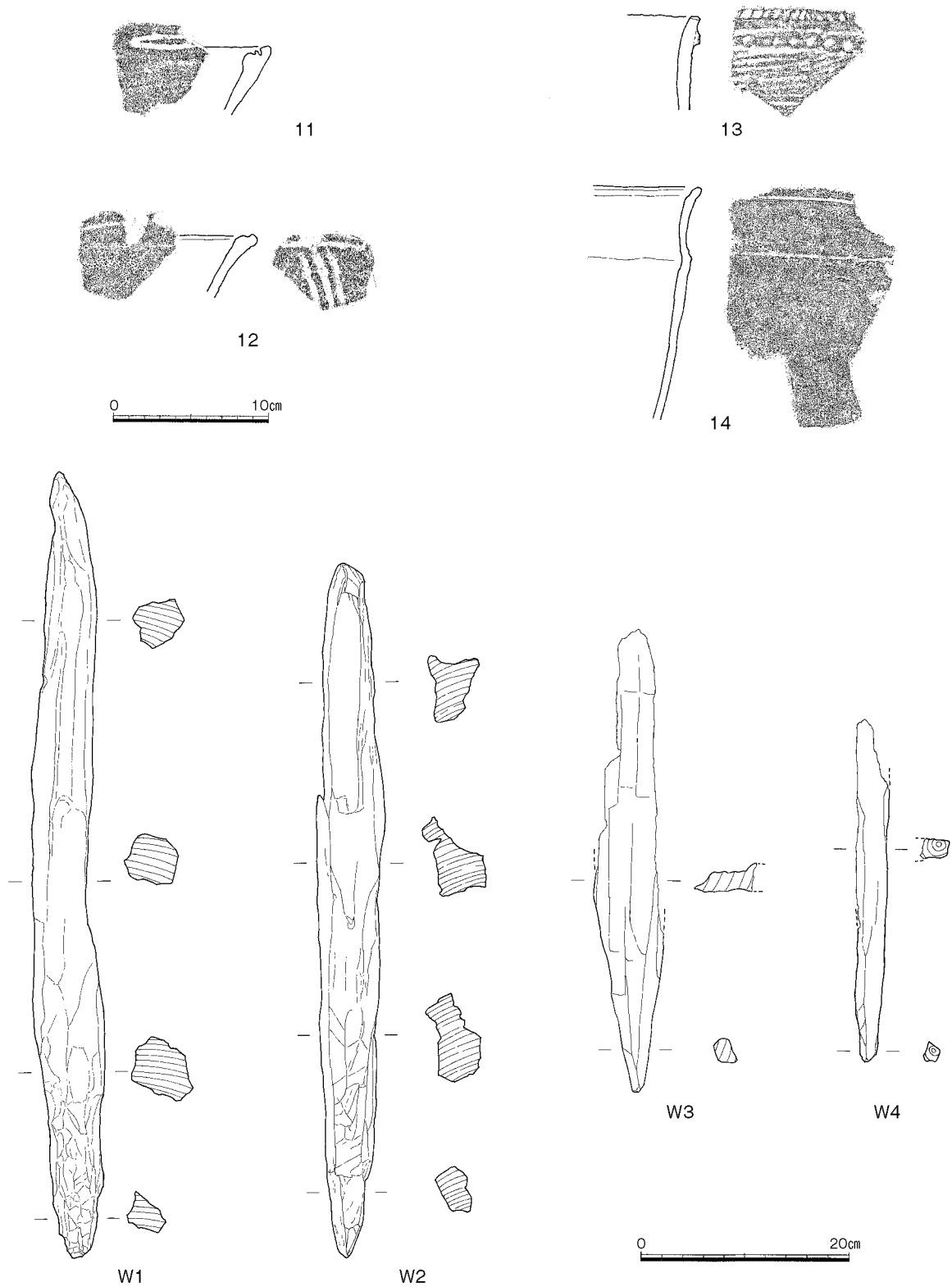
第10図 流路4、溝14・15 (西壁) (1/60)



- | | | |
|--|---|--|
| 1 褐灰色 (7.5YR4/1) 土 (現耕作土) | 9 灰褐色 (7.5YR6/2) 粘質土 | 16 黒褐色 (10YR3/1,3/2) 粘質土 |
| 2 灰色 (10Y5/1) 粘質土 (旧耕作土) | 10 灰褐色 (7.5YR5/2) 粘質土 | 17 明黄褐色 (2.5Y6/6) 粘質土 (固い) |
| 3 黄灰色 (2.5Y5/1) 土 (造成土) | 11 褐灰色 (7.5YR6/1) ~
にぶい橙色 (7.5YR6/4) 微砂 | 18 灰色 (10Y5/1) 粗砂 (黄褐色粘質土ブロック含む)
(礫多) (流路5) |
| 4 灰褐色 (10YR6/1) 粘質土 | 12 にぶい黄褐色 (10YR5/4) ~
灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 | 19 オリーブ灰色 (5GY6/1) 粗砂 (礫多) (流路5) |
| 5 黄褐色 (2.5Y5/4) 粘質土 (Fe沈着) | 13 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土 | 20 灰色 (5Y5/1) 粗砂 (礫少) |
| 6 灰色 (5Y5/1) 粘質土 (床土) | 14 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土 | 21 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘質土 (固い) |
| 7 灰色 (10Y5/1) 粘質土 | 15 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土 (固い) | 22 オリーブ灰色 (5GY6/1) 粗砂 (礫多) |
| 8 にぶい黄褐色 (10YR5/4) ~
灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 | | |

第11図 流路5 (西壁) (1/80)

後も同様の流路を取るような流れが存在していたものと考えられる。堆積状況の観察から大きくは3度の埋没過程が見取れる。最も古いのが第34図31～33層の段階で北側の肩口部分の堆積である。次に同図28～30層の堆積、最も新しいのが21～27層の堆積である。いずれの堆積も礫を多く混じえた粗砂層が中心であり、部分的にドングリなどの植物遺体も多く含む。なお、底から出土した流木のC14年



第12図 流路6出土遺物 (1/4・1/6)

代測定では3100±60年BP、ドングリでは2960±40年BPが出されている。(付載2参照)

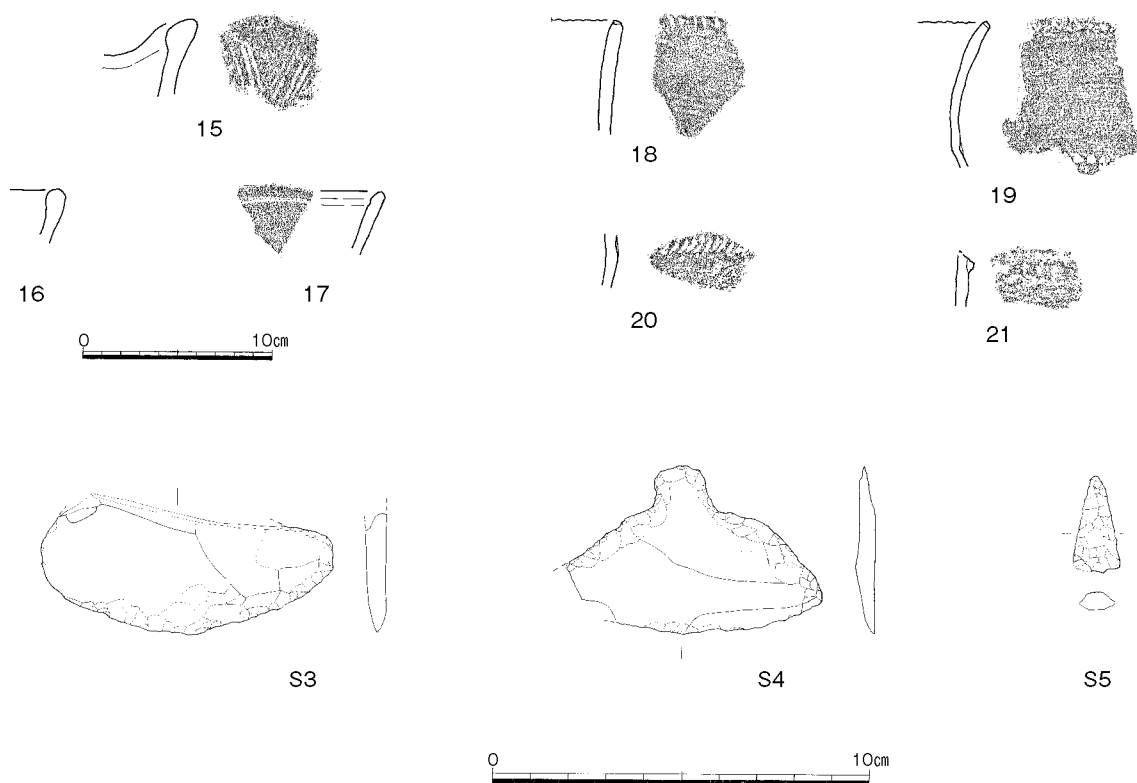
北側の肩口付近には、不整形な平坦な段が形成されており、ここに8本の杭が列状に打たれていることを確認した。うち4本をW1～W4として図示した。W1・W2はミカン割り状に加工が認められるが、W3については平たく板状に割っている。W3・W4についてもC14年代測定を行ったところ、W3が2180±50年BP、W4が2290±40年BPが示された。このため、これらの杭列は流路6の埋没後、弥生時代以降に形成されたと理解している。

このほか、11～14を図示した。11は、口唇部に二重の沈線を施す。12も口唇部に沈線を持ち、外面も沈線で飾る。13は、口唇部に刻目を持ち、外面は二枚貝の調整が見られ、貼付刻目の突帯を巡らす。14は口縁部内外面と体部の屈曲部に沈線を施している。これらの遺物を考え合わせ、後期には流路があり、晩期にかけて激しい流量を繰り返しながらやがて埋没していったものと考えられる。(大橋)

その他の出土遺物 (第13図)

これまで説明した流路に直接は帰属しない縄文時代後期～晩期の遺物をここで紹介する。15は波状口縁で外面は複数の条線で飾られ、17は口唇部内面に沈線が認められる。18は口唇部に刻目が施され、外面に二枚貝条痕を認める。19も口唇部に刻目と、外面に刺突文が巡る。20は横方向の爪形文、21は刻目貼付突帯がある。S3はスクレイパーで流路5の基盤となる黄褐色を呈する堆積層からの出土である。S4は横長の石匙で、S5は長三角形の石鏃である。いずれもサヌカイト製である。

ここで記載した遺物も含め、各流路から出土した遺物を勘案すると、この周囲に縄文時代後期以降に人の生活が営まれ始め、晩期には本格的な居住が展開していたことが推測される。(大橋)



第13図 その他の出土遺物 (1/4・1/2)

2 弥生・古墳時代の遺構・遺物

土壌1 (第14・16図)

溝11と重複し、これに先行する不整形な窪みである。ここでは土壌として扱った。検出面からの深さは10cm、底面の海拔高は15.7mを測る。黒褐色土で埋積している。

出土遺物がなく、詳細な時期は不明であるが、溝11との重複関係から弥生時代後期段階と推測している。(大橋)

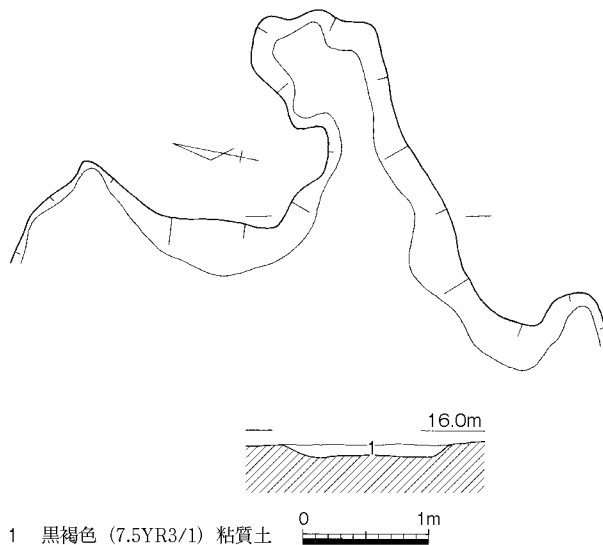
土壌2 (第15・16図)

土壌1の南方約15mに位置し、溝12・13と接している。長軸方向で580cm、短軸方向で230cmの不整長方形を呈し、深さ15cmほどある竪穴状の土壌である。底面の海拔高は約15.4mを測り、平坦な形状をとる。北東壁側と南西壁の一部に幅40cmほどの浅い溝が巡る。この溝は長軸400cmほどで屈曲し、本来の土壌の形状がいったんここで区切られていたかもしれない。また、北側隅部には平坦な段が階段状に一部設けられている。

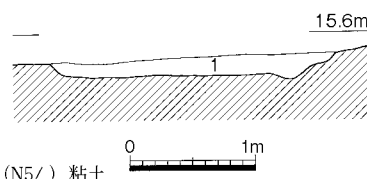
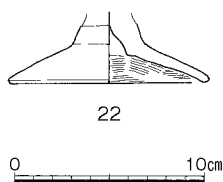
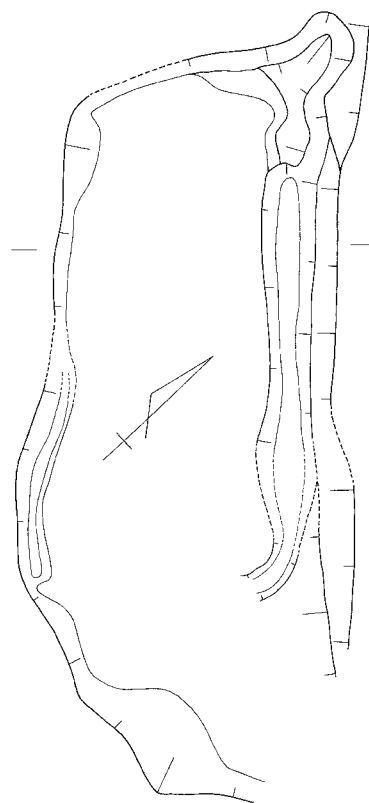
出土遺物は図示した短脚の高杯のみである。この土壌も古墳時代初頭段階の堆積と推測している黒褐色土に覆われていることを考え合わせれば、弥生時代後期後半の時期のものと判断される。(大橋)

土壌3 (第16・17図)

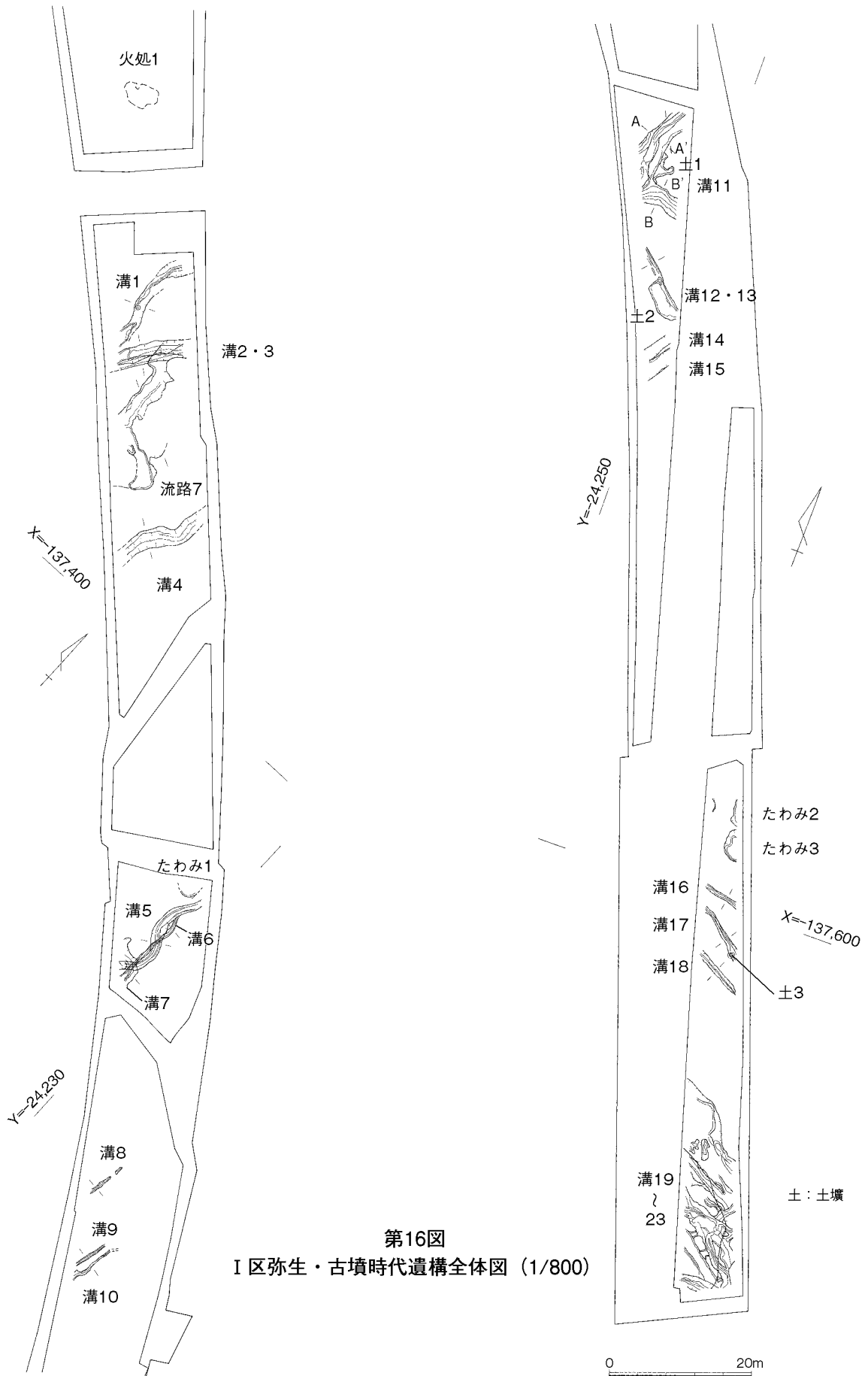
土壌2の南方約90m、溝17と重複し、一部これに削平されている土壌である。94×78cmのやや楕円形を呈し、深さは45cmほどある。底面の海拔高は14.1mである。最下



第14図 土壌1 (1/60)



第15図 土壌2 (1/60) ・出土遺物 (1/4)



第16図
I区弥生・古墳時代遺構全体図 (1/800)

層には砂礫が堆積しており、ある時期の洪水砂によって埋積したものと考えられる。遺構の時期は、出土遺物が無く、詳細は不明であるが、溝との重複関係を参考に弥生時代後期段階と思われる。(大橋)

たわみ1 (第16・18図)

I区中央付近に位置する。径約220cmほどの不整円形を呈し、そのうちの半円部のみを検出している。深さは10cmほどと浅く窪み状の形態である。黄灰色の粘質土を埋土としている。

出土遺物が無く時期は不明であるが、層位関係から弥生時代後期段階の可能性はある。(大橋)

たわみ2・3 (第16・19図)

土壙3の北方約20m付近に位置する。たわみ2の南隣にたわみ3が接するようにある。両方とも不整円形をなす浅い窪み状の形態である。たわみ2が深さ5cm、たわみ3の深さは15cmほどである。底面の海拔高は14.5m程度である。いずれも灰褐色粘土を埋土としている。

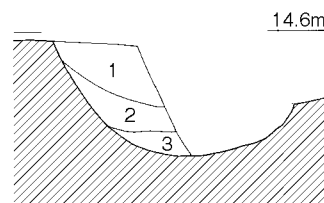
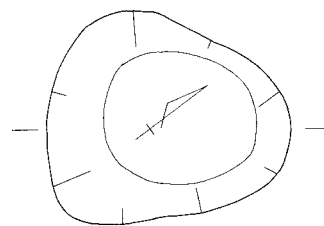
出土遺物に図示した23の須恵器高杯脚部があり、これを参考にすれば、たわみ2・たわみ3は6世紀後半の時期が推測される。(大橋)

火処1 (第16図)

I区北端部の町道北の調査区に検出した。焼土の広がり東西5m、南北3mの範囲に確認した。時期は埋土や基盤層での検出等から古墳時代以前の可能性が強い。(山磨)

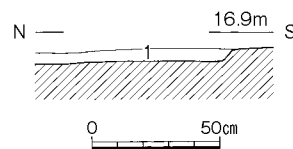
溝1 (第16・20図)

後述する溝31と重複するようにその下位で検出した溝である。南北方向に延び、幅150cm、深さ65cmほどを測る。溝底の海拔高は、17mほどである。



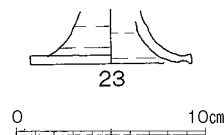
- 1 褐灰色 (7.5YR5/1) 粘質土
- 2 灰褐色 (7.5YR6/2) 粘質土
- 3 灰色 (N5/) 砂礫

第17図 土壙3 (1/30)

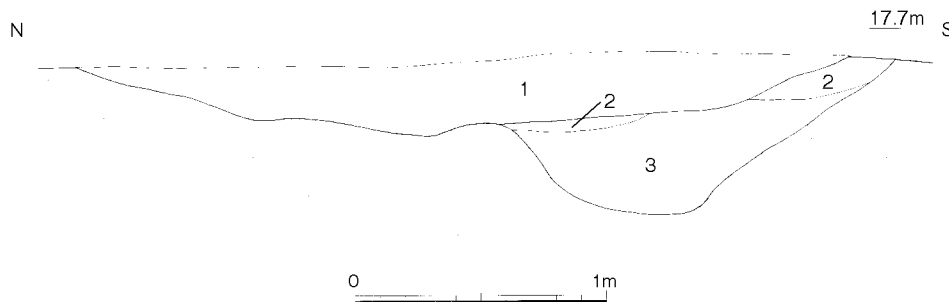
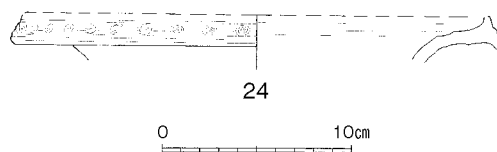


- 1 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土 (固い)

第18図 たわみ1 (1/30)



第19図 たわみ2出土遺物 (1/4)



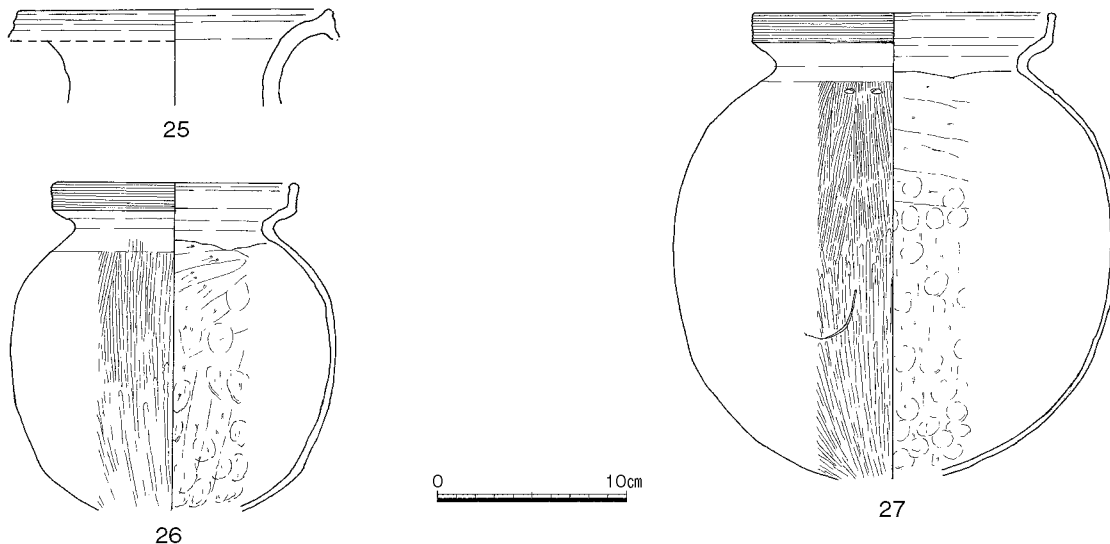
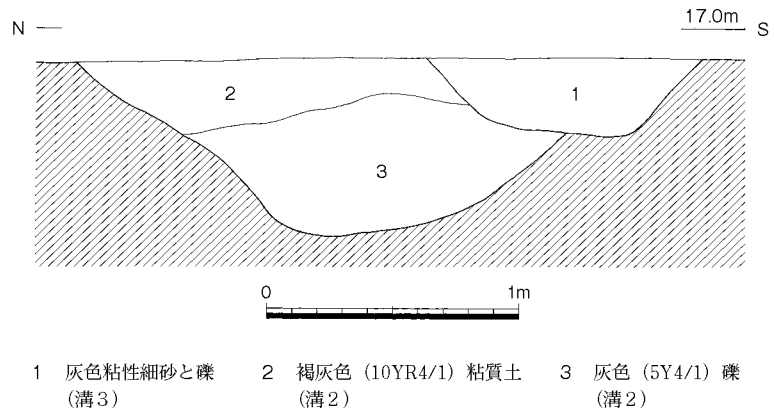
- 1 灰色 (7.5Y4/1) 粗砂と礫 (溝31)
- 2 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘質土 (木片、有機物) (溝1)
- 3 灰色 (7.5Y4/1) 粗砂と礫

第20図 溝1 (1/30) ・出土遺物 (1/4)

溝最下層は、礫を混じえた灰色粗砂層であり、その上位に木片や有機物を含んだ黒褐色土が堆積している。出土遺物として口縁部外面を竹管文で飾る24を図示した。層位関係の比較検討から溝は弥生時代後期段階の可能性を考えている。(大橋)

溝2 (第16・21図、図版3-2)

溝1の東に南西から北東に向く溝である。後述する溝3と重複する。幅190cm、深さ70cmを測る。溝底の海拔高は16.7mほどである。溝底には礫が堆積しており、この礫を巻き込んだ濁流によってか、部分的に凹凸が激しい。



第21図 溝2・3 (1/30) ・溝2出土遺物 (1/4)

出土遺物として25~27を図示しているが、25が壺、26・27が甕である。27の肩部には米粒状圧痕が認められる。溝の時期は26・27を参考に古墳時代前半期と考えられる。(大橋)

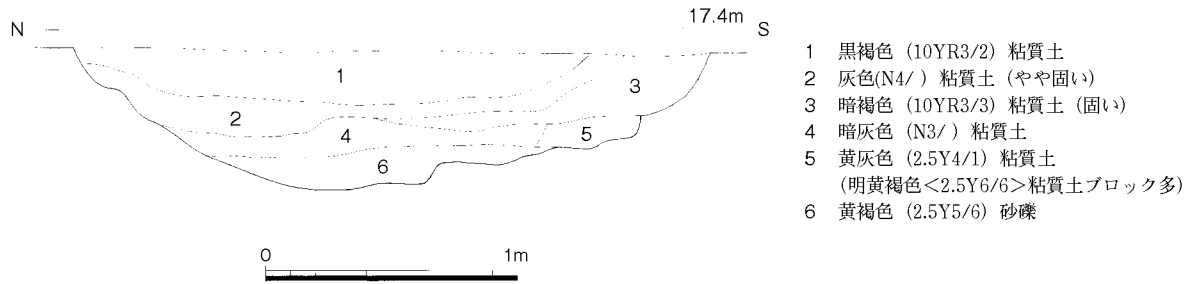
溝3 (第16・21図、図版3-3)

溝2とほぼ重複し、その上位にある溝である。溝2の埋没後に流れをほぼ踏襲している。検出面での幅約110cm、深さ30cmを測り、溝底の海拔高は17.2mほどである。埋土に多く礫を含む。

出土遺物が無く、時期は不明であるが、溝2との関係や層位関係から古墳時代前半段階に収まると考えている。(大橋)

溝4 (第16・22図、図版4-1)

溝2・3の東側、約12mの位置に、やや蛇行しながら南北方向に流路をとる溝である。幅約250cm、深さ50cmを測り、溝底の海拔高は16.7mほどである。埋積土の最下層は黄褐色の砂礫層であり、一時期的な水流の激しさが想像される。出土遺物は細片のため溝の詳細な時期は不明であるが、埋積後の上



- 1 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土
- 2 灰色(N4/) 粘質土 (やや固い)
- 3 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土 (固い)
- 4 暗灰色 (N3/) 粘質土
- 5 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土
(明黄褐色<2.5Y6/6>粘質土ブロック多)
- 6 黄褐色 (2.5Y5/6) 砂礫

第22図 溝4 (1/30)

面を古墳時代前半の黒褐色土が覆うことからこれ以前、弥生時代後期から古墳時代前半までの時期と判断した。

溝5 (第16・23図、図版4-2・3)

たわみ1の東方に、ほぼ南北にS字状に蛇行しながら流れる溝である。幅140cm、深さ30cmを測り、溝底の海拔高は16.5m前後である。後述する溝6とは組紐のような状況で重複し、溝6に後出している。埋土は大きく2段階に分かれ、また礫を多く含む層がある。時期を判断する出土遺物がないものの層位関係から弥生時代後期段階の可能性が高い。

(大橋)

溝6 (第16・23図)

溝5と重複し、これに先行する溝である。幅75cm、深さ20cmを測り、溝底の海拔高は16.6mと溝5より浅い。埋積土は黒褐色土である。

この溝も時期を判断する出土遺物がないものの、周囲の状況を勘案すれば弥生時代後期と判断される。

(大橋)

溝7 (第16・23図)

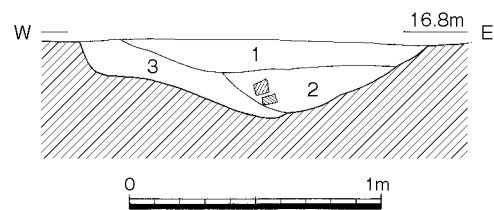
溝5・溝6の南端部で重複し、L字状に屈曲し溝5・溝6に先行する溝である。幅160cm、深さ20cm、溝底の海拔高は16.2mほどと3条の中で最も深い。埋積土は黒褐色土である。この溝も他の溝との重複関係を勘案すれば、弥生時代後期段階の可能性を考えられる。

(大橋)

溝8・9・10 (第16・24図、図版5-1)

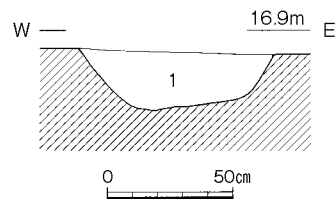
溝8は、溝5・6の東方約20m付近で検出された溝である。幅40cm、深さ15cm、溝底の海拔高は16.1m程度であり、北から南方へ低くなっている。溝9は溝8の東10mに位置し、幅45cm、深さ5cm、溝底の海拔高は16.1m程度である。溝10は溝9の0.8~1mほど東で平行して流れている。調査区南端付近で流れの向きを南北方向から西側へと屈曲するようである。また、溝9も平面的には確認できな

溝5



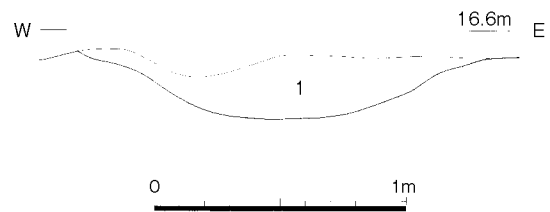
- 1 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土 (固い)
- 2 灰色 (5Y4/1) 粘質土 (礫多)
- 3 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 (固い)

溝6



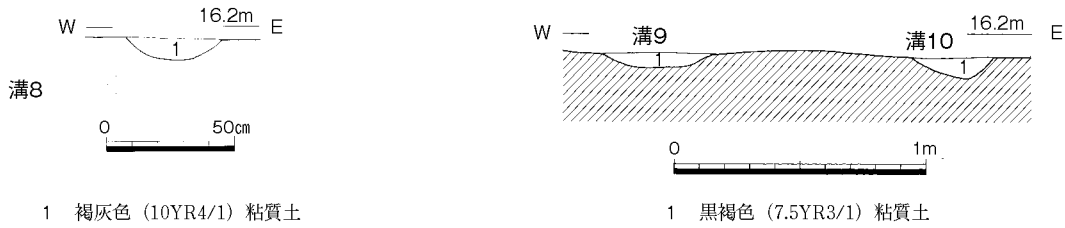
- 1 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土

溝7



- 1 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘質土

第23図 溝5・6・7 (1/30)



1 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土

1 黒褐色 (7.5YR3/1) 粘質土

第24図 溝8・9・10 (1/30)

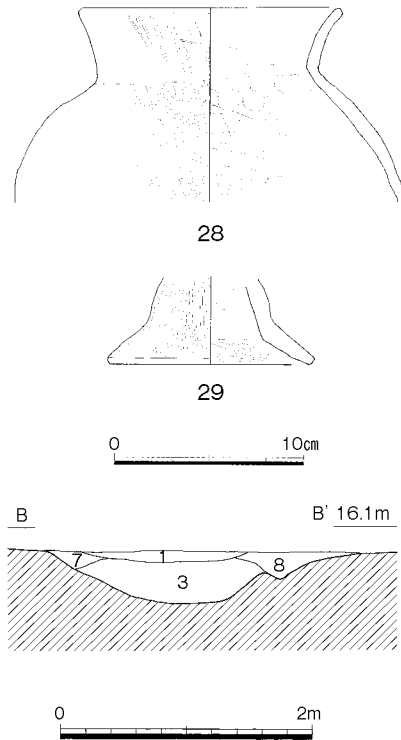
かったが、同様に屈曲し、この位置で溝10と重複していると考えられる。

溝8～10の時期を判断する明確な出土遺物はないが、古墳時代前半と推測される黒褐色土で上面が覆われていることから、弥生時代後期～古墳時代前半の範疇になるものと判断した。(大橋)

溝11 (第16・25図、図版5-2)

I区中央付近で検出された溝で、土壌1を一部削平している。幅250～330cm、深さはA-A'断面で80cm、B-B'断面で40cmと浅い。これは本来2条の溝が重複しており、深く古段階の溝が南北方向に延び、浅く新段階の溝が南北から東へ屈曲しているためと考えられる。第25図に示す5・6層が古い溝の堆積、それ以外が新しい溝の堆積であり、それぞれ溝底には多量の礫を含む粗砂が堆積している。

図示した出土遺物と、層位関係を考え併せて溝の時期は弥生時代後期から古墳時代前半までの中で考えたい。(大橋)

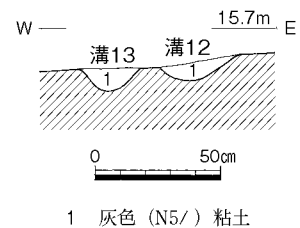


- | | | |
|--------------------------|---------------------------|----------------------|
| 1 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土 (固い) | 4 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土 | 7 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土 |
| 2 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質土 | 5 灰色 (N4/) 粘質土 | 8 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土 |
| 3 灰色 (7.5Y4/1) 粗砂と多量の礫 | 6 オリーブ灰色 (5GY5/1) 粗砂と多量の礫 | |

第25図 溝11 (1/60) ・ 出土遺物 (1/4)

溝12・13 (第16・26図)

溝11の南東6mで北西から南東方向に平行に延びる2条の溝である。溝間はほぼ接し、幅20～30cmを測る。溝底には連続する凹凸が認められ、深さは約20cmである。土壌2の主軸方向と同じくし、土壌北壁に接して伸びる。また、この溝を境に面的に西側がやや低くなる。出土遺物はないが、土壌2と関連性が推し量られる遺構で、同じく弥生時代後期後半の時期と判断した。(大橋)



1 灰色 (N5/) 粘土

第26図 溝12・13 (1/30)

溝14・15 (第10・16図)

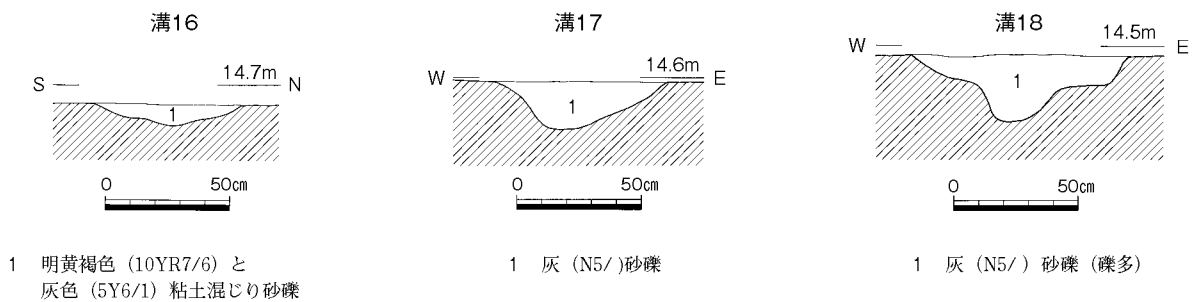
土壌2の南東で確認された平行する2条の溝である。溝14は、幅200cm、深さ20cmを測り、溝底の海

抜高15.3m。溝15は、幅150cm、深さ30cm、溝底の海拔高は15.1mを測る。溝の時期は、溝14が古墳時代前半の黒褐色土を切っていることからこれ以降、溝15はこの黒褐色土に覆われていることから、これ以前と考えられた。(大橋)

溝16・17・18 (第16・27図、図版5-3)

たわみ2・3の南方に位置するほぼ平行するように東西方向に延びる3条の溝である。それぞれ幅50~70cmほどで、溝底の海拔高は溝16が14.55m、溝17が14.4m、溝18が14.2mほどである。それぞれ砂礫で埋没しており、溝18の断面の形状は二段に掘り込まれている。なお、溝17は土壌3を削平しており、これに後出する。

出土遺物は細片のみで詳細な溝の時期は不明であるが、周囲の状況と層位関係を勘案すれば弥生時代後期の可能性が高い。(大橋)



第27図 溝16・17・18 (1/30)

溝19・20・21・22・23 (第16・28・29・31~34図、図版6、7-1)

I区南端部では、複数の溝が検出されている。これらは、縄文時代後期以降の自然流路の埋没後、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけて形成された水田に関連する遺構として評価している。

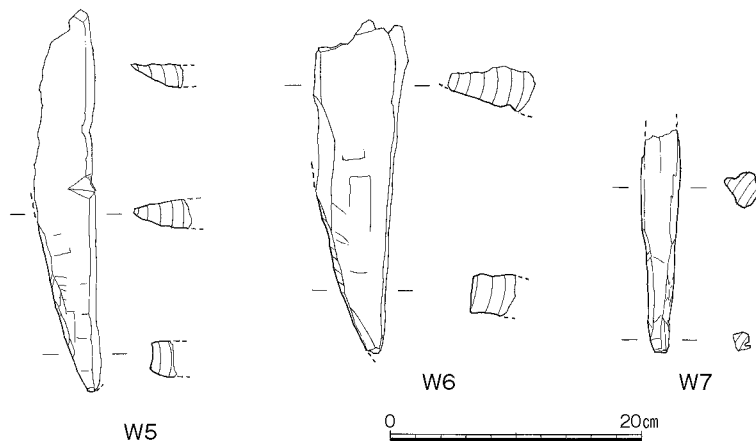
溝19は5条の溝のうち、もっとも先行すると思われる溝である。北西から南東方向に直線的に延び、幅110cm、深さ25cmほどを測る。溝底には砂礫が堆積している。

溝20は溝19に直交し、その埋没後に流れている。溝幅60cmを測る。

溝21は、北西から南東方向に延びる溝で、幅4~5mほど、深さ50cmの幅広な溝であり、幹線用排水路と思われる。溝底には主に溝横方向に2列と北側法面付近とに、あわせてコ字状に杭列が確認された。この杭列は溝21の水量

調節を行う堰の機能を果たす構造物の一部と考えられ、直交する溝20に水を導いていると理解される。なお、溝20と溝21の溝底の比高は30cmほどあり、溝20の方が高い。溝の最下層は砂礫が堆積している。

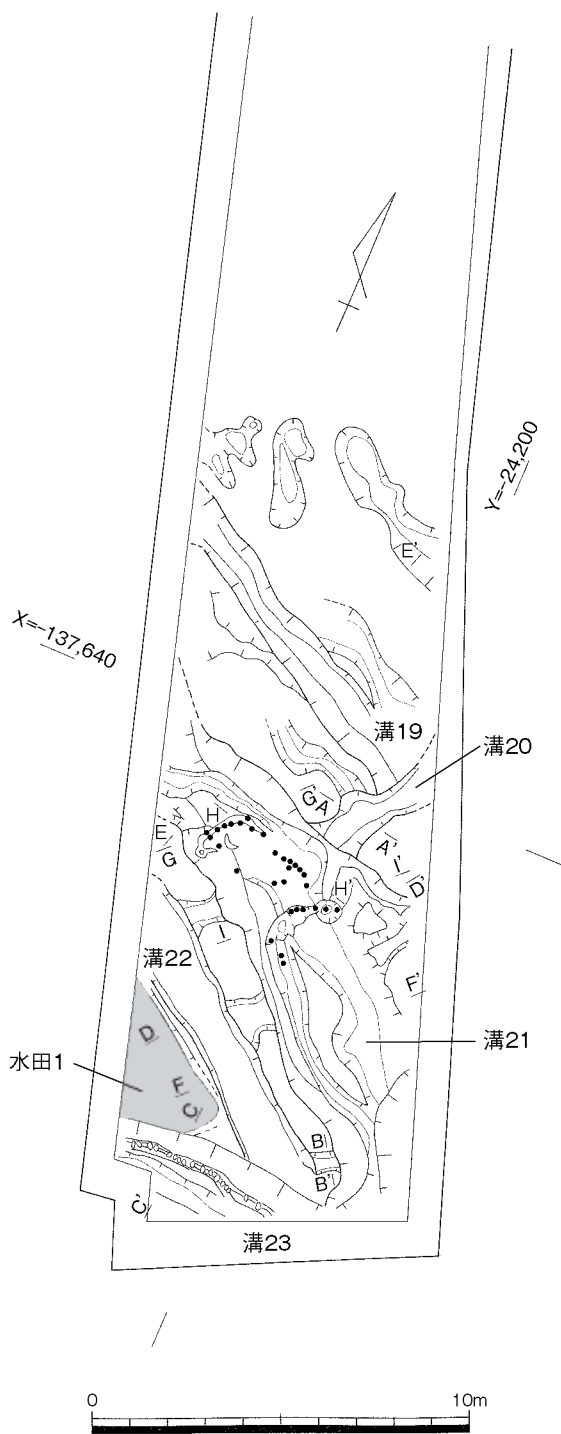
溝22は、溝21の南側に幅60~100cmほどの高まりを挟んでほぼ平行に延びている溝である。幅130cm、深さ10cmほど



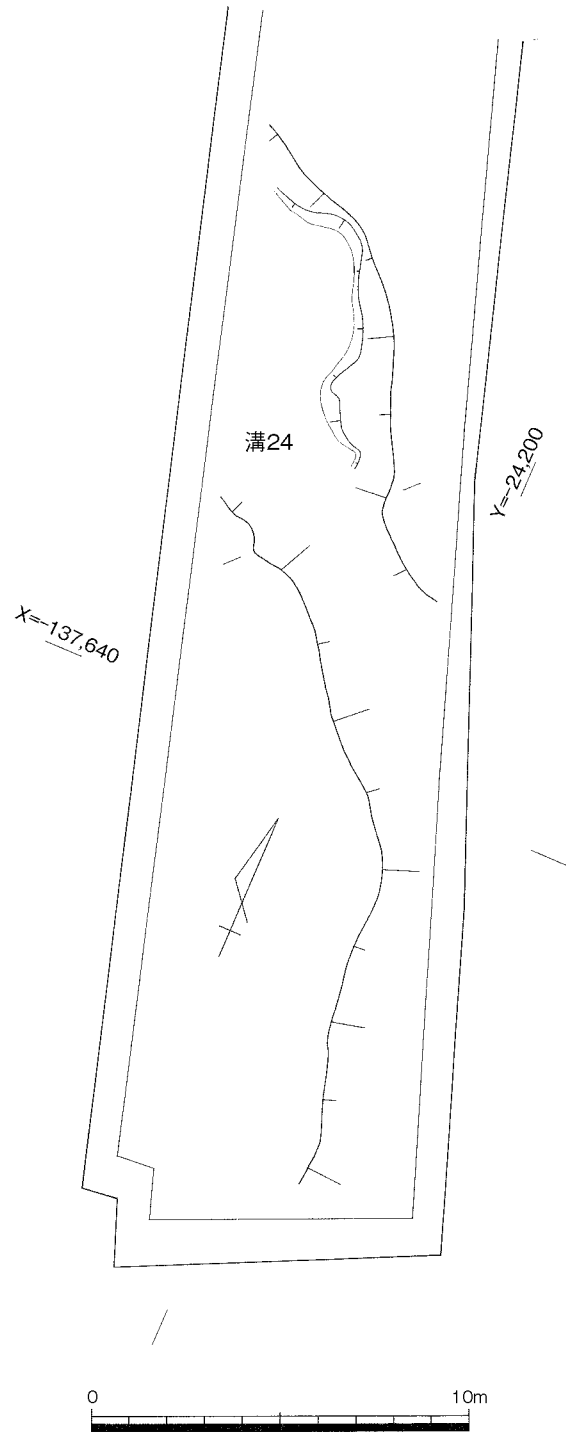
第28図 溝21出土遺物 (1/6)

を測る。溝底は平坦に加工されており、溝21から水を取り入れたと思われる水口状の連結部が3か所確認された。なお、溝21との溝底の比高は60cmほどあり、溝22の方が高い。この溝も砂礫で埋没している。

溝23は溝22と一部重複し、これを削平するように東西方向に延びる。幅250cm、深さ30cmを測る。溝底の海拔高は13.6mほどである。この溝の底には、連続する凹凸が認められ、溝を掘削した鋤状の工具痕跡ではないかと考えられる。

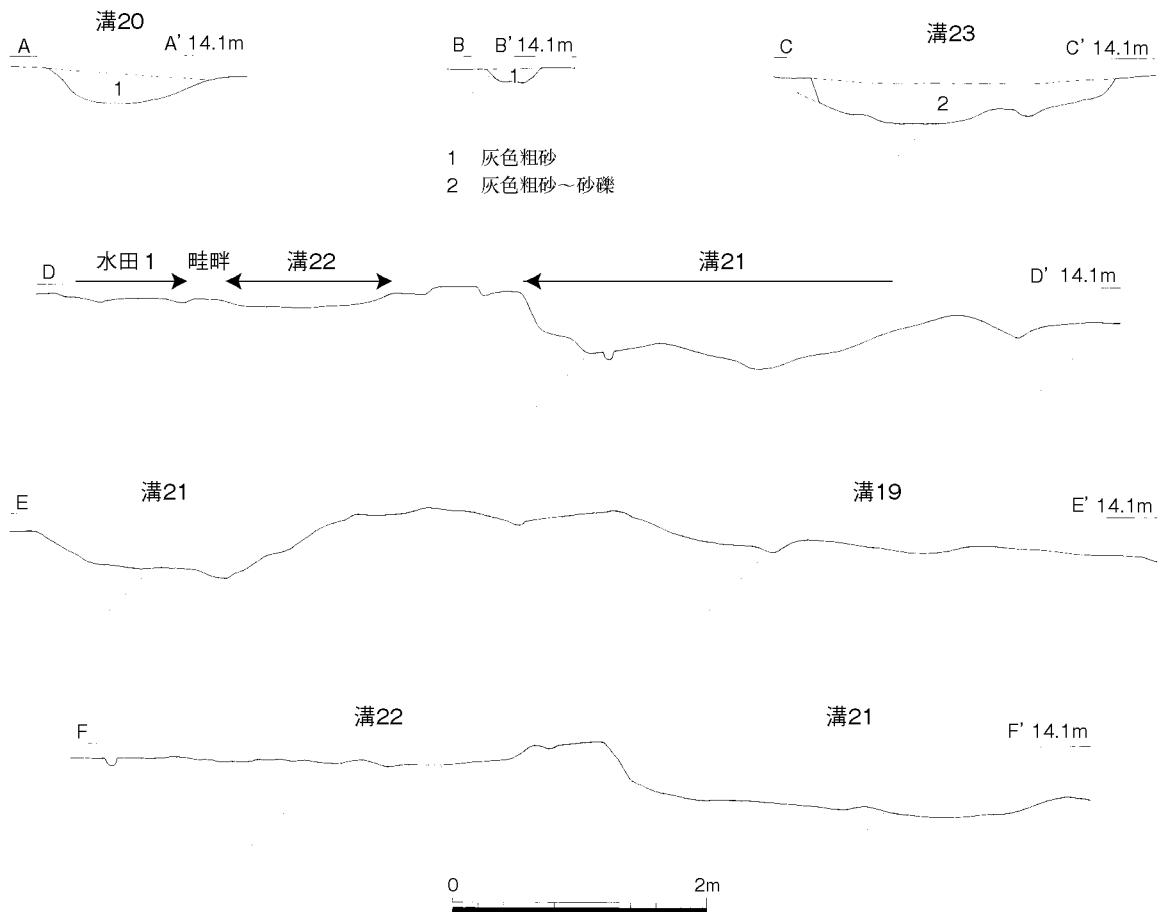


第29図 溝19・20・21・22・23・水田1 (1/200)

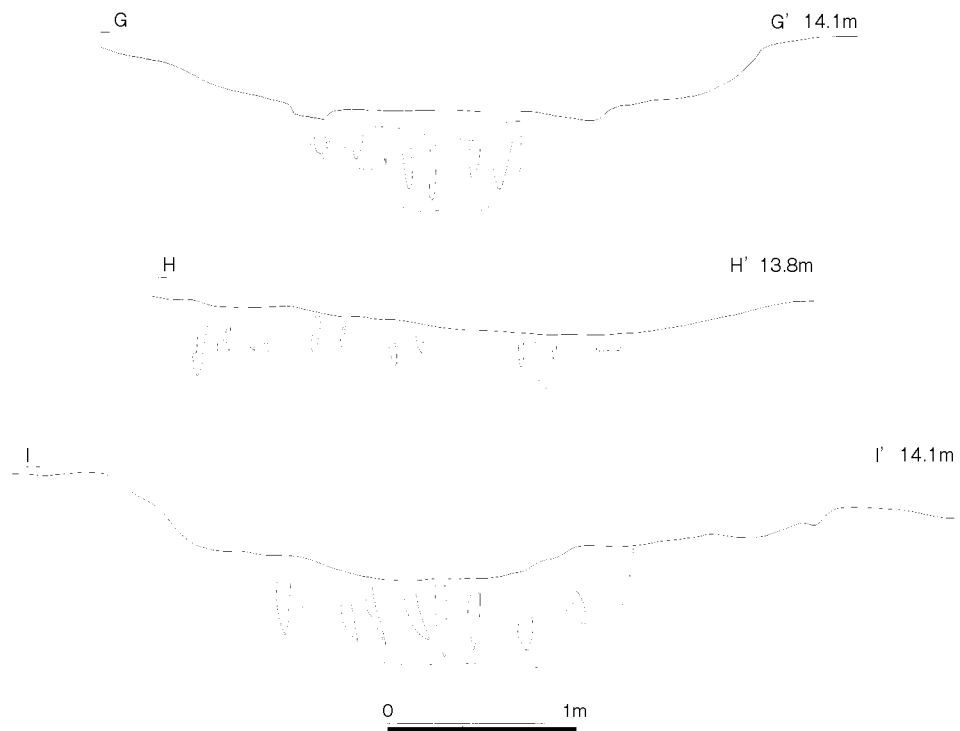


第30図 溝24 (1/200)

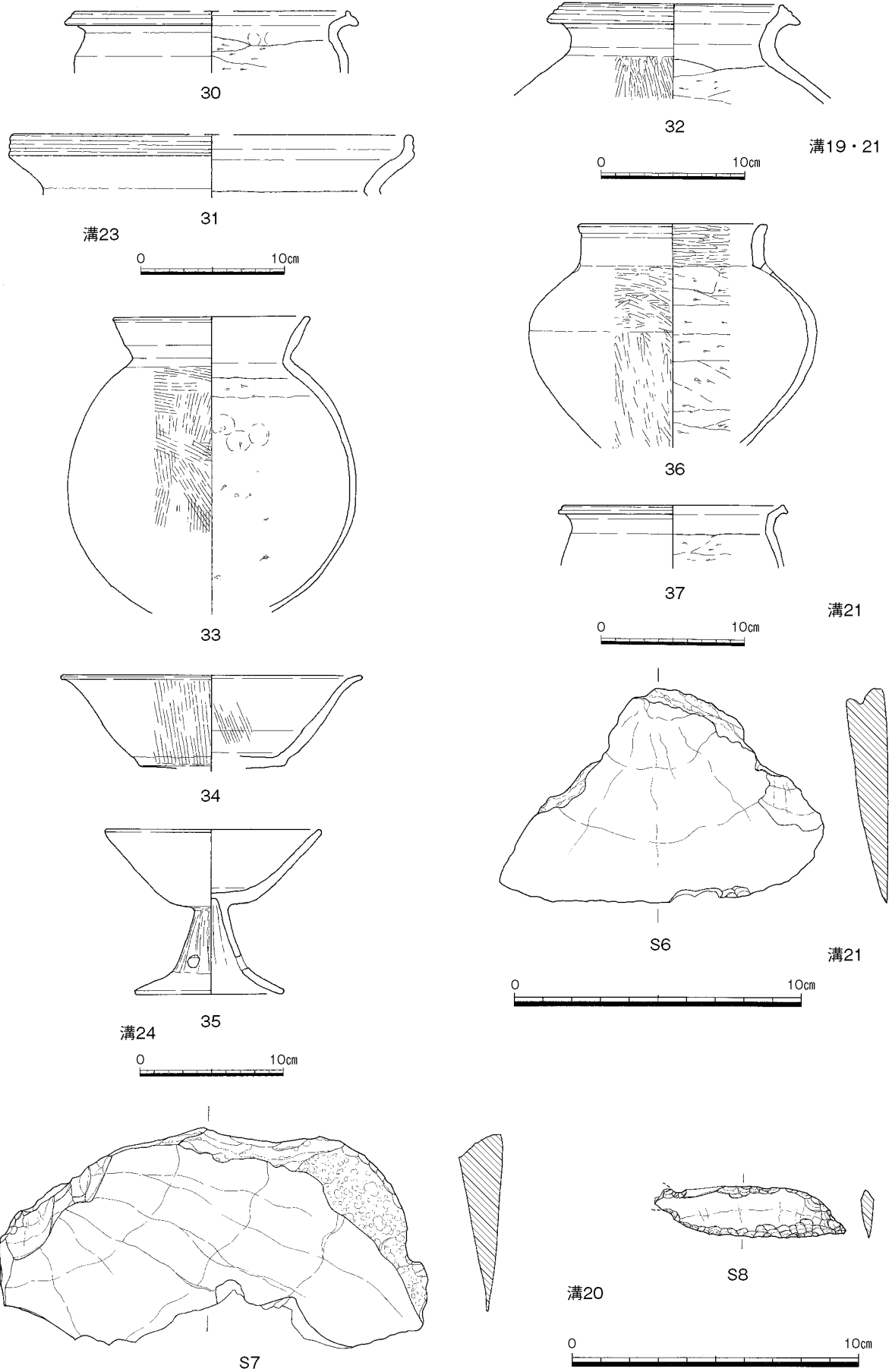
第3章 発掘調査の概要



第31図 溝19・20・21・22・23、水田1 (1/60)



第32図 溝21 (1/40)



第33図 溝19・20・21・23・24出土遺物 (1/4・1/2)

第33図にそれぞれの出土遺物を図示した。36・37が溝21から、30・31が溝23からの出土である。また、S6・S7のサヌカイト製石核やS8の横型の石匙もある。これらの遺物と層序を参考にすれば、溝19→溝20・溝21・溝22→溝23の時期差を認めるものの、いずれも弥生時代後期後半段階の中で収まるものと理解された。

(大橋)

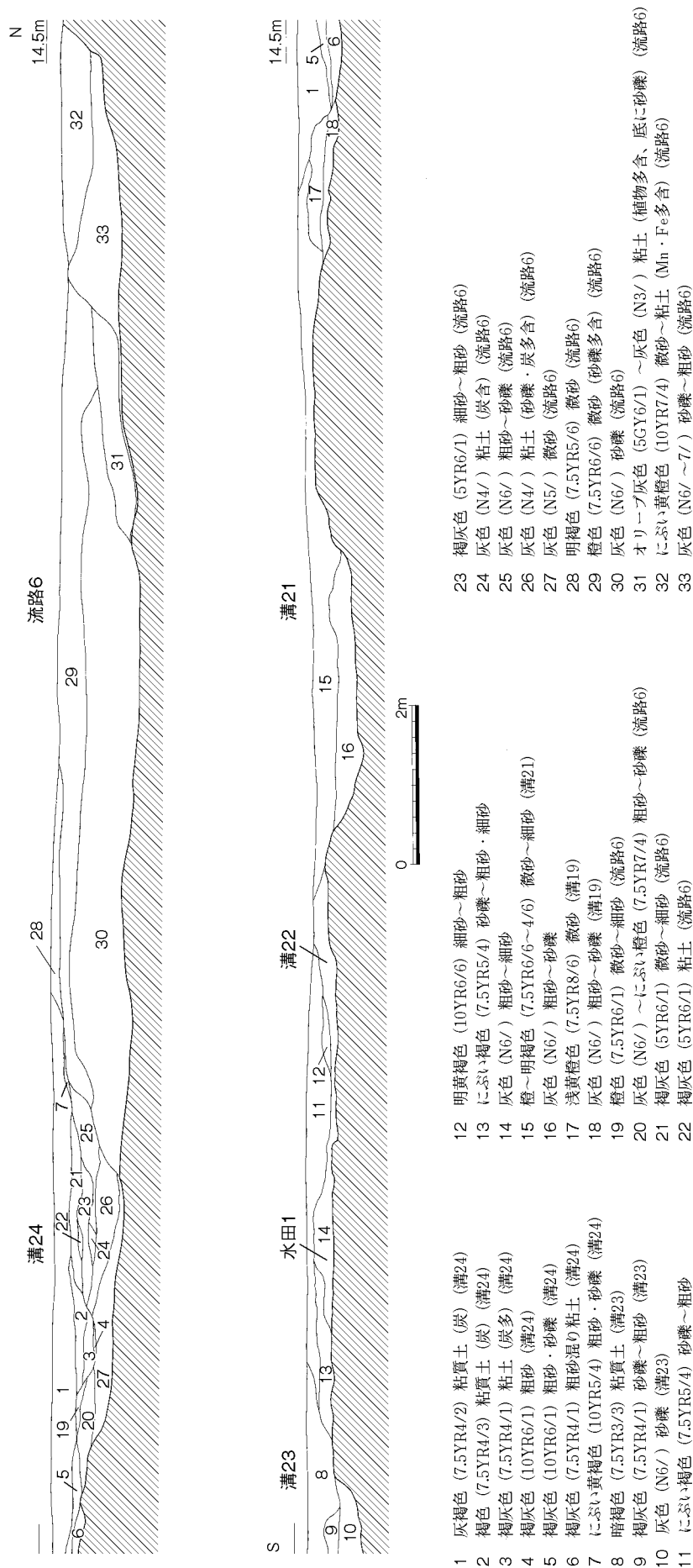
溝24 (第30・34・35図、図版7-2)

溝19・20・21の上位で検出された溝で、やや蛇行しながら北から南へ延びる。

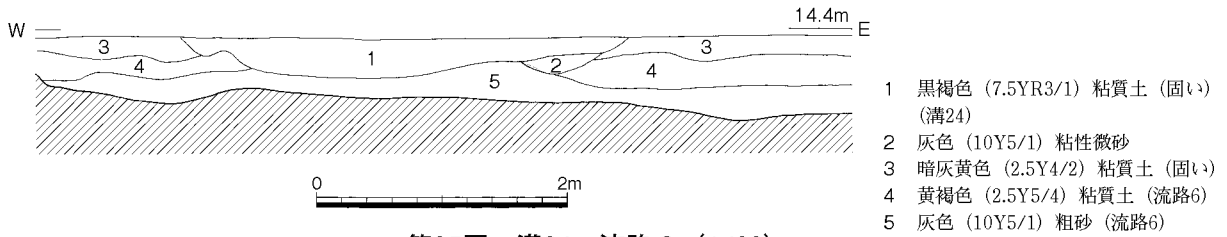
幅3～5m、検出面から60cmほどの深さを測る。溝底には数条の起伏があり、また砂礫を中心とした堆積も部分的に認められた。上位の埋積土は周辺で確認された古墳時代前半段階の黒褐色土と近似している。出土遺物は33の壺と34・35の高杯を図示した。

これらの出土遺物と層位関係から、この溝は古墳時代前半段階に埋没していったものと判断された。

(大橋)



第34図 溝19・21・22・23・24、水田1、流路6 (西壁) (1/80)

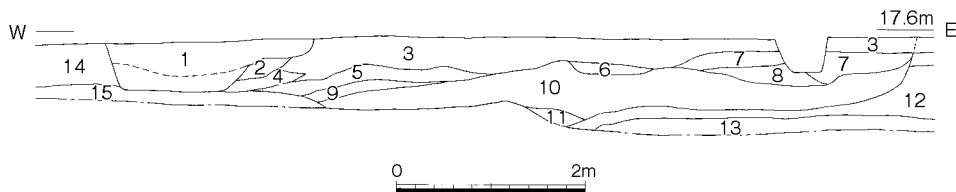


第35図 溝24、流路6 (1/60)

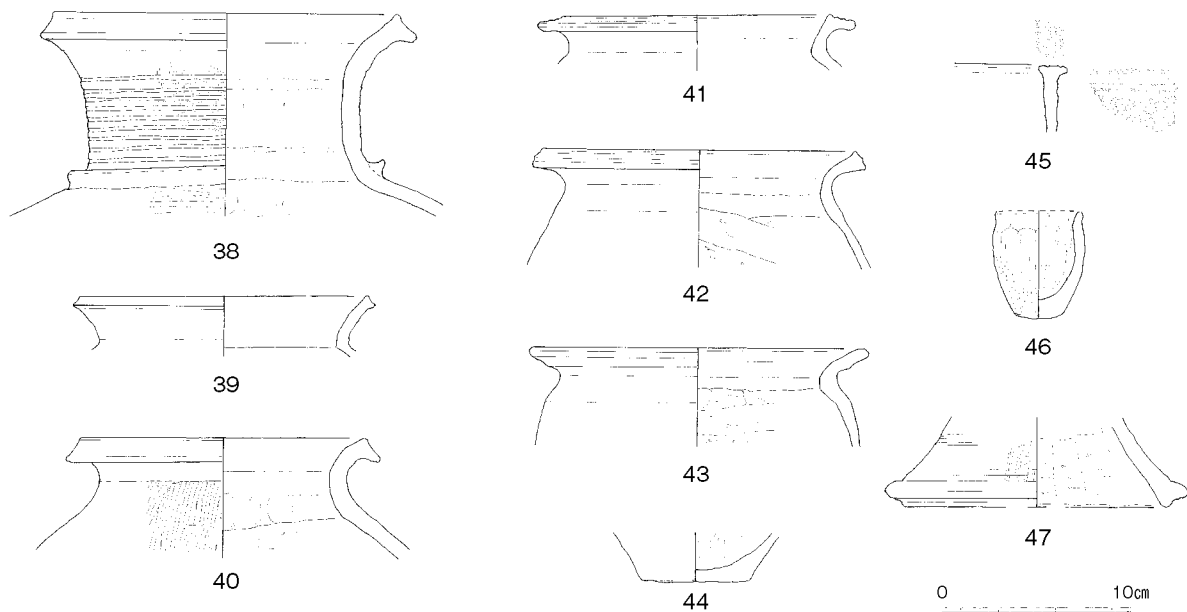
水田1 (第29・31・34図、図版7-3)

I区南端で溝22の南側に幅20~30cmほどの畔状の高まりを挟んで一段低くなった平坦面を確認した。この平坦面は黄褐色基盤層を掘削して形成されており、その海拔高は14mを測る。水田耕作土自体は確認されず、基盤層上面は砂礫で被覆されていることから、確定はできないが、溝21の灌溉施設的な杭の状況や用排水路状の溝のあり方から、微高地端部を削平した水田痕跡と判断した。耕作土の欠如は、被覆している砂礫から考えて、開墾まもなくの洪水によって流失したと想像される。この基盤層上面には、径10~15cm程度の小穴が2個対状に確認され、平坦面を構築する開墾に用いたナスビ形又鍬などのような工具の痕跡ではないかと推測された。

水田の時期は、溝10を勘案すれば、弥生時代後期後半と考えられる。 (大橋)



- | | | |
|----------------------|----------------------------------|------------------------------|
| 1 灰色 (5Y4/1) 粗砂と礫 | 6 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘性細砂 | 11 黄褐色 (10YR5/6) 粘性粗砂と礫 |
| 2 灰色 (5Y4/1) 粘性微砂 | 7 灰色 (N4/) 粘質土と礫 | 12 灰色 (10Y5/1) 粘質土 |
| 3 褐灰色 (10YR4/1) 粘性細砂 | 8 にぶい黄褐色 (10YR5/6) 粘性細砂と礫 (Fe沈着) | 13 オリーブ黄色 (5Y6/4) 粘性粗砂と礫 |
| 4 灰色 (5Y4/1) 粘性細砂と小礫 | 9 灰色 (N4/) 粘質土 (固くしまる) | 14 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土 (固くしまる) |
| 5 灰色 (5Y4/1) 粘性細砂と礫 | 10 灰色 (10Y4/1) 粘性粗砂と礫 | 15 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土 |



第36図 流路7 (1/80) ・出土遺物 (1/4)

流路7 (第16・36図)

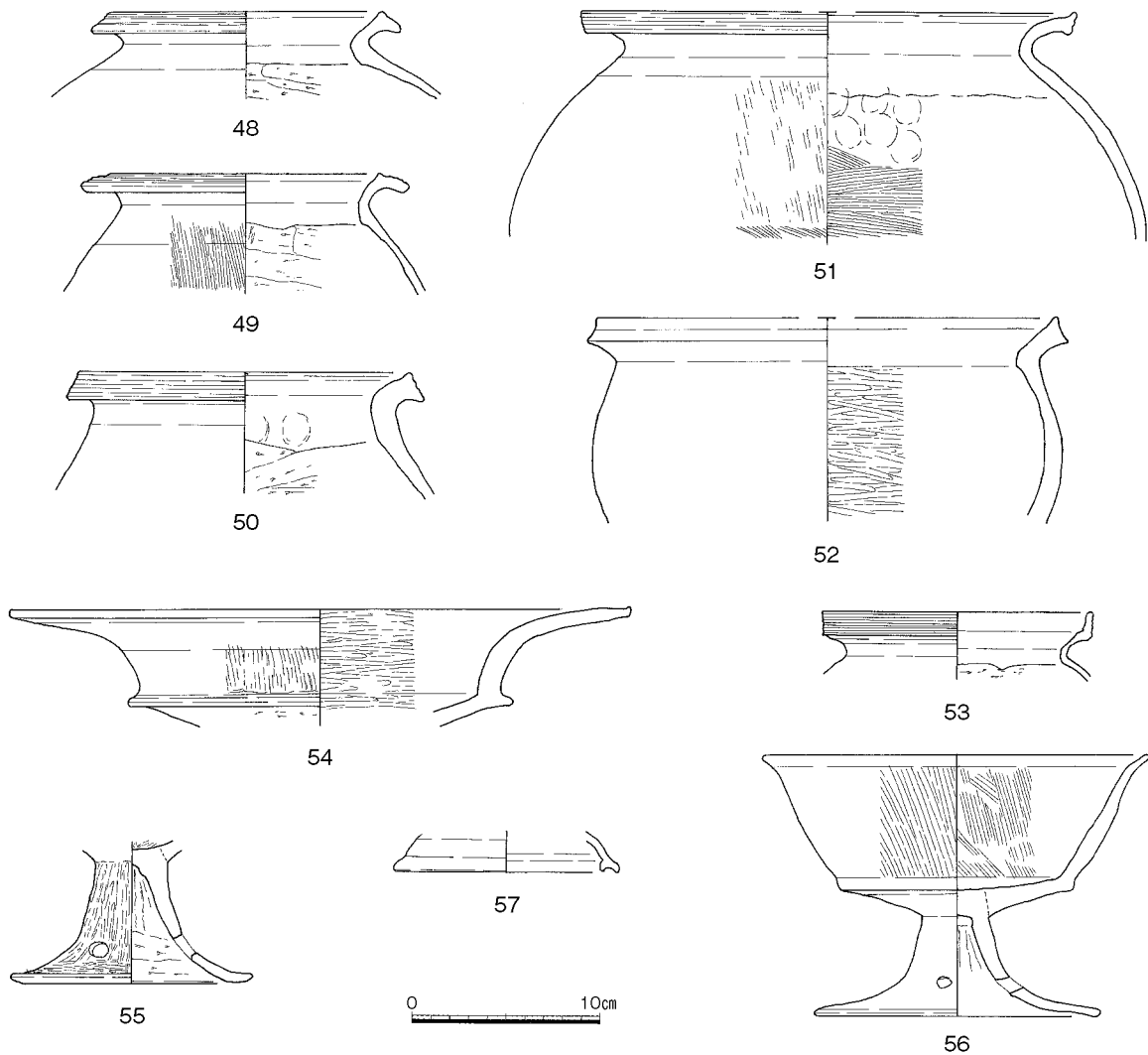
溝2・3の下位で、不整形な平面形をもつ砂礫や粗砂を基本とする堆積を確認した。北から南へと延びるようであり、自然流路と判断した。幅は約8mほど、深さは1mほどある。また底の海拔高は16.6mである。堆積状況の観察により時期差を認めうることから、複数回の激しく水量が増した時期の存在が推測された。また、この流路の下位にも礫の堆積が確認され、さらに古い段階にも流路が存在したことが想像に難くない。

出土遺物は38~47を図示したが、弥生時代中期後半から後期前半段階にかけての時期と判断した。
(大橋)

その他の出土遺物 (第37図)

これまで説明した遺構などに帰属しない堆積層などからの出土遺物をここで図示した。

48~51は弥生時代中期後半から後期の甕である。49は口縁部を外側に拡張させて凹線を施している。51は口縁端部を外方につまみ上げて、外面に凹線を巡らす。52は鉢で内面はヘラミガキが観察できる。53は古墳時代初頭の甕。54は高杯の杯部として図化した。屈曲部から短く立ち上がり大きく口縁部は外反している。55・56は土師器の高杯。57は返りをもつ須恵器蓋である。
(大橋)

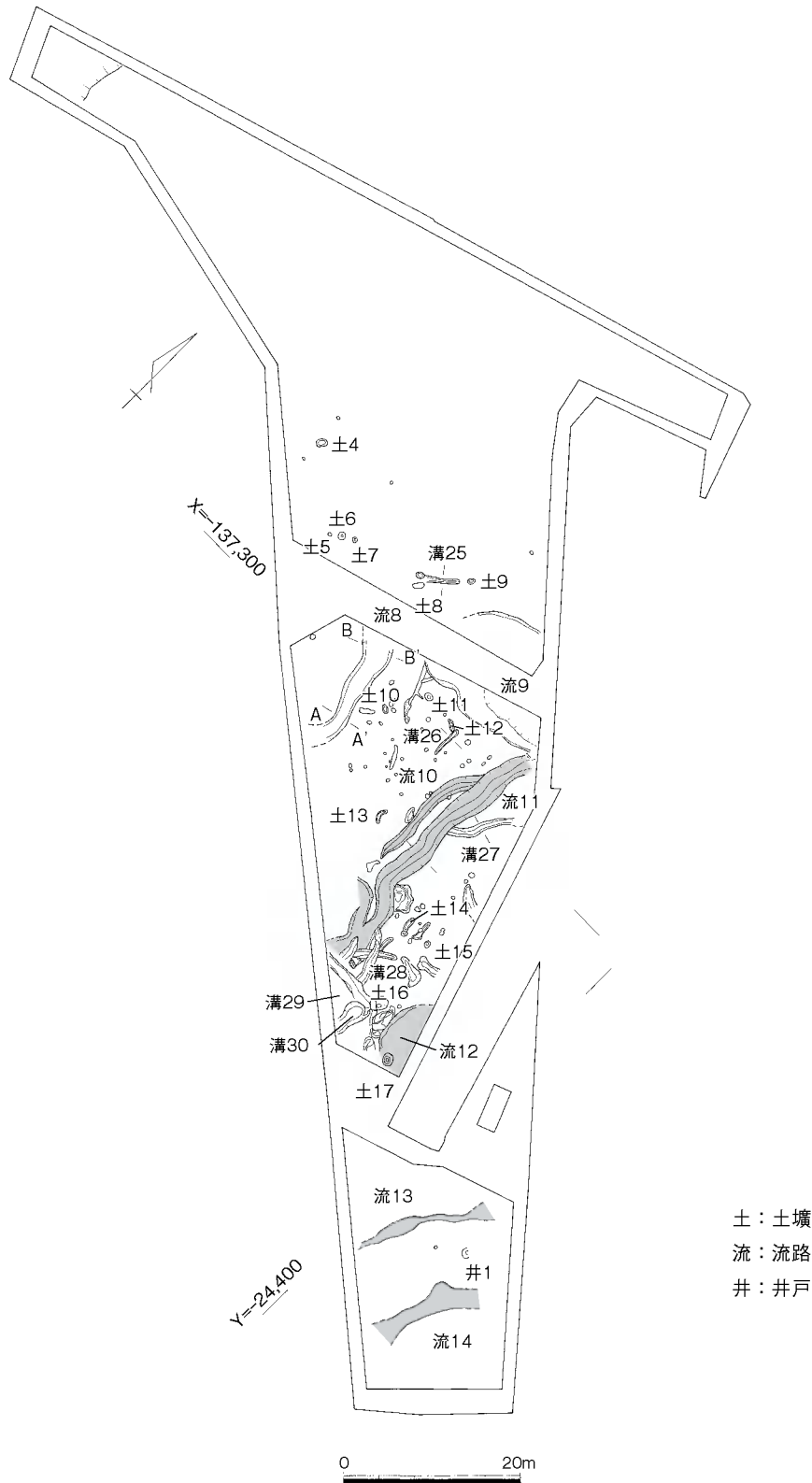


第37図 その他の出土遺物 (1/4)

3 古代・中世の遺構・遺物

土壌4 (第38・40図)

I区最北端の緩やかに南に傾斜する位置に検出した。平面形は不整形な円形をなし、規模は長辺1

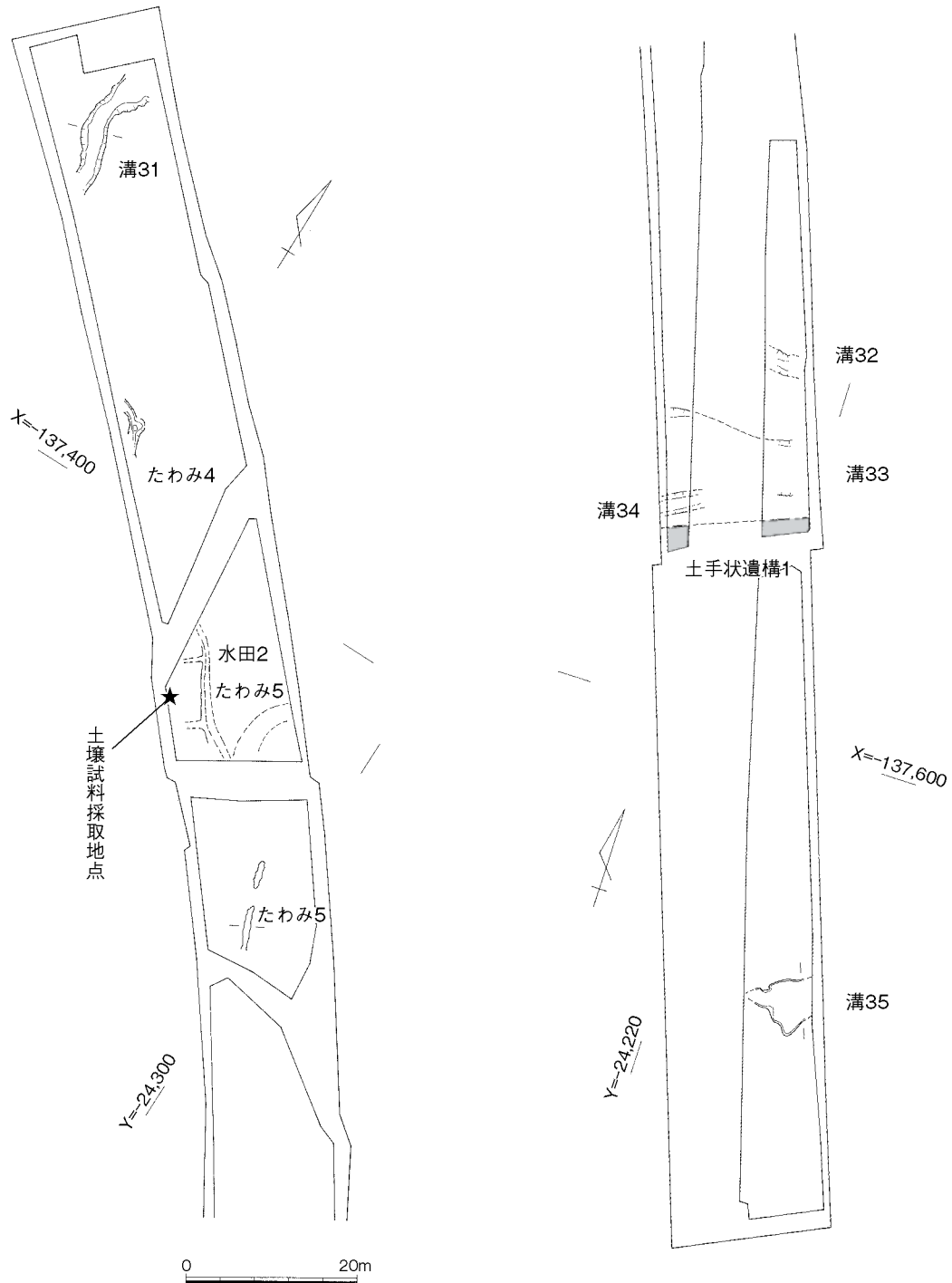


第38図 I区古代・中世遺構全体図① (1/800)

m、短辺80cmを測る。断面はやや浅い皿状をなし、深さ7cmを測る。時期を確定する遺物は出土していないが、埋土や検出状況等から中世と考えられる。(山磨)

土壇5 (第38・40図)

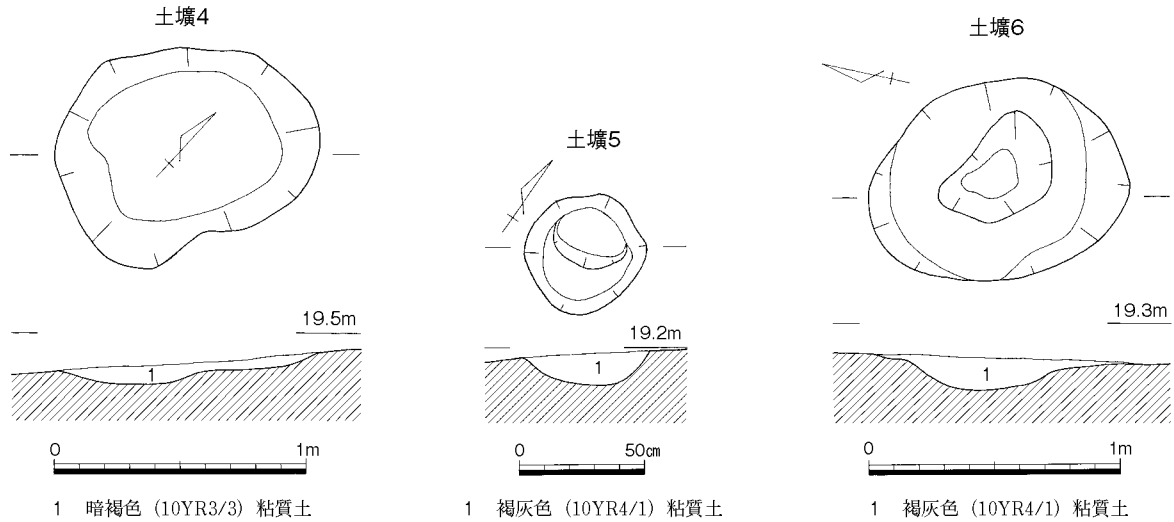
I区最北端の緩やかに南に傾斜する位置に検出した。3基並列して検出した西端の1基である。平面形はやや不定形な円形を呈し、規模は長径50cm、短径45cmを測る。断面は浅い皿状をなし、深さ12cmを測る。遺物は出土していない。時期は埋土や検出状況等から中世の範疇と考えられる。(山磨)



第39図 I区古代・中世遺構全体図② (1/800)

土壙6 (第38・40図)

I区最北端の緩やかに南に傾斜する斜面に3基並列して検出した中央の1基である。平面形はほぼ円形を呈し、長径1m、短径80cmを測る。断面は皿状を呈し、深さ13cmである。遺物は出土していない。時期は埋土や検出状況等から中世の範疇と考えられる。(山磨)



第40図 土壙4・5・6 (1/30)

土壙7 (第38・41図)

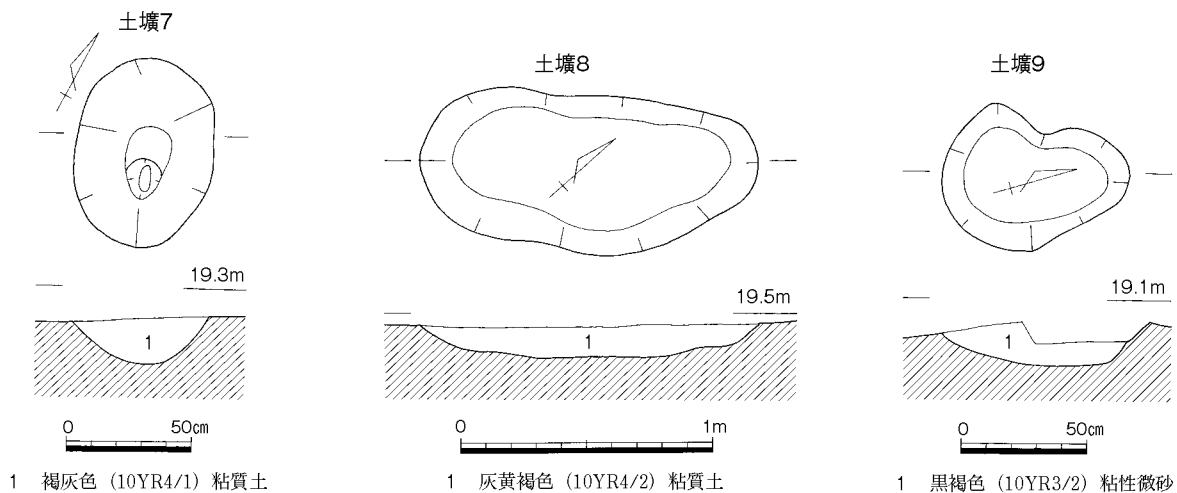
I区最北端の緩やかに南に傾斜する斜面に3基並列して検出した東端の1基である。平面形は楕円形を呈し、長径75cm、短径55cmを測る。断面は碗状を呈し、深さ18cmである。遺物は出土していない。時期は埋土や検出状況等から中世の範疇と考えられる。(山磨)

土壙8 (第38・41図)

I区最北端の緩やかに南に傾斜する斜面中央に検出した。平面形は、やや不整形な長楕円形を呈し、長径1.3m、短径60cmを測る。断面は皿状を呈し、深さ10cmである。時期を確定する遺物は出土していないが、埋土や検出状況等から中世の範疇と考えられる。(山磨)

土壙9 (第38・41図)

I区最北端の緩やかに南に傾斜する斜面のやや東に検出した。平面形は不整形な形状を呈し、長径75cm、短径55cmを測る。断面は皿状を呈し、深さ15cmである。遺物は出土していない。時期は埋土や



第41図 土壙7・8・9 (1/30)

堆積状況等から中世の範疇と考えられる。 (山磨)

土壙10 (第38・42図)

I区北端部のやや北寄りの平坦部に検出した。平面形は楕円形の形状に呈し、長径82cm、短径58cmを測る。断面は皿状を呈し、深さ12cmである。遺物は出土していない。時期は埋土や検出状況等から古代の可能性はある。 (山磨)

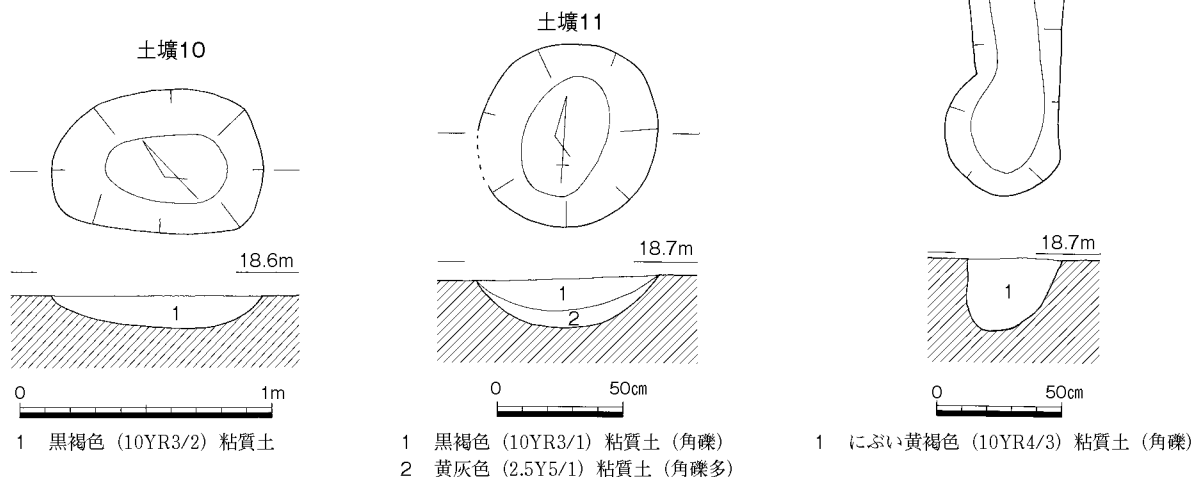
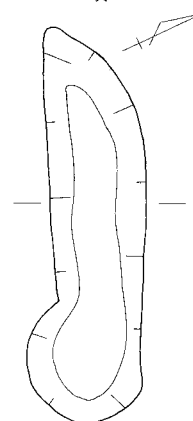
土壙11 (第38・42図)

土壙10と同様の1区北端部の平坦面に検出した。平面形はほぼ円形を呈し、長径74cm、短径69cmを測る。断面は椀状を呈し、深さ20cmである。埋土は2層に分層でき、いずれにも角礫を含んでいる。遺物は出土していない。時期は埋土や検出状況等から古代の可能性はある。 (山磨)

土壙12 (第38・42図)

I区北端部の土壙11の東側3mに検出した。平面形は不整形な形状を呈し、長径156cm、短径45cmを測る。断面はU字形を呈し、深さ28cmである。埋土に角礫を含み弥生土器の細片が出土している。時期は埋土や出土遺物から古代以前の可能性がある。 (山磨)

土壙12



第42図 土壙10・11・12 (1/30)

土壙13 (第38・43図)

I区北端部に検出した。平面形は、長楕円形を呈し、長径195cm、短径78cmを測る。断面は東側が二段に掘削され、平坦な底面をなし深さ28cmを測る。埋土中から弥生土器が出土している。時期は埋土や出土遺物等から古代以前の可能性がある。 (山磨)

土壙14 (第38・43図)

I区北端の平坦部に検出した。平面形は円形を呈し、長径60cm、短径58cmを測る。断面は掘鉢状を呈し、深さ18cmを測る。埋土中から土師器の細片が出土している。時期は埋土や出土遺物から古代以降である。 (山磨)

土壙15 (第38・43図)

I区北端に検出した。平面形はほぼ円形を呈し、長径70cm、短径65cmを測る。断面は逆台形を呈し、深さ25cmである。遺物は出土していない。時期は埋土や検出状況等から古代であろう。 (山磨)

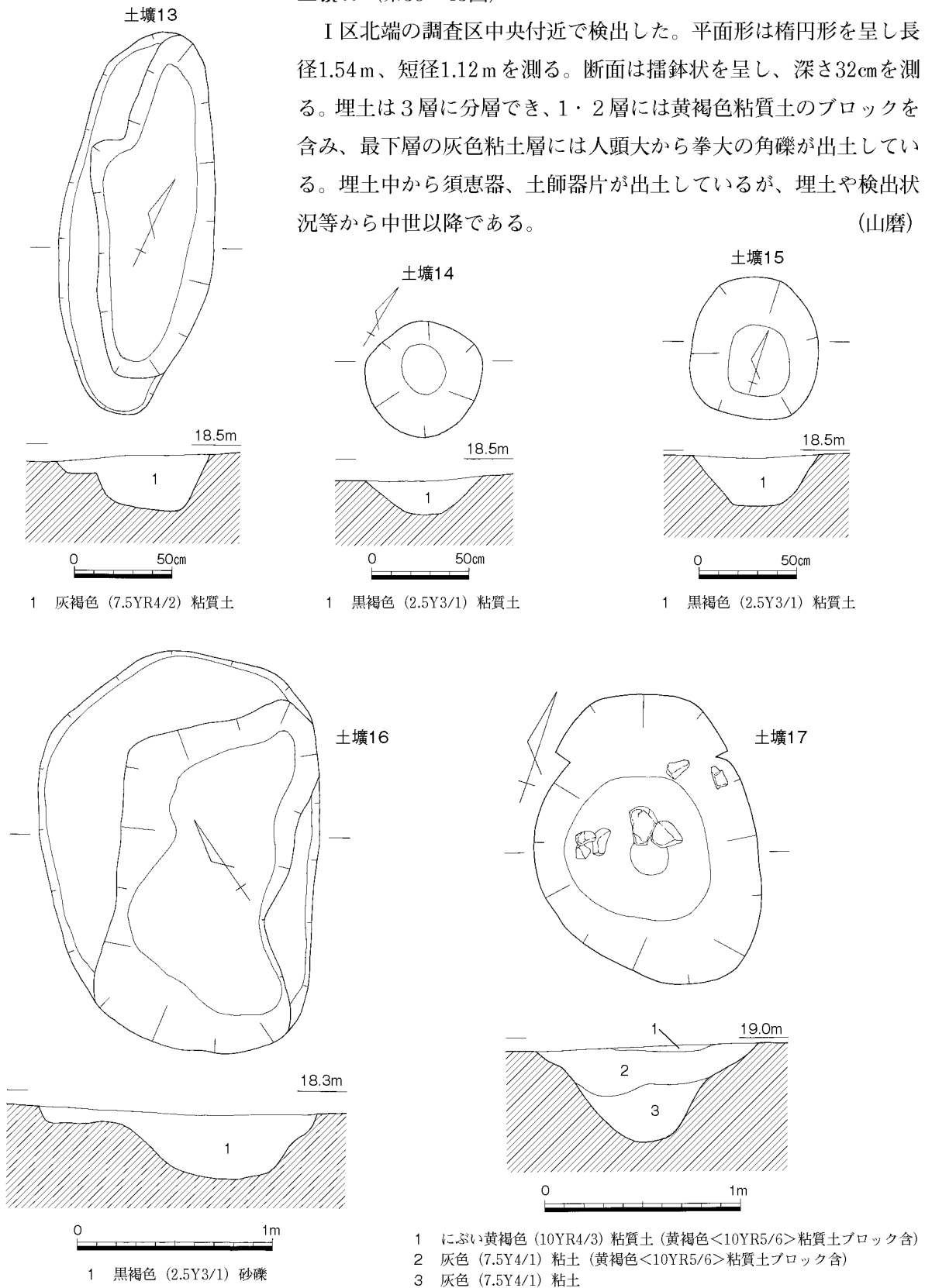
土壙16 (第38・43図)

I区北端の古代の包含層除去後の緩斜面に検出した。平面形は楕円形を呈し、長径2.05m、短径1.4

mを測る。掘り方は、北半部が2段に掘削され最大深さ32cmである。埋土は砂礫を含む黒褐色土である。遺物は出土していない。時期は埋土や検出状況等から古代の範疇である。(山磨)

土壙17 (第38・43図)

I区北端の調査区中央付近で検出した。平面形は楕円形を呈し長径1.54m、短径1.12mを測る。断面は楕円状を呈し、深さ32cmを測る。埋土は3層に分層でき、1・2層には黄褐色粘質土のブロックを含み、最下層の灰色粘土層には人頭大から拳大の角礫が出土している。埋土中から須恵器、土師器片が出土しているが、埋土や検出状況等から中世以降である。(山磨)



第43図 土壙13・14・15・16・17 (1/30)

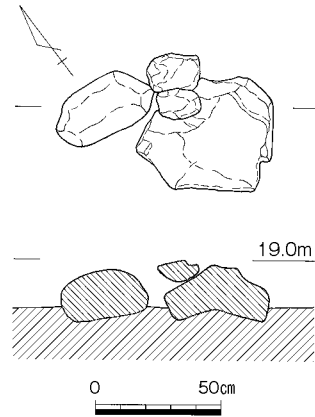
集石 1 (第44図)

I区北端の包含層上面に一辺15~50cm大の数個の角石が集中していた。集石下部には明瞭な掘り方は認められなく基盤面に集積した状況である。時期は集石周辺の埋土や検出状況等から中世以降である。(山磨)

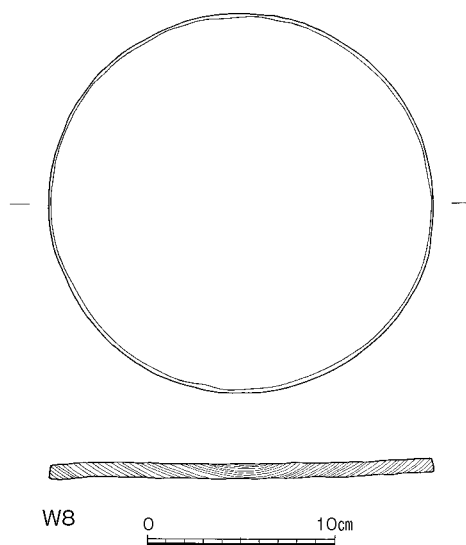
井戸 1 (第38・45・46図、巻頭図版2-2、図版2)

I区北端部の砂礫層を重機により掘削中に検出した須恵器大甕を転用した井戸である。検出面は第61図の流路14(第3層)を除去後の標高18.3m付近の暗灰黄色砂質土(第4層)上面である。井戸掘り方は、1辺1m前後のやや隅丸方形に近い形状である。底面は直径70cmほどを測り、海拔17.6m付近である。断面は中央がやや膨らんだU字形を呈し、底部中央がやや窪んだ状況である。掘り方および大甕等の一部は消失したが、底面の四隅に20cm大の扁平な石材を設置して、その上に、一辺6cm角で長さ48~50cmの両端にほぞ穴を設けた角材を方形に組み込んでいたと見られる。この上に須恵器大甕の頸部および底部を欠いた残存高75cm、最大幅90cmの体部を据えていた。井戸掘り方と大甕の間には、拳大の礫を含む埋土を充填していた。

遺物は、底部より須恵器の杯蓋と身、ヘラ状の骨製品、井戸底部に設置した可能性もある曲物の底部が出土している。時期は出土須恵器の特徴等から9世紀前半期が考えられる。(山磨)

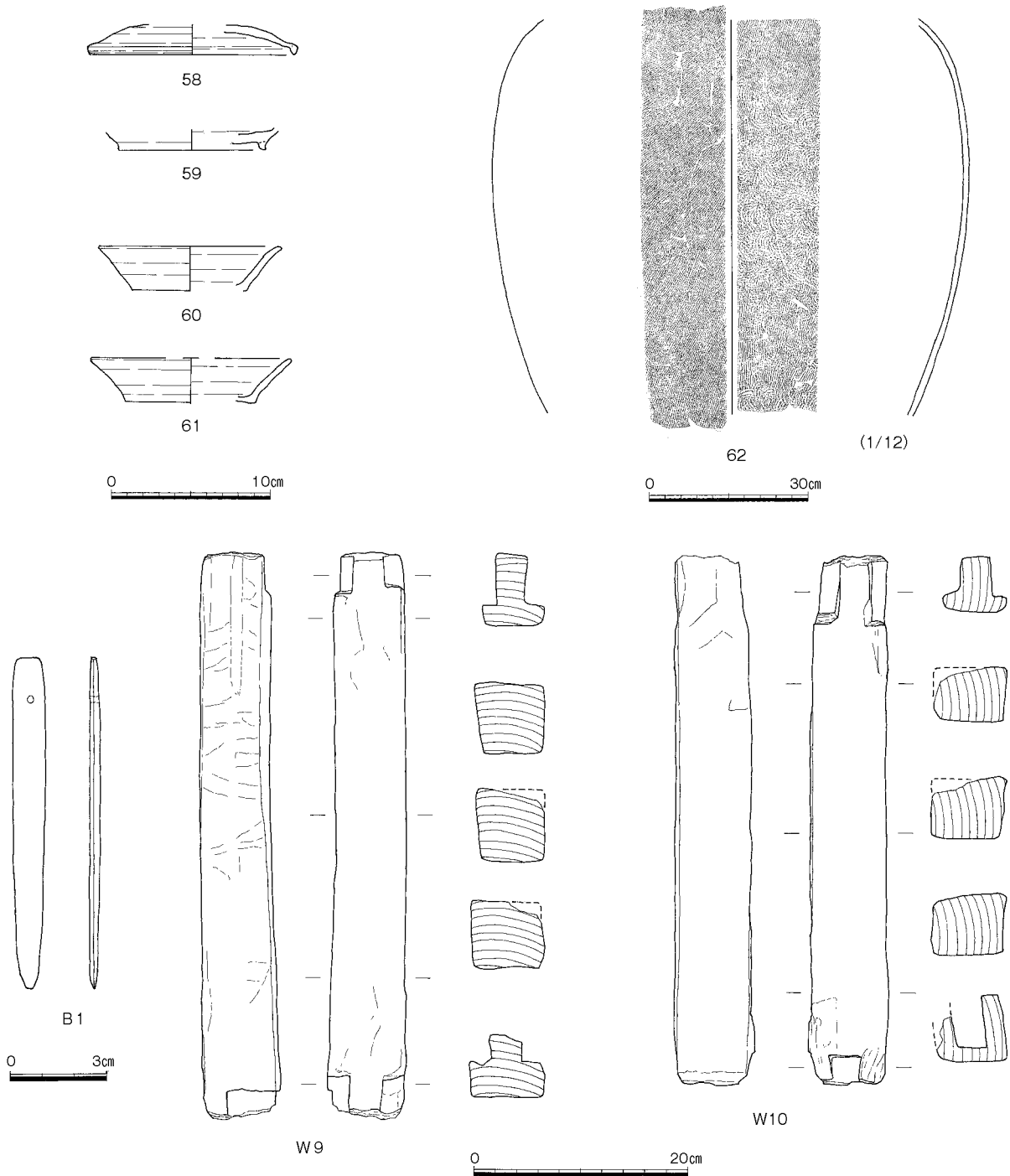


第44図 集石 1 (1/30)



- 1 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質土
- 2 円礫
- 3 灰色 (10Y4/1) 細砂
- 4 黒色 (10Y2/1) 粘土

第45図 井戸 1 (1/30) ・出土遺物① (1/4)

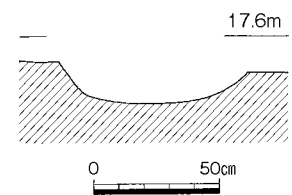


第46図 井戸1出土遺物② (1/2・1/4・1/6・1/12)

たわみ4・5 (第39・47・55図)

たわみ4は溝4の上位に調査区の壁際で確認されたもので、底面に粗砂が堆積している。溝4の埋没後の窪みと考えられ、中世段階のものと思われる。

たわみ5は、水田2と一部接するように位置し、南方へと一部延びるように確認された。礫と粗砂で埋積しており、洪水時の濁流の痕跡と思われる。層位関係から中世段階の可能性を考えた。(大橋)



第47図 たわみ4 (1/30)

溝25 (第38・48図)

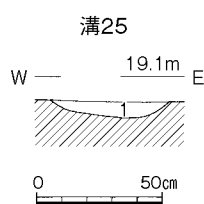
I区最北端に検出した浅い溝状の遺構である。北西から南西に流走する。検出長4m、幅50cm程、深さ6cmを測る。断面は皿状を呈し、褐灰色粘質土の埋土である、遺物は土師器小皿の細片が出土している。時期は出土遺物や埋土等から中世と考えられる。(山磨)

溝26 (第38・48図)

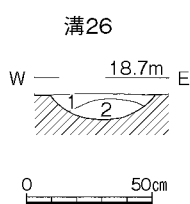
I区北端に検出した浅い溝状の遺構である。北から南に流走する。検出長3.5m、幅40cm、深さ10cmを測る。断面は皿状を呈し、埋土は、上層に小礫を含む褐灰色粘質土、下層に黄灰色砂礫層の堆積である。遺物は出土していない。時期は埋土や検出状況等から古代以前の可能性がある。(山磨)

溝27 (第38・48図)

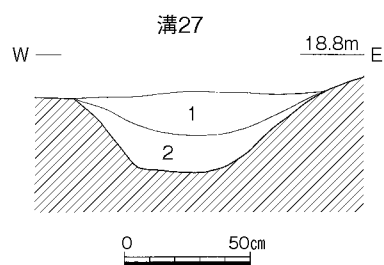
I区北端で検出した北から南に緩くS字状に蛇行する溝である。北端は調査区外に、南端は流路11と重なる。検出長7.5m、幅90cm、深さ35cmを測る。断面は逆台形に近い形状をなし、埋土は2層に分層でき、上層に灰褐色砂質土、下層に褐灰色砂礫が堆積している。遺物は出土していない。時期は埋土や検出状況等から古代以前の可能性がある。(山磨)



1 褐灰色 (5YR4/1) 粘質土



1 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土 (小礫)
2 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂礫

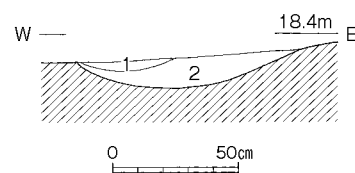


1 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂質土
2 褐灰色 (7.5YR4/1) 砂礫

第48図 溝25・26・27 (1/30)

溝28 (第38・49図)

I区北端で検出した緩くカーブする溝である。北端は流路11と重複し、南端は溝29に削平されている。検出長7m、幅85cm、深さ10cmを測る。断面は皿状をなし、埋土は2層に分層できる。遺物は弥生土器片が出土している。時期は出土遺物や埋土等から古代以前と考えられる。(山磨)



1 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂質土
2 褐灰色 (7.5YR4/1) 砂礫

第49図 溝28 (1/30)

溝29・30 (第38・50・51図)

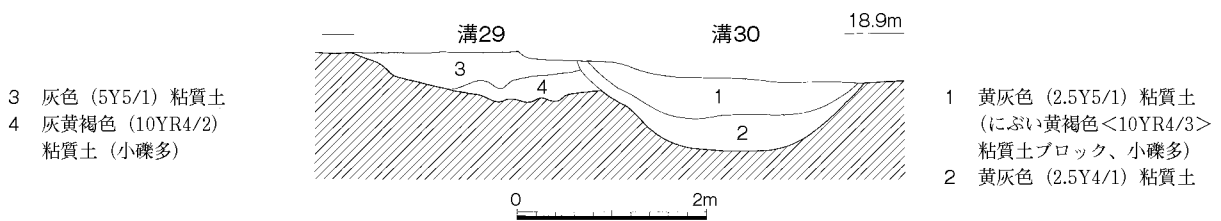
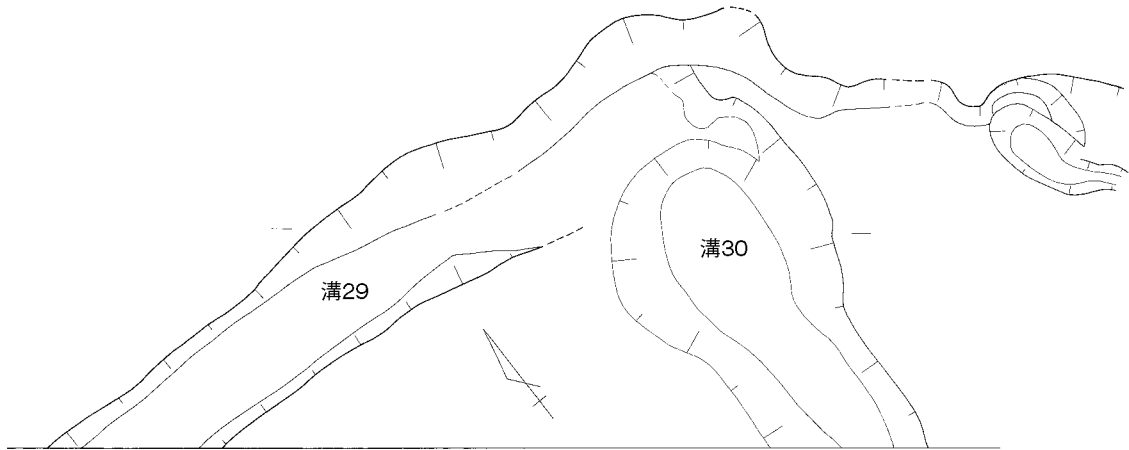
I区北端の西側調査区境に検出した2本の溝である。

溝29は検出長7m、幅1.1m、深さ35cmである。断面は西端部で逆台形に近い形状をなし、埋土は2層に分層でき、上層に灰色粘質土、下層に灰黄褐色粘質土が堆積している。遺物は土師器の小皿、土錘、須恵器片が出土している。

溝30は直径240cm、深さ80cmの掘鉢状の掘り方に幅140cm、深さ30cm程の溝が伴う。埋土は2層に分層でき、いずれも黄灰色粘質土で、上層に粘質土のブロックや小礫を多く含む。遺物は、土師器の杯、須恵器甕片が出土している。時期は中世の範疇と考えられる。(山磨)

溝31 (第20・39図)

溝1の上位、ほぼ溝1と重複するように検出した幅約250cm、深さ70cm以上を測る。溝底の海拔高は17.1mほどである。砂礫層で埋没している。古墳時代前半の包含層である黒褐色土の上から認められ、層位関係から中世段階と考えた。(大橋)



第50図 溝29・30 (1/80)

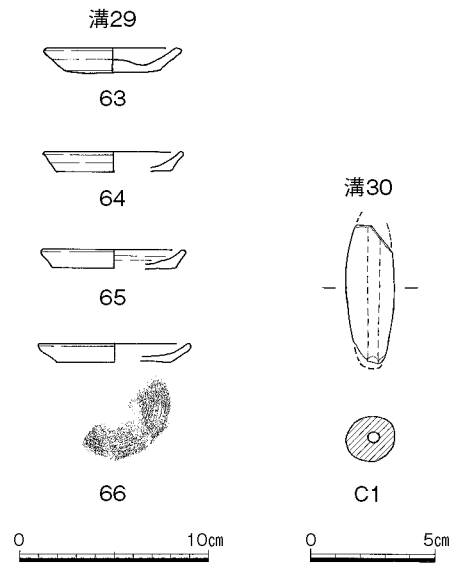
溝32 (第39・52図)

土手状遺構の北側でほぼ平行する3条確認した溝のうちのもっとも北に位置する。東西方向に延びると思われる。幅250cm、深さ35cmを測り、溝底の海拔高は14.5mである。西側の調査区では不明であった。溝の時期は層位関係から古代末～中世段階か。(大橋)

溝33 (第39・56図)

土手状遺構の北側の端部で確認した幅5mほどの溝状の落ち込みである。深さは30cmほどある。溝底の海拔高は、14.6mである。

土手状遺構と一帯をなすものと思われ、古代末から中



第51図 溝29・30出土遺物 (1/4・1/3)

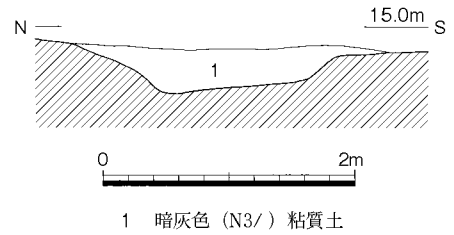
世段階の時期と考えた。

(大橋)

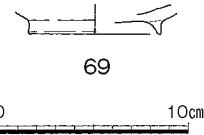
溝34 (第39・53図)

土手状遺構の北側で検出した溝である。幅230cm、深さ15cmを測る。溝底の海拔高は15.6mと溝32や溝33と比較してやや高い。層位関係から考えて古代末～中世段階のものである。

(大橋)



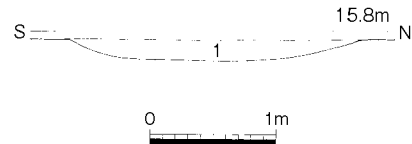
第52図 溝32 (1/60)



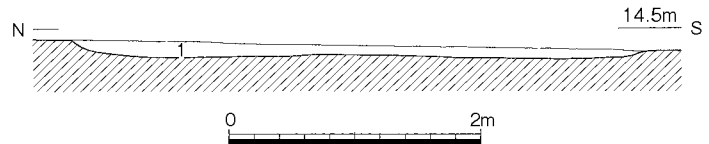
溝35 (第39・54図)

溝24の上位で確認した浅い不整形な溝である。調査区東壁付近のみ確認された。粗砂で埋積している。図示した69は器壁が摩滅しているが黒色土器と思われ、溝の時期も古代末と考えている。

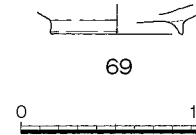
(大橋)



第53図 溝34 (1/60)

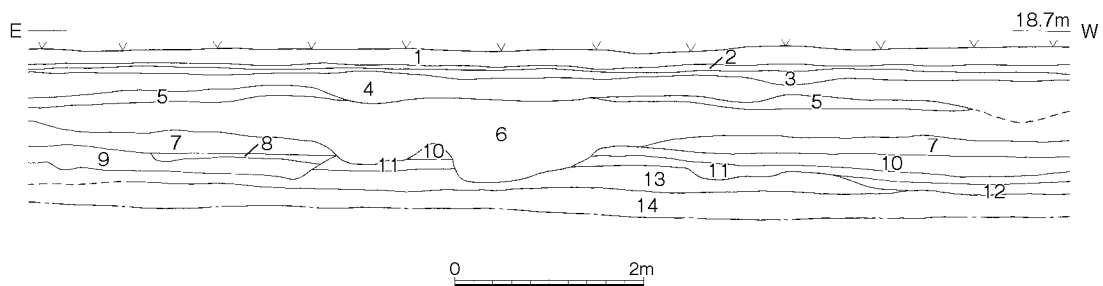


第54図 溝35 (1/60) ・出土遺物 (1/4)



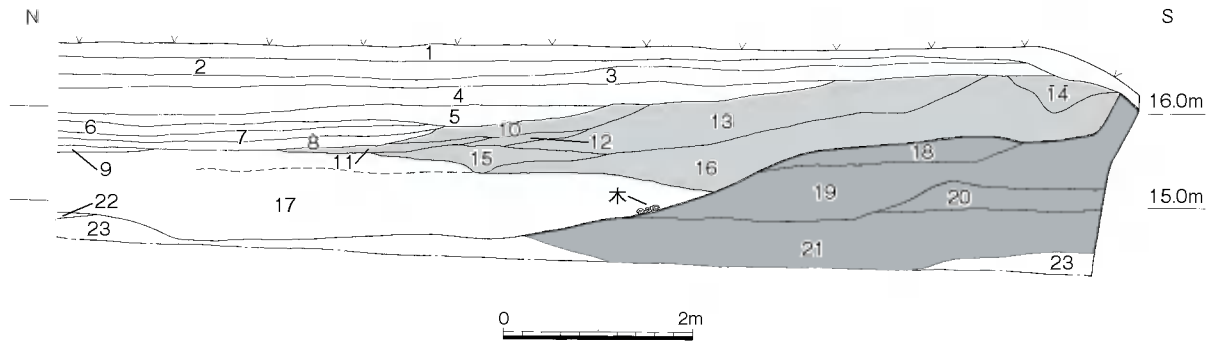
水田2 (第39・55図、図版8-1)

調査区の一段低くなった南側でのみ確認され、北側には水田層が広がらず、水田域の境界に浅い溝の痕跡が把握できた。水田層上面での海拔高は17.3mを測り、南西方向に向かって徐々に低くなる。耕作土層は大きく2層に分離できた。水田畔畦は、耕作土上層を除去したところ、鉄分沈着の帯として認識され、2条の畦が8mの間隔で作られている。なお、この水田層は他の調査区では明瞭ではなく、非常に限定されたものであったのか、または度重なる洪水などによって大きく削平などを受けていたことが想像される。水田層の時期については、時期を判別する明確な出土遺物が無く、詳細には不明であるが、層序関係から考えて古代末～中世初期段階と考えて矛盾がないと推測される。(大橋)



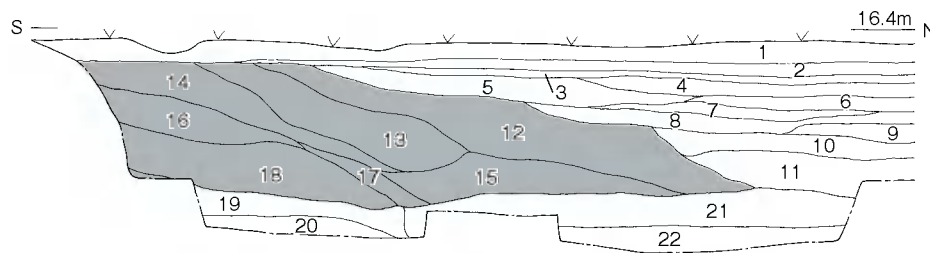
- | | | |
|----------------------------|------------------------------------|--------------------------------|
| 1 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土 (現耕作土) | 6 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土と多量の礫と粗砂 (たわみ5) | 11 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土 (水田層?) |
| 2 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土 | 7 灰色 (5Y4/1) 粘質土 | 12 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土 (水田層) |
| 3 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土 | 8 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土 | 13 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土 |
| 4 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土と多量の礫 | 9 灰黄褐色 (10YR4/2) 粗砂と礫 | 14 黄褐色 (2.5Y4/1) 粘質土 |
| 5 褐灰色 (7.5YR4/1) 粘質土 | 10 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土 (水田層?) | |

第55図 たわみ5、水田2 (南壁) (1/80)



- | | | |
|--------------------------------|-----------------------------------|---|
| 1 褐灰色 (7.5YR4/1) 土 (現耕作土) | 10 褐灰色 (5YR4/1) 粘質土 (Mu多い) (造成土) | 18 黒褐色 (10YR3/2) 土と
にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土 (造成土) |
| 2 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土 (礫まじり) | 11 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土 (造成土) | 19 黄褐色 (2.5Y5/3) 土ブロックと
オリブ灰色 (5Y6/1) 粘質土ブロック
(造成土) |
| 3 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土 (やや細砂まじり) | 12 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 (造成土) | 20 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘質土 |
| 4 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土 (Fe) | 13 褐色 (7.5YR4/4) 土 (固い) (造成土) | 21 暗緑灰色 (5G4/1) 粗砂 (礫多い) |
| 5 褐灰色 (7.5YR4/1) 粘質土 (固い、Mu多い) | 14 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土 (造成土) | 22 暗オリブ灰色 (5GY4/1) 粗砂 (礫多) |
| 6 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土 | 15 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土 (Fe多い) (造成土) | 23 明黄褐色 (10YR6/6) 粘質土 (地山) |
| 7 褐灰色 (7.5YR5/1) 粘質土 | 16 黒褐色 (10YR3/2) 土 (礫多い) (造成土) | |
| 8 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土 | 17 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土 (固い) (溝33) | |
| 9 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質土 | | |

第56図 溝33、土手状遺構1 (東壁) (1/80)

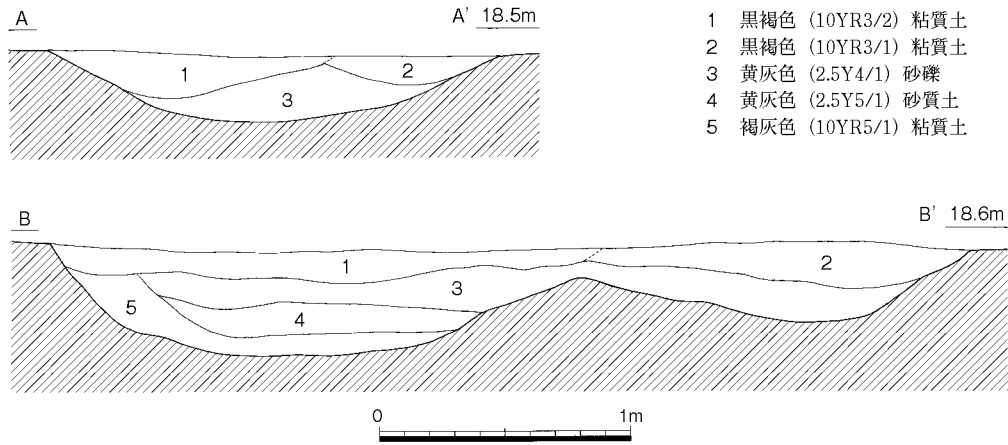


- | | |
|---|---|
| 1 褐灰色 (10YR6/1) 微砂 (現耕作土) | 15 褐灰色 (5YR5/1) 砂混じり粘土
(土手状遺構1) |
| 2 にぶい黄褐色 (10YR6/3) 微砂 | 16 暗赤褐色 (5YR3/2) 砂礫混じり微砂
(固い) (土手状遺構1) |
| 3 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質土 | 17 褐灰色 (5YR5/1) 粘土 (土手状遺構1) |
| 4 にぶい黄褐色 (10YR6/4) 粘質土 | 18 淡黄色 (2.5Y8/3) 粘土
と暗灰色 (N3/) 粘土の混じり |
| 5 にぶい褐色 (7.5YR6/3) 微砂～細砂 (礫多) | 19 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘土 |
| 6 灰褐色 (7.5YR6/2) 粘質土 | 20 明緑灰色 (7.5GY7/1) 粘土 |
| 7 灰褐色 (7.5YR5/2) 粘質土 | 21 灰色 (N4/) 粘土 (湿地状の堆積) |
| 8 褐灰色 (7.5YR6/1) | 22 明緑灰色 (10GY7/1) 粘土 |
| 9 ～にぶい橙色 (7.5YR6/4) 微砂 | |
| 10 灰褐色 (7.5YR4/2) 微砂～細砂 | |
| 11 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土 | |
| 12 にぶい赤褐色 (2.5YR4/3)
砂礫混じり微砂 (固い) (土手状遺構1) | |
| 13 灰褐色 (5YR4/2) 砂礫混じり微砂
(固い) (土手状遺構1) | |
| 14 にぶい赤褐色 (5YR4/3)
砂礫混じり微砂 (土手状遺構1) | |

第57図 土手状遺構1 (西壁) (1/60)

土手状遺構1 (第39・56・57図)

北東から南西方向に延びる盛土遺構である。現在の地割り境と一致し、この土手状遺構の南側田面は約1mほど低くなっている。土層断面の観察から2時期の構築が推測される。第1段階では、南方へ緩やかに傾斜する湿地状の堆積の上に、礫と粘土塊を混じえた砂礫層を約1m以上盛り上げて構築している。この北側裾部には溝33とした窪みが形成され、横木状の材木の一部が確認された。土手北側にはやや湿地状の堆積が認められ、一時期、ため池のように滞水するような時期があったと推測される。その後、土手北側は海拔高15.5m付近まで埋め立てられ、水田形成がなされているようである。第2段階は、さらにこの上に50cmほど盛り上げ、土手北側では徐々に堆積が進みながら田面が上がり、現在の地形となっている。構築時期については、古代末から中世初期段階と考えている。(大橋)



第58図 流路8 (1/30)

流路8 (第38・58図)

I区北端に検出した北から南に蛇行している流路である。検出長12m、最大幅3.5m、深さ25~40cmを測る。北端の断面では深さ40cmと深さ30cmのいずれも皿状をなす流路が重複している。遺物は埋土中から弥生土器が出土している。時期は出土遺物や埋土等から古代以前の可能性がある。(山磨)

流路9・10・11 (第38・59・60図、図版9-2)

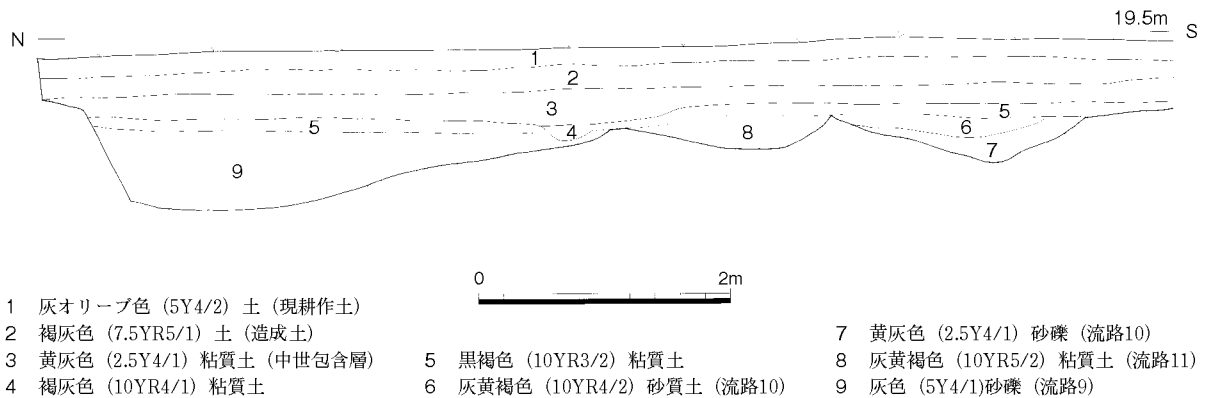
I区北端に検出した。流路9は東西方向、流路10、11は南北に緩く蛇行し下降している。流路10は検出長19m、幅1.5m、深さ40cmで、流路11は検出長30m、幅2.5m、深さ30cmを測る。流路11は中央付近で深さ80cm程のV字形に近い形状をなし、固く縮まった褐灰色の砂礫が堆積している。出土遺物は流路9、10より土器の細片が出土している。時期は古代以前の可能性もある。(山磨)

流路12 (第38・60図、図版9-3)

I区北端の中央に検出した。調査区東側に現農道があり全貌は不明瞭である。検出長6.5m、幅2m、深さ20cmを測り、緩く彎曲している。断面は皿状をなし褐灰色の砂質土が堆積している。時期を確定する遺物は出土していないが、堆積状況や埋土等から古代以前の可能性がある。(山磨)

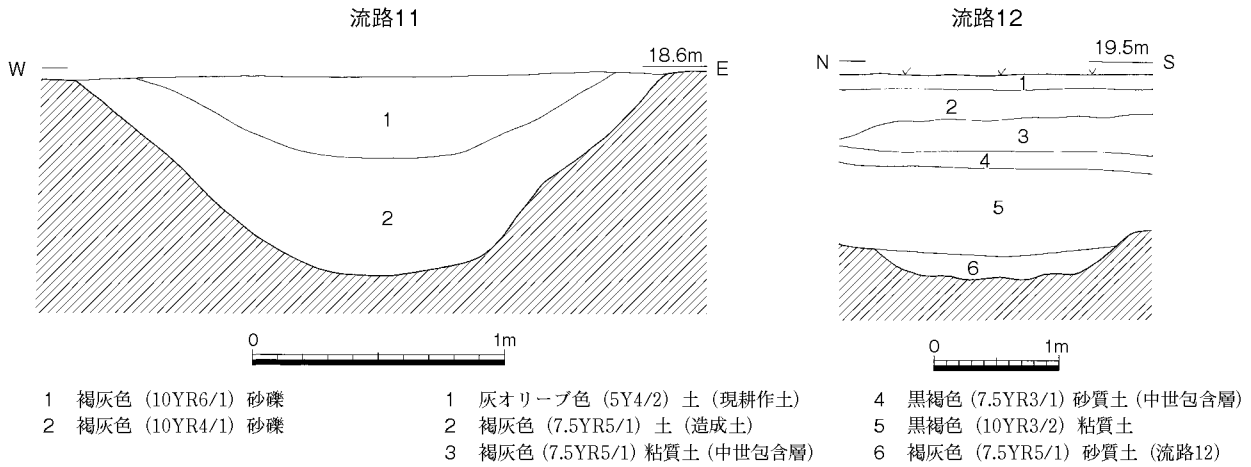
流路13・14 (第38・61図)

I区北端に位置し両流路の間に井戸1が位置する。砂礫層の堆積した自然流路の下端部で、いずれも基盤層もしくは直上の黒色粘土層(弥生~古墳)上面にて検出した。



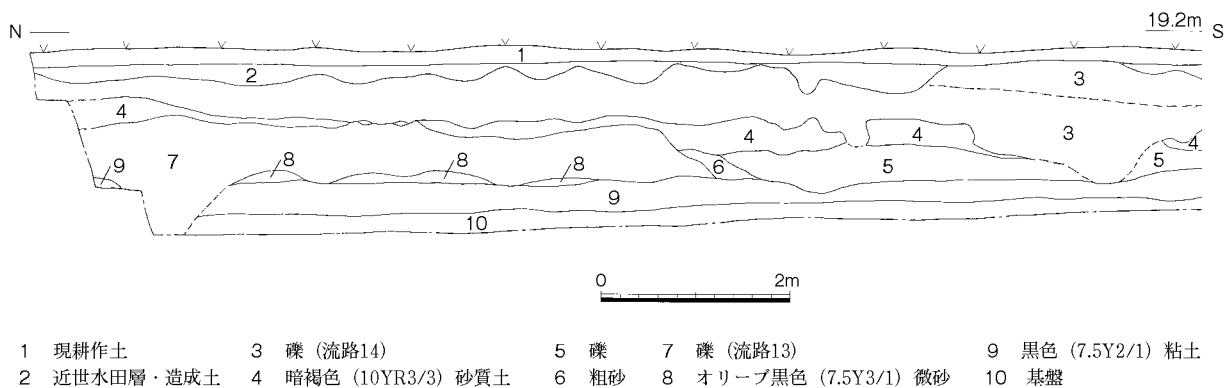
- | | | |
|-----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|
| 1 灰オリーブ色 (5Y4/2) 土 (現耕作土) | 5 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土 | 7 黄灰色 (2.5Y4/1) 砂礫 (流路10) |
| 2 褐灰色 (7.5YR5/1) 土 (造成土) | 6 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土 (流路10) | 8 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土 (流路11) |
| 3 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土 (中世包含層) | 4 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土 | 9 灰色 (5Y4/1) 砂礫 (流路9) |

第59図 流路9・10・11 (東壁) (1/60)



第60図 流路11・12 (1/30・1/60)

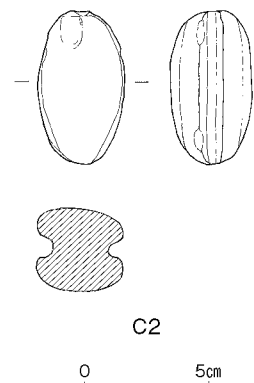
流路13は、第7層（礫層）の残存部の状況である。調査区を南北に横断し検出長12.5m、最大幅1.7m、深さ60cmほどである。埋土中から弥生時代後期の土器が出土しているが、堆積状況や第7層の埋土等から古代の範疇と考えられる。流路14は、第3層（暗褐色砂質土）の残存部の流路である。流路13と同様に調査区を南北に横断する。検出長9m、幅1.5m、深さ40cmを測る。埋土中から弥生土器が出土しているが、堆積状況や第3層の埋土等から流路13と同様に古代の範疇である。なお井戸1は第3層除去後の第4層もしくは第7層上面で検出している。 (山磨)



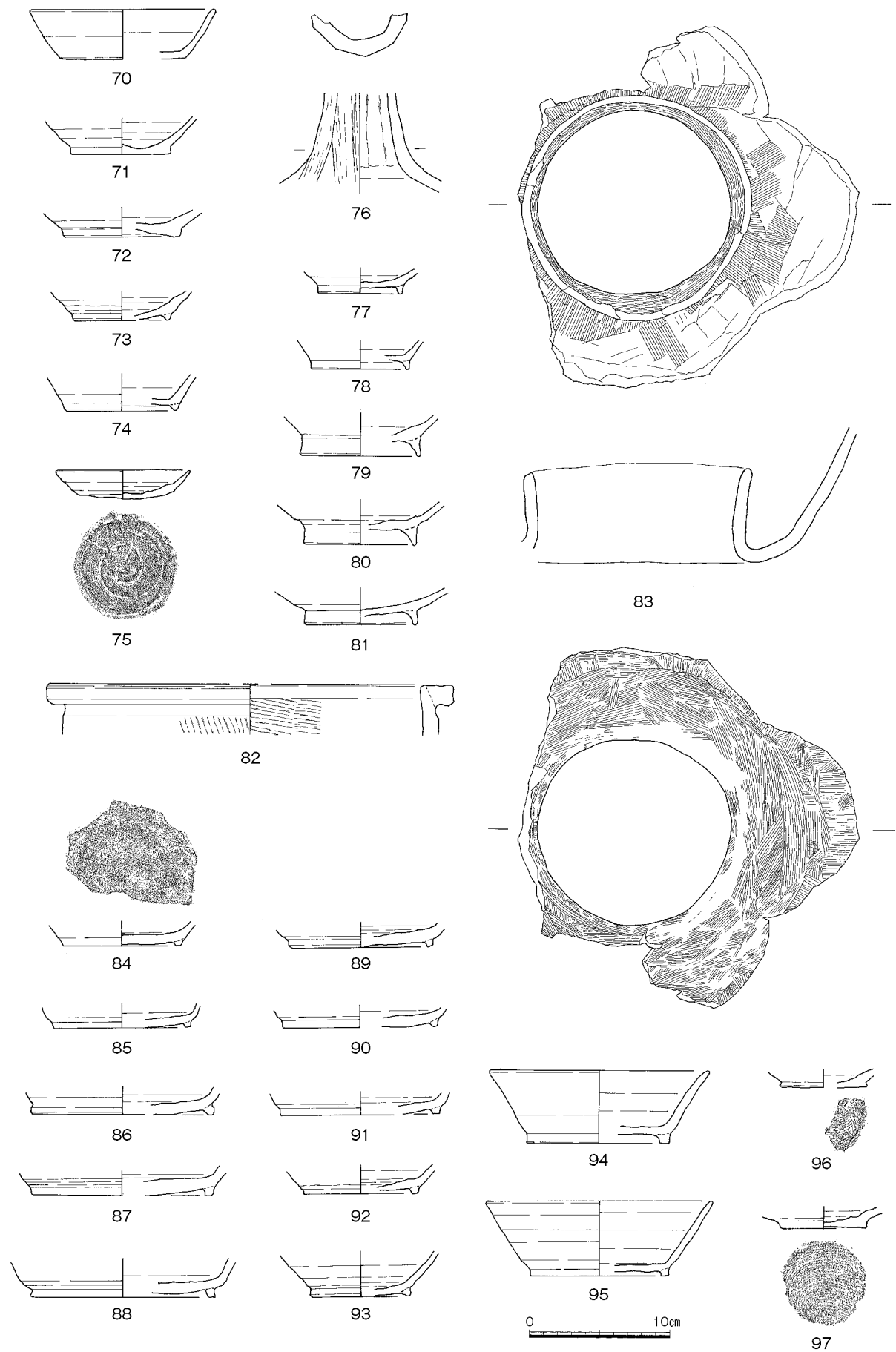
第61図 流路13・14 (東壁) (1/80)

その他の出土遺物 (第62～64図)

70～83は土師器である。うち70～76が古代、77～81が中世段階のものか。76の高杯は脚柱部面取りで丹塗りが残る。82は鍋、83は機種不明である。何らかの台状のものであろうか。いずれも中世段階のものか。84～95は須恵器高台付杯、96・97は糸切り底の須恵器碗である。98は肩部に2条の突帯を巡らす須恵器壺。99・100は緑釉碗、101は灰釉耳皿、102は灰釉碗で、103は瀬戸焼の瓶子、104は白磁碗である。105は須恵器盤の脚部であろう。106は瓦塔の基部、107は透かしをもつ円面硯である。108～112は縄目タタキ、あるいは格子目タタキの平瓦である。C2は有溝土錘である。以上、微量ではあるが、緑釉、灰

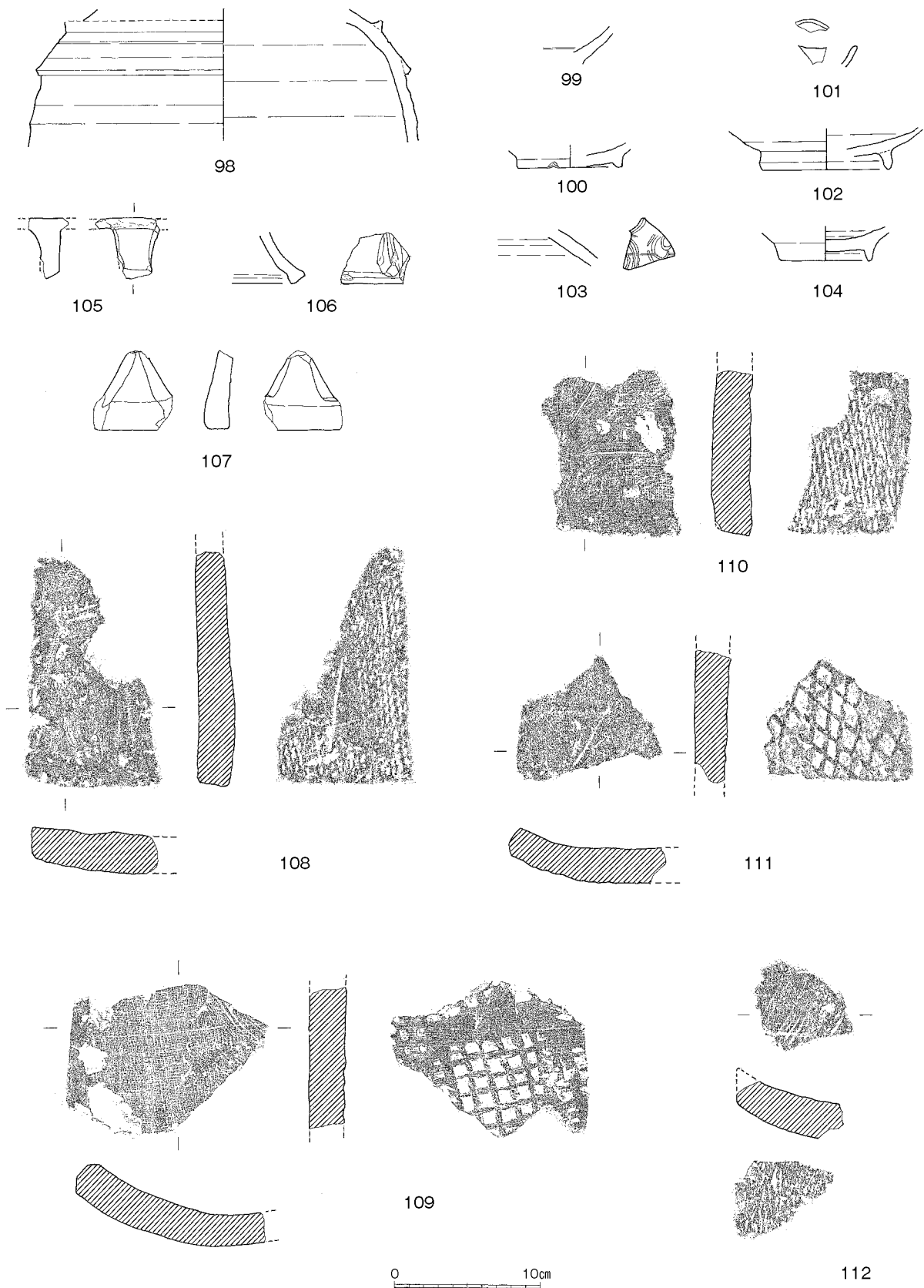


第62図 その他の出土遺物① (1/3)



第63図 その他の出土遺物② (1/4)

釉、瓦塔、円面硯など古代段階の特徴的な遺物があり、瓦の出土も考えると一般集落ではなく本遺跡北側に所在する古代寺院吉岡廃寺との関連性が強くうかがえる。(大橋)



第64図 その他の出土遺物③ (1/4)

4 近世以降の遺構・遺物

土壇18 (第65・67図)

I区北西部の調査区境に位置し西端は未検出である。検出規模は現存長1.7m、幅1.2mを測り、楕円形に近い形状とみられる。断面は浅い播鉢状を呈し、深さ30cmを測る。須恵器、土師器片が出土しているが、埋土や検出面から中世以降である。(山磨)

井戸2 (第66・67図、図版3-1)

径50cmほどの掘り方をもつ井戸である。検出面から井戸底までは20cmほどと浅いが、上部は大きく現在の水田層などで削平を受けていたものと推測される。掘り方の内側に裏込め土で支えながら径35cmほどの曲物が置かれ、その内側の井戸底には拳から乳児頭大の大きさの礫が敷き詰められていた。曲物自体はほとんどが腐朽していた。

出土遺物はないが、周囲の状況から近世のものと考えた。(大橋)

溝36 (第67・68図)

東西方向に延びる溝である。南側の肩口部分のみを検出した。現在の田面境の向きと一致し、幅3m以上、深さ90cmほどを測る。

この溝の上面の一部を覆うように近現代の水田層が形成されていることから近世段階の水田の用排水路であろうか。(大橋)

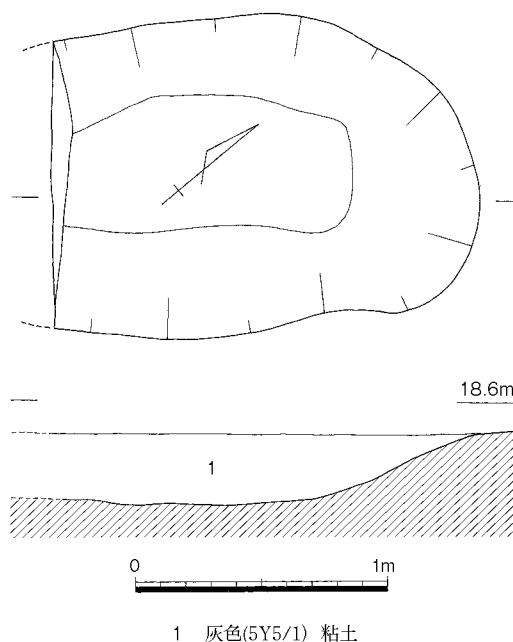
溝37 (第67・69図)

南西から北東に延びる溝である。溝36の南方約30mに位置する。幅約3m、深さ50cmほどを測る。礫を含んだ粗砂で埋没している。

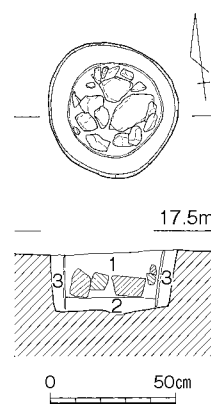
この溝も溝36同様、現在の田面境と一致しており、上面を近現代の水田層が覆うことから現在より一段階古い近世段階の用排水の役割を果たしていたものであろう。(大橋)

その他の出土遺物 (第70図)

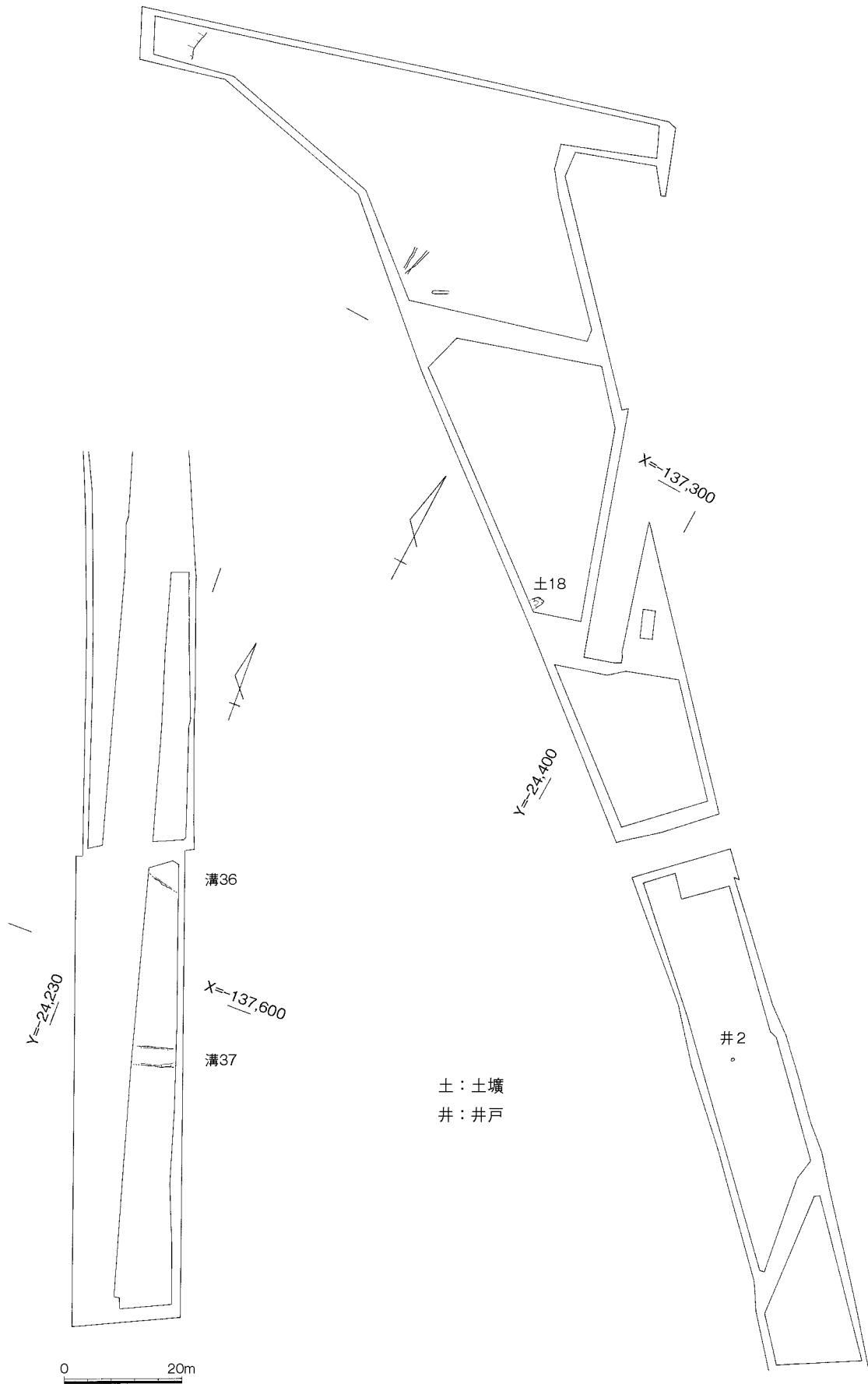
鉄器3点を図示している。M1・M2は釘か。いずれも断面長方形をなす。M2は頭部を折り返している。M3は釘か、馬鍬の歯の一部かとも思われる。いずれも時期は不明であるが出土した層序関係から近世段階のものと考えた。(大橋)



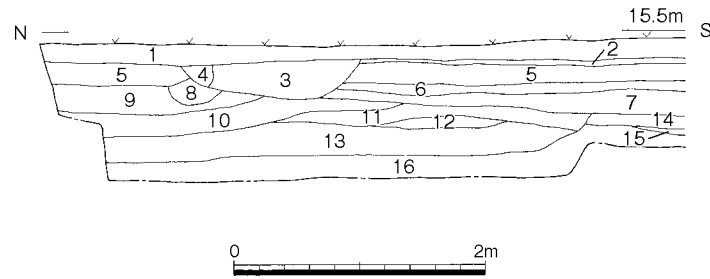
第65図 土壇18 (1/30)



第66図 井戸2 (1/30)

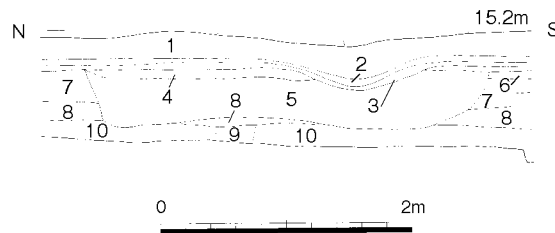


第67図 I区近世以降遺構全体図 (1/1,000)



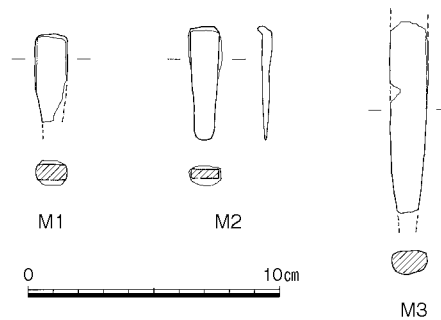
- | | |
|----------------------------|--|
| 1 褐灰色 (7.5YR4/1) 土 (現耕作土) | 9 黄橙色 (10YR7/8) ~ 橙色 (10YR4/4) 細砂~粗砂 (溝36) |
| 2 橙色 (7.5YR6/8) 微砂~細砂 | 10 にぶい黄橙色 (10YR6/4) 砂礫 (溝36) |
| 3 黄灰色 (2.5Y6/1) 細砂~粗砂 (暗渠) | 11 橙色 (7.5YR6/6) 粗砂~細砂 (Mn多) (溝36) |
| 4 黄灰色 (2.5Y5/1) 細砂~粗砂 (暗渠) | 12 灰褐色 (7.5YR5/2) 粗砂 (溝36) |
| 5 灰色 (5Y6/1) 砂礫 | 13 にぶい褐色 (7.5YR5/3) 粗砂~細砂 (Fe, Mn多) (溝36) |
| 6 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘土 (Mn多) | 14 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 粘土 |
| 7 灰色 (2.5Y6/1) 粘土 | 15 灰色 (5Y5/1) 粘土 |
| 8 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘土 (暗渠) | 16 黄褐色 (10YR5/6) 粘性微砂 (固い) |

第68図 溝36 (1/60)



- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1 褐灰色 (7.5YR4/1) 粘質土 (現耕作土) | 6 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質細砂 |
| 2 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土 | 7 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土 |
| 3 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土 | 8 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質土 (固い礫多) |
| 4 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘質細砂 | 9 2cm以下の礫層 (溝18) |
| 5 灰色 (N5/) 粗砂 (礫多) (溝37) | 10 黄褐色 (10YR5/6) 粘質微砂 (固い) |

第69図 溝37 (1/60)



第70図 その他の出土遺物 (1/3)

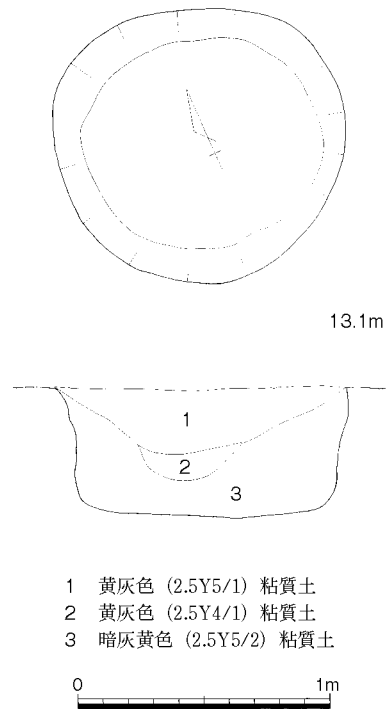
第3節 II区の調査

1 縄文時代の遺構・遺物

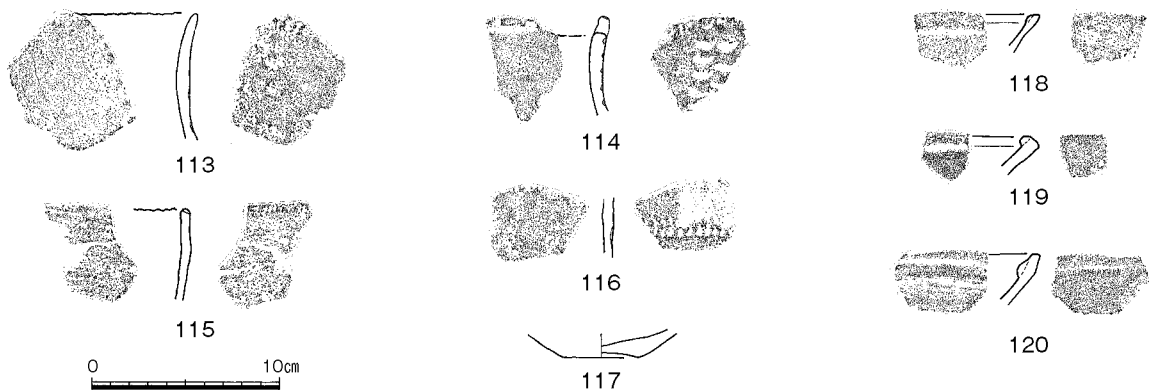
土壌19 (第71・72図、図版17-2・18-3)

調査区の北半部、流路17の西微高地において検出した。平面形は、108×116cmのほぼ円形で、深さは52cm残存していた。断面形は箱形であるが、袋状に近い部分もあった。埋土は3層に区分できた。

遺物は各土層から出土した。113～115は深鉢で、口縁端部に刻目、外面に縦の刺突文を、また116の外面には、横に刺突文が施されているのが特徴である。117は深鉢の底部で、小さな凹み底である。118～120は浅鉢の口縁部で、端部が丸く肥厚している。116・120は口縁端部に突起が認められる。時期は縄文時代晩期中葉（谷尻式）である。 (平井)



- 1 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土
- 2 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土
- 3 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土

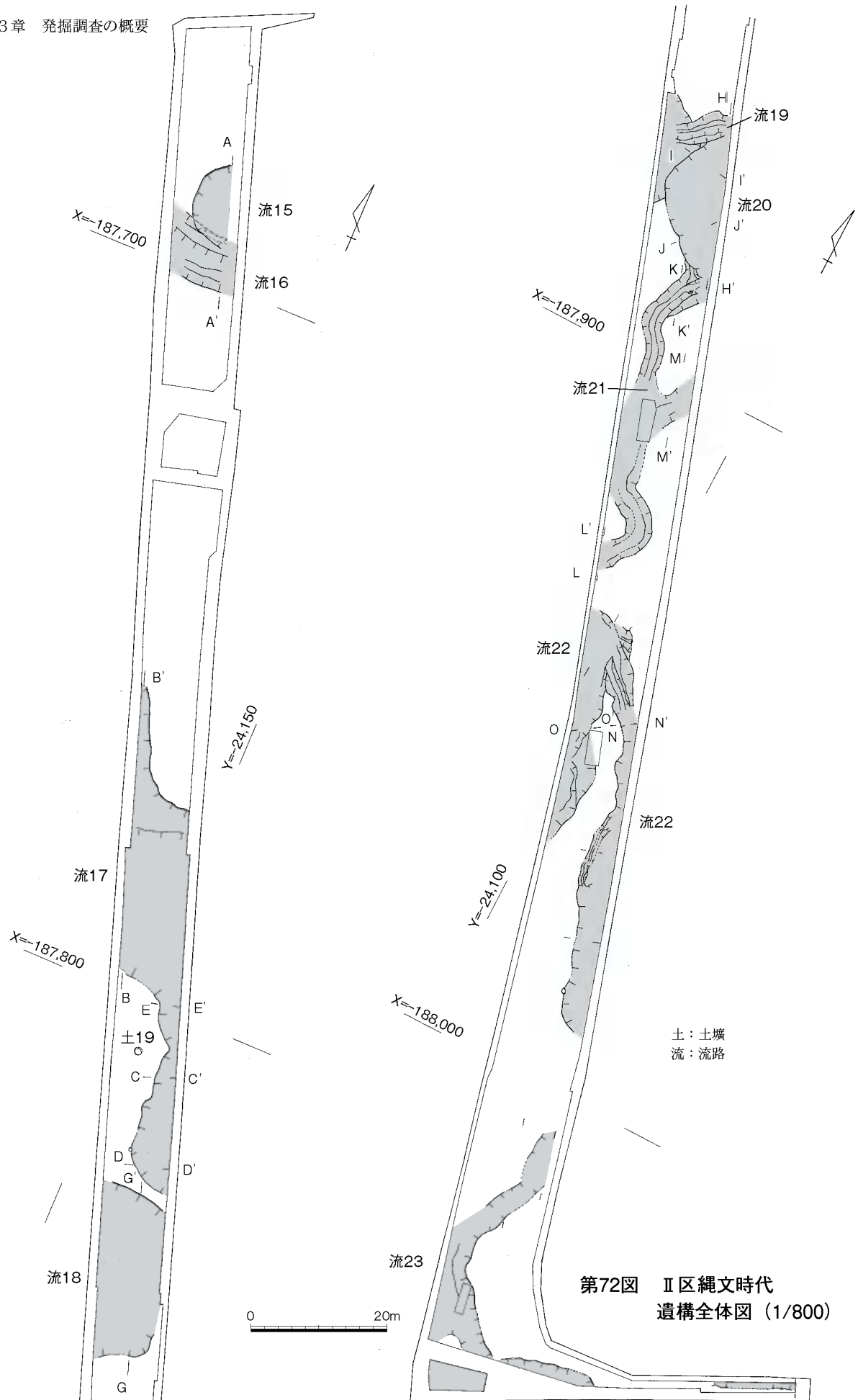


第71図 土壌19 (1/30) ・出土遺物 (1/4)

流路15・16 (第72・73図、図版13-1)

調査区の北端部において検出した。微高地を掘り下げる過程で砂の堆積が第72図の全体図に示したような範囲に確認できた。第73図は調査区東壁の断面図で、1～4層が流路15に相当する。最上層は粘質土で、その下層に粗砂や細砂・微砂が、そして最下層には粗い礫が堆積していた。この東壁の断面図では流路16と切り合っているように観察できたが、後述するように流路16の北壁は明確ではなく、同一の流路がこの部分で分岐しているのかもしれない。

第73図の5～23層が流路16であるが、6～10層と11～23層とに「新古」の関係が認められた。堆積土はいずれも各種の砂とシルトが中心で、一部植物の堆積が認められた。また、17～23層ではさらに北に続くように観察できたが、面的には明瞭ではなかった。出土遺物は確認できなかったが、他の事例から縄文時代晩期に埋没した自然流路と考えている。 (平井)



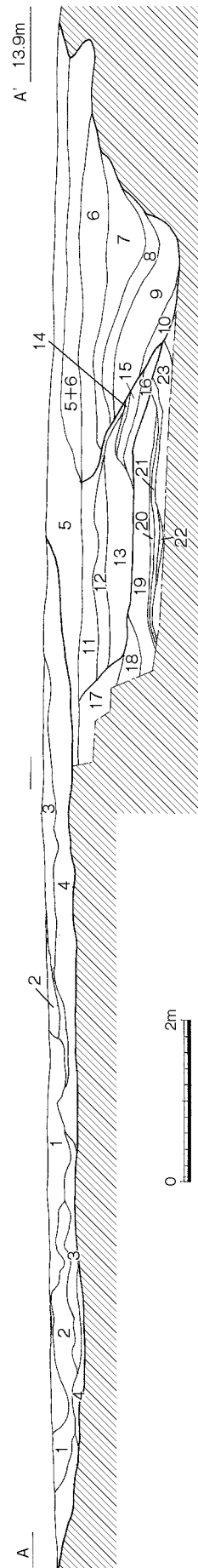
第72図 II区縄文時代
遺構全体図 (1/800)

流路17(第72・74～85図、図版13-2・3、14-1・2)

調査区の北半部において第72図の全体図に示しているように蛇行するかたちで検出した。最初、弥生時代中期の流路27の堆積土確認のために設定したトレンチにおいて確認した(第74図D断面の3・4層が流路17、1・2層が流路27)。第74図B-B'は、調査区の西壁の断面図であるが、特徴は、ピート層とよばれる植物の葉や木材、種実が大量に堆積した層が確認できていることである。特に図の6・13・14・16～19・22～24・34層がそれに相当する。その他は、粗砂を中心とした砂の堆積が多かった。図の35層が流路17の最下層と考えている。39～49は弥生時代中期の流路25で、36～38は流路17より古い堆積層である。

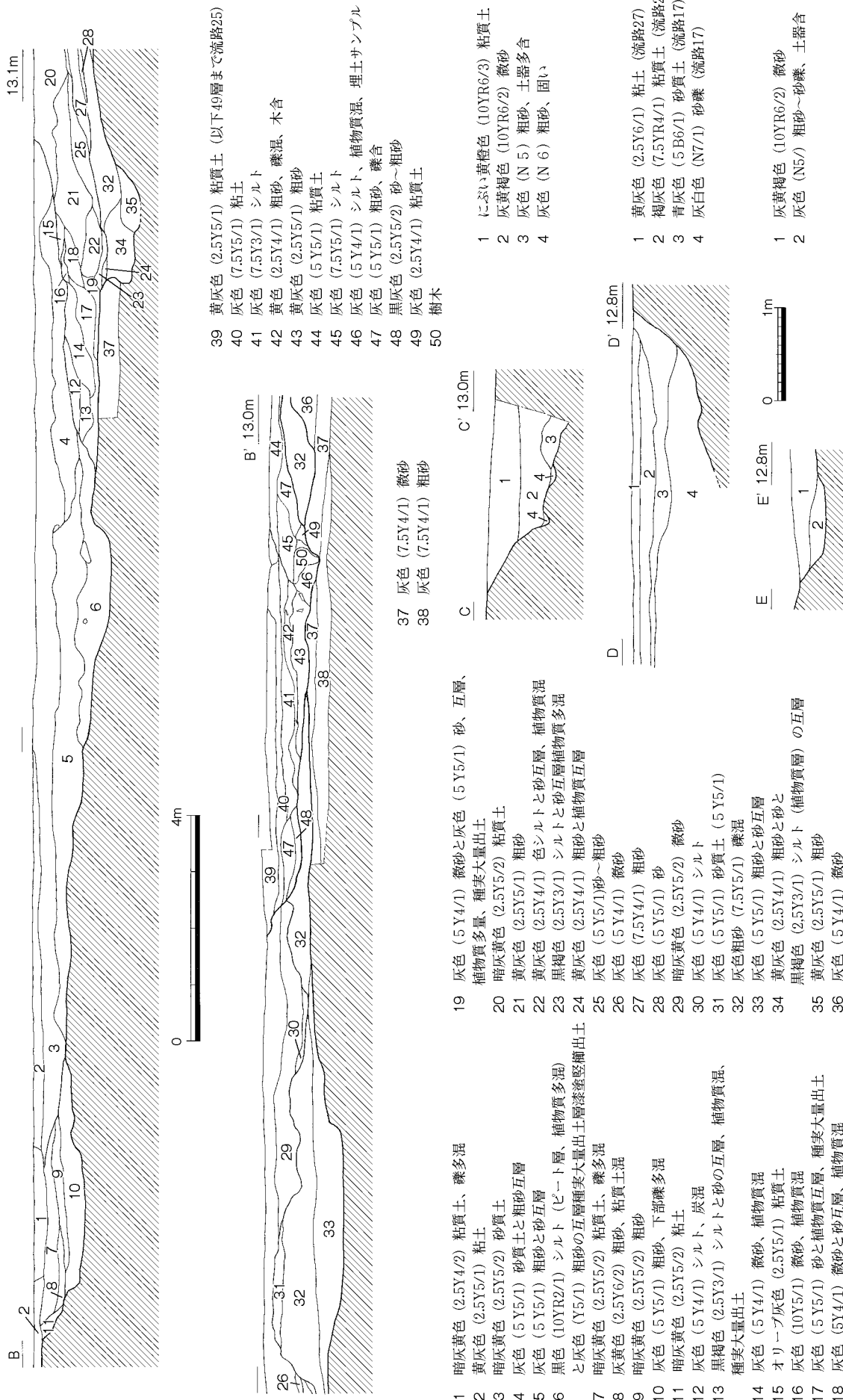
遺物は、大きくC断面肩部とB断面南半部および中央部から出土している。第78図は、C断面肩部2～4層からまとまって出土した土器である。121～137は深鉢で、口縁端部に刻目、口頸部外面に縦と横に刺突文を施しているのが特徴である。底部は小さな凹み底である(137)。138・139の浅鉢は内外面ミガキで、口縁端部内面を丸く肥厚させている。138は山形突起部分である。いずれも縄文時代晩期中葉である。第79図はおもにB断面図25～35層から出土した土器である。140・141は縄文時代中期、142～145は中期末～後期前葉、146～148は後期中葉、149は後期後葉であろう。152～159の深鉢は第78図と同じ特徴から、また、160～164の浅鉢には鍵形口縁部もあるがいずれも晩期中葉であろう。第80～85図はおもにB断面図の5層から出土した。165～168は後期前葉で、165・167は磨消縄文、166には巻貝条痕が観察できる。169～173は二枚貝条痕を多用していることや爪形文がないことから晩期中葉の古い段階と考えられる。174は深鉢で、173～196には縦方向の、197～210・218～222には横方向刺突文が確認できる。247～270は浅鉢である。245・246・268～271以外はその特徴から晩期中葉である。

第75図は、B断面6層のピート層から出土した



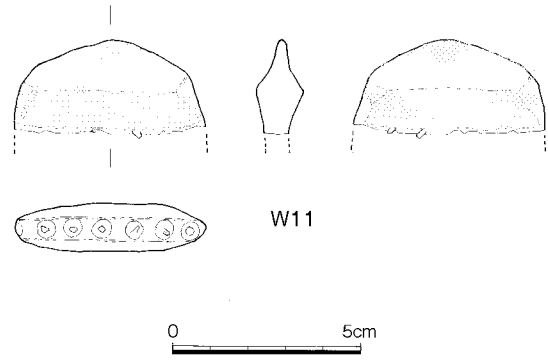
- | | | | | | |
|---|------------------------------|----|------------------------------|----|-----------------|
| 1 | 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土 | 9 | 灰色(7.5Y5/1)粗砂 | 17 | 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土 |
| 2 | 黄灰色(2.5Y6/1)粗砂 | 10 | 黒褐色(2.5Y3/1)シルト・植物質混 | 18 | 黄灰色(2.5Y4/1)粘質土 |
| 3 | 灰黄色(2.5Y6/2)砂 | 11 | 灰オリーブ色(5Y5/2)微砂・粗砂混(以下流路16古) | 19 | 灰色(7.5Y5/1)粗砂 |
| 4 | 黄灰色(2.5Y5/1)礫 | 12 | 暗灰黄色(2.5Y5/2)粗砂 | 20 | 灰色(10Y4/1)微砂 |
| 5 | 灰オリーブ色(5Y4/2)粘質土 | 13 | 灰色(5Y5/1)粗砂 | 21 | 黒褐色(2.5Y3/1)シルト |
| 6 | 灰黄色(2.5Y5/2)砂～粗砂(6～10層流路16新) | 14 | 灰色(7.5Y5/1)シルト・粗砂混 | 22 | 黄灰色(2.5Y5/1)シルト |
| 7 | 灰色(7.5Y5/1)粗砂・小礫混 | 15 | 灰色(7.5Y4/1)シルト・粗砂混 | 23 | 黄灰色(2.5Y4/1)粗砂 |
| 8 | 灰色(5Y5/1)砂 | 16 | 灰色(5Y5/1)シルト・粗砂混 | | |

第73図 流路15・16 (1/80)

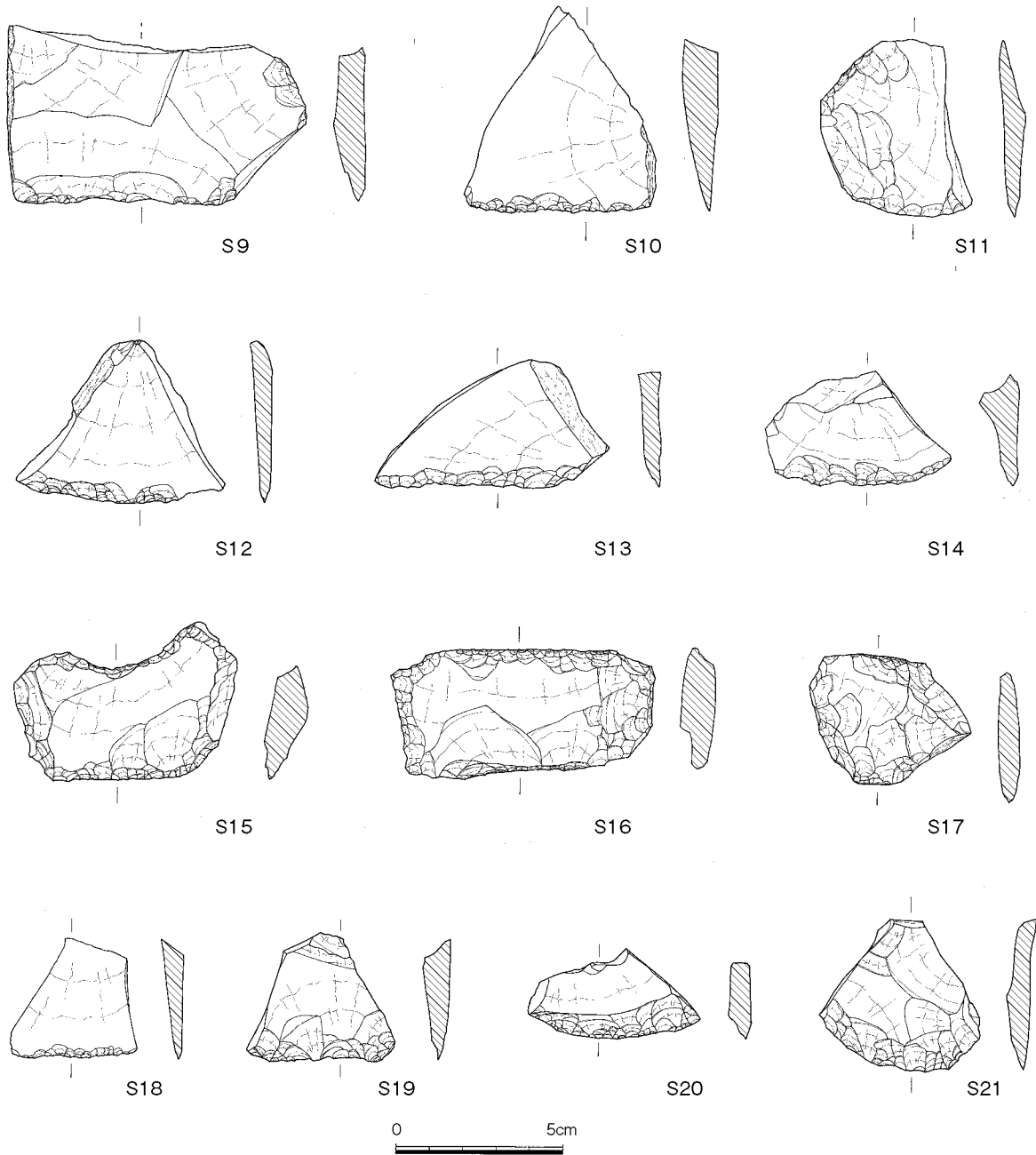


第74図 流路17・25・27 (1/100・1/60)

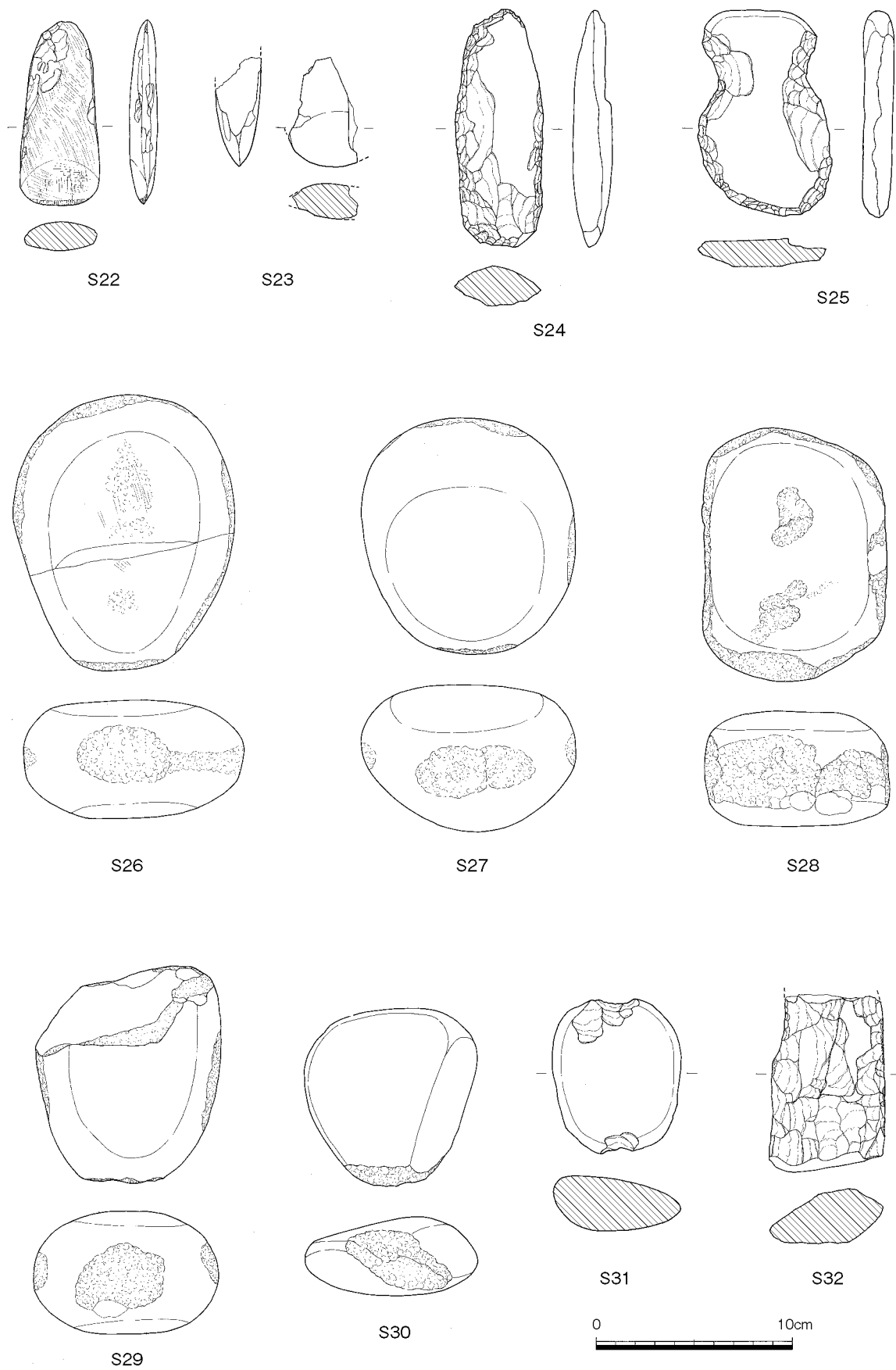
豎櫛である。黒漆の後、網掛部分に赤漆を塗って仕上っている。大きさは、縦2.5cm、横5.0cm、厚さ1.2cmが残存し、ヒゴ状の櫛歯が7本観察できる。時期については第4章で考察している。第76・77図の石器については、S9・S16・S17がC断面の2～4層、S10～S15・S18～S24・S26～S32がおもにB断面の5層、S35は特定ができないがB断面の25～35層から出土した。器種、材質、法量については一覧表に記載した。(平井)



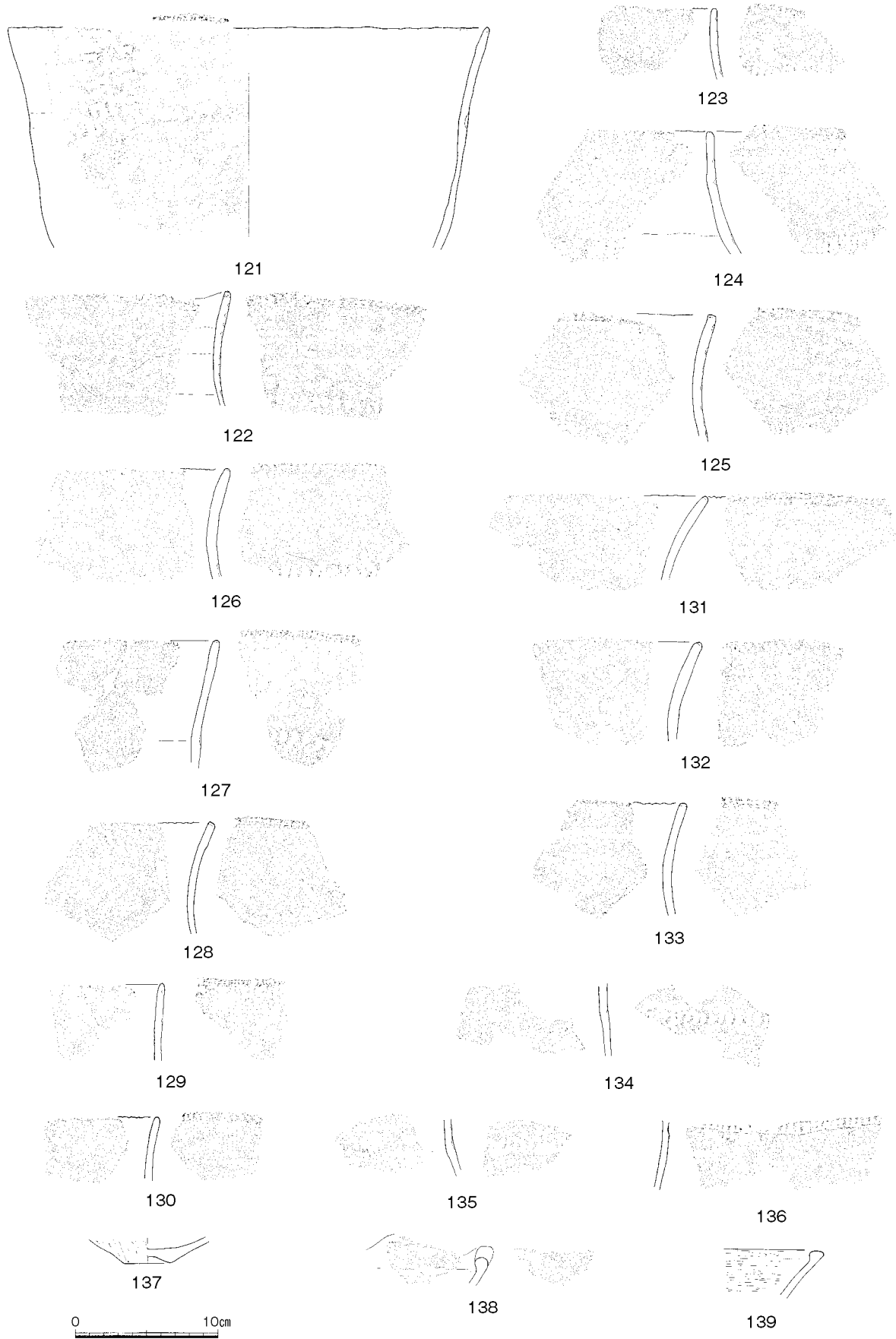
第75図 流路17出土豎櫛 (1/2)



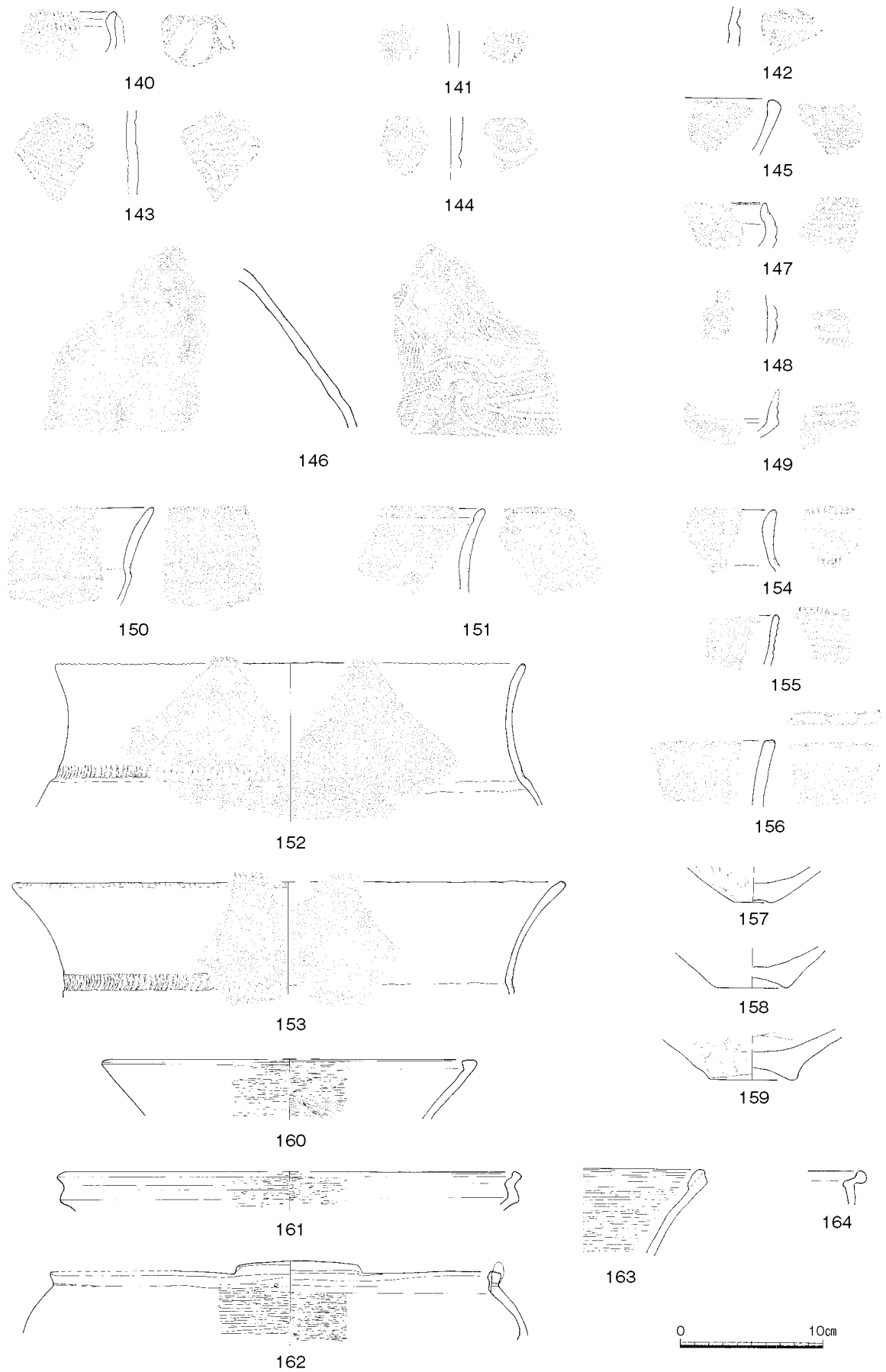
第76図 流路17出土遺物① (1/2)



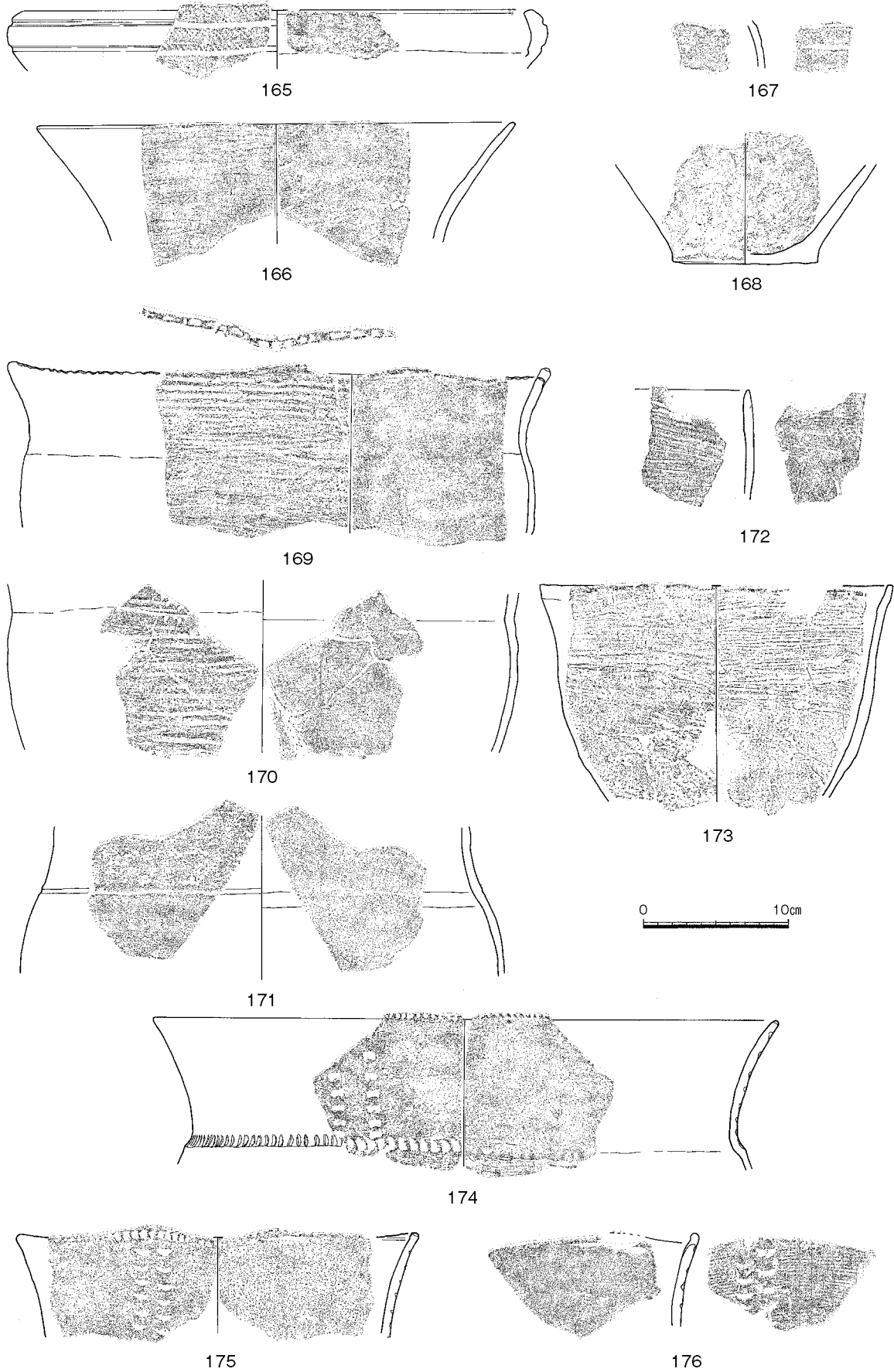
第77図 流路17出土遺物② (1/3)



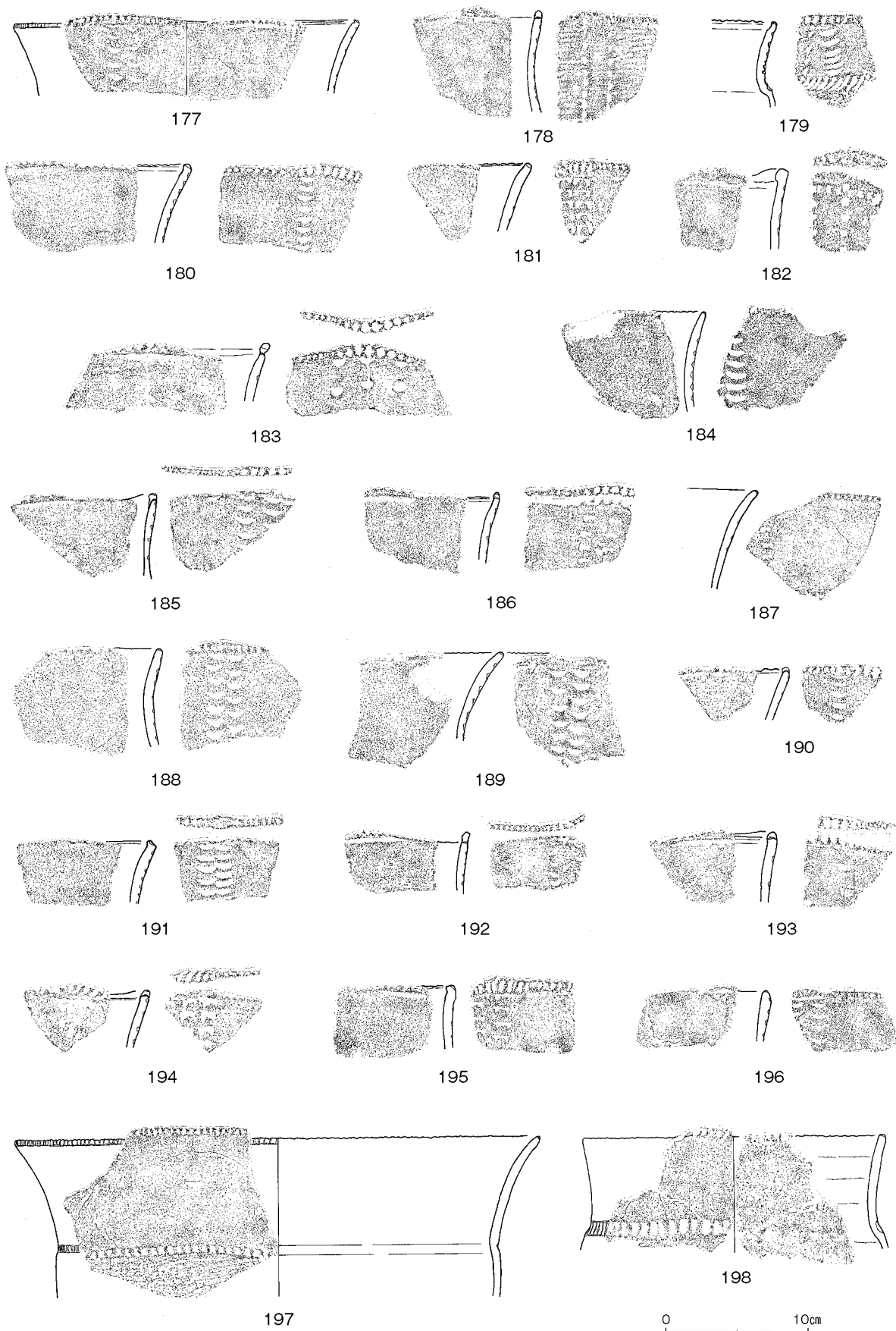
第78図 流路17出土遺物③ (1/4)



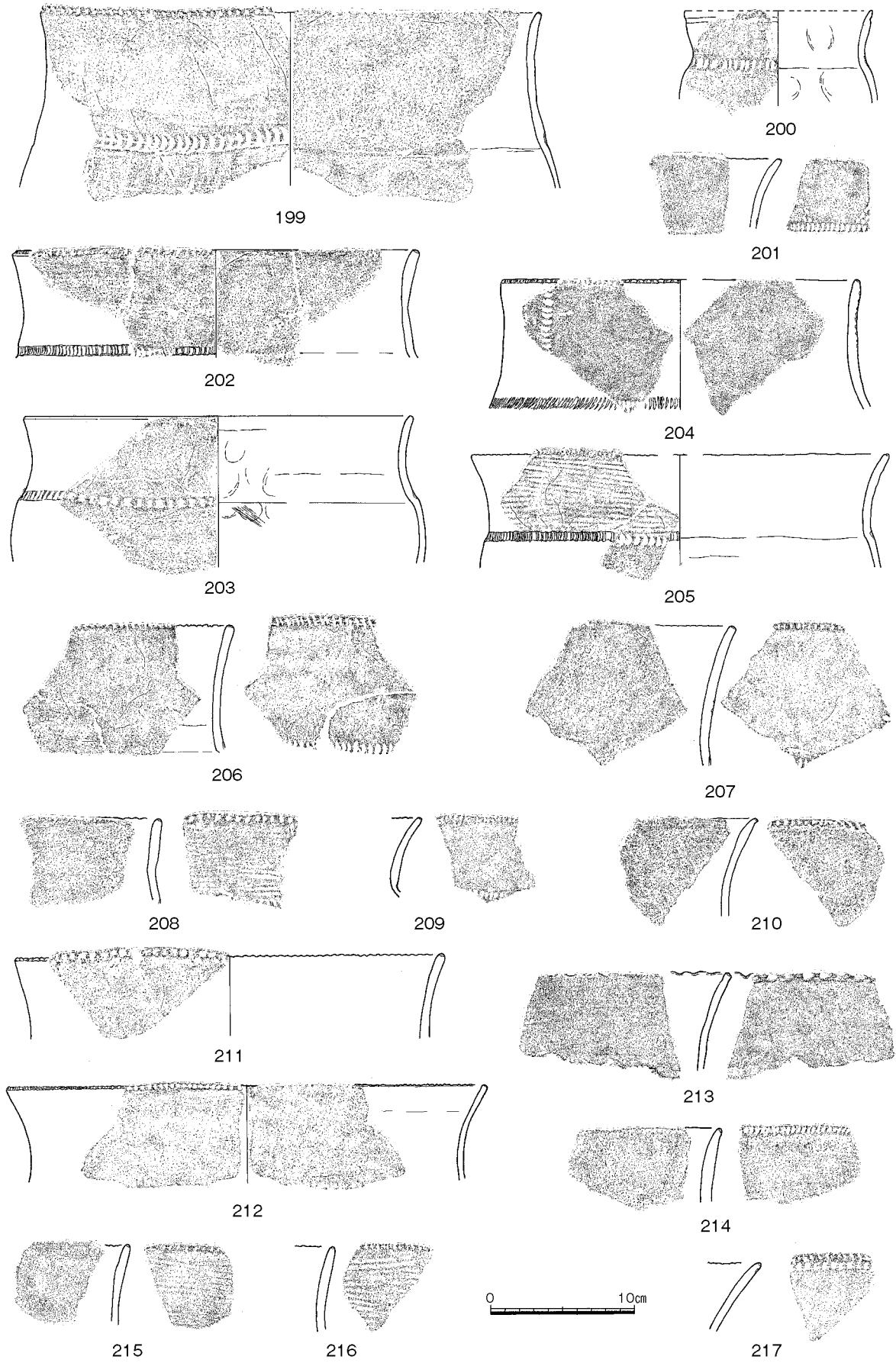
第79図 流路17出土遺物④ (1/4)



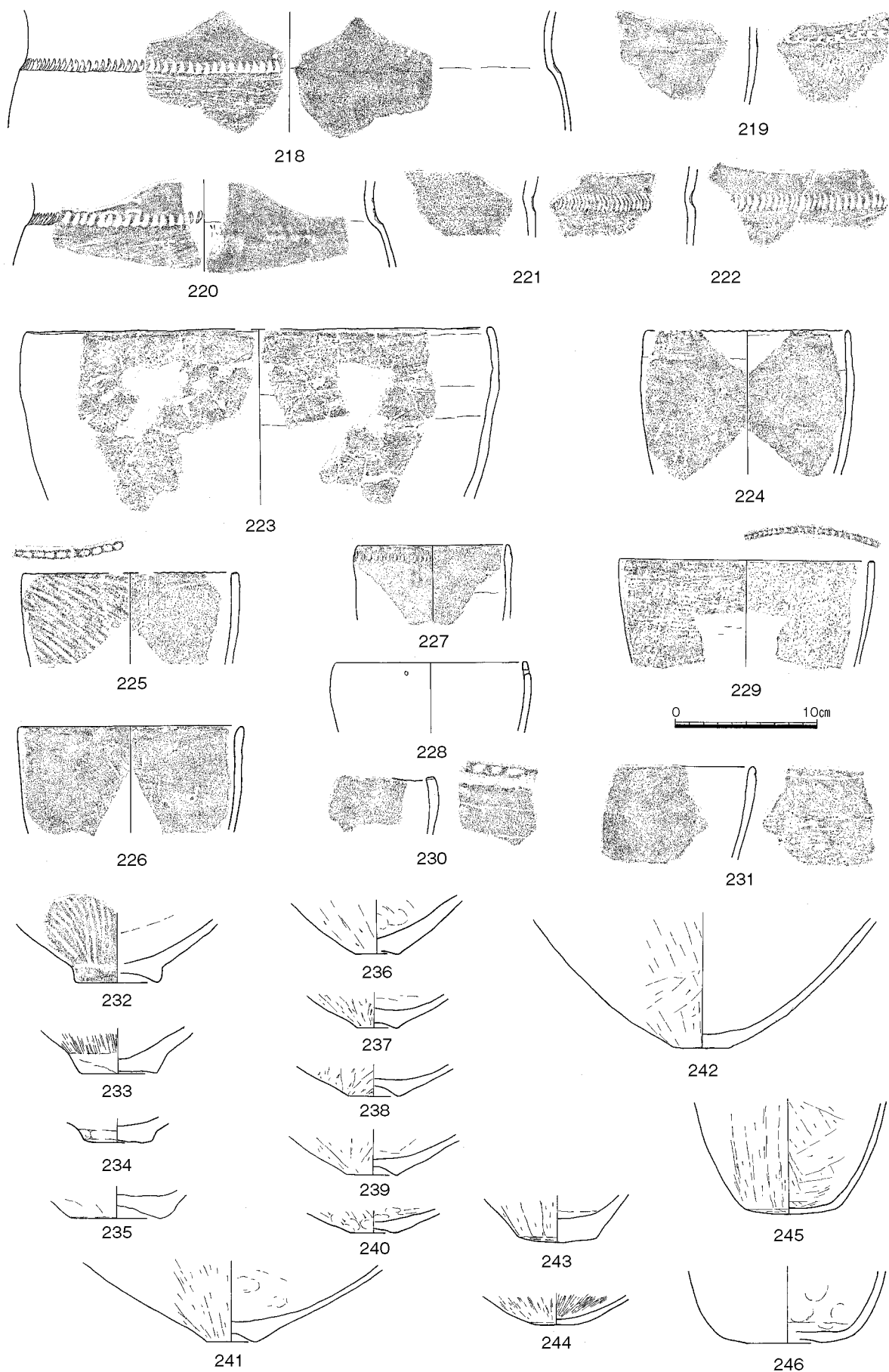
第80図 流路17出土遺物⑤ (1/4)



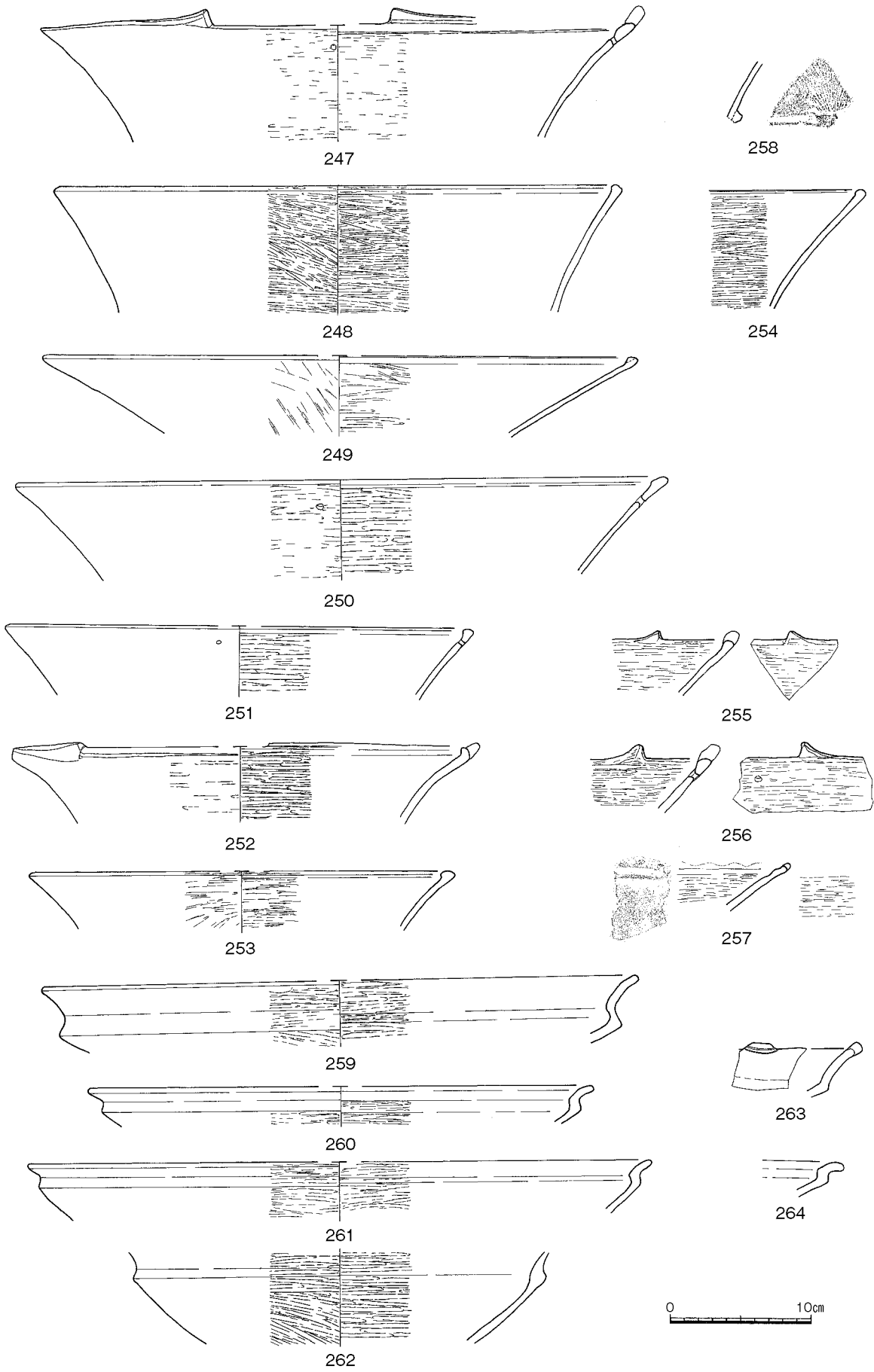
第81図 流路17出土遺物⑥ (1/4)



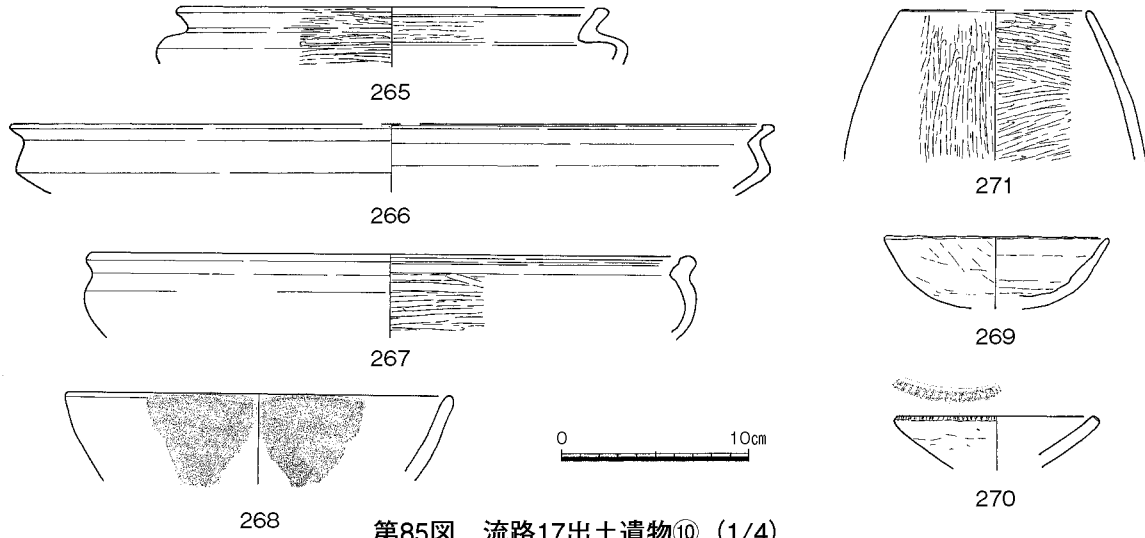
第82図 流路17出土遺物⑦ (1/4)



第83図 流路17出土遺物⑧ (1/4)



第84図 流路17出土遺物⑨ (1/4)

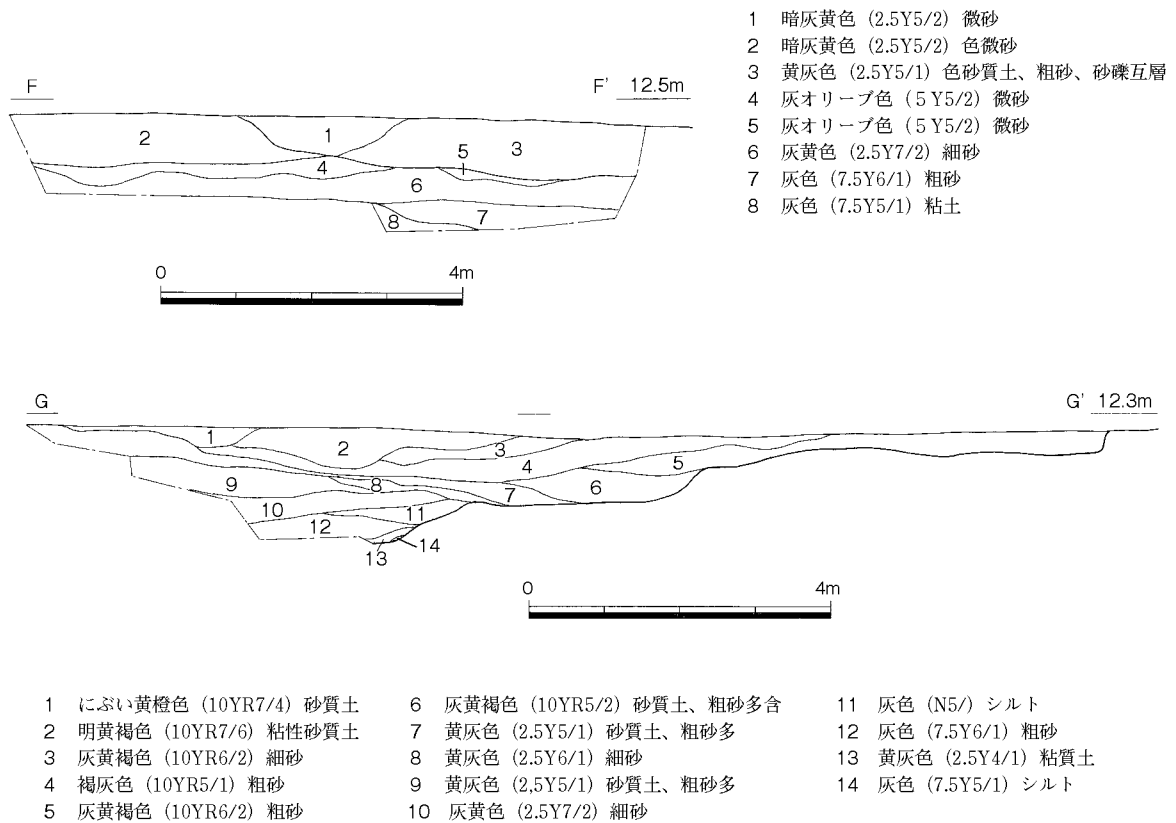


第85図 流路17出土遺物⑩ (1/4)

流路18 (第72・86・87図)

流路17の南隣で検出した。弥生時代の遺構面である基盤層に粗砂の部分が発見されたため、南北方向に大規模なトレンチを設定した。その結果、南側では第86図G断面のように北に向かって粗砂や細砂が下がる肩部を確認し、流路であると判断した。なお、北側の肩部については、F断面の1・3層として面的に掘り下げたが、この基盤層も細砂・粗砂が北側に続いており、流路18がさらに北側に広がっているのか、あるいはより古い流路が存在しているのではないかと想定している。出土遺物が確認できなかったため、時期は不詳だが、他の流路と同じく縄文時代晩期中葉頃に埋没したのではないかと推測している。

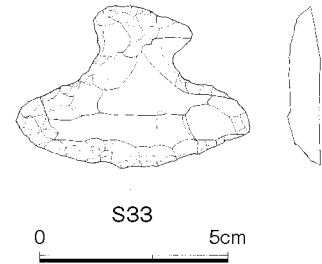
(平井)



第86図 流路18 (1/100)

流路19・20 (第72・88・89図、図版14—3)

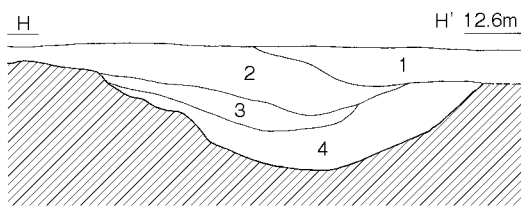
II区中央で検出した自然流路で、流路19は東西方向に、流路20は北西から南東方向に流走し、流路19は流路20を切っていた。流路19・20ともに堆積土中からの遺物の出土はなく、流路が埋没した詳細な時期は不明であるが、層位や検出状況から縄文時代晩期のものと考えられる。流路19は幅4m、深さ96cmを測り、流路の堆積土の上部は砂礫層、下部は粘土であった。流路20は蛇行した流れの湾曲部のみを検出で、全形は不明である。検出面からの深さは最深部で78cmを測る。埋土の下層部は細砂もしくは砂礫で、比較的短時間に流路が埋没した様子



第87図 流路18出土遺物 (1/2)

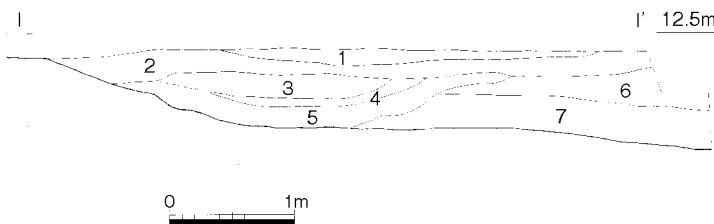
うかがわれる。流路28と同一で、弥生時代中期に至るまで埋没を繰り返していた流路と考えられる。

(石田)

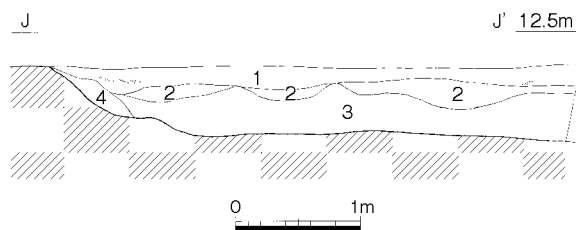


- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土 (砂礫混)
- 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂礫
- 3 灰色 (5Y5/1) 細砂
- 4 灰色 (10Y4/1) 粘土

第88図 流路19 (1/60)

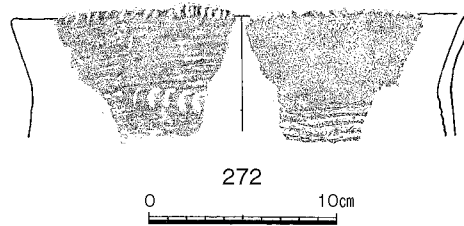


- 1 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土
- 2 暗褐色 (10YR3/3) 砂質土
- 3 褐灰色 (10YR5/1) 粗砂
- 4 にぶい黄橙色 (10YR6/4) 砂質土
- 5 褐灰色 (10YR5/1) 粗砂
- 6 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘質土
- 7 灰色 (7.5Y4/1) 砂礫 (2~3cm大礫)



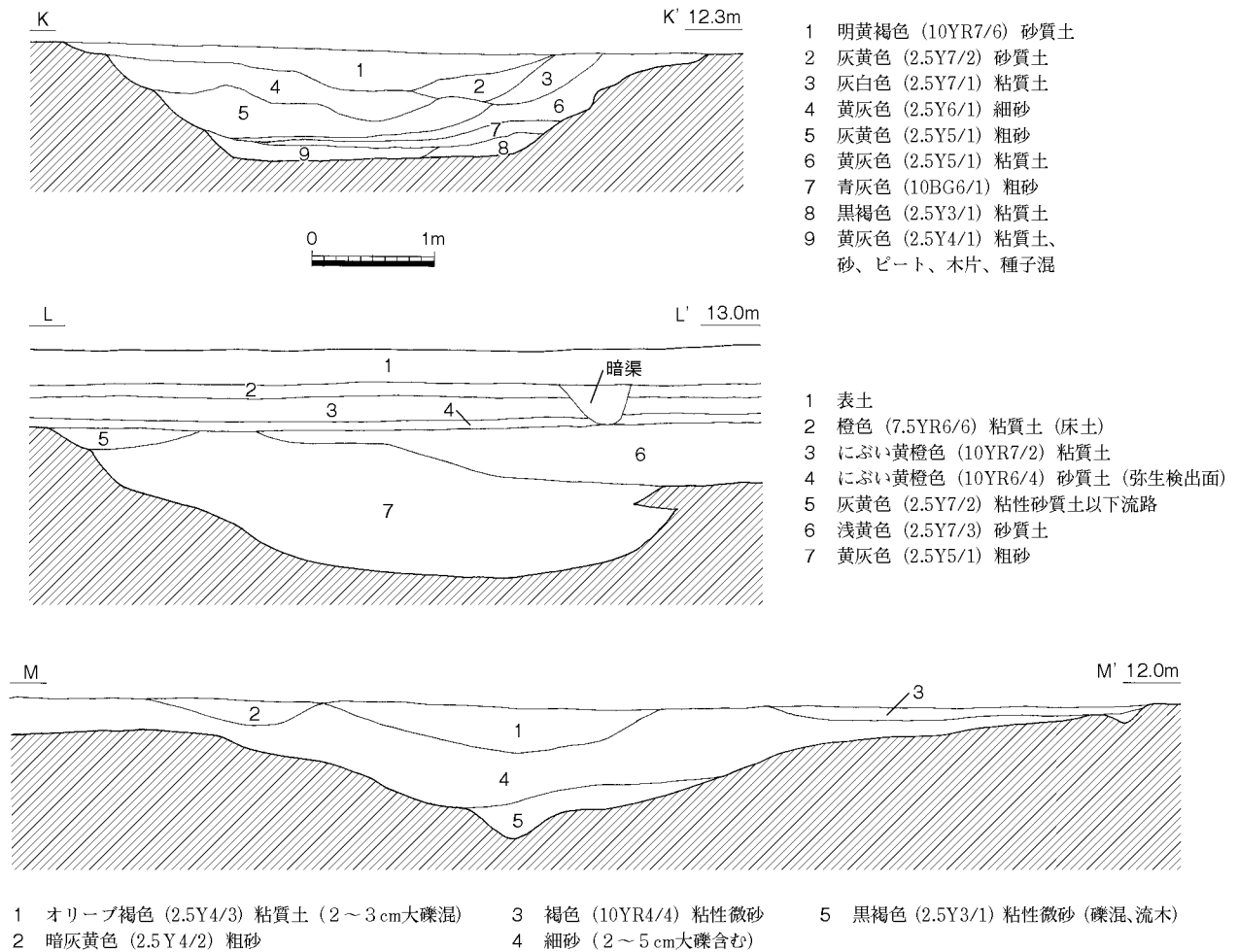
- 1 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土
- 2 暗褐色 (10YR3/3) 砂質土
- 3 暗褐色 (10YR3/3) 細砂
- 4 灰色 (7.5Y4/1) 砂礫 (2~3cm大礫)
- 5 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘性微砂

第89図 流路20 (1/60)

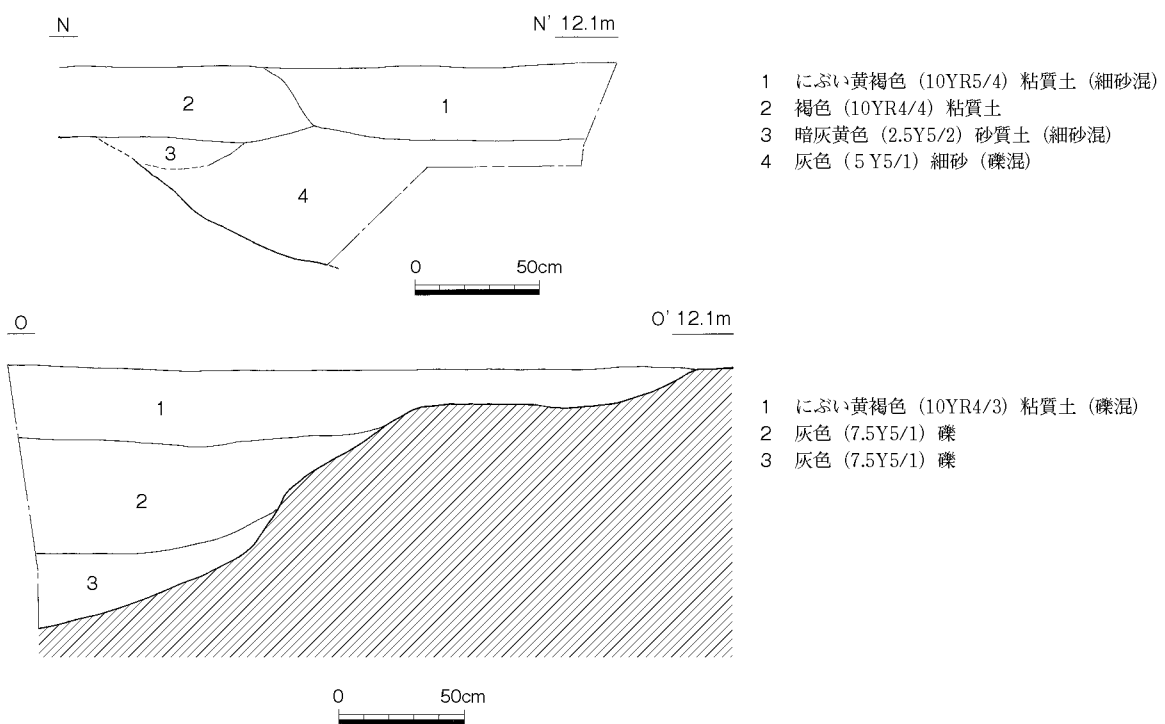


第90図 流路21出土遺物 (1/4)

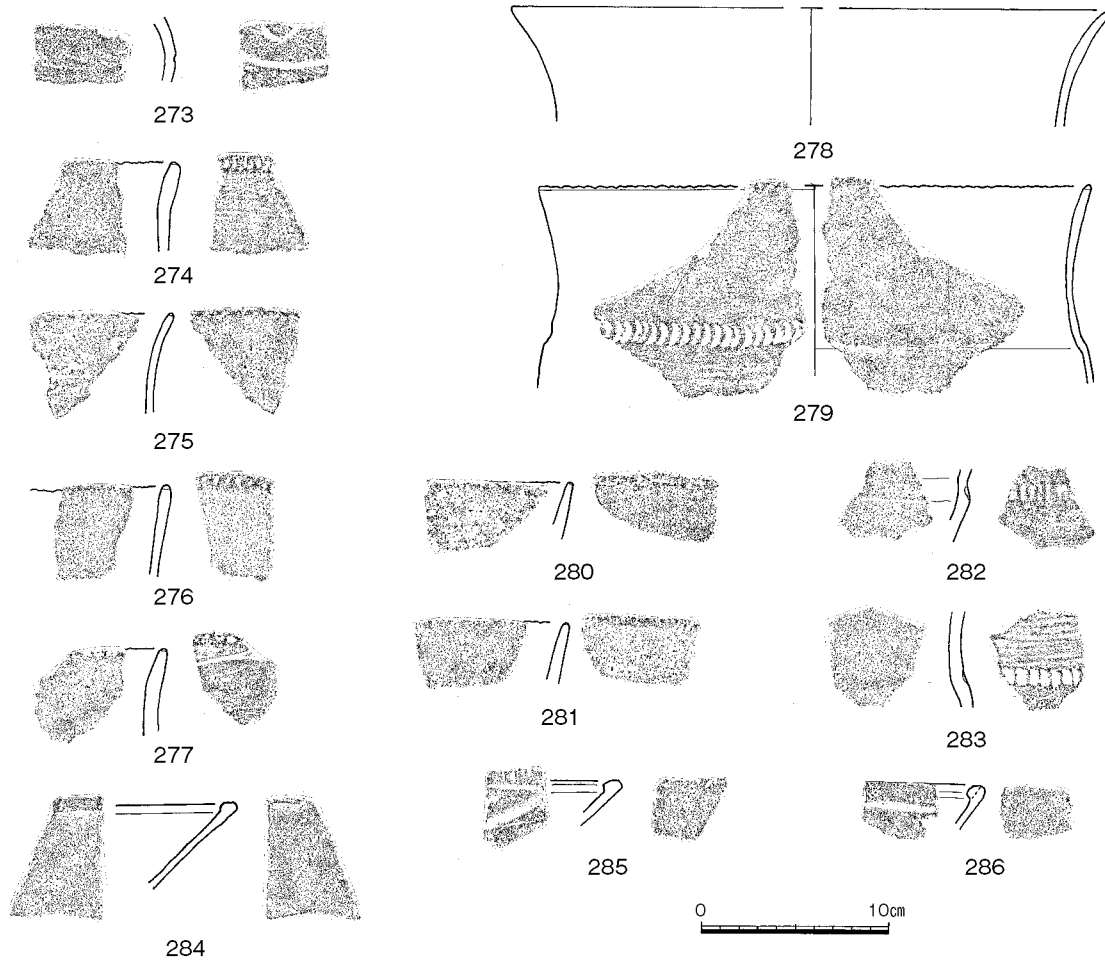
第3章 発掘調査の概要



第91図 流路21 (1/60)



第92図 流路22 (1/30)



第93図 流路22出土遺物① (1/4)

流路21 (第72・90・91図、図版15-1)

II区中央で検出した自然流路である。調査区のほぼ中央を北から南に蛇行して流走するが、途中北東方向からの支流と合流している。長さ42mにわたって検出し、幅2.6m、深さは90cm程度であった。

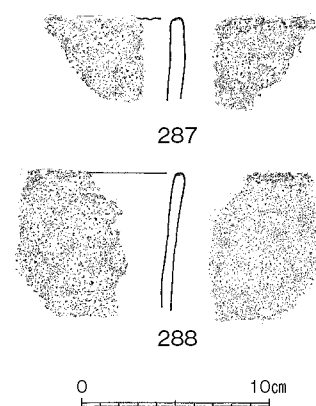
流路の堆積土は砂もしくは粘質土であったが、第91図のK断面に示したように最下層の第9層からは、木片や種子が混じって出土した。

堆積土中から口縁端部に刻目、口縁部と体部の境目に爪形文を施す深鉢片272が出土していることから、この流路は縄文時代晩期中葉には埋没したものと考えられる。(石田)

流路22 (第72・92~94図、図版15-2)

II区南半で検出した自然流路で、北西から南東方向と南西方向に分かれ流走しており、長さ61mにわたって検出している。流路の深さは175cm以上で、堆積土は礫もしくは礫混じりの砂であった。

堆積土の特徴からこの流路は、比較的短時間に埋没したものと考えられる。流路の堆積土である礫層中からは、縄文土器片がまとまって出土している。



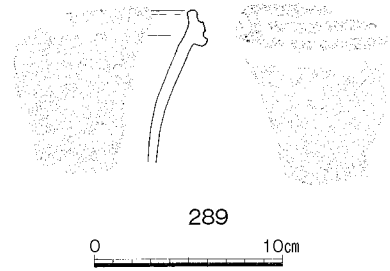
第94図 流路22出土遺物② (1/4)

出土土器には、深鉢273～283・287・288のほか、浅鉢の口縁部片284～286がある。273は外面に沈線、磨消縄文を施す。274～281・287・288は口縁端部に刻目を、279・282・283は外面に爪形文を施している。

これらの出土遺物から流路が埋没したのは縄文時代晩期中葉頃と考えられる。 (石田)

流路23 (第72・95図、図版15-3)

Ⅱ区南端で検出した自然流路である。調査区内でゆるやかに湾曲して北東から南東方向に流走している。流路の幅は3 m程度で砂礫が堆積していた。砂礫層中からは、口縁端部に磨消縄文や沈線を施す縁帯文の深鉢289が出土している。以上のことから流路は、縄文時代後期中葉以降に埋没したものと考えられる。 (石田)

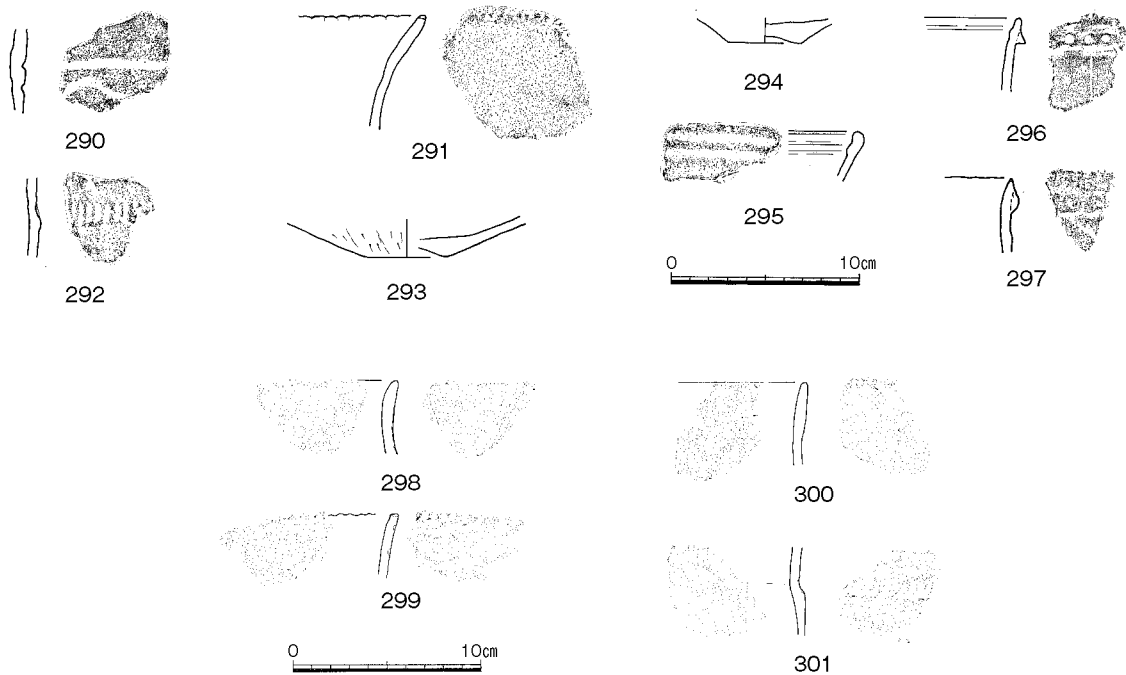
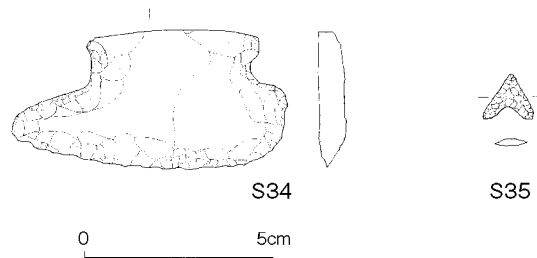


第95図 流路23出土遺物 (1/4)

その他の出土遺物 (第96図)

包含層出土あるいは遺構に伴わない縄文時代の遺物で、図示できたものについて掲載した。S34は石匙、S35は鋏形の石鏃でいずれもサヌカイト製である。

290は縄文時代後期前葉の深鉢片で外面に磨消縄文や沈線を施す。295は縄文時代晩期の浅鉢の口縁部片で内面に沈線が2条認められる。291～293、298～301は縄文時代晩期中葉の深鉢で、口縁端部に刻目を施すものや、屈曲部外面に刺突文や沈線文を施すものが見受けられる。296・297は縄文時代晩期後葉の深鉢片で296は口縁端部に刻目突帯文とヘラ描き文を、297は刻目突帯文を施す。 (石田)



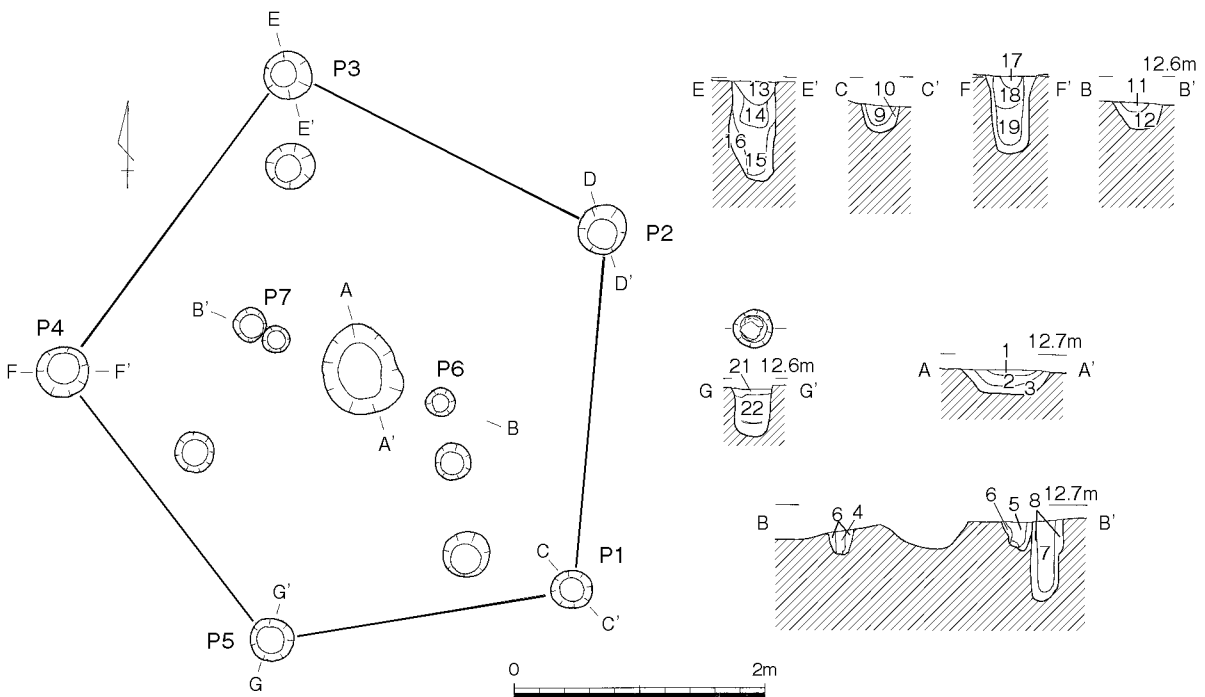
第96図 その他の出土遺物 (1/2・1/4)

2 弥生・古墳時代の遺構・遺物

竪穴住居 1 (第97~100図、巻頭図版2-1、図版16-1・2、18-1・2)

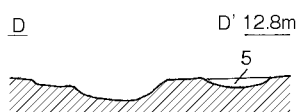
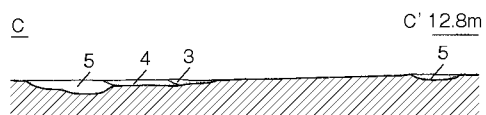
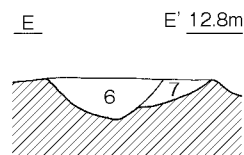
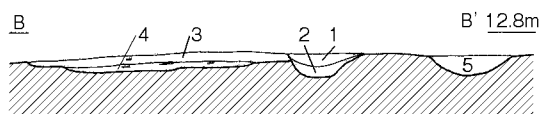
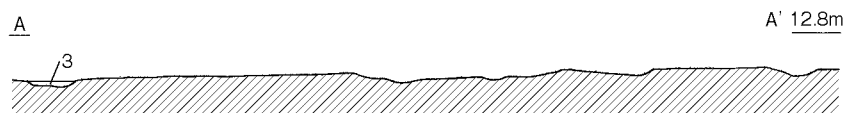
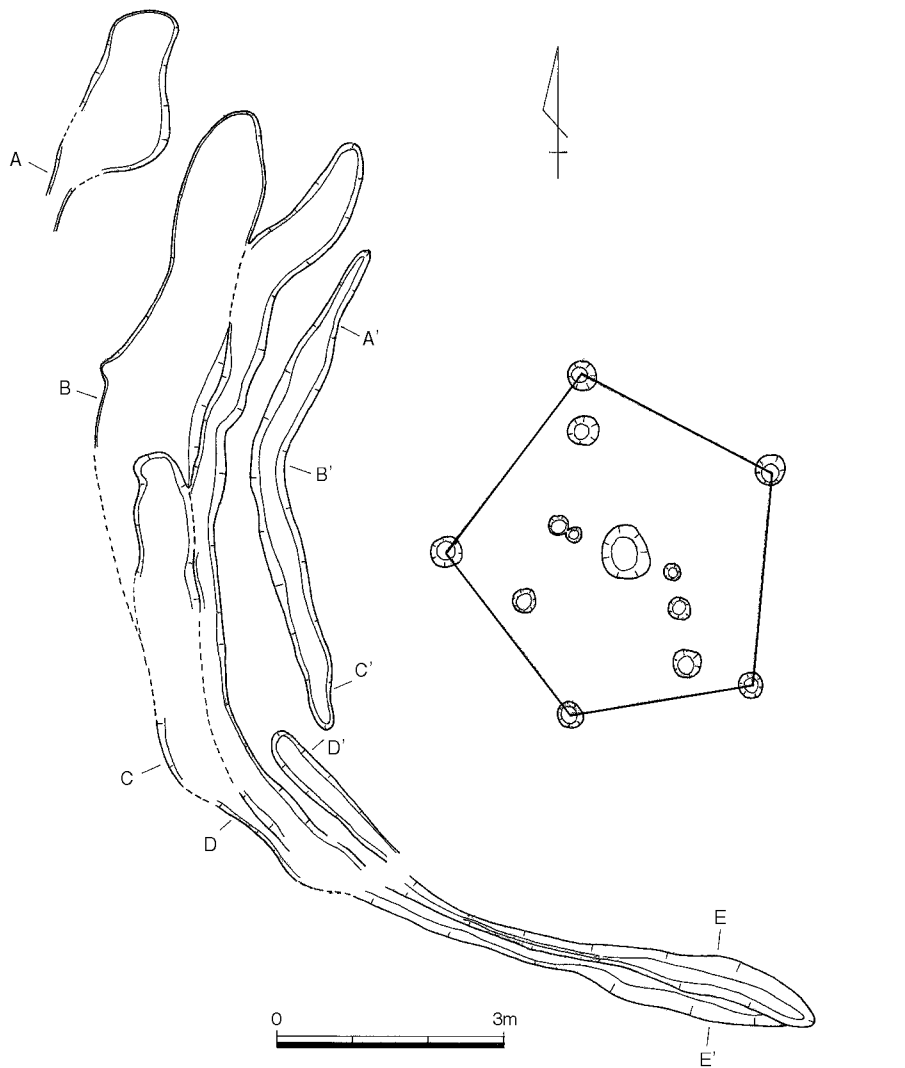
II区のほぼ中央付近で検出された遺構である。竪穴住居の掘り方は検出されなかったが、この周辺は削平が大きくなされているため、深い遺構である中央土壇と柱穴のみが検出されたものと考えられる。柱穴の並びから、主柱穴が5本で、中央土壇の脇に2本の小柱穴を持つタイプの住居であると判断される。この柱穴群を取り囲むように西側から南側にかけて3~4重の溝群が検出されており、おそらくこの竪穴住居に付随するものと判断できる。本例と同様な事例は、岡山市百間川原尾島遺跡などでも検出されており、排水の機能が推定されている。中央土壇の中には、炭と灰が交互に充填されている様子が観察された。いわゆる「灰穴炉」である。主柱穴のうち最も深いP3は現存で約80cmの深さがあり、柱痕も明瞭である。中央土壇の両脇の小柱穴は大きさ・深さ共に主柱穴に比べて小規模である。遺物には弥生土器・サヌカイトの剥片がある。弥生土器はその多くが周辺を囲む溝から出土した。器種には壺302~304、甕305~313、鉢314・315、高杯316などがある。壺302は外面口縁部から頸部にかけて4条の貼り付け押圧突帯文を施している。壺304は外面口縁部から頸部にかけて櫛描波状文が認められる。これら壺の特徴や甕の口縁端部の特徴などから、中期中葉でも古い段階に比定できる。

(河合)



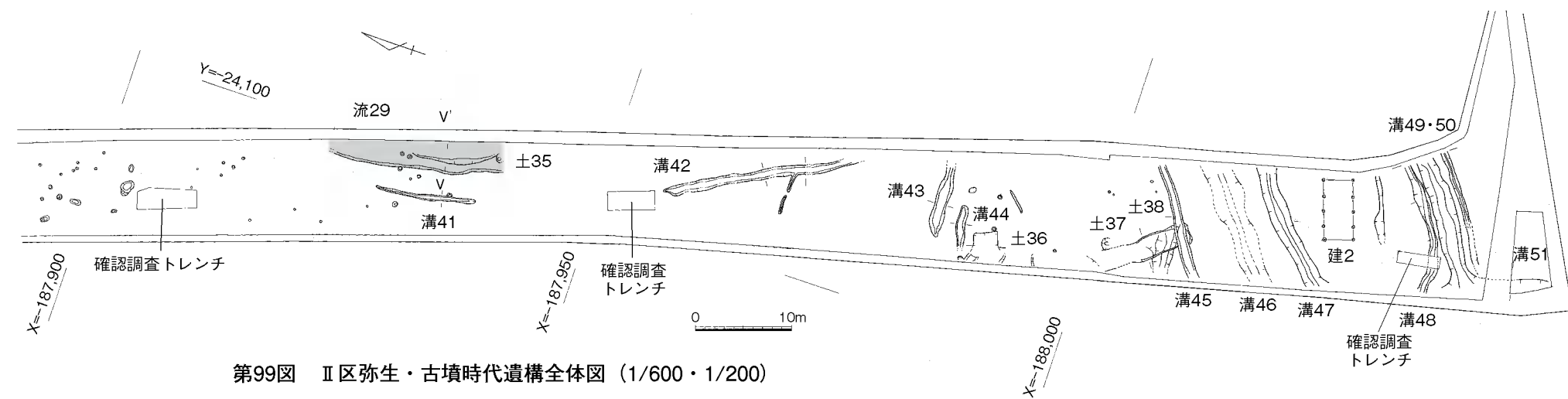
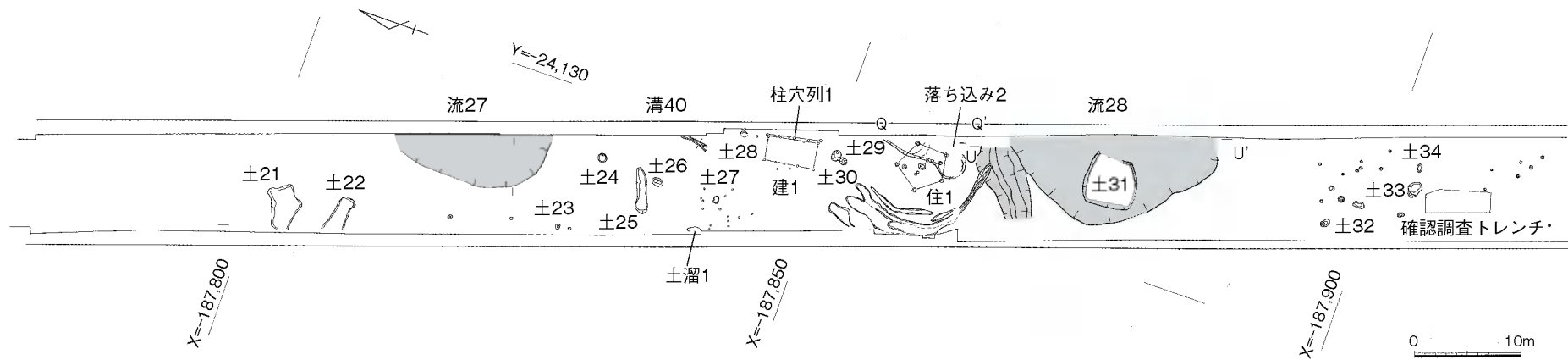
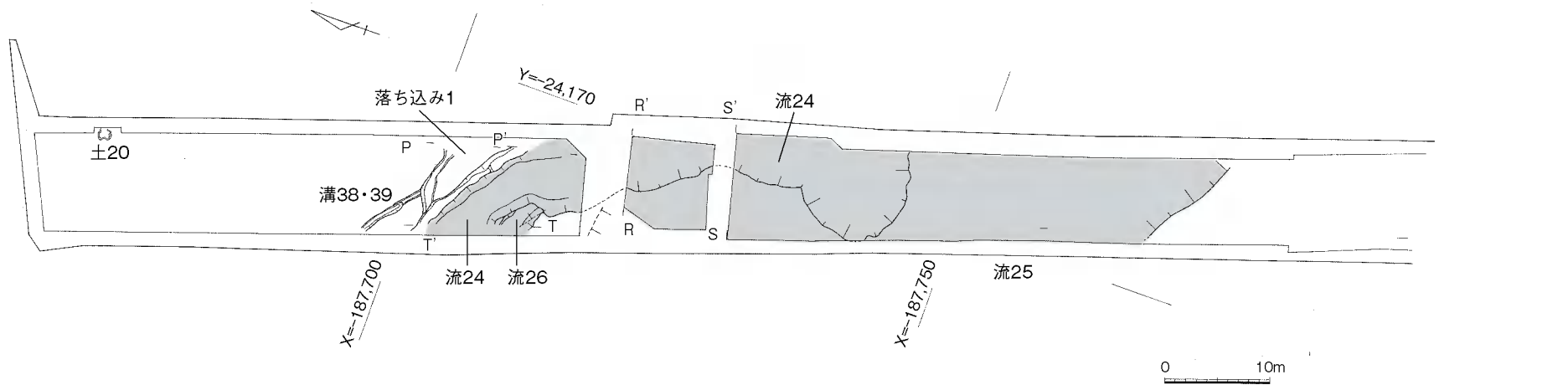
- | | | |
|--------------------------|---------------------------|---------------------------|
| 1 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土 (炭混) | 8 黄褐色 (2.5Y5/2) 粘土 | 15 灰色 (5Y4/1) 粘土 |
| 2 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘質土 (炭層) | 9 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘土 (炭多) | 16 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘土 (炭少) |
| 3 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘質土 (炭層) | 10 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘土 (炭多) | 17 黄灰色 (2.5Y4/1) (炭多) |
| 4 黒褐色 (10Y3/1) 粘質土 (炭混) | 11 黄灰色 (2.5Y4/1) | 18 黄灰色 (2.5Y4/1) (炭混) |
| 5 灰色 (5Y5/1) 粘土 | 12 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘土 | 19 灰色 (5Y4/1) 粘土 |
| 6 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘土 | 13 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘土 (炭少) | 20 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘土 (炭少) |
| 7 暗灰黄色 (2.5Y5/1) 粘土 (炭混) | 14 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘土 (炭混) | 21 黄灰色 (2.5Y4/1) (炭多) |
| | | 22 暗灰黄色 (2.5Y5/2) (炭多) |

第97図 竪穴住居 1① (1/60)



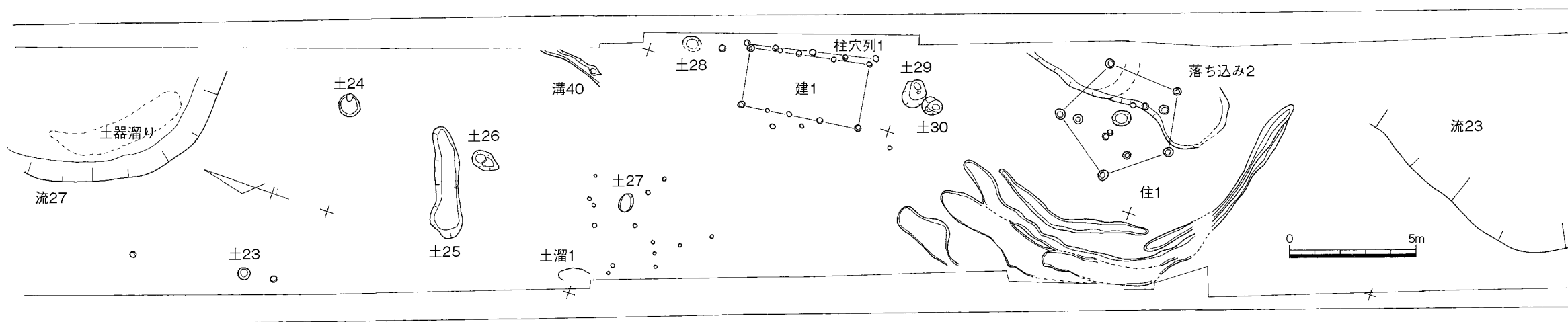
- 1 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘土 (炭少)
- 2 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘土 (炭混)
- 3 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土 (炭多、小礫)
- 4 黒褐色 (10YR3/1) 粘土 (炭多)
- 5 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘土 (炭少)
- 6 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土
- 7 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土

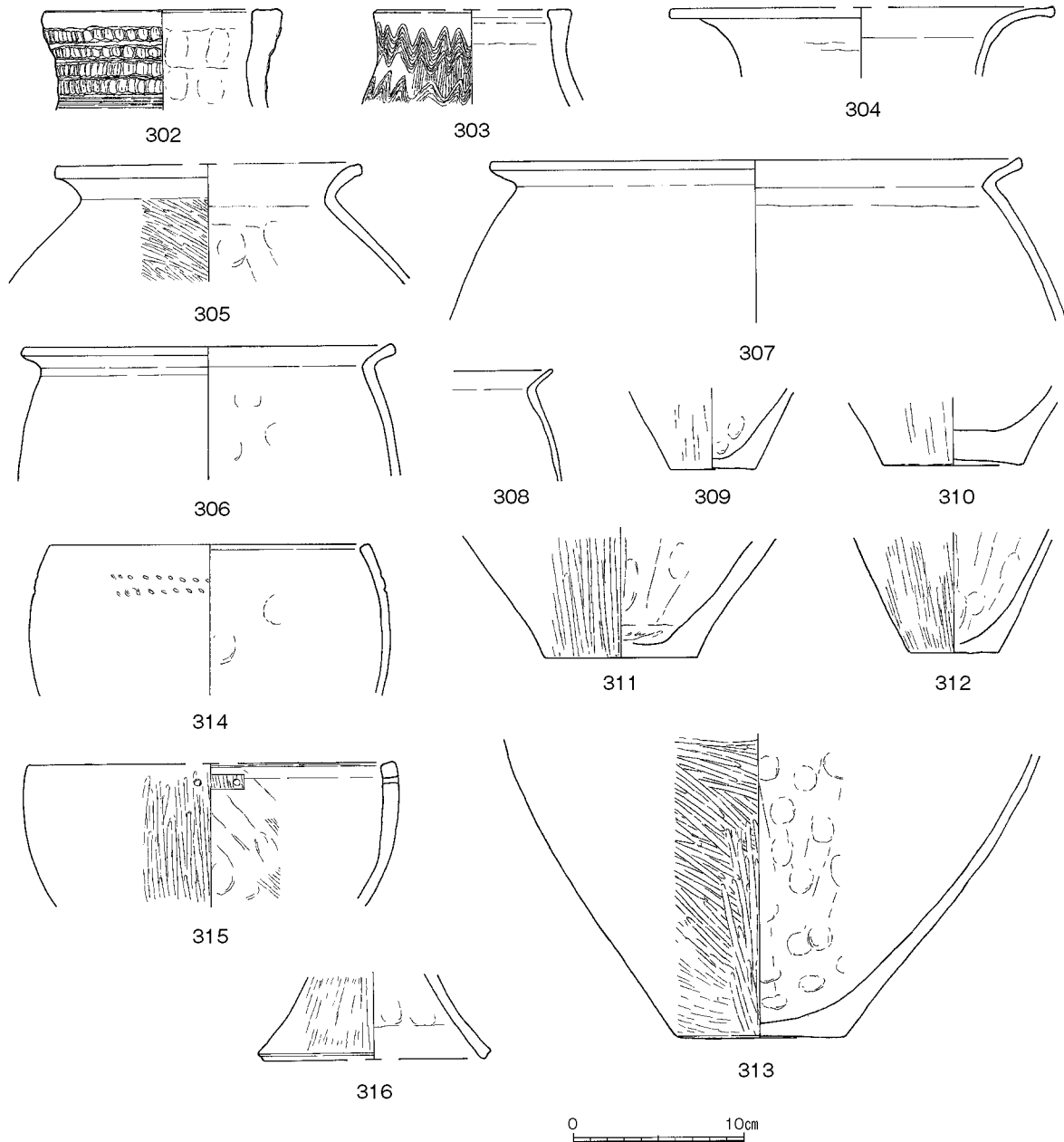
第98図 竪穴住居 1② (1/100・1/40)



土：土塊
 流：流路
 建：建物
 住：竪穴住居
 土溜：土器溜り

第99図 II区弥生・古墳時代遺構全体図 (1/600・1/200)

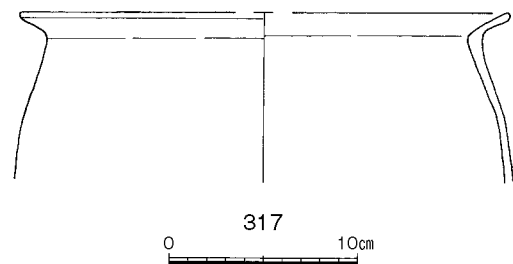




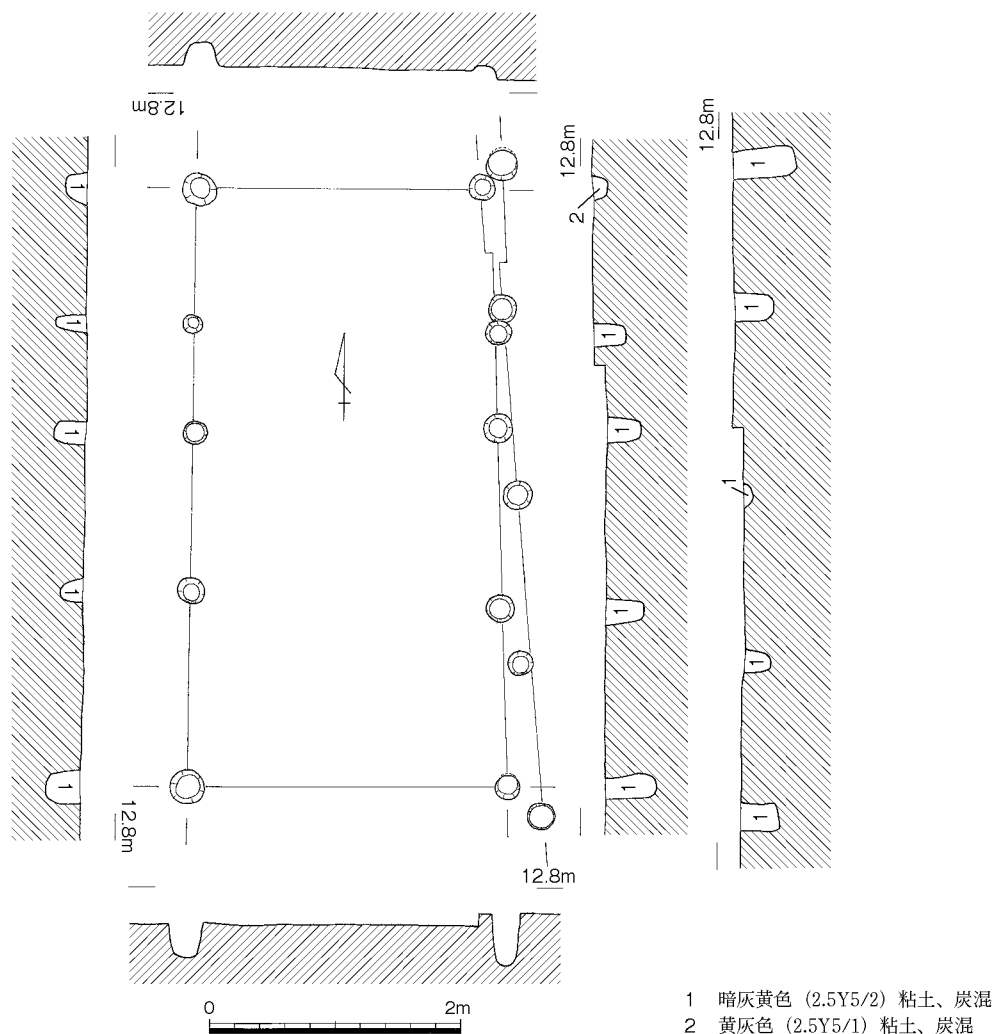
第100図 竪穴住居1出土遺物 (1/4)

建物1 (第99・101・102図、図版16-3)

竪穴住居の北側に近接して検出された遺構である。規模は桁行4間×梁行1間であり、長さ約4.8m×2.5mを測る。柱穴の規模は径約30cmである。埋土は黄灰色系で、竪穴住居1と共通する。東側が柱穴列1と重複関係にあり、後述するように柱穴列1は調査区外にもう1列平行に並び、建物になる可能性が考えられることから、少なくとも1度の建て替えを想定できる。出土遺物は弥生土器甕317があり、その特徴から、中期中葉でも古い段階に比定できる。このことや埋土から、建物1と



第101図 建物1出土遺物 (1/4)



第102図 建物1、柱穴列1 (1/60)

竪穴住居1との同時併存の可能性が想定できる。 (河合)

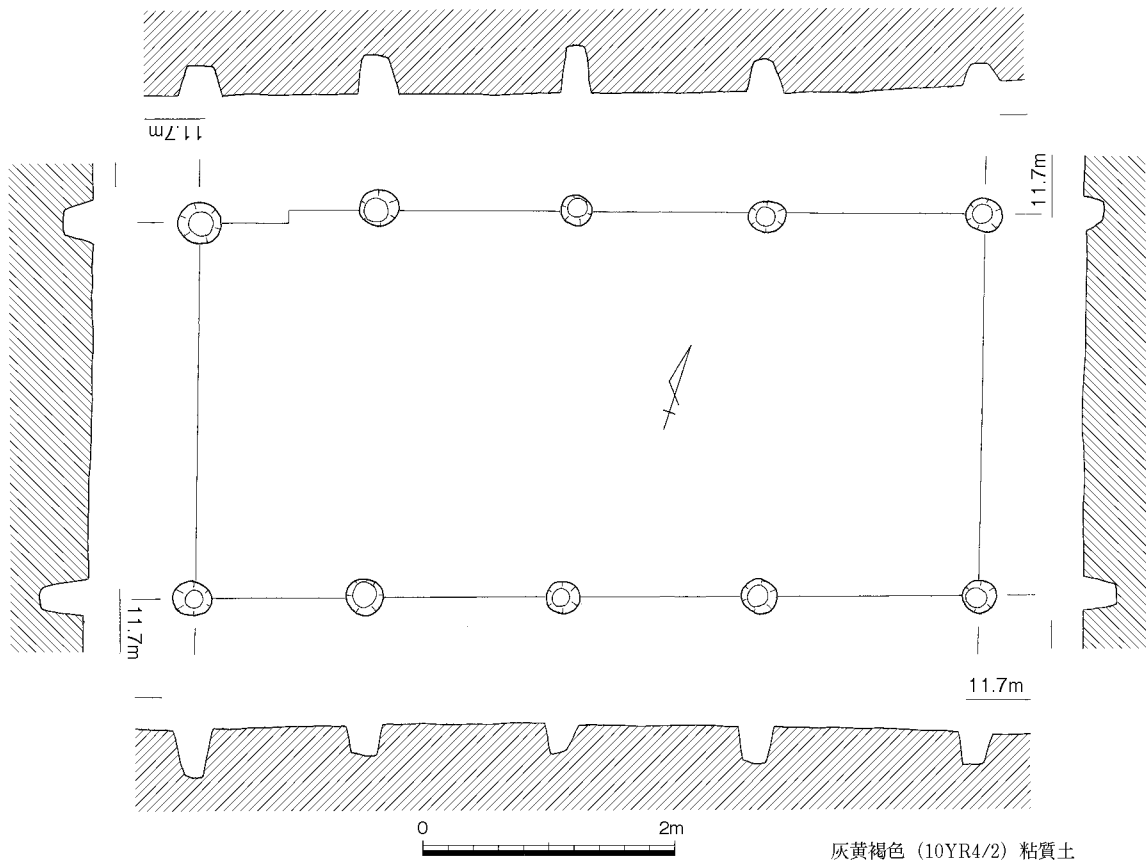
建物2 (第99・103図、図版17-1)

Ⅱ区南端の微高地上で検出した桁行4間、梁行1間の掘立柱建物である。建物の規模は桁行が620cm、梁行が300cmを測り、面積は18.6㎡であった。柱間距離は桁行で135~175cmとやや不等な間隔であった。また、棟方向はN-71°-Eを示していた。

柱穴の掘り方は全て円形で、径は30cm程度、検出面からの深さは40cm程度であった。図示できるような伴出遺物はなかったが、柱穴から弥生土器片が出土したことや、検出状況から建物の時期は弥生時代中期に属すると考えられる。 (石田)

柱穴列1 (第99・102図、図版16-3)

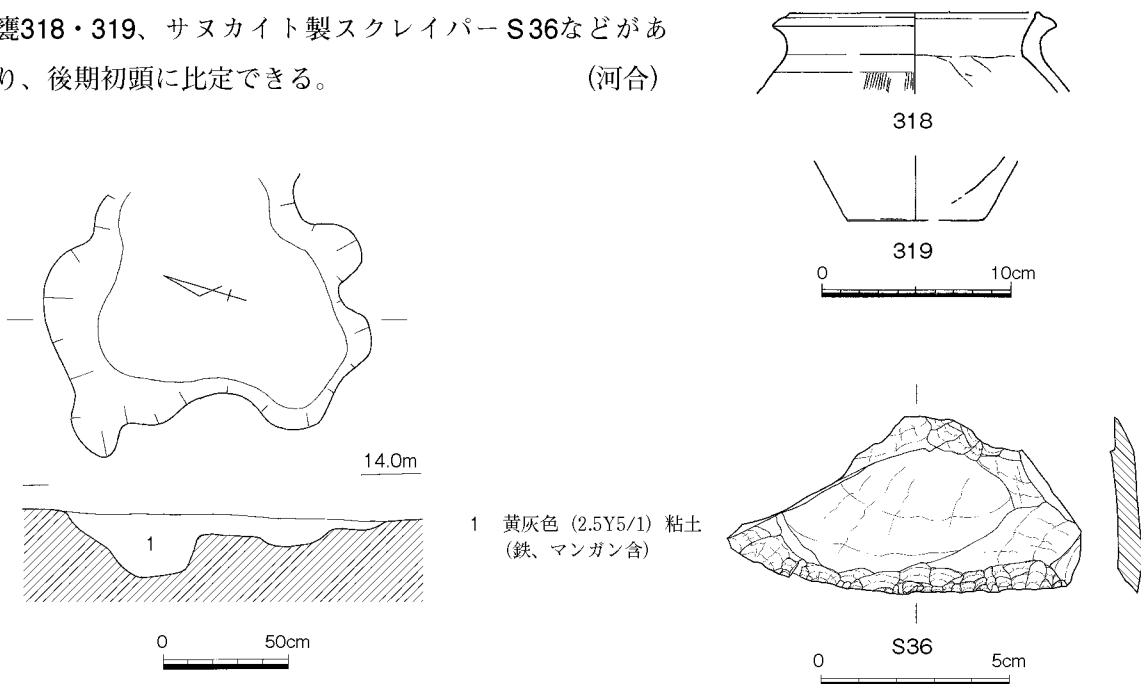
建物1と重なるように検出された遺構である。現状で5つの柱穴が並び、長さは約5.2mを測る。柱穴の規模は径約30cmである。この遺構は埋土や長軸方向が建物1と共通することから、調査区外の東側にもう1列並ぶことが想定され、一部建物1に切られることから、少なくとも1度の建て替えがなされ、建物1に先行すると考えることができる。遺構の時期は小片出土した土器と埋土から、竪穴住居1に近い時期が想定できる。 (河合)



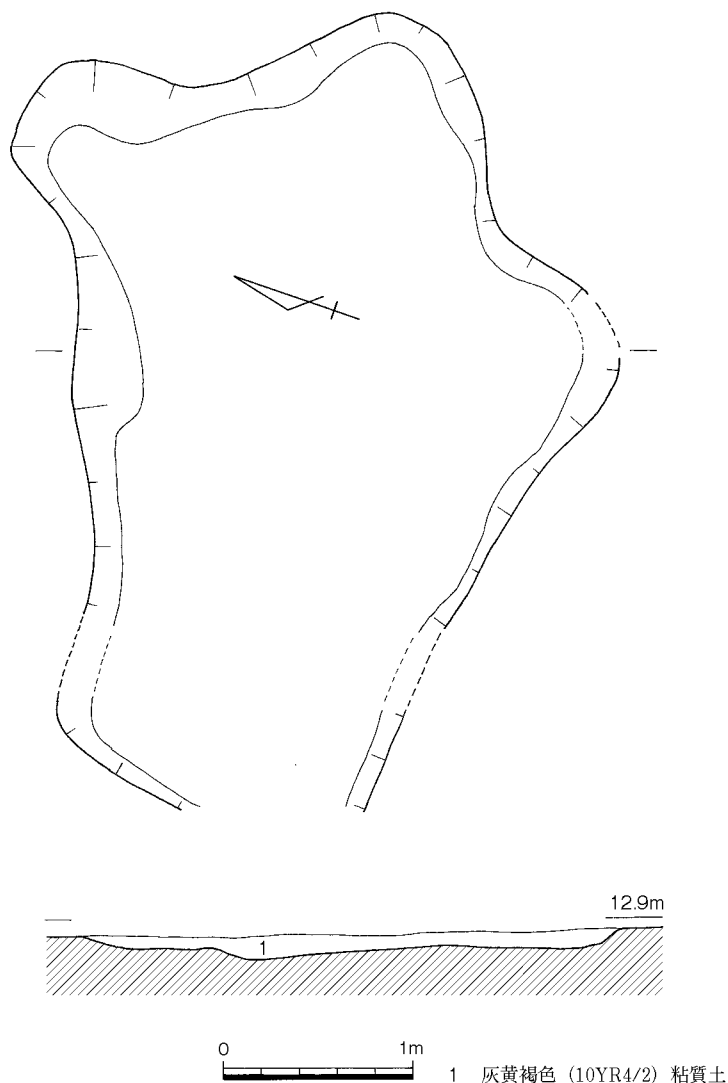
第103図 建物2 (1/60)

土壌20 (第99・104図)

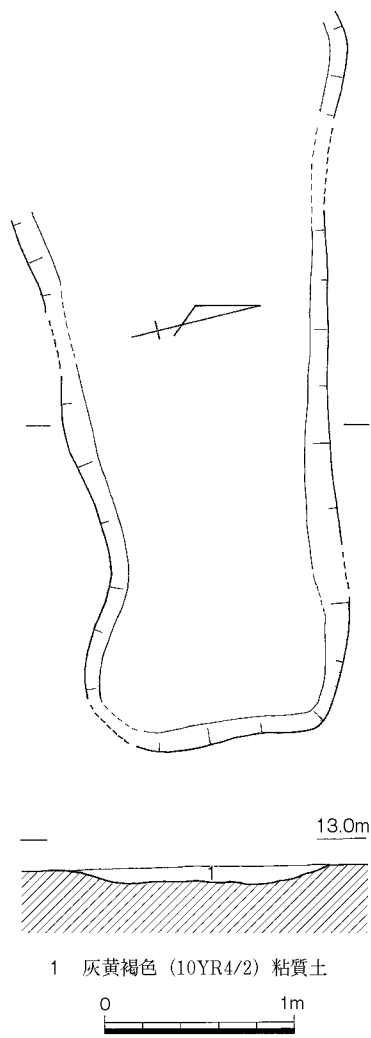
II区の北端付近で検出された遺構である。平面形が不整形であることや底面に起伏があることから、倒木痕の可能性が高いと考える。出土遺物には弥生土器甕318・319、サヌカイト製スクレイパーS36などがあり、後期初頭に比定できる。(河合)



第104図 土壌20 (1/30) ・出土遺物 (1/4・1/2)



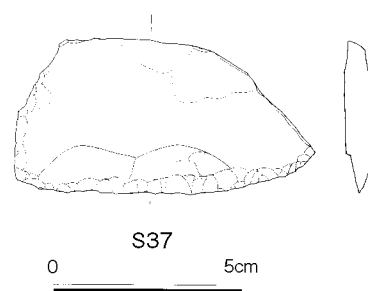
第105図 土壌21 (1/40)



第106図 土壌22 (1/40)

土壌21 (第99・105・107図、図版17-2)

弥生中期の遺物が多く出土した流路27の北西約10mの所に位置する。平面形は不整形であり、現状で最大幅約2.2m、長さ約3.2m、深さ約8cmを測る。出土遺物には、サヌカイト製スクレイパー S37のほか、弥生土器の細片が確認された。出土遺物や埋土から、周辺の遺構と同様中期中葉でも古い時期に比定しておきたい (河合)



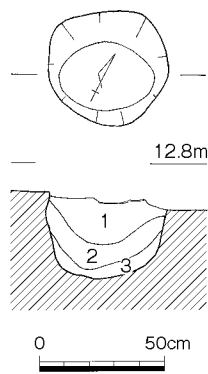
第107図 土壌21出土遺物 (1/2)

土壌22 (第99・106図、図版17-2)

近接する土壌21とは約3m離れて位置する。幅約1m、深さは10cmに満たない遺構であり、その形状から溝になる可能性も考えられる。出土遺物には縄文土器の細片があるものの、埋土や位置から土壌21に近い時期を考慮しておきたい。 (河合)

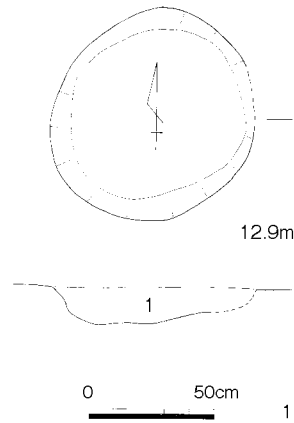
土壌23 (第99・108図、図版18-4)

流路27の南西、弥生中期の遺構群が集中する地点の一角に位置する。平面円形を呈し、その規模は、径約30cm、深さ約46cmを測る。埋土は3層に分層され、1・2層には炭が認められる。出土遺物は1



- 1 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土 (炭混)
- 2 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土 (炭混)
- 3 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質土

第108図 土壙23 (1/30)



- 1 褐灰色 (10YR4/1) 粘土

第109図 土壙24 (1/30)

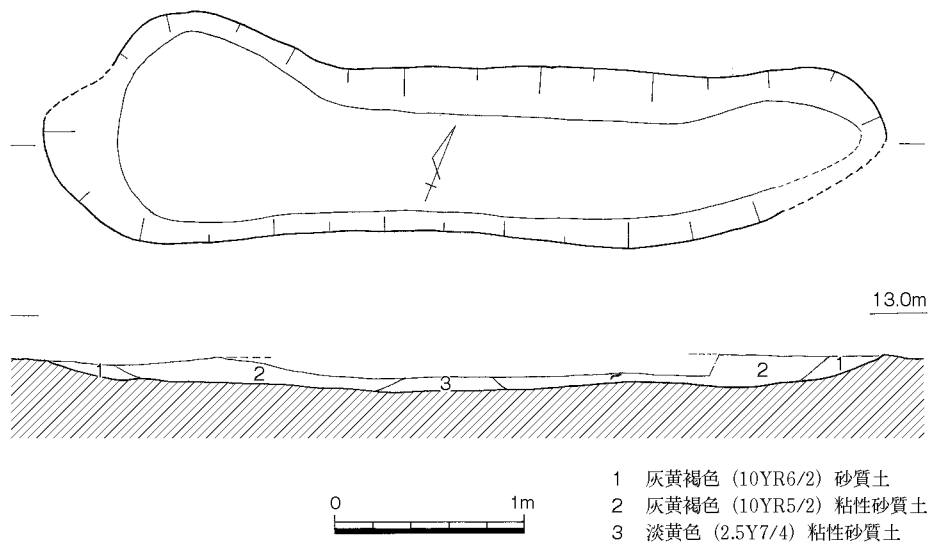
層からややまとまって弥生土器壺の胴部片が出土している。遺物から、周辺の遺構群と同様中期中葉でも古い時期に属すると考えておきたい。(河合)

土壙24 (第99・109図)

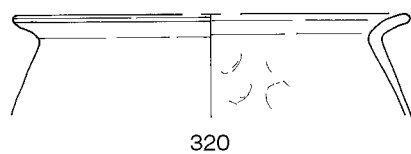
流路27の南、弥生中期の遺構群が集中する地点の一角に位置する。平面円形を呈し、その規模は、径約80cm、深さ約15cmを測る。出土遺物には弥生土器の小片がある。遺物と埋土、そして遺構の位置から土壙23に近い時期を考慮しておきたい。(河合)

土壙25 (第99・110図、図版17-3)

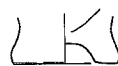
土壙24と後述する土壙26の間に位置する。平面形は長楕円形を呈し、いわゆる「舟形土壙」に近い



- 1 灰黄褐色 (10YR6/2) 砂質土
- 2 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘性砂質土
- 3 淡黄色 (2.5Y7/4) 粘性砂質土



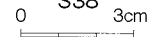
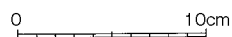
320



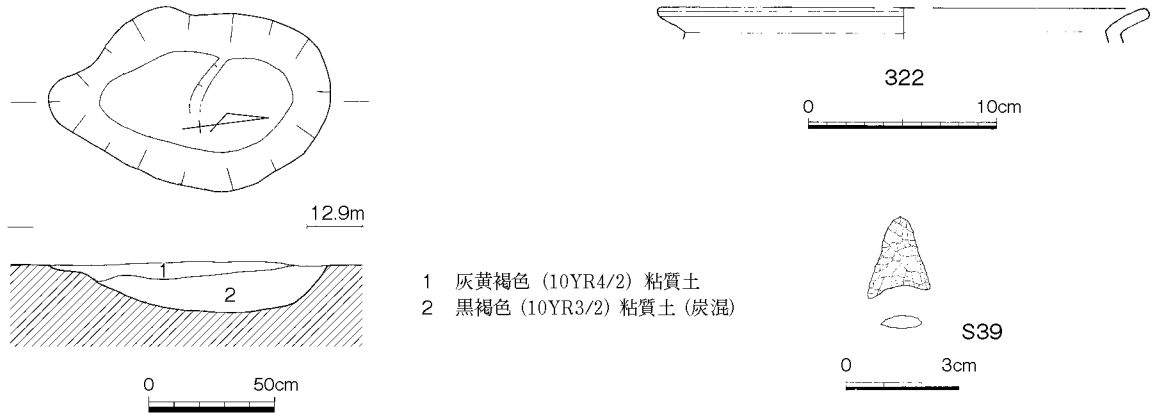
321



S38 3cm



第110図 土壙25 (1/40) ・出土遺物 (1/4・1/2)



第111図 土壌26 (1/30) ・出土遺物 (1/4・1/2)

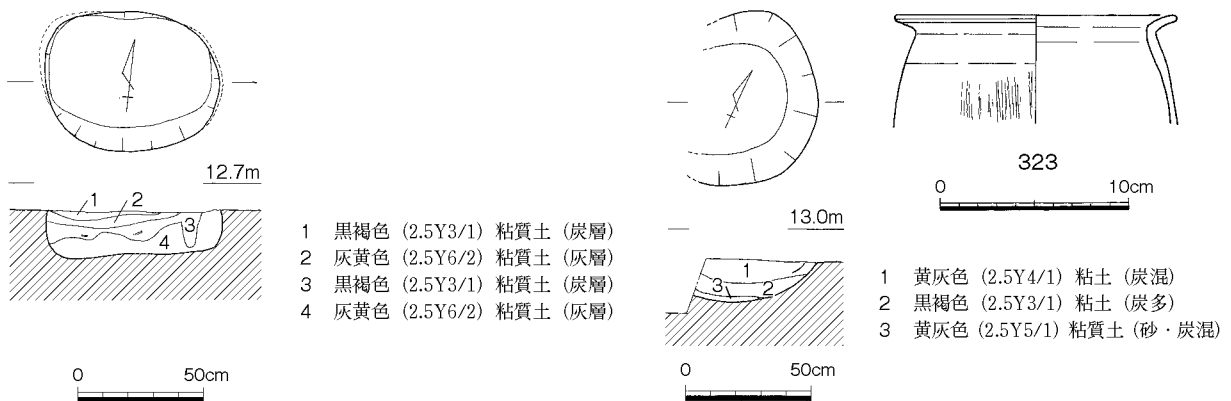
形状を有する。現状で、幅は中央で約92cm、長さは約446cm、深さ約18cmを測る。土壌は大きく2層に分かれ、遺構のほぼ中央にブロック状に淡黄色粘性砂質土が混じる。出土遺物には弥生土器甕320・321のほかサヌカイト製石錐S38などが認められる。甕320はくの字状の口縁部をもち、口縁端部を丸く収めている。甕の底部321は上げ底状を呈する。土器などの特徴から、中期中葉でも古い段階に比定できる。(河合)

土壌26 (第99・111図、図版18-5)

土壌25の南側に隣接する遺構である。平面形は不整楕円形を呈し、長軸約110cm、短軸約72cm、深さ約20cmを測る。出土遺物には弥生土器甕322、サヌカイト製石鏃S39などがある。土器などの特徴から、中期中葉でも古い段階に比定できる。(河合)

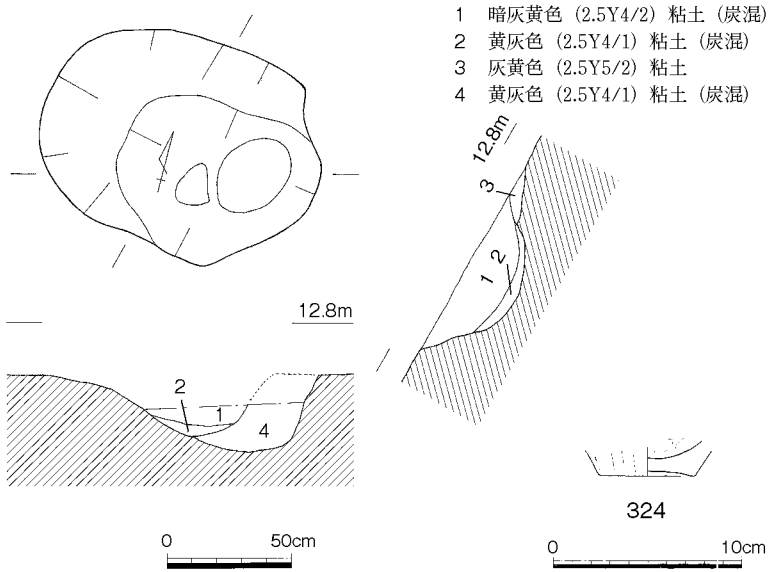
土壌27 (第99・112図、図版18-6)

土壌26から約5.5m南に位置し、周辺には柱穴が比較的多く存在する。平面形は楕円形を呈し、長軸約66cm、短軸約54cm、深さ約17cmを測る。埋土には特徴があり、炭層と灰層が交互に充填されていた。これは竪穴住居1の中央土壌で検出された「灰穴炉」と同様の構造を有することから、この遺構も竪穴住居の中央土壌である可能性が高く、周辺で多く検出された柱穴のいくつかが住居を構成する柱穴になる可能性がある。しかし、この周辺は大きく削平を受けているため、まとめることができなかった。(河合)

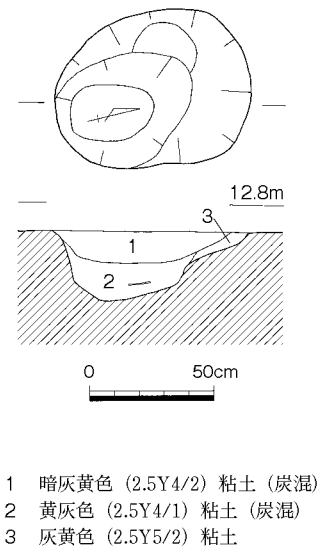


第112図 土壌27 (1/30)

第113図 土壌28 (1/30) ・出土遺物 (1/4)



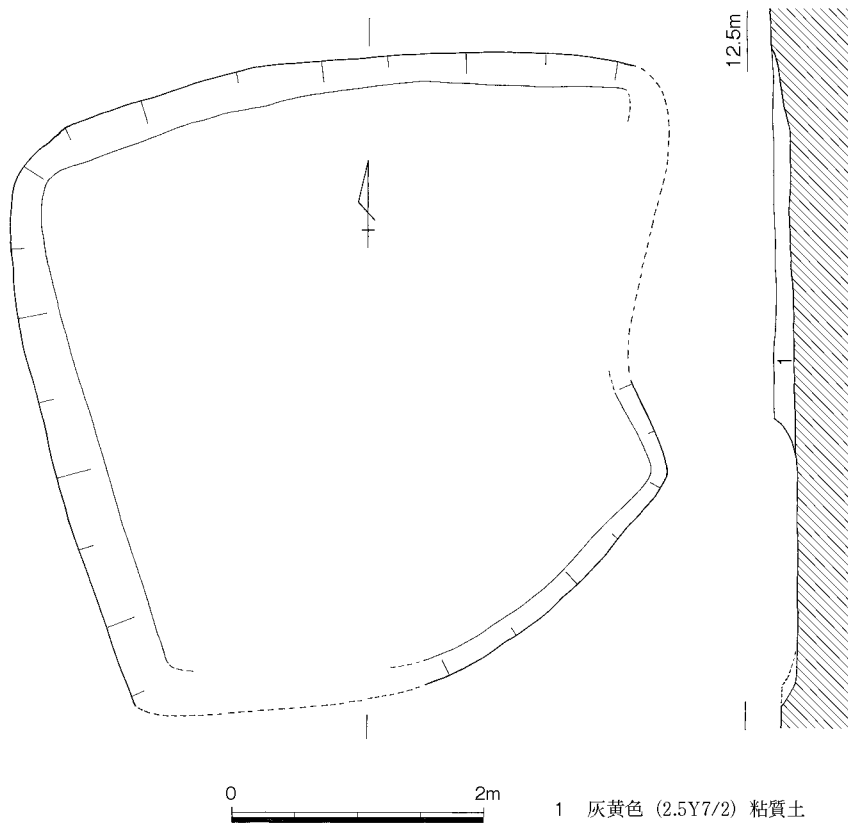
第114図 土壌29 (1/30) ・出土遺物 (1/4)



第115図 土壌30 (1/30)

土壌28 (第99・113図)

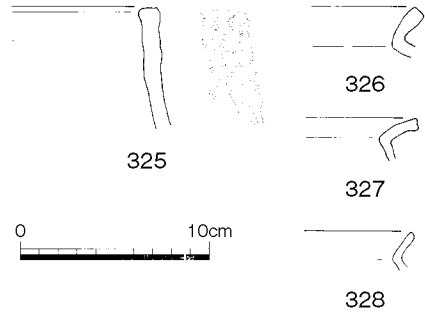
建物1の約2m北に位置する。遺構の約半分を削平されているが、おそらく平面円形を呈し、現状で径約70cm、深さ約18cmを測る。埋土は3層に分層され、それぞれの層で炭が検出されたが、2層で特に多かった。出土遺物には弥生土器甕323がある。土器などの特徴から、中期中葉でも古い段階に比定できる。
 (河合)



第116図 土壌31 (1/60)

土壌29 (第99・114図、図版18-7)

建物1の約1m南に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸約112cm、短軸約85cm、深さ約32cmを測る。断面の観察からは、一度掘り返しを受けたか、または複数の土壌が重複しているかのいずれかが想定される。出土遺物には弥生土器甕324の底部などがある。出土遺物や埋土から、周辺の遺構と同様中期中葉でも古い時期に比定しておきたい。(河合)



第117図 土壌31出土遺物 (1/4)

土壌30 (第99・115図、図版18-8)

土壌29に隣接する。平面形は楕円形を呈し、長軸約80cm、短軸約60cm、深さ約28cmを測る。土壌29同様、掘り返しまたは複数の土壌の重複が想定される。出土遺物には弥生土器細片がある。出土遺物や埋土から、土壌29に近い時期を考えておきたい。(河合)

土壌31 (第99・116・117図)

Ⅱ区中央で検出され、流路28と重なるが、流路28の埋没後に掘削された土壌である。平面形は方形に近いが、いびつな形状を呈している。土壌の規模は長辺で516cm、短辺は457cmを測る。大部分が後世の削平を受けており、検出面からの深さは22cmであった。

埋土中には土器片が混ざっており、頸部外面に指頭圧痕文帯を貼り付ける壺325、甕の口縁部片326～328が出土している。

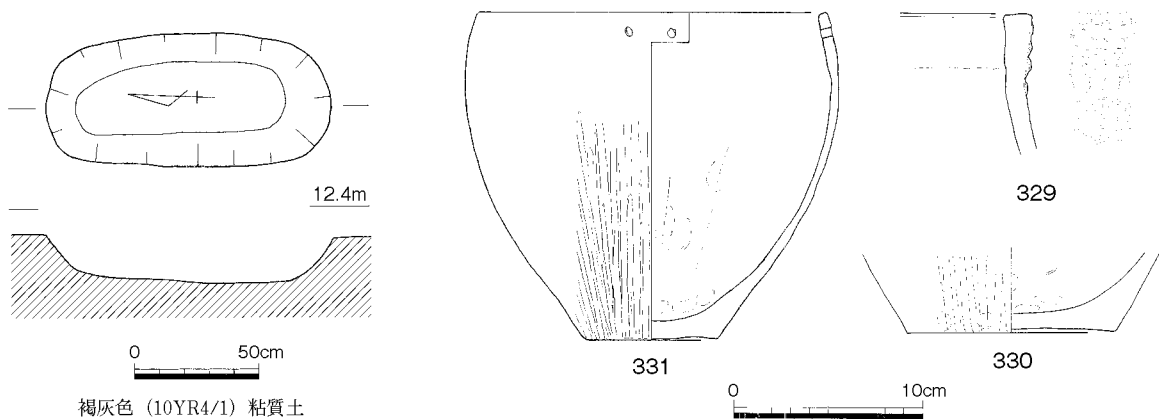
土壌の時期は、これらの遺物から弥生時代中期前半に属すると考えられる。(石田)

土壌32 (第99・118図、図版19-1)

Ⅱ区中央部で検出した長楕円形の土壌である。長辺は114cm、短辺は54cm、検出面からの深さは18cmで、断面形は碗状を呈していた。

土壌の北東隅からは、頸部外面に指頭圧痕文帯を貼り付ける壺の口縁部片329、壺の底部片330の他に、外面にヘラミガキを施し、口縁部の2か所に穿孔を施す鉢331が出土している。

これらの出土遺物から、土壌の時期は弥生時代中期前半と考えられる。(石田)



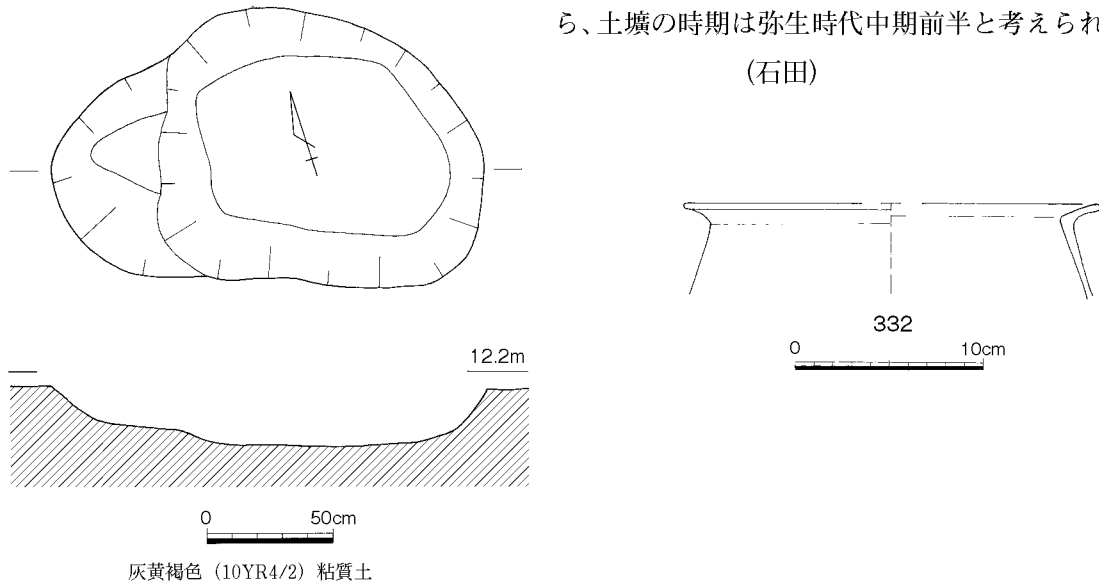
第118図 土壌32 (1/30) ・出土遺物 (1/4)

土壙33 (第99・119図)

II区中央部、土壙32の南4.2mに位置する土壙である。土壙の平面形は不整形を呈し、断面は西側が一段高く、二段掘りになっている。

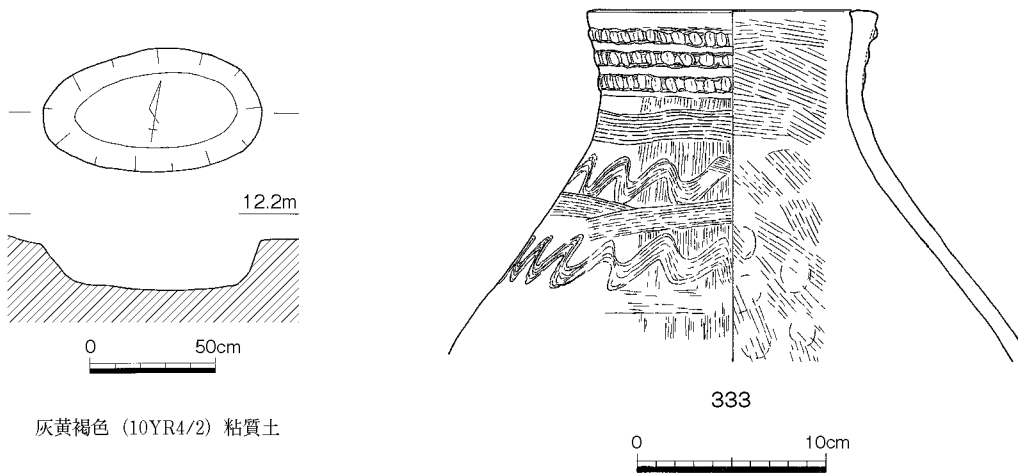
土壙の規模は長辺172cm、短辺107cm、検出面からの深さは25cmを測る。埋土中から、口縁端部があり肥厚しない甕片332が出土している。出土土器ら、土壙の時期は弥生時代中期前半と考えられる。

(石田)



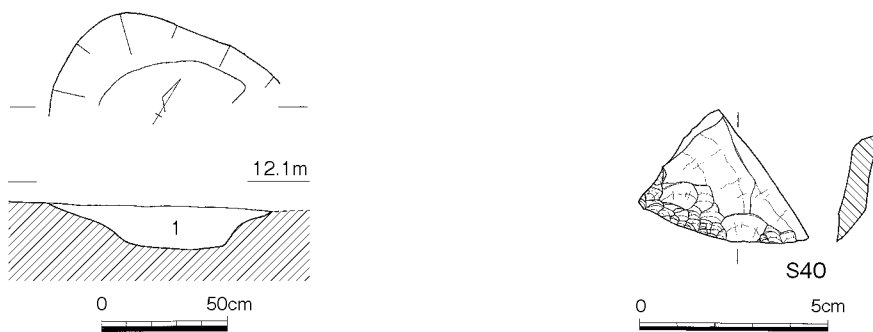
灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土

第119図 土壙33 (1/30) ・出土遺物 (1/4)



灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土

第120図 土壙34 (1/30) ・出土遺物 (1/4)



1 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土 (炭混)

第121図 土壙35 (1/30) ・出土遺物 (1/2)

土壌34 (第99・120図、図版19-2)

Ⅱ区中央部、土壌33の東約1mで検出した土壌である。平面形は楕円形で、断面形は碗状を呈している。土壌の規模は長辺が87cm、短辺は49cmを測り、検出面からの深さは20cmであった。

土壌の西端肩口からは、頸部外面に3条の指頭圧痕文帯を貼り付け、櫛描波状文と櫛描直線文を施す壺333が出土している。

土壌の時期は出土土器から、弥生時代中期前半に属すると考えられる。

(石田)

土壌35 (第99・121図)

Ⅱ区南半で検出した土壌である。半分以上が削平により失われており全形は不明である。土壌の規模は残存長で長辺90cm、短辺は39cm、深さは17cmを測る。

埋土中からは、サヌカイト製のスクレイパー S40が出土している。土壌の時期は、他の土壌と同様に弥生時代中期前半と考えられる。

(石田)

土壌36 (第99・122図、図版19-3)

Ⅱ区南半で検出した土壌である。土壌の平面形は隅丸方形に近く、断面は袋状で、壁は内傾して立ち上がる。規模は長辺282cm、短辺は252cm、深さは33cmを測る。埋土は他の土壌と異なり黒褐色を呈していた。

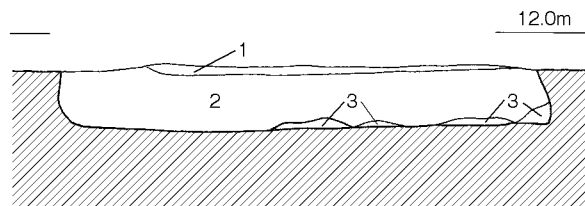
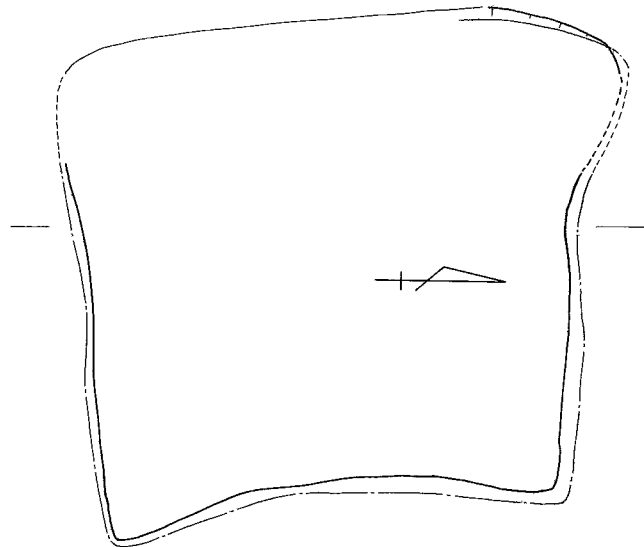
出土した遺物はなく、詳細な時期は不明であるが、弥生時代中期の範疇と考えられる。

(石田)

土壌37 (第99・123図)

Ⅱ区南半、土壌36の南約10mで検出した土壌である。平面形は円形、断面は碗状を呈している。南半の一部が削平を受けている。規模は長辺は115cm、短辺は残存長で78cm、深さは31cmを測る。埋土中より土器片が出土したが、細片で図示できるものはなかった。時期は弥生時代中期に属するものと考えられる。

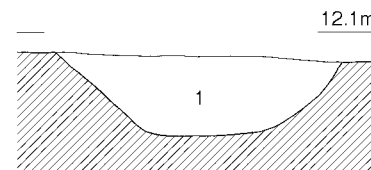
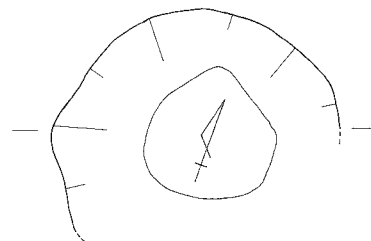
(石田)



- 1 褐灰色 (10YR5/1) 粘性砂質土
- 2 黒褐色 (10YR3/1) 粘性砂質土
- 3 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂質土



第122図 土壌36 (1/40)



- 1 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土

第123図 土壌37 (1/30)

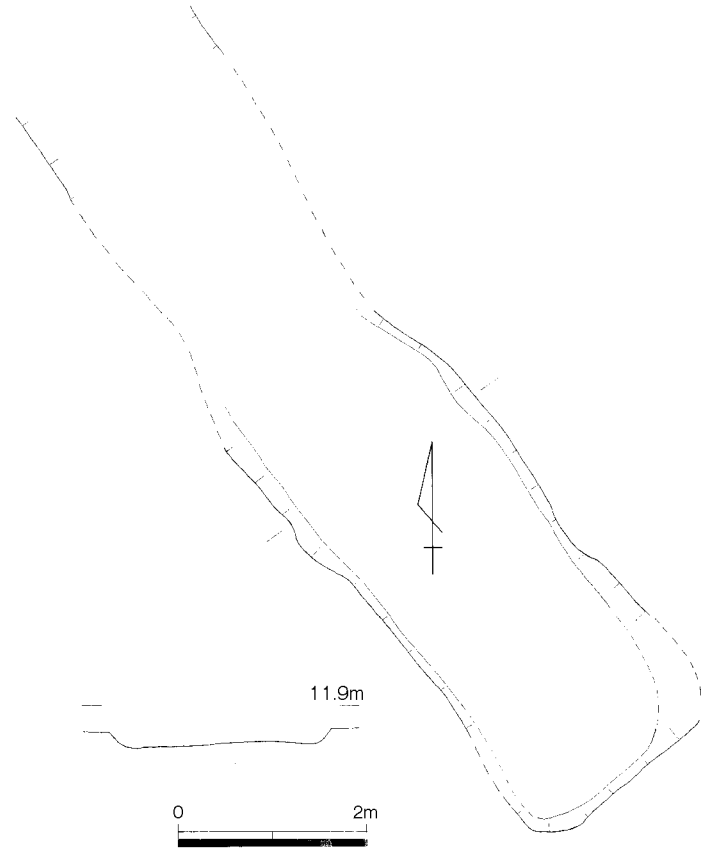
土壙38 (第99・124図)

II区南半、土壙36の南約11mで検出した土壙である。

土壙は北半の大部分が削平を受けており、全形は不明であるが、長細い長方形で溝のような形状を呈している。断面形は皿状で浅い。

土壙の規模は、検出長で長辺が950cm、短辺は240cm、深さは16cmを測る。埋土は土壙36と同様で黒褐色を呈しており、褐色土がブロック状に入っていた。土壙36と様相が近似しているが性格は不明である。

埋土中から土器片が出土しているが、細片で図示できるものはなかった。詳細な時期は不明であるが、土壙36と同じく弥生時代中期の範疇と考えられる。(石田)

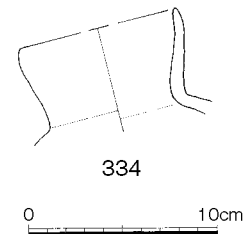


黒褐色 (10YR2/2) 粘質土と褐色 (10YR4/6) 土ブロック

第124図 土壙38 (1/80)

土器溜り1 (第99・125図)

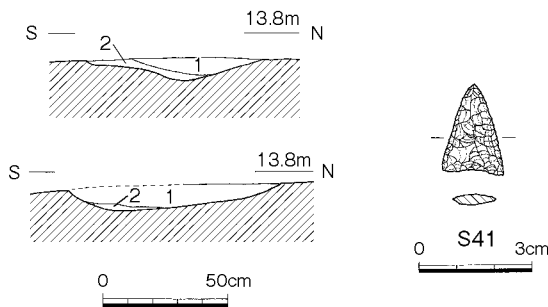
II区のほぼ中央付近で平安時代の須恵器が一定の範囲に十数片まわって見つかっている箇所があり、これを土器溜り1として報告する。須恵器334は平瓶の口縁部破片である。(河合)



第125図 土器溜り1 出土遺物 (1/4)

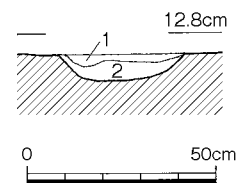
溝38・39 (第99・126図)

調査区の北側に位置し、後述する落ち込み1に接続する溝である。平面での切り合いの観察から溝38と39に分けたが、埋土などから同一の溝の可能性が高い。溝の幅は約84cm、深さ約10cmを測る。出土遺物に



1 暗灰黄色 (10YR5/2) 粘土 (溝38)
2 暗灰黄色 (10YR4/2) 粘土 (溝39)

第126図 溝38・39 (1/30) ・溝38出土遺物 (1/2)



1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土
2 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂質土

第127図 溝40 (1/20)

は弥生土器細片のほか、サヌカイト製石鏃S41などがあり、遺物や埋土から、中期中葉に属するものと考えておきたい。(河合)

溝40 (第99・127図)

建物1の約5m北に位置する。溝の方向はほぼ南北方向である。溝の幅は約34cm、深さ約18cmを測る。出土遺物には弥生土器細片がある。出土遺物や埋土から、周辺の遺構と同様中期中葉でも古い時期に比定しておきたい。(河合)

溝41 (第99・128図)

Ⅱ区南半で検出した南北方向に流れる溝である。検出長は10m、幅61cm、深さ10cmと浅い。

溝の埋土中から、口縁端部に刻目、外面に貼付突帯を施す壺335、甕336・337が出土している。これらの出土遺物から、溝の埋没した時期は弥生時代中期前半と考えられる。(石田)

溝42 (第99・129図)

Ⅱ区南半で検出した南北方向に流れる溝である。検出長は20m、幅104cm、深さ10cmと浅い。埋土中から甕の底部片338が出土しており、溝の埋没した時期は弥生時代中期前半と考えられる。(石田)

溝43 (第99・130図)

Ⅱ区南半で検出した東西方向に流れる溝である。検出長は7.5m、幅120cm、深さ8cmと浅い。出土遺物はなく時期は不明であるが、層位や埋土の状況から弥生時代中期と考えられる。(石田)

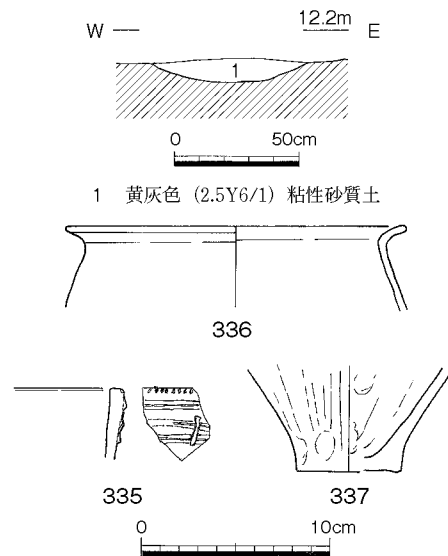
溝44 (第99・130図)

Ⅱ区南半に位置し、東西方向に流れる溝である。溝43と平行する形で検出した。検出長は4.5m、幅94cm、深さ9cmと浅かった。

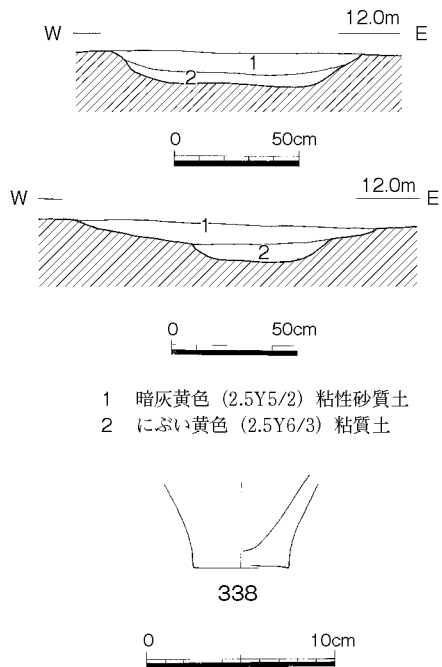
出土遺物はなく詳細な時期は不明であるが、層位や埋土の状況から弥生時代中期と考えられる。(石田)

溝45 (第99・131図)

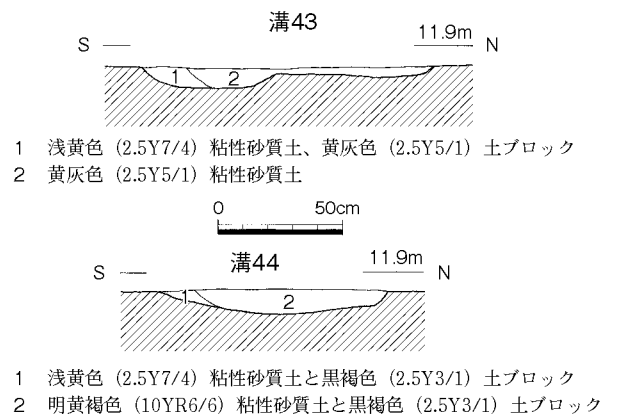
Ⅱ区南端で検出した東西方向に流れる溝で、溝46・47と平行する。検出長は12.2m、幅100cm、深さ30cm。出土遺物はなく時期は不明であるが、層位や埋土の状況から弥生時代中期と考えられる。溝46～51とともに用水路としての性格が想定される溝である。(石田)



第128図 溝41 (1/30) ・出土遺物 (1/4)



第129図 溝42 (1/30) ・出土遺物 (1/4)



第130図 溝43・44 (1/30)

溝46 (第99・131図、図版20-1)

II区南端で検出した東西方向に流れる溝で、溝45・47と平行している。検出長は11m、幅280cm、深さ72cm。出土遺物はなく詳細な時期は不明であるが、層位や埋土の状況から弥生時代中期と考えられる。(石田)

溝47 (第99・131図、図版20-2)

II区南端で検出した東西方向に流れる溝で、溝45・46と平行する。検出長は13.7m、幅200cm、深さ78cm。出土遺物はなく時期は不明であるが、層位や埋土の状況から弥生時代中期と考えられる。(石田)

溝48 (第99・132・133図、図版17-1)

II区南端で検出した東西方向に流れる溝である。掘立柱建物2の南7.5mに位置し、平行して検出された溝49に先行する溝である。規模は検出長で13.5m、幅120cm、断面形は椀状で検出面からの深さ30cmを測る。埋土中から、甕の底部片339が出土している。時期は、出土土器から弥生時代中期に属すると考えられる。(石田)

溝49 (第99・132図、図版17-1、20-3)

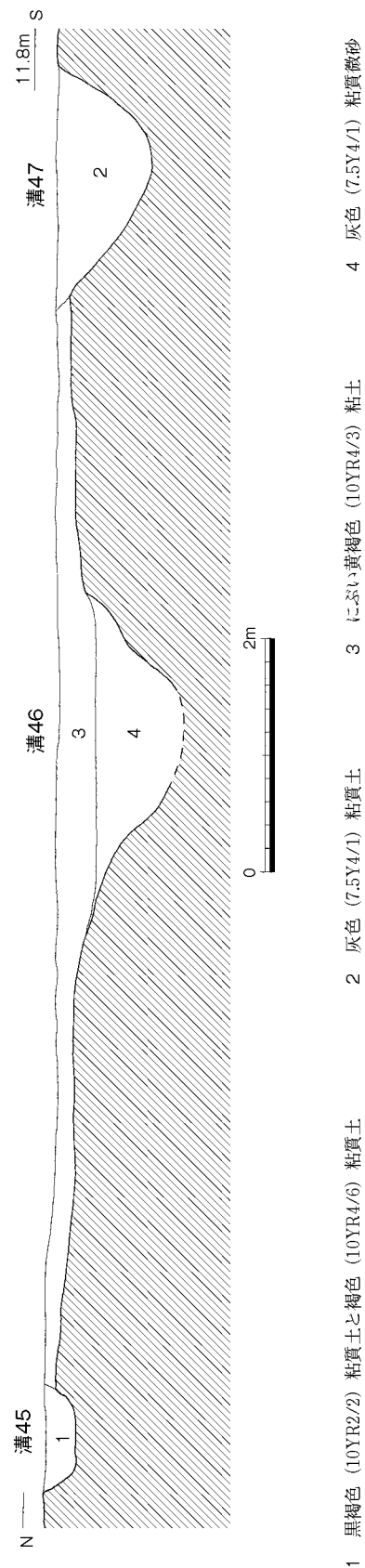
II区南端で検出した東西方向に流れる溝で、溝48・50と平行するが溝48より新しい。規模は検出長で13.7m、幅240cm、深さ75cmを測る。断面形は、椀状でしっかりとした掘り方をもつ。出土遺物はなく詳細な時期は不明であるが、埋土の状況や周辺の遺構との関係から弥生時代中期に属すると考えられる。(石田)

溝50 (第99・132・133図、図版17-1)

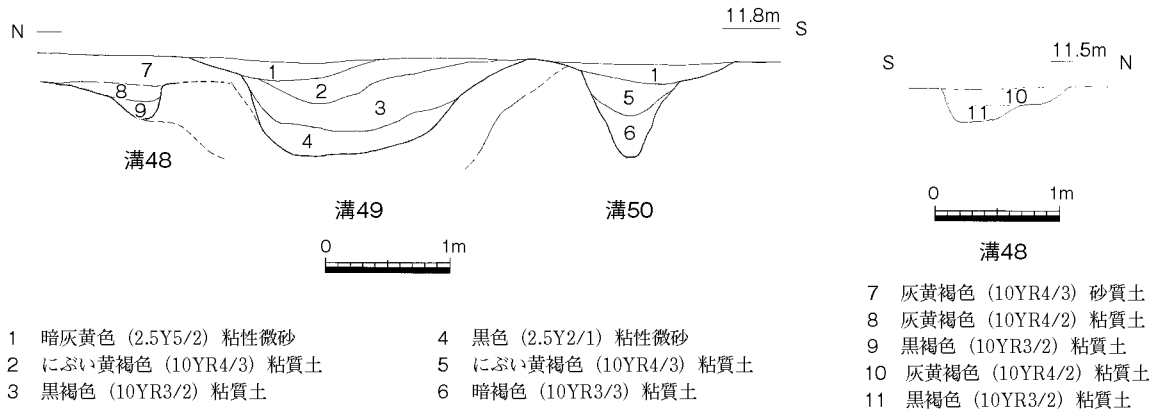
II区南端で検出した東西方向に流れる溝である。溝49に平行する形で検出した。規模は検出長で16.3m、幅60cm、断面形は葉研状で深さ72cmを測る。埋土中から鉢の底部340、鉢か高杯の脚部片341が出土している。溝の時期は出土遺物から弥生時代中期と考えられる。(石田)

溝51 (第99・134図)

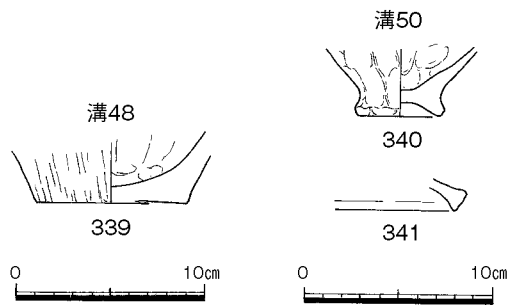
II区南端で検出した。隣接する溝48~50とは異なり、南北方向に流走する溝である。溝の大部分は調査区外に伸びており、全形は不明である。規模は検出長で3.3m、幅128cm以上、深さ66cm以上を測る。すぐ北側を流れる溝49と一連の溝、もしくは、それに取り付く溝と考えられる。出土遺物はなく時期は不明であるが、層位や埋土の状況から弥生時代中期と考えられる。(石田)



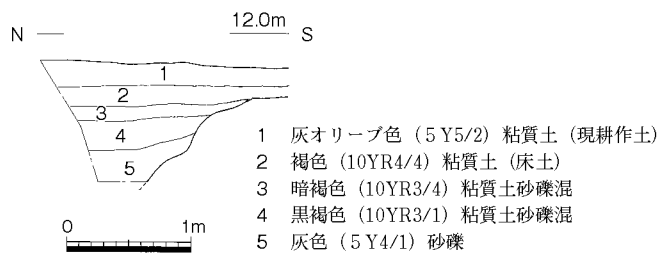
第131図 溝45・46・47 (1/60)



第132図 溝48・49・50 (1/60)



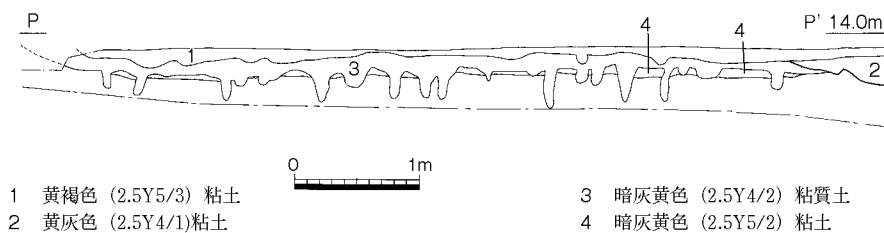
第133図 溝48・50出土遺物 (1/4)



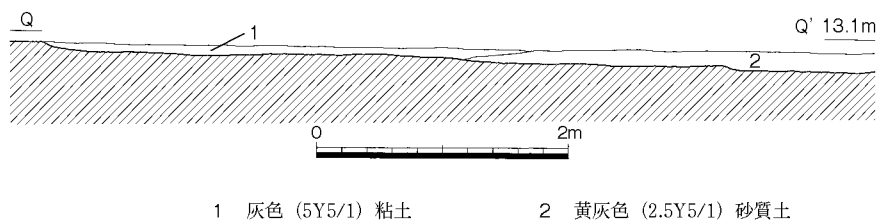
第134図 溝51 (1/60)

落ち込み1 (第99・135図、図版24-3)

溝38・39に接続し、古墳時代後期の流路24に切られる遺構である。第135図のうち、3・4層が当遺構に関係するものである。当遺構は北側の肩部から緩やかに下がった後は比較的平坦な面を形成する。平面検出時は多数の円形の変色部が認められ、断面形態は起伏に富む。これは一般的には植物の株の痕跡で理解されるものであり、詳細は不明であるが、当遺構を意図的に掘削し何らかの栽培を行っていた可能性がある。溝38・39は導水路の可能性も考えられる。出土遺物や埋土から、溝38・39に近い時期が想定される。(河合)



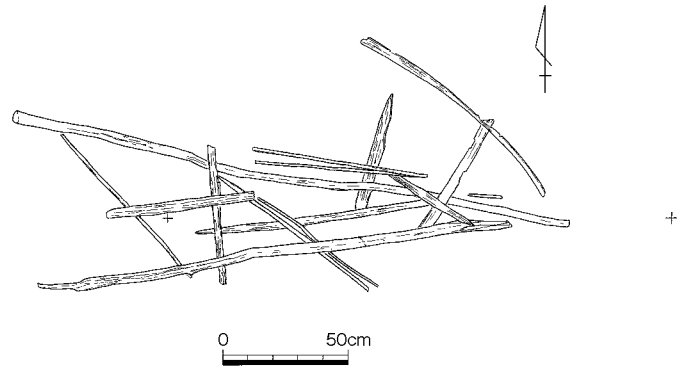
第135図 落ち込み1 (1/60)



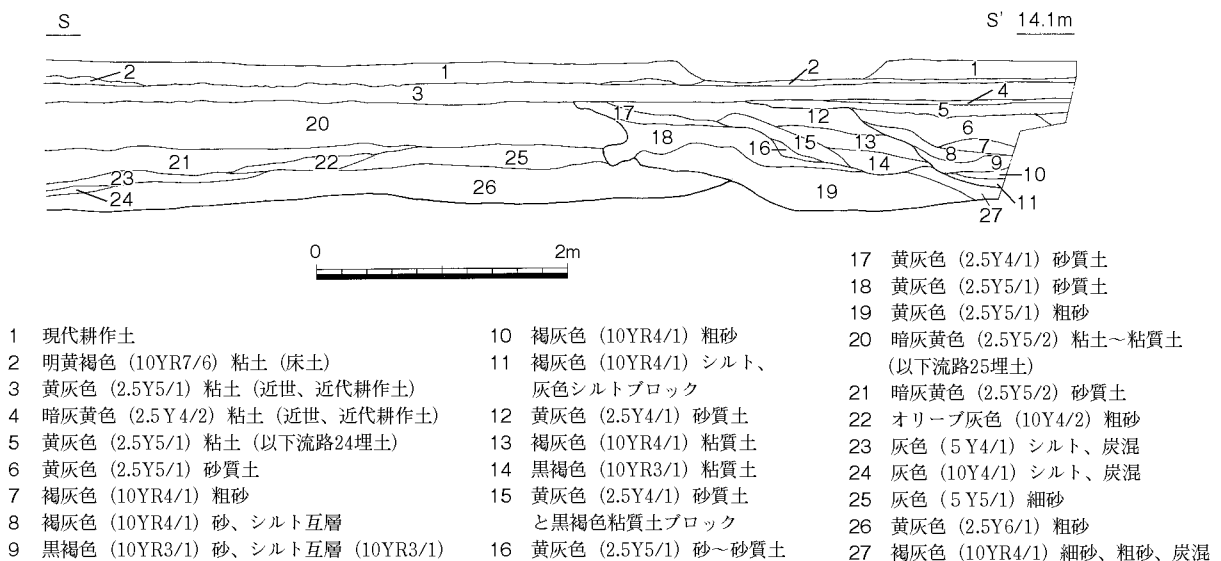
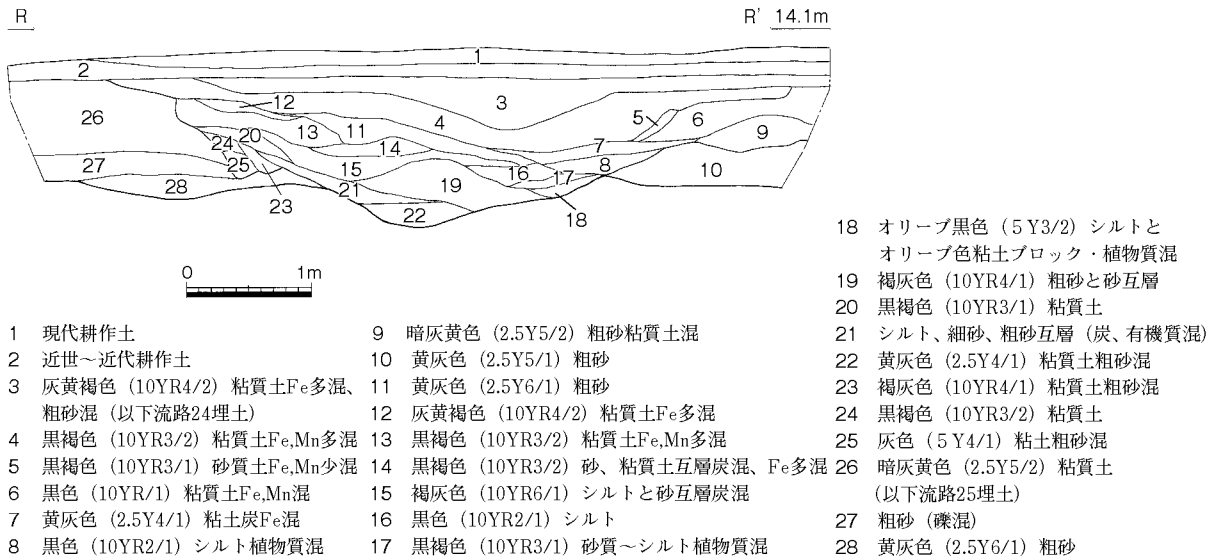
第136図 落ち込み2 (1/60)

落ち込み2 (第99・136図)

当遺構は竪穴住居1の東半を切るように形成されていた。切り合いの観察からは竪穴住居1に後出



第137図 流路24木材出土状況 (1/30)



第138図 流路24・25 (1/60)

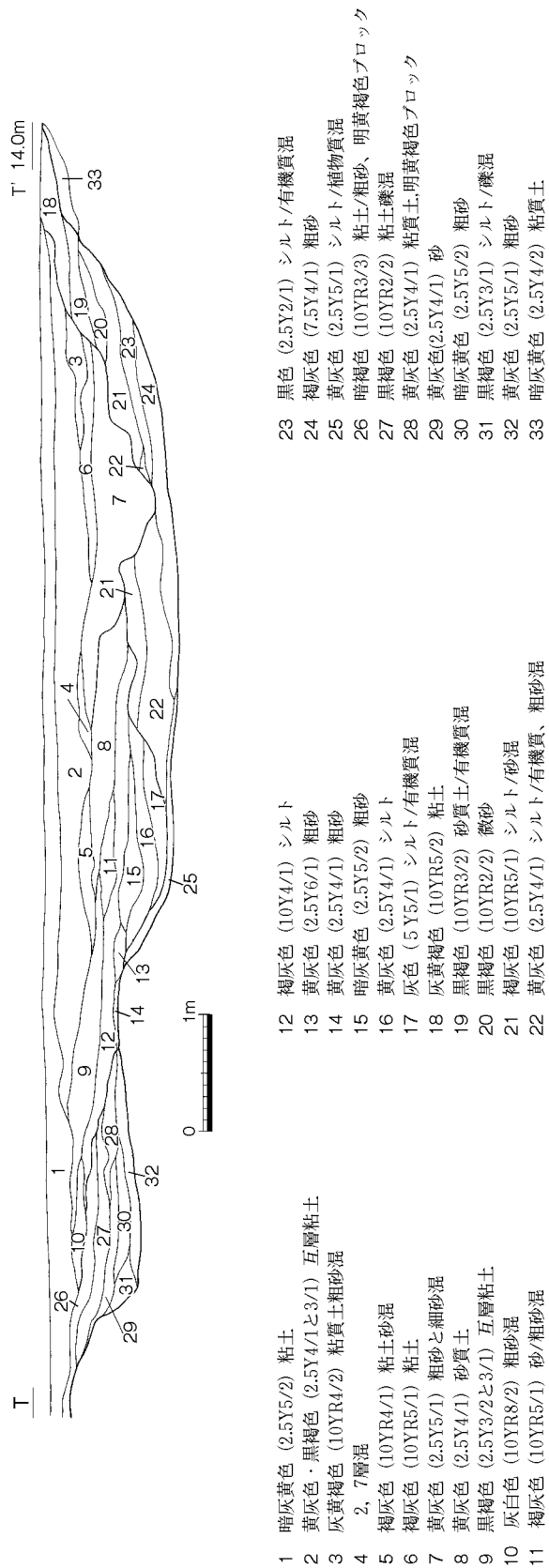
するものである。埋土の観察ではまず南側が砂質土で埋まった後、北側が埋まったものと考えられる。性格の特定は難しい。出土遺物には弥生土器の細片がある。時期の特定は難しいが、弥生時代の範疇で理解しておきたい。(河合)

流路24・25・26 (第74・99・137~142図、図版21・22)

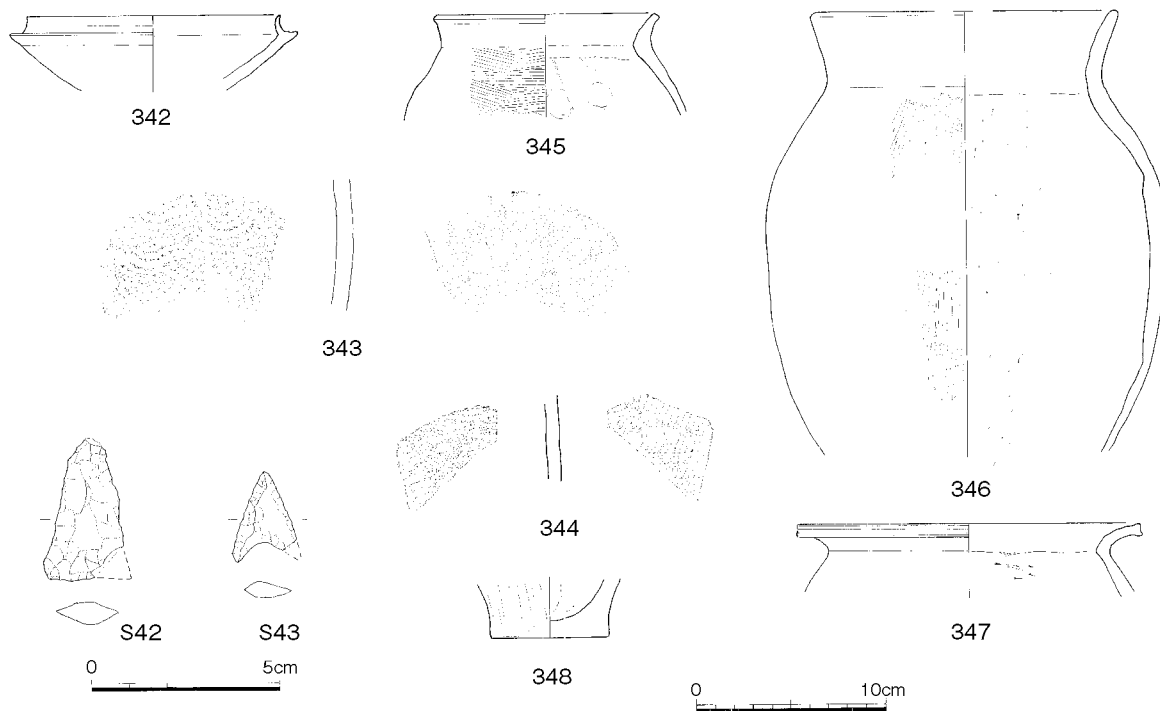
II区の北半で検出された。調査区の西方から東方にかけて流れる流路で、幅が約45mある流路25が最も古く、流路25が埋まった後に流路26、流路24の順で流路が形成されている。流路26は流路24に切られているため詳細は不明であるが、おそらく流路24と大部分が重なると考えられる。

流路24は第139図の断面を微細に観察すれば、大きく2~7層、8~17層、18~25層の3単位に分けることができる。このうち、第140図に示した6世紀末に属する須恵器342~344、土師器345・346は第7層に対応する粗砂層から出土している。流路24は複数の流路の重なりと見ることができ、流路26もそのうちの一つである可能性がある。流路の時期は流路24内に形成された最後の流路が古墳時代後期の6世紀末に近い時期に形成されたと判断できるほかは、判断する材料がないものの、流路26を含めて古墳時代後期の範疇で理解しておきたい。出土遺物には須恵器杯342、須恵器甕343・344、土師器甕345・346のほか、弥生土器甕347・348、サヌカイト製石鏃S42・43などがある。弥生土器、サヌカイト製石器は混入と判断される。このほか、第15~17層に対応する層からは第137図で示した木が集中する箇所があり、精査したところ一部に加工の痕跡が見られたが、用途を特定することができなかった。

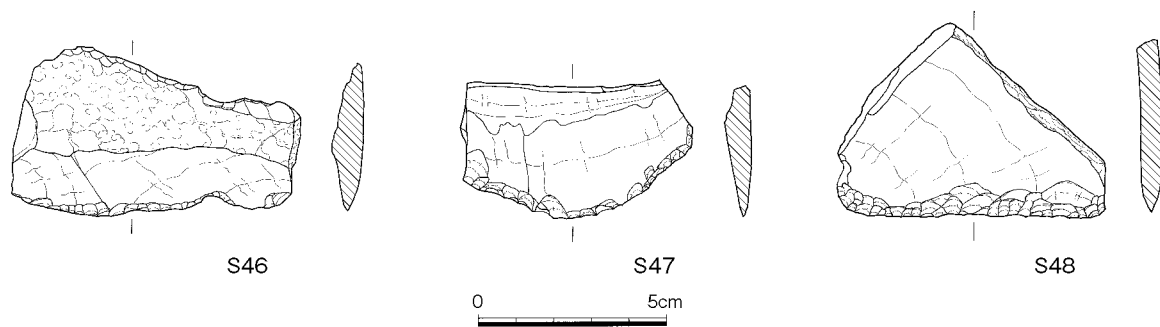
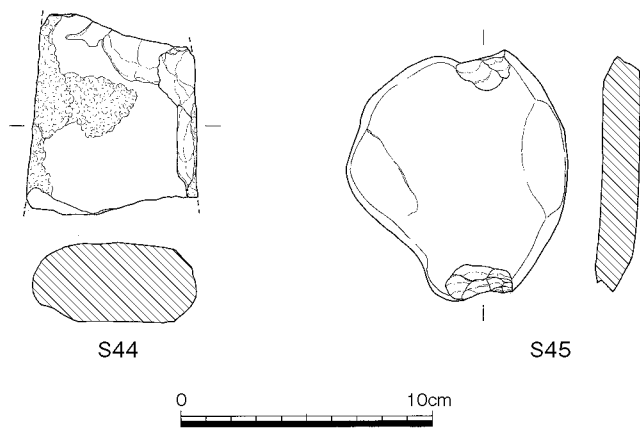
流路25は流路24・26形成以前のもので



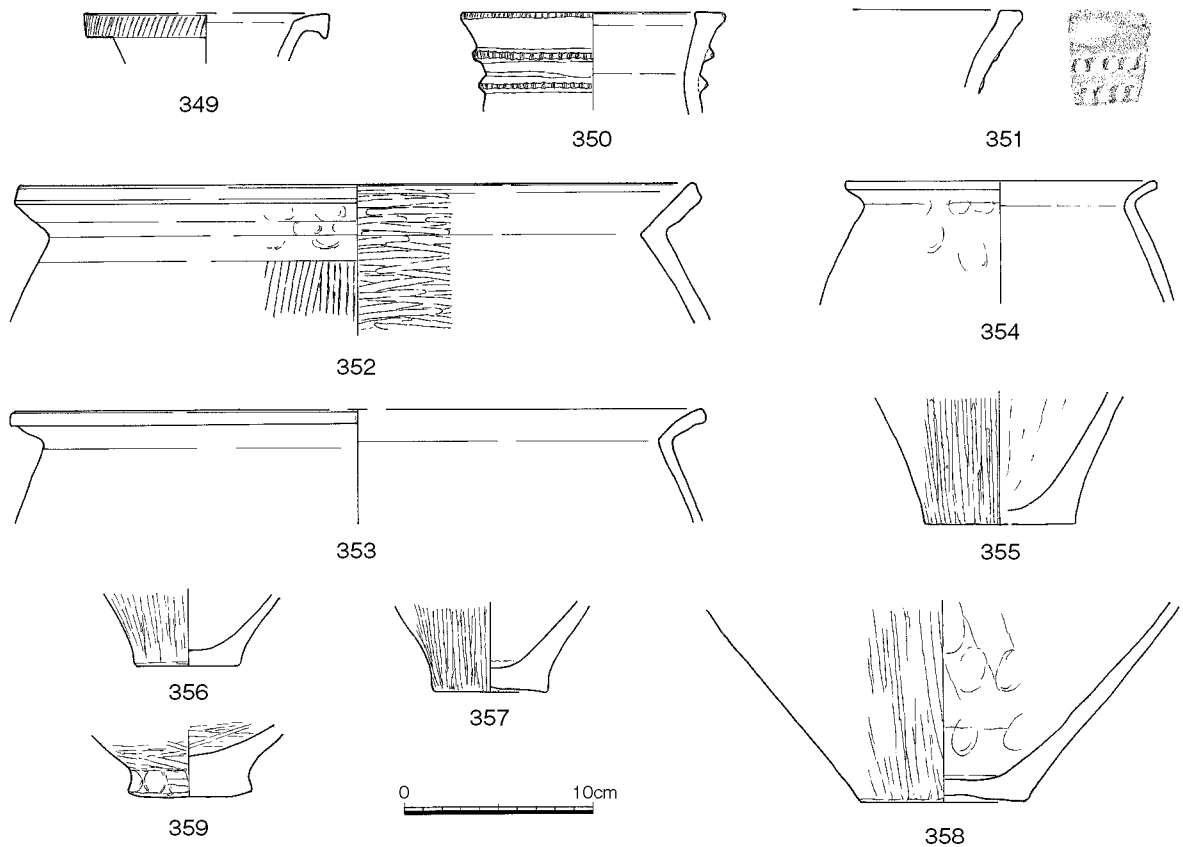
第139図 流路24・26 (1/60)



第140図 流路24出土遺物 (1/4・1/2)



第141図 流路25出土遺物① (1/3・1/2)

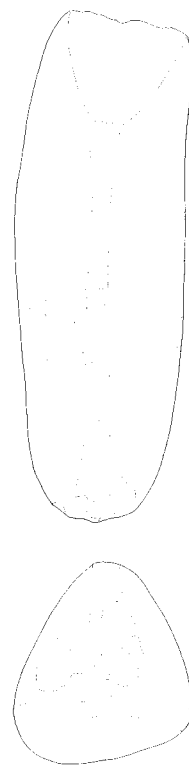


第142図 流路25出土遺物② (1/4)

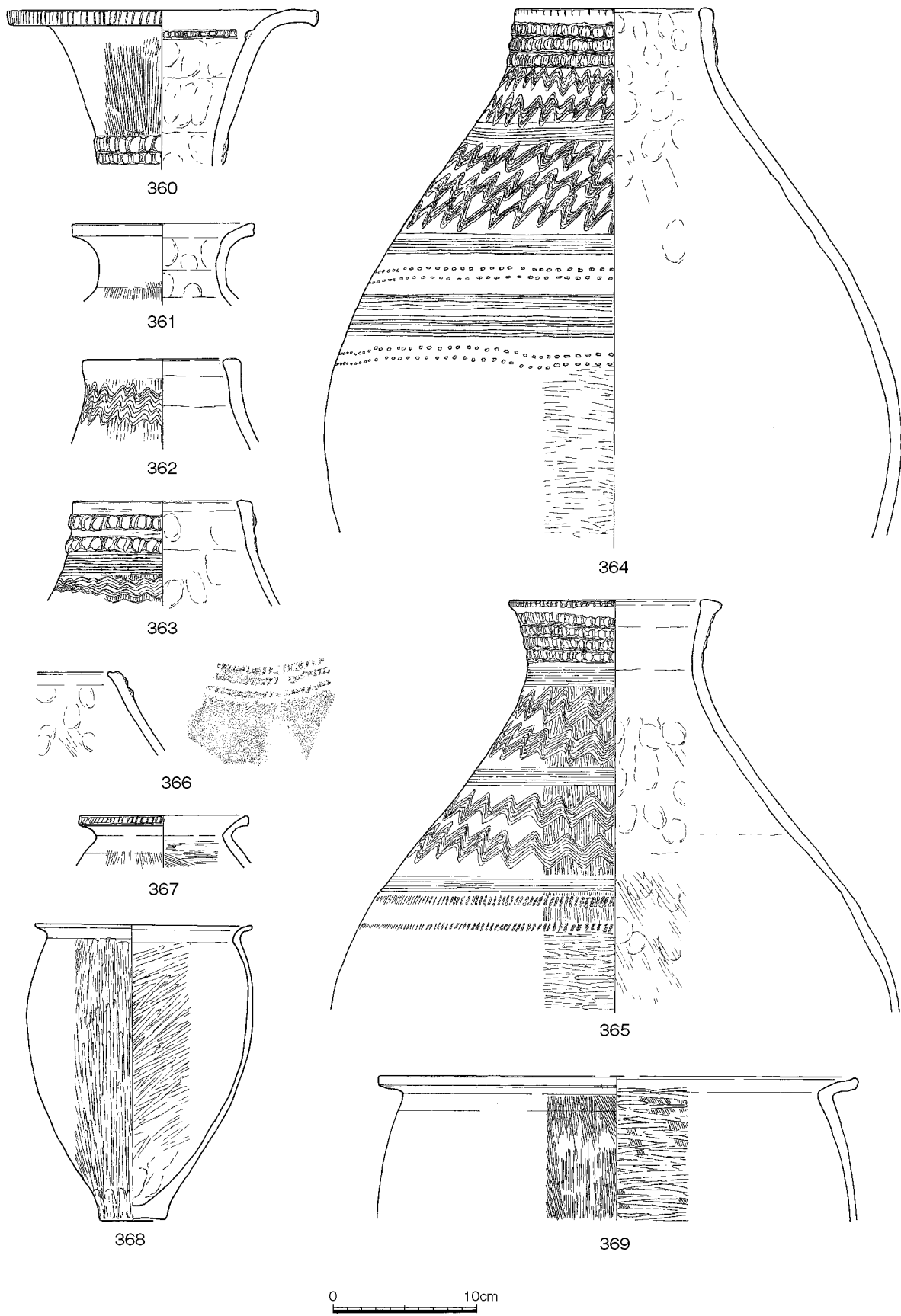
ある。一部流路24と重なる部分があり、その部分を図示したものが第138・139図断面である。第138図R断面の9・10層は流路25の埋土である可能性を考えている。流路25からは弥生土器349～359のほか、安山岩製石斧転用敲石の可能性があるS44、流紋岩製石錘S45、サヌカイト製石匙S46、スクレイパーS47・S48などが出土している。流路25の時期は、土器などから弥生時代中期中葉の古い段階を中心とした時期と判断される。(河合)

流路27 (第74・99・143～146図、図版23)

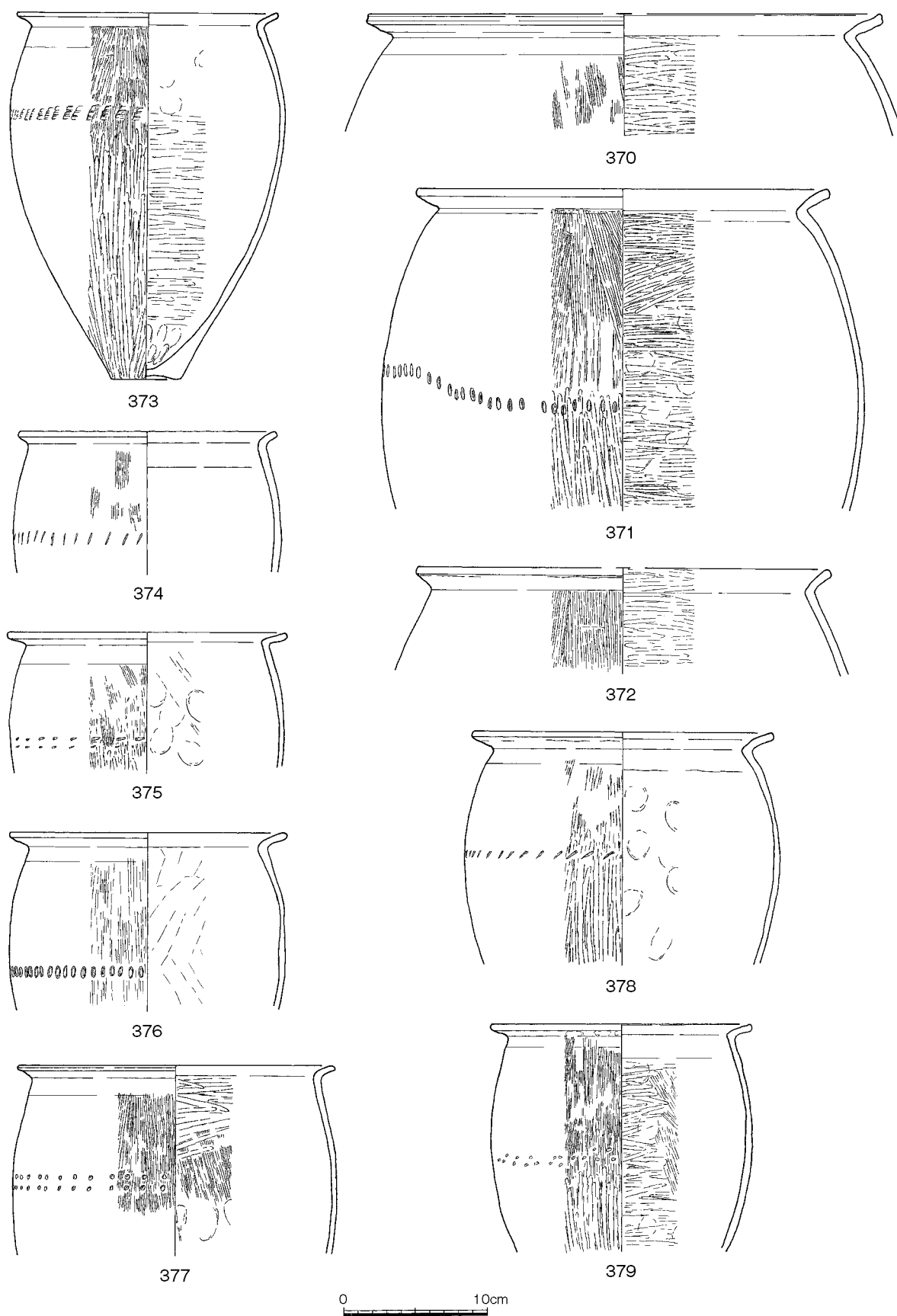
当遺構は、Ⅱ区の中央付近に位置する。断面図を第74図に示しているとおり、当遺構は縄文時代の晩期の遺物が多量に出土した流路17が埋まっていく過程で機能していた流路で、本来同一のものである。出土遺物は第144～146図に示したとおり、多量に出土したが、その多くは竪穴住居1などの方向の肩部に集中しており、その出土状況から弥生時代中期中葉の集落から廃棄されたと判断される。出土遺物には弥生土器360～385のほか、安山岩製の敲石S49、サヌカイト製の石匙S50、スクレイパーS51、RF S52などがある。流路27の時期は、弥生土器362・363・377など若干古相を示すものも含まれているが、おおむね中期中葉の古い段階を中心とした時期と判断される。(河合)



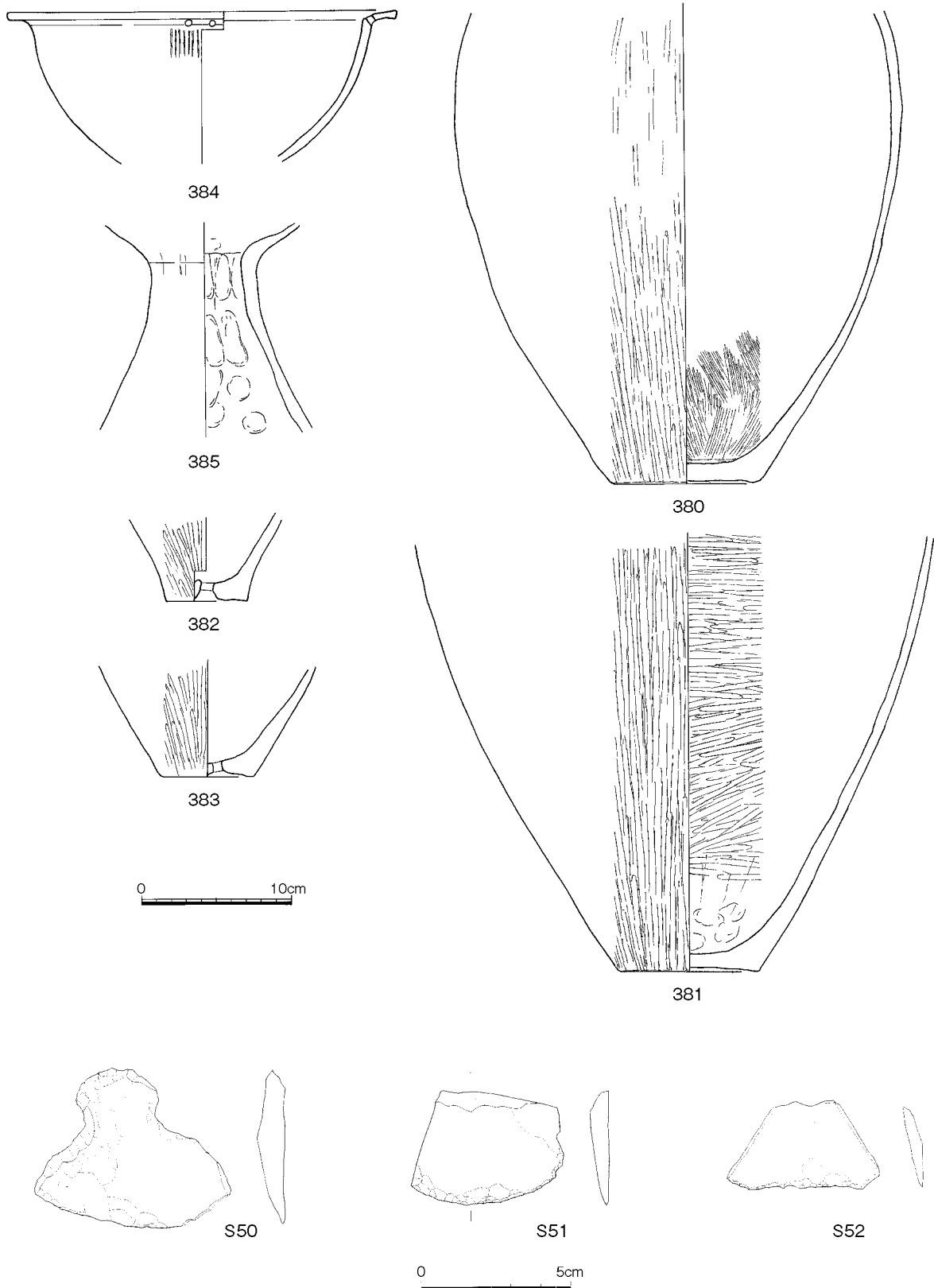
第143図 流路27出土遺物① (1/3)



第144図 流路27出土遺物② (1/4)



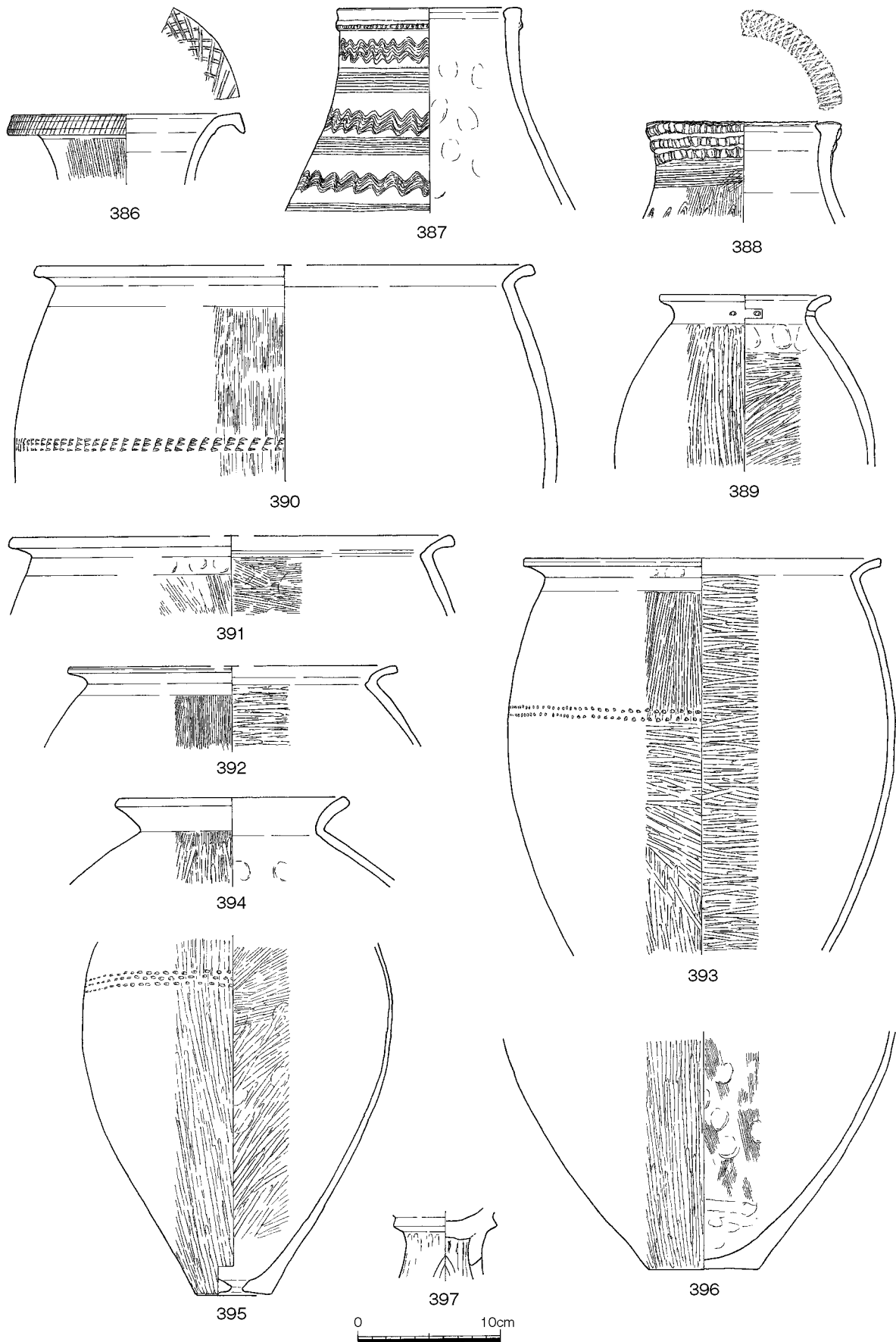
第145図 流路27出土遺物③ (1/4)



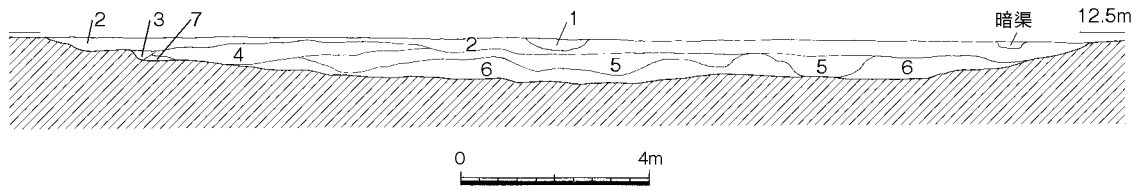
第146図 流路27出土遺物④ (1/4・1/2)

流路28 (第99・147・148図、図版14-3、24-1)

II区で検出した自然流路で、北東から南東方向に湾曲して流れる流路の攻撃面に当たる部分を検出した。肩口からは、大量の土器がまとまって出土しており、一括して投棄されたような状況を呈して



第147図 流路28出土遺物 (1/4)



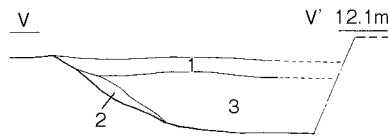
- | | | |
|------------------------------|-------------------------|------------------------|
| 1 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質土 (溝53埋土) | 4 におい黄褐色 (10YR4/3) 砂礫 | 6 灰色 (5Y4/1) 砂礫 |
| 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 (砂礫混) | 5 におい黄褐色 (10YR4/3) 粘性微砂 | 7 におい黄橙色 (10YR4/3) 粘質土 |
| 3 におい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土 | | |

第148図 流路28 (1/160)

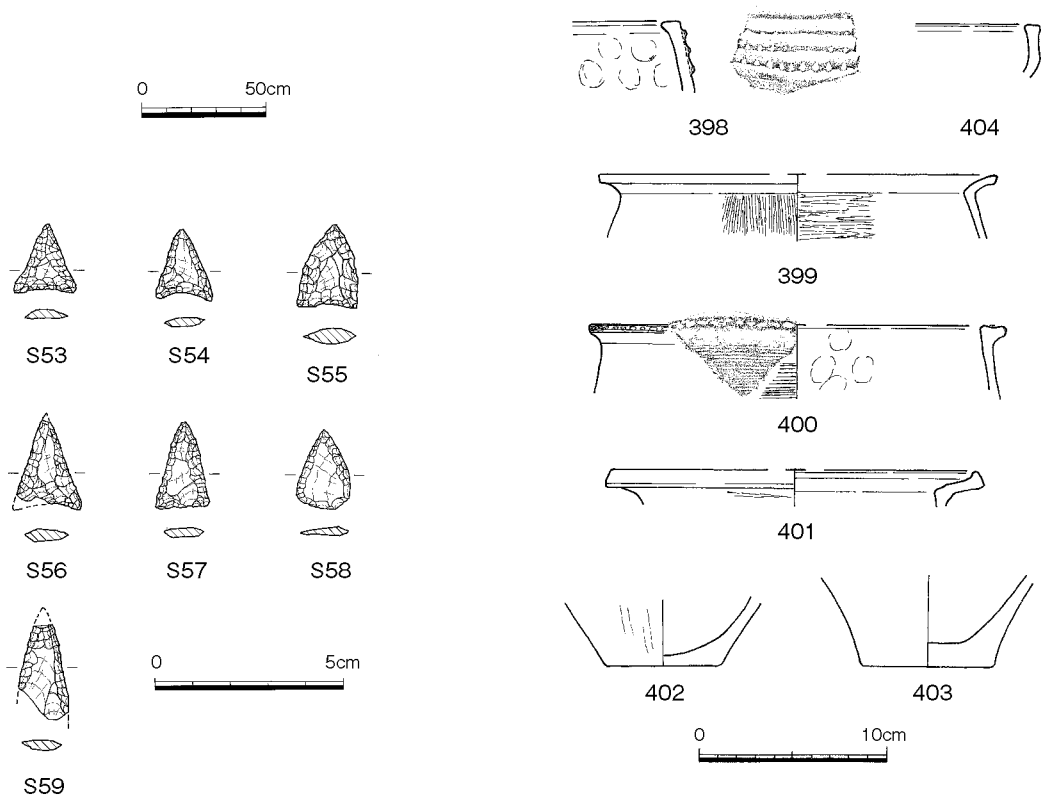
いる。出土した土器には壺386~389、甕390~396、高杯397がある。387・388は無頸壺でいずれも外面に櫛描波状文と櫛描直線文を施し、387は刻目突帯を持つ。390・393・395の甕の胴部外面には刺突列点文が施されている。これらの土器の時期は弥生時代中期前半と考えられる。(石田)

流路29 (第99・149図、図版24-2)

II区南半部の東壁近くで検出した。平面形は僅かにカーブを描いており、南部分は縄文時代の流路22によって切られていた。溝の可能性もあるが、幅が約3mと広いこと、および他の流路と同じく下層に粗砂が厚く堆積していることから流路と考えている。埋土中から中期の土器が出土している。401・404が最も新しく、中期中葉である。今回の調査区ではあまり出土しておらず、流路には時期差を考慮する必要があるだろう。また、石鏃が7点出土しているのも注目される。(平井)

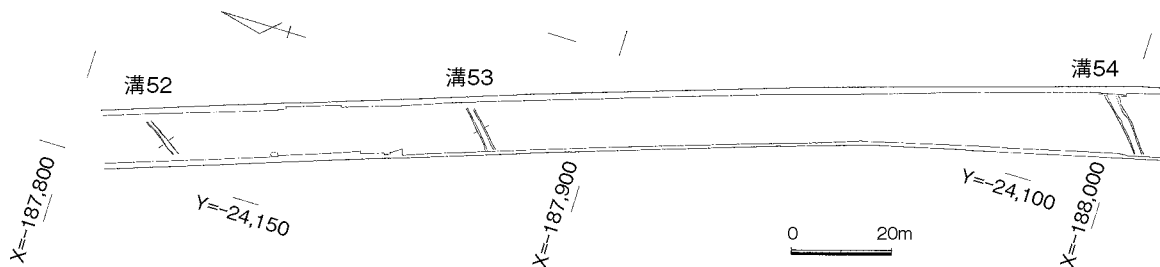


- | |
|-----------------------|
| 1 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土 |
| 2 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘性砂質土 |
| 3 黄灰色 (2.5Y6/1) 粗砂 |



第149図 流路29 (1/30) ・出土遺物 (1/4・1/2)

3 古代以降の遺構・遺物



第150図 II区古代以降遺構全体図 (1/1,500)

溝52 (第150・151図)

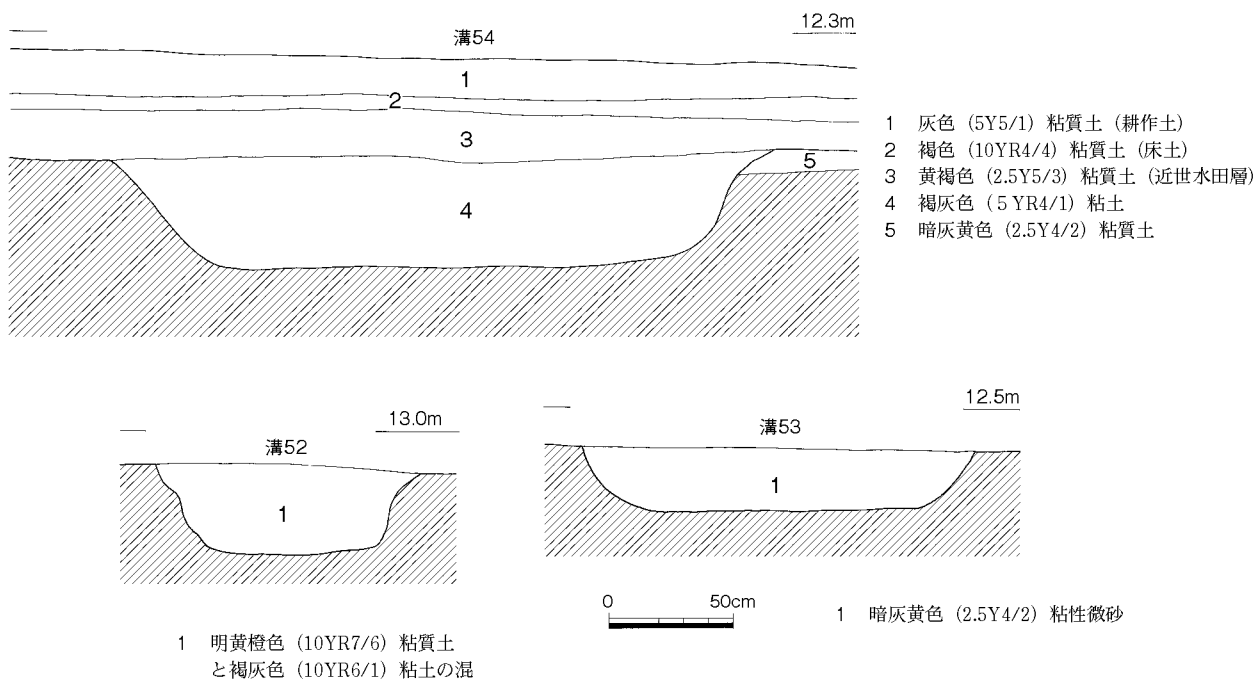
近世の水田層の直下で検出された溝であり、流路27を切っている。幅約104cm、深さ約36cmを測る。埋土からは人為的に埋め戻したことがうかがえた。溝53・54とほぼ方向が揃っていることから、近世以前の土地区画の一端を示している可能性がある。(河合)

溝53 (第150・151図)

II区南半で、調査区を横断する形で検出した溝である。検出幅は153cm、深さは24cm。溝52・54と同様に北東から南西方向に流れ、溝の方向はN-50°-Eであった。出土遺物はなく時期は不明であるが、層位や埋土の状況から中～近世のもので、当時の地割りを示す可能性が考えられる。(石田)

溝54 (第150・151図)

II区南半で、調査区を横断する形で検出した溝である。検出幅182cm、深さ42cm、溝53と同様に方向はN-50°-Eであった。出土遺物はなく時期は不明であるが、層位や埋土の状況から中～近世のものと考えられる。溝53と同時期のもので、当時の地割りに沿っている可能性が高い。(石田)



第151図 溝52・53・54 (1/30)

第4章 まとめ

鍛冶屋D遺跡は、調査の結果、I区は、東西に連なる300m級の山々の間の谷部から土砂が流れ込んで形成された扇状地の一部で、縄文時代晩期には幾筋もの自然流路が走っていることが明らかになった。⁽¹⁾一方、II区は、弥生時代には沖積地として安定しており、これは遺跡の東約1.5kmを南に流れる吉井川の氾濫による沖積作用によるのではないかと考えている。

今回の発掘調査で検出したもっとも古い遺物は、縄文時代中期の土器で、小片が2点のみである。以後少量であるが、中期末～後期前葉・中葉・後葉の土器が出土している。これらは晩期中葉の土器を多く出土する流路から混在する形で出土している。また、形式的に連続せず、まとまった資料でもない。しかしながら、著しい摩滅痕は認められないことから、調査地の周辺に当該期の遺跡が存在していると想定できる資料として重要であろう。

さて、今回のおもな調査成果としては、縄文時代の土器や石器、竪櫛、種実が出土したことや、弥生時代中期の集落の検出が考えられる。

このうち、縄文時代晩期中葉の土器、縄文時代の竪櫛、縄文時代の種実、弥生時代中期の竪穴住居、弥生時代中期の土器については項目を立ててまとめを行うこととする。

その他について、まず縄文時代の石器については、晩期中葉の土器が多く出土した流路17から出土した。流路17からは中期や後期の土器も出土していることから、晩期中葉とは必ずしも断定はできないものの、石斧や石鍬は貴重な出土例といえよう。また、S26・S27は用途不詳であるが、面として光沢をもつほど擦る、あるいは磨かれているのが大きな特徴である。

次に、今回の調査区は白鳳時代創建の吉岡廃寺の南に隣接しており、関連遺構の検出に注意を払ったが、吉岡廃寺との直接的な関連を示す遺構は検出できなかった。しかし、I区で検出した平安時代初期の井戸1については、須恵器大甕を井戸枠に用い、栈木を組むなど丁寧な作りであった⁽²⁾。吉岡廃寺は出土した瓦の年代観から奈良時代末～平安時代初頭に廃絶したと考えられており、吉岡廃寺との関連で考えるべきであろう。また、灰釉陶器・緑釉陶器、硯、瓦塔、瓦などについても、吉岡廃寺との関連で理解すべきであろう。

1 縄文時代晩期中葉の土器について

縄文時代晩期の土器は、本文で記述したように一部の土器（13・14・297など）を除けば中葉（突帯文土器を晩期後葉とする）の「谷尻式」に相当するまとまった資料と評価できる。

いわゆる「谷尻式」のうち掲載資料の多い深鉢については、特徴として、①口縁端部には明確な長方形突起はごく僅かで、小さな山形を呈し、内面には切り込みを入れて突起であることを他の口縁部と明確に区別しているものが多い（186・192など）、②口頸部外面調整はナデと二枚貝条痕の二種類が確認できるが、ほとんどがナデである、③突起部分から垂下して施される刺突文は、上向きの「C字」形（175・188など）や下向きの「コ字」形（121・125など）などがあり、前者と後者の比率は約7：3である。上向きの「C字」形や下向きの「コ字」形を2列に施すものが多い（約8割）が、その他に棒状の列点文との組み合わせ（122）や「D字」形の3列（182・183）とするものもあり、画的ではない、④横方向の刺突文は左向きの「C字」形（152・199など）が約6割、「D字」形（122・

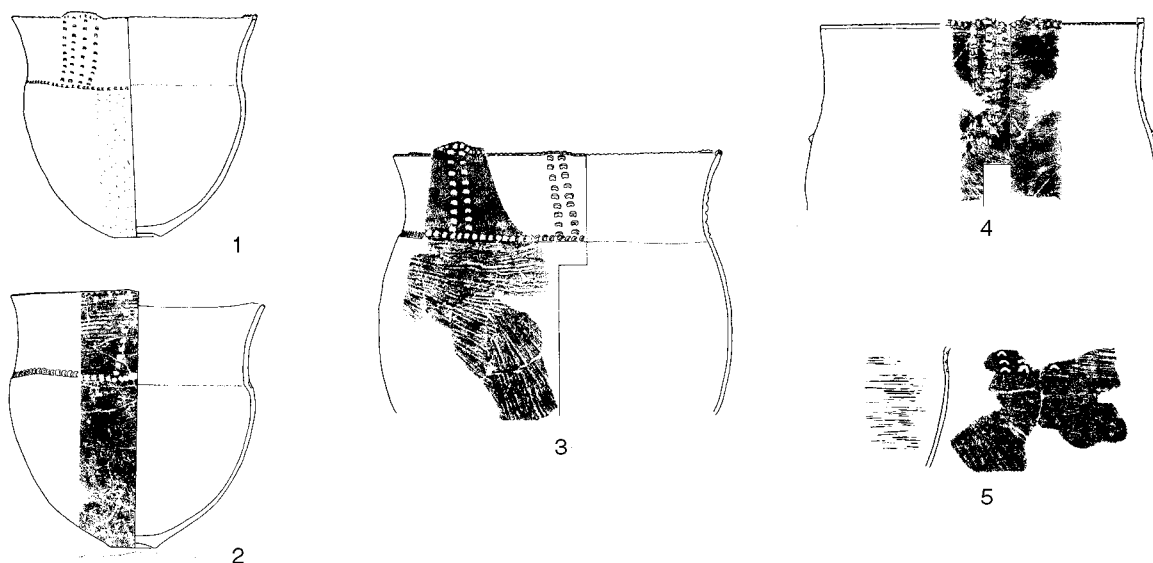
174など) が約3割でほとんどを占める。このほかには右向きの「C字」形が2点(124・272)と右向きの「コ字」形が1点(219)のみで、強い規格性をうかがわせる、⑤縦横の刺突文ともに、大きさは相対的に小振りである、⑥底部は小さなくぼみ底が多いが、その他に小さなくぼみ底や平底に近いものもみられることが指摘できる。

これらの特徴の中では、刺突文の大きさが相対的に小振りである点に注目したい。岡山県内出土の「谷尻式」の刺突文には長さ1cmを超える相対的に大きなものと、それ以下の相対的に小さなものが出土しており、鍛冶屋D遺跡出土土器のように相対的に小振りな資料としては南溝手遺跡⁽³⁾(第152図1)や百間川沢田遺跡⁽⁴⁾(第152図2)などが知られていた。筆者はこの違いについて、口縁端部の長方形突起の簡略化傾向との組み合わせや、「南溝手遺跡土器溜り2」において前段階の土器群とともに出土していることを根拠に、型的には小形の刺突文が古く、大形の刺突文が新しい傾向であり、「IV期(谷尻式)」が古・新に細分できる可能性を指摘したことがある⁽⁵⁾。

ところで、近年、岡山県北部に位置する久田原遺跡⁽⁶⁾と久田堀ノ内遺跡⁽⁷⁾の報告書が刊行され、鍛冶屋D遺跡で見られたような特徴をもつ「谷尻式」の資料が報告されている。まとまった出土資料としては、「久田原遺跡河道2下流部<下層:第4層>」(第152図3)と「久田堀ノ内遺跡土器溜り10」、「久田堀ノ内遺跡河道4下流部西斜面」が考えられる。

また、「久田原遺跡河道2下流部<下層:第4層>」では、「南溝手遺跡土器溜り2」と同じように一定量の前段階の土器とともに出土していることは重要であろう。こうした事例は、資料数は少ないが、「久田原遺跡竪穴住居2」と「久田原遺跡河道2中流部<下層:黒褐色土層上面>」でも報告されており、これらの資料が古い傾向であることを示唆している。

さらに重要なことは、「久田原遺跡竪穴住居2」で出土している口縁突起部から垂下する縦の刺突文のみ施されている深鉢である(第152図4)。この形式の深鉢は、あまり注目していなかったが「南溝手遺跡土器溜り2」でも出土している(第152図5)。爪形文を特徴とする「谷尻式」は岡山県を中心とする中部瀬戸内地方の特徴的な型式であるが、この爪形文が、いつ、どの地域で、どのようにして



第152図 縄文時代晩期中葉の土器 (1/8)

出現するのかが解明すべき重要な課題である。資料不足ではあるが、これら縦方向のみの刺突文が、その後「谷尻式」の特色である縦・横方向の刺突文の端緒ではないかと考えておきたい。

また、「谷尻式」の深鉢底部は凹み底で、中でも236～241のような小さな凹み底が特徴的であるが、242～246の平底にちかい底部の存在は今後注意しておくべきであろう。

次に、放射性炭素年代測定について触れておきたい。第80図169の深鉢の表面には全面にわたって煤が多く付着していた。そこで加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を依頼した。その結果については付載3に掲載しているが、2900±40年B.P.という測定数値が得られている。土器の編年的位置は、晩期中葉ではあるが「谷尻式」ではなく、舟津原段階の新段階、平井編年案のⅢb期⁽⁵⁾と考えている。

2 縄文時代の豎櫛について

豎櫛(W11)は、流路17の埋土中から出土した。出土地点は、第72図平面図のX=-187.800ラインの北約10mの調査区中央部である。出土層位は、第74図B断面図の6層中の上半部で、樹木や葉、種実とともに埋まっていたのが良好な状態で保存されていた要因と考えられる。

出土したのは櫛の頭部で櫛歯は欠損している。櫛歯については、断面観察により、直径1～2mmのヒゴ状を呈し、7本確認できる。また、レントゲン撮影を試みた結果、最大幅2～3mmで先の尖った針先状の影が写っているが、これが何かはさらに詳細な分析が必要である。頭部の製作方法としては、ヒゴ状の櫛歯を何らかで縛って骨格とし、木屑などともに漆で固めたのではないと思われる。断面形は菱形を呈している。表面については、分析はしていないが、黒漆を施したのち、文様として赤漆を塗っているものと思われる。

この豎櫛の製作・廃棄時期については、明確に指摘することができない。流路17から出土した土器は晩期中葉が圧倒的に多いが、以下の理由により、より古く考えておきたい。理由の第一は、晩期中葉の土器は、豎櫛の出土した第74図6層（ピート層）と明らかに分離できる上部の5層（砂層）から多く出土していること、第二は、後述するが、豎櫛が出土した6層を中心に採集した種実のうちの1個体（トチノキの種実）の放射性炭素年代測定値が3730±40年B.P.であること（付載3）、第三は、少量ではあるが後期前葉の土器が出土していることである。将来的には、豎櫛そのものの放射性炭素年代測定の実施が求められるが、現状では後期前葉と考えておきたい。

なお、縄文時代の豎櫛の県内での出土は、津島岡大遺跡⁽⁶⁾の後期中葉（彦崎K2式）の資料に続く2例目である。

3 縄文時代の流路から出土した種実について

本文中に述べたように流路17のピート層には、幹や枝などの樹木や葉とともに大量の種実が堆積していた。この種実については、現場での調査中に採集可能な大形品の一部についてはその都度採集するとともに、集中している個所についてはブロック状の塊にして現場事務所に持ち帰り、後日水洗を行った。水洗作業は厳密なフローテーション方法ではなく、容器に入れた塊を水につけ攪乱し、浮き上がった種実を目視で採集したもので、採集できなかった小さな種実もあったと思われる。こうして採集した総数約3000個（同定作業の結果判明）については、株式会社古環境研究所に同定を依頼した。その結果については、付載3に報告しているとおりである。調査担当者が期待した栽培種は検出されず、量的な多寡はあるものの種類については、これまで知られている知見と大きく異なるものではないようである。しかしながら、こうした分析は今後も引き続き取り組む必要があるであろう。

第4章 まとめ

また、晩期中葉の土器が多数出土しているため、種実についても加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を試みることにした。その結果についても付載3に掲載しているが、測定数値は3730±40年B.P.であった。この数値は、調査担当者が想定した晩期中葉の数値としては不適當なものであると判断している。

この数値については、現在の知見では後期前葉頃と判断すべきと考えているが、その理由としては、第一に種実が集中して出土したピート層が晩期中葉土器が多く出土した砂層より下層に堆積していたこと、第二に少量ではあるが、縄文時代後期前葉の土器が出土していることが考えられる。

4 弥生時代中期の竪穴住居⁽⁹⁾について

竪穴住居1は、中央穴と考えられる土壇とそれを取り巻くように検出できた5本の柱穴により、床

第2表 外周溝または周堤を確認した竪穴住居一覧

番号	遺跡名	遺構名	時期	出土遺物	床面積	周堤	外周溝	備考	文献名
1	京免遺跡	SH 13	弥生後期前葉	土器	—	—	○(広)	枝溝が取り付く	①
2	〃	SH 35	弥生後期	なし	—	—	○(狭)		
3	〃	SH 37	弥生後期中葉	土器、扁平片刃石斧	—	—	○(狭)	枝溝が取り付く	①
4	〃	SH 134	弥生後期前葉	土器	—	—	○(狭)		①
5	沼E遺跡	5号住居	弥生後期I	土器、叩き石	28㎡	—	○(広)		②
6	椽山遺跡	7号住居址	弥生後期I	土器、石鏃、石包丁	13㎡	—	○(狭)		③
7	百間川原尾島遺跡	竪穴住居29	弥生後期II	土器、鉄器片、蛇紋岩製勾玉、ガラス小玉、土製品	25㎡	—	○(広)	全周しない	④
8	〃	竪穴住居30	弥生後期II	土器、鉄鏃、ガラス小玉	20㎡	—	○(狭)	全周、枝溝取り付く	④
9	〃	竪穴住居32	弥生後期II	土器、石鏃、礫石、ガラス小玉	(45㎡)	—	○(広)	全周しない?	④
10	〃	竪穴住居35	弥生後期III	土器、鉄鏃、叩き石	15㎡	—	○(狭)	全周。枝溝取り付く	④
11	〃	竪穴住居5	弥生後期IV	土器、鉄鏃、銅製品	33㎡	—	○(狭)	洪水砂で埋没	⑤
12	〃	竪穴住居7	弥生後期IV	土器、鉄鏃、鉄鉋、銅鏃、ガラス滓	38㎡	—	○(狭)	洪水砂で埋没、馬蹄形	⑤
13	〃	竪穴住居8	弥生後期II	土器、ガラス小玉、礫石	—	—	○(狭)	一部切れた場所に出入口を想定	⑤
14	〃	竪穴住居9	弥生後期II	土器、製塩土器	—	—	○(狭)		⑤
15	〃	竪穴住居5	弥生後期III	土器、鉄鏃、鉄鉋、銅鏃、石鏃、石包丁、紡錘車	(20㎡)	—	○(狭)	枝溝が取り付く	⑥
16	〃	竪穴住居6	弥生後期III	土器、鉄鏃、鉄鉋先、鉄鉋、碧玉製管玉、土玉、石鏃、石包丁、礫石、紡錘車、人面土製品	(67㎡)	—	○(狭)	全周、枝溝取り付く	⑥
17	下庄遺跡	竪穴住居	弥生後期	なし	(12㎡)	—	○(狭)		⑦
18	百間川兼基遺跡	竪穴住居3	弥生中期III	土器、鉄斧、鉄鏃、石鏃	22㎡	—	○(狭)	底が床面より高い	⑧
19	〃	竪穴住居16	弥生後期IV	土器、石鏃、石包丁	13㎡	○	○(広)	洪水砂で埋没	⑧
20	〃	竪穴住居17	弥生後期II	土器、石鏃	32㎡	—	○(狭)		⑧
21	鍛冶屋D遺跡	竪穴住居1	弥生中期I	土器	—	—	○(広)		本報告書
22	窪木薬師遺跡	竪穴住居12	古墳中期	土器	17㎡	○	—	洪水砂で埋没	⑨

文献名

- ①「京免・竹ノ下遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第11集 津山市教育委員会 1982
- ②「沼E遺跡II」『津山市教育委員会発掘調査報告』第8集 津山市教育委員会 1981
- ③『椽山遺跡群I』久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1979
- ④「百間川原尾島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56 岡山県教育委員会 1984
- ⑤「百間川原尾島遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88 岡山県教育委員会 1994
- ⑥「百間川原尾島遺跡6」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』179 岡山県教育委員会 2004
- ⑦「下庄遺跡・上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』157 岡山県教育委員会 2001
- ⑧「百間川兼基遺跡4・百間川沢田遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』208 岡山県教育委員会 2007
- ⑨「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86 岡山県教育委員会 1993

面まで削平された竪穴住居であると判断している。時期は、中央穴や柱穴から出土した土器により中期前葉新段階と筆者は考えており、同時期の類例から平面形は円形ではないかと推測できる。

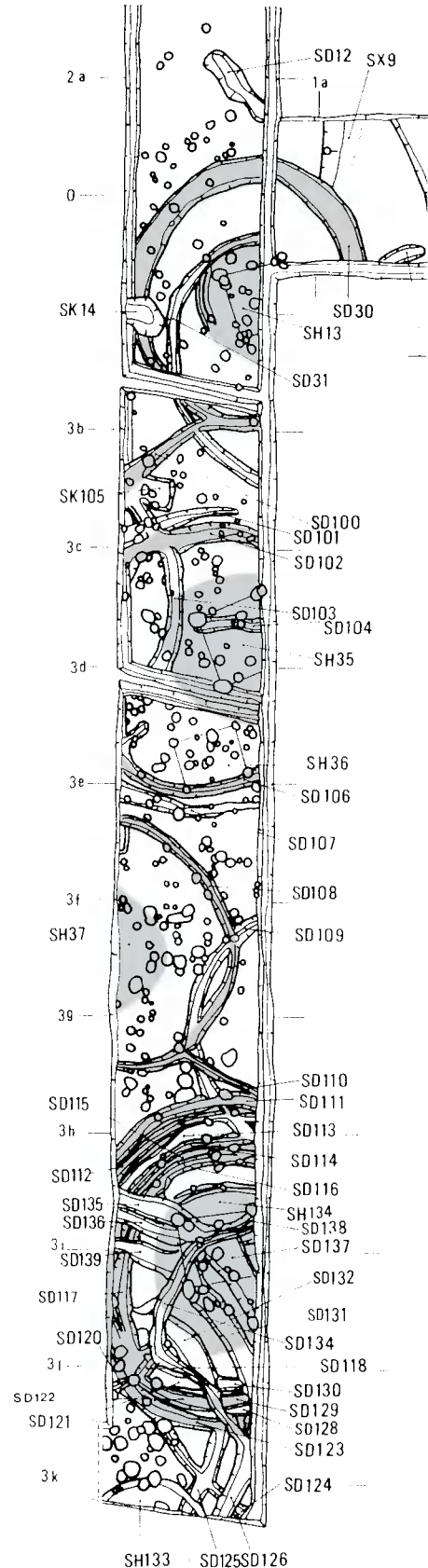
さて、この竪穴住居の特徴は周囲を巡る溝が検出できていることである。この溝が竪穴住居に伴うと考える理由は、溝から出土した土器と竪穴住居の土器が同時期であること、竪穴住居の周辺ではこの時期以外の遺構がほとんど検出されていないこと、そして、近年注目された大阪府八尾南遺跡⁽¹⁰⁾の調査成果などによる。

八尾南遺跡では、洪水砂で埋没し、当時の状態をよく残している弥生時代後期の竪穴建物群が検出されており、その特徴の一つとして、竪穴住居の周囲を巡る周堤と溝の存在が明らかになっている。また、八尾南遺跡の調査を契機に東海・北陸・山陰の事例など全国的な視野から竪穴住居の景観をテーマとした研究会⁽¹¹⁾が開催されるとともに、注目される論考⁽¹²⁾も発表されるなど新たな研究段階に至っていると考えられる。竪穴住居に周堤が存在していることは、戦後まもなくの登呂遺跡の発掘調査で注目されていたが、その後それを証明する事例はほとんど検出できなかった。しかしながら、竪穴を掘った土を周囲に盛り上げて周堤を設けるとする考えは多くの研究者によって支持されることとなる。

岡山県内では1970年代以降大規模な発掘調査が実施され、竪穴住居の発掘調査例も大幅に増加していった。周堤そのものの報告例は、1990年に調査された窪木薬師遺跡⁽¹³⁾（古墳時代中期）と2004年に調査された百間川兼基遺跡⁽¹⁴⁾（弥生時代後期）の事例のみであるが（いずれも洪水砂で埋没していたため検出可能であった）、竪穴住居を巡る溝については、それ以前の1977年に調査された京免遺跡の報告書において、この溝が竪穴住居に伴う溝（岡山県下では外周溝と呼称する報告書が多い）で、排水機能をもつことや周堤との関係が考察されている⁽¹⁵⁾。

また、ほぼ同時期に県南部では百間川遺跡群の大規模な調査が開始され、百間川原尾島遺跡で竪穴住居の外周溝が相次いで検出された。これらについては、すでに各報告書で考察が加えられている。

さらに、2004年には百間川兼基遺跡で洪水砂によって



京免遺跡 SH13・35・37・134

第153図 住居外周溝の事例① (1/300)

埋没した弥生時代後期の竪穴住居が検出され、周堤と外周溝の存在が確認できており、これについても考察が行われている。⁽¹⁶⁾

今回、岡山県下で周堤あるいは外周溝を確認した竪穴住居について一覧表を作成した。外周溝のみについて特徴をまとめると、もっとも古い時期は鍛冶屋D遺跡の中期前葉で、中期の事例はこの他に百間川兼基遺跡の中期後葉があるのみである。後期には前葉・中葉・後葉・末葉のすべてに事例が確認される。古墳時代には未検出である。

外周溝と竪穴住居の壁との距離については、規格性を読み取ることができ、ほぼ2 m前後である。

外周溝の形状には1 m前後の比較的幅広のタイプと、ほぼ50cm以下で比較的深いタイプがあるが、時期的に変化する傾向は認められず、後期Ⅱ・Ⅳ期では共存している。また、外周溝の深さは竪穴住居床面より深い場合がほとんどで、この溝の機能を排水のためとする根拠となっている⁽¹⁷⁾。

排水機能については、百間川兼基遺跡で検出されたような住居内から住居外に延びる溝が知られており、同様な事例は八尾南遺跡でも確認されている。

外周溝全体が判明する事例は少ないが、百間川原尾島遺跡(2)竪穴住居35⁽¹⁸⁾、百間川原尾島遺跡(6)竪穴住居6⁽¹⁹⁾では、一周し途中から枝溝が取りつき、隣接する大規模な溝（集落を画する溝で、かつ排水機能を持っていたと考えられる）につながっていた。また、百間川原尾島遺跡(2)竪穴住居29⁽¹⁸⁾では二方向のみ広い溝が掘られていたが、これについても竪穴住居35と同じく隣接する大溝につながっていたと想定できる（第154・155図）。こうした事例から、外周溝が排水機能を目的の一つとしていたと想定できる。

なお、これらの外周溝が完全な明渠ではなかったことが、洪水砂で埋没した事例である百間川原尾島遺跡(3)竪穴住居5・6⁽¹⁹⁾や百間川兼基遺跡竪穴住居16⁽¹⁴⁾での埋土観察の結果から指摘されている。

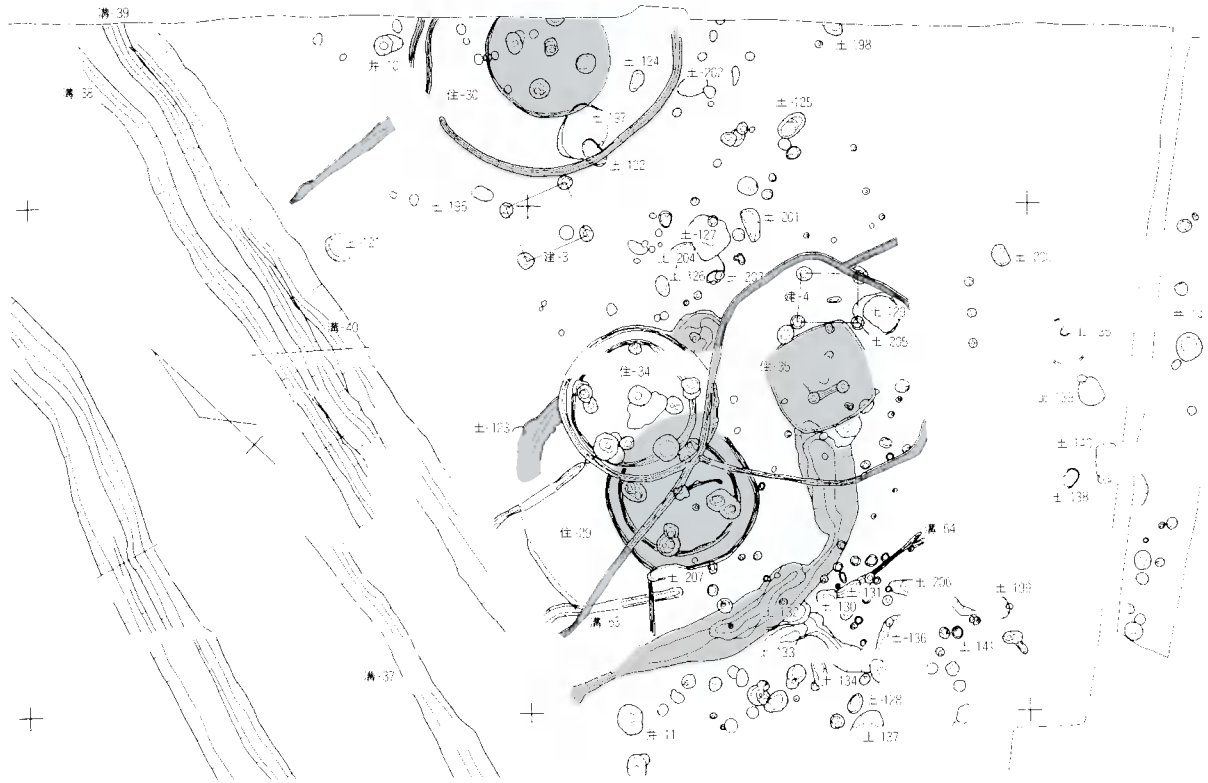
また、百間川原尾島遺跡(3)竪穴住居5では馬蹄形に掘られているのが特徴である。

外周溝が周堤の存在を証明するかどうかについては、百間川兼基遺跡や八尾南遺跡の事例が参考になる。すなわち、これら実際に周堤帯が検出された事例では幅の狭い外周溝ではなく、幅広の外周溝あるいは土壌が連なるような形状を示していた。岡山県下でこうした事例に相当するのは百間川原尾島遺跡(2)の竪穴住居9⁽¹⁸⁾と鍛冶屋D遺跡竪穴住居1のみで、それ以外は必ずしも周堤の存在を証明するとは言えない。

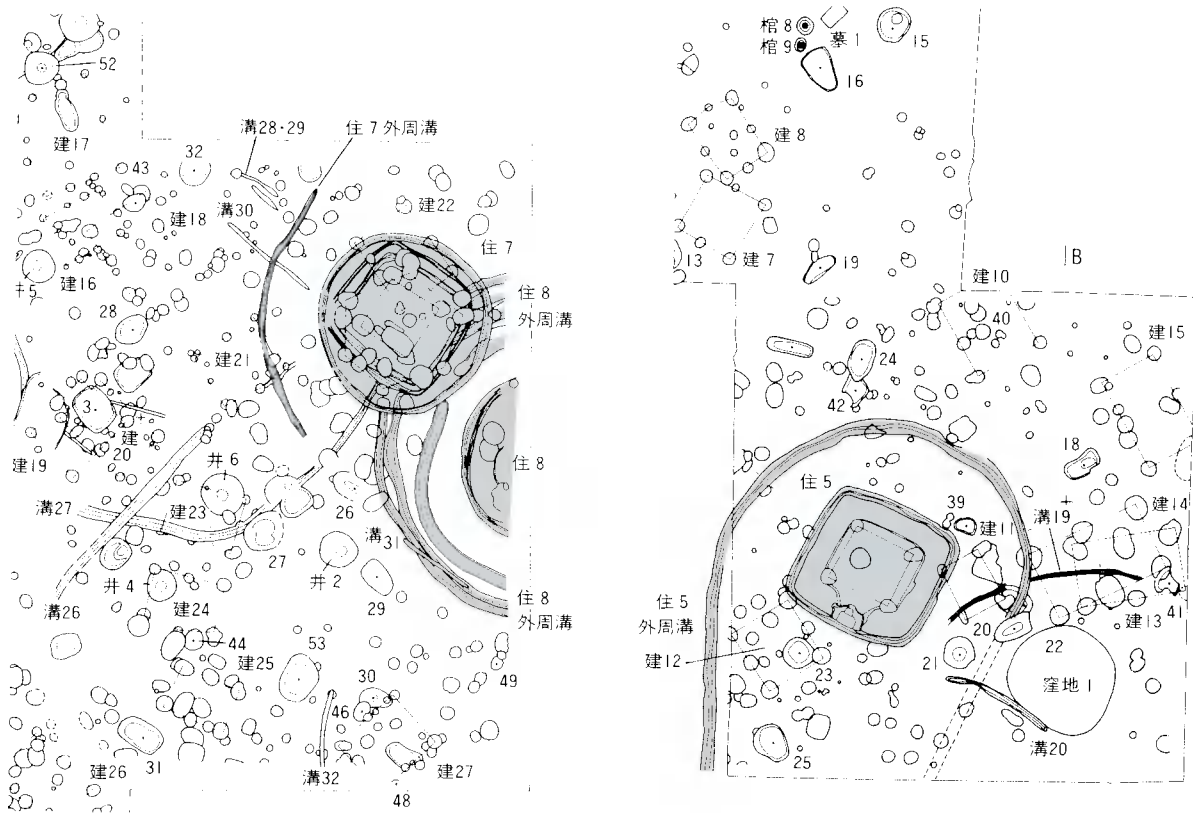
このことは、洪水砂で埋没していた百間川原尾島遺跡(3)竪穴住居7⁽¹⁹⁾において周堤が確認されず、壁立ち構造が想定されていることも参考になるかもしれない⁽²⁰⁾。ただし、この竪穴住居についても埋没時点にすでに取り除かれていた可能性がある。

外周溝を伴う竪穴住居が一般的ではないことから、床面積と出土遺物についても一覧表に掲載した。面積は50㎡をこえる大形住居もあるが、平均的な住居と大きく異なっていない。住居の規模は集落内で相対的に判断しなければならないが、床面積からは特殊性を指摘することはできない。また、百間川原尾島遺跡の事例では、鉄鏝や鉄ヤリガンナ、銅鏝、ガラス小玉、砥石、紡錘車などを出土する機会が多いが、鉄器製作や玉製作など特定の作業場であることを実証する事例はなく、外周溝を伴わない竪穴住居からも同様の遺物は出土しているのが現状である。

したがって、外周溝を伴う竪穴住居に特別の性格や用途を想定することはできないが、百間川原尾島遺跡と同じような条件で多数の竪穴住居を検出した足守川下流域の津寺遺跡や高塚遺跡、加茂政所遺跡では確認されていないのも事実である。

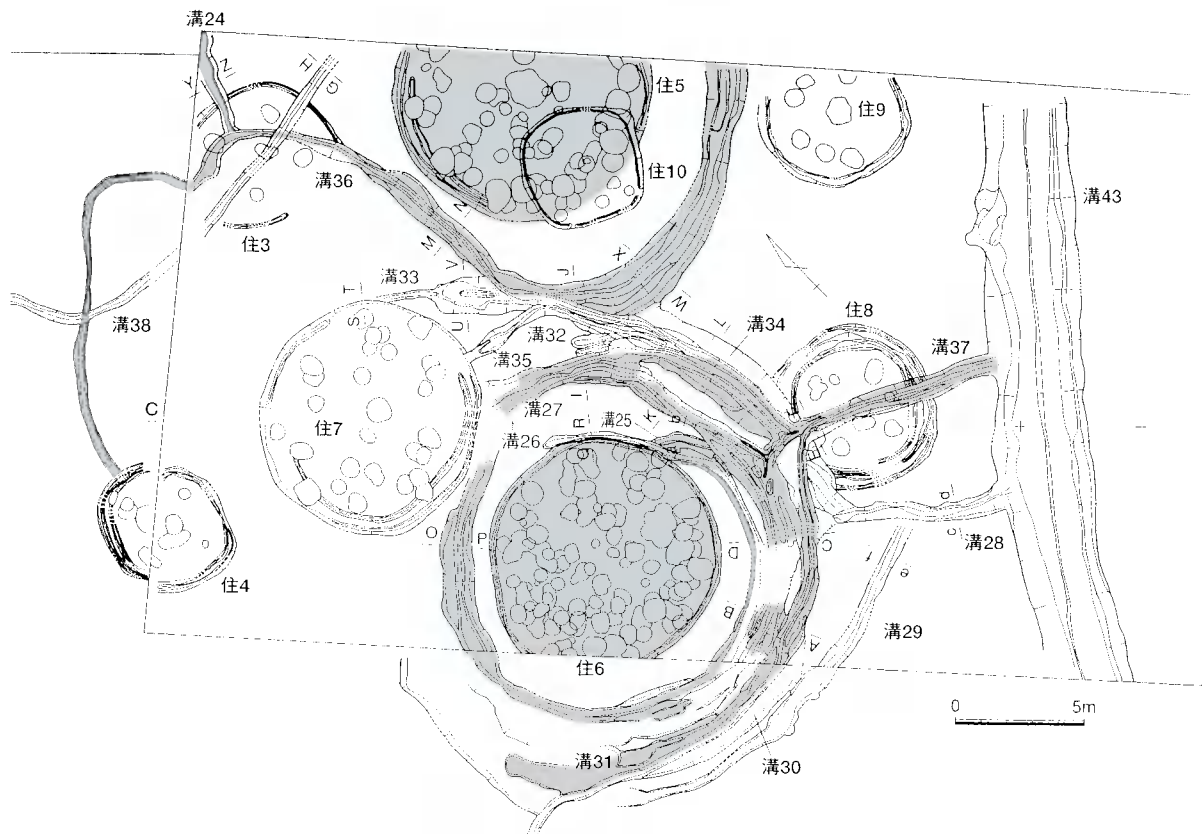


百間川原尾島遺跡 (2) 竪穴住居29・30・35

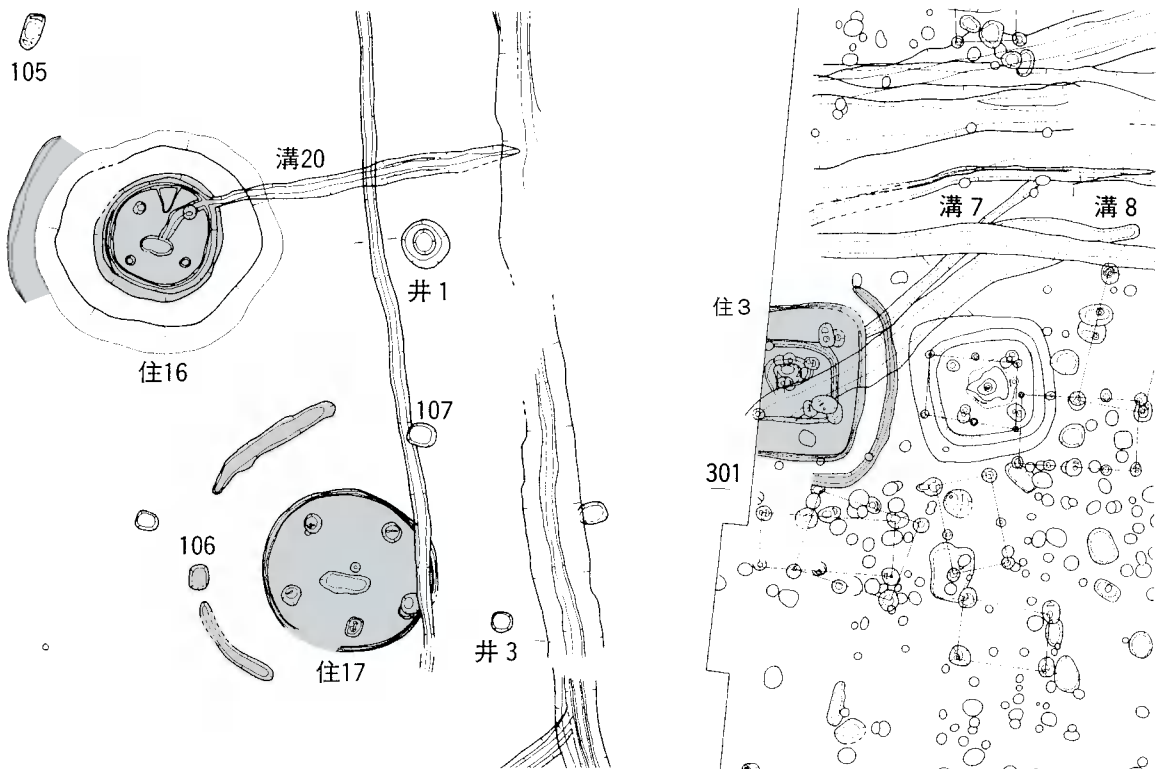


百間川原尾島遺跡 (3) 竪穴住居5・7・8

第154図 住居外周溝の事例② (1/300)



百間川原尾島遺跡(6) 竪穴住居5・6



百間川兼基遺跡竪穴住居3・16・17

第155図 住居外周溝の事例③ (1/300)

最後に、こうした県内の事例を参考に、鍛冶屋D遺跡については、竪穴住居には周堤を伴い、その西外側に（おそらく相対する東側にも存在しているが、全周はしない）排水目的の溝を掘り、南側の流路23につないでいたと推測しておきたい。

5 弥生時代中期の土器について

流路27・28から比較的まとまった量の土器が出土した。中期土器については以前少し考察したことがあるので⁽²¹⁾、編年的な位置づけについて簡単に触れておきたい。

壺や甕・高杯の特徴から、これらが中期前葉後半から中期中葉前半であろうことは明らかであるが、中期前葉とするか中葉とするかについて考えてみたい⁽²²⁾。

多く出土している甕について特徴をまとめると、①くの字形の口縁部は横方向のヘラミガキ、あるいは強くはないがヨコナデで仕上げられており、ほとんどが後者である、②体部外面調整は、ほとんどが上半縦方向のハケメ、下半縦方向のヘラミガキである、③体部上半と下半の境には一段および二段の列点文が施されている、④体部内面の最終調整には横方向のヘラミガキが観察できるものが多い、⑤体部の形状は、最大径が口径よりあまり大きくならず、最大径は上位にある、⑥底部は、中期中葉の事例よりは相対的に厚く、また上げ底を呈するものが多い。

岡山県における弥生時代中期の編年は、近畿地方の成果に合わせる形で、櫛描文が出現し盛行する時期を前葉、凹線文が出現し盛行する時期を後葉とし、その中間を中葉としてきたことは周知のことである。ただし、実際出土資料では、櫛描文や凹線文の出現と各器種の組み合わせなど全体としての型式の画期との間に微妙な差があり、この問題の理解によって、異なる編年案が発表されているのが現状である⁽²³⁾。

また、中期の前葉と中葉の区分についても、公表されている資料が少なく十分な検討が出来ていないのが現状であり、鍛冶屋D遺跡で出土した土器については、二つの考え方が出来るのではなかろうか。一つは、口縁部内面を横方向のヘラミガキではなく、ヨコナデで仕上げる技法の出現を最大の基準として中葉との画期とする見解に従って、中葉の最古段階と理解する。もう一つは、上記特徴⑤・⑥のように体部の器形や底部の作り方が前葉の特徴を有しており、中葉以降の変化とは区別して考えることを重視して前葉の最新段階と理解する考え方である。

口縁部ヨコナデ技法の出現を編年の画期とすることについては、編年表を作成する際には解りやすいが、前述した櫛描文や凹線文の出現の場合と同じように、実際の出土状況ではいくつかの古い特徴を持つ資料⁽²⁴⁾があるのも事実であり、今回の資料もその資料に相当するのではないかと考えている。

この問題については、今後の資料の増加により、壺や高杯など他の器種との組み合わせや出土状況を基に考察していきたいが、現段階では、中期前葉の新段階と考えておきたい。

(平井)

註

- (1) 今回報告した流路については、調査時点では河道と称していた。河道も流路も自然現象で形成されたものと理解でき用語として大きな違いはないようにも思えるが、著しく蛇行する流れが幾筋もみられることや、挟られたような肩部が観察できるなど土石流のような強い流れが推測できることから、本報告書では「流路」という遺構名で報告した。
- (2) 須恵器大甕を用いた古代の井戸については県内では類例が少ないが、2008年に調査された伊福定国前遺跡(岡山市)で検出されている。(『所報吉備』45 岡山県古代吉備文化財センター 2008)
- (3) 「南溝手遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』107 岡山県教育委員会 1996
- (4) 「百間川沢田遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93 岡山県教育委員会 1993

第4章 まとめ

- (5) 平井泰男「中部瀬戸内地方における縄文時代後期末葉から晩期の土器編年試案」『突帯文と遠賀川』 土器持寄会 2000
- (6) 「久田原遺跡・久田原古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』184 岡山県教育委員会 2004
- (7) 「久田堀ノ内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』192 岡山県教育委員会 2005
- (8) 「津島岡大遺跡4」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第7冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1994
- (9) 本報告書では竪穴住居と表記しているが、筆者は、近年多く用いられているように、竪穴建物としてそれぞれの遺構ごとに住居であるとか作業小屋であるとかを検討すべきだと考えている。
- (10) 「八尾南遺跡」『(財)大阪府埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第172集 財団法人大阪府文化財センター 2008
- (11) 『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館 2005年度共同研究成果報告書』 財団法人大阪府文化財センター 2007
- (12) 岡本淳一郎「周溝をもつ建物の分類と系譜」『不老子笹川遺跡発掘調査報告』 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2006
- (13) 「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86 岡山県教育委員会 1993
- (14) 「百間川兼基遺跡4・百間川沢田遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』208 岡山県教育委員会 2007
- (15) 中山俊紀「第5章概括と問題点」『京免・竹ノ下遺跡』 津山市教育委員会 1982
中山氏は丘陵上の遺跡についても類例を紹介しているが、平野部の遺跡と同一に議論すべきではないと思われるので今回は触れない。
- (16) 和田剛「百間川遺跡群における弥生時代の竪穴住居について」(前掲註14文献)
- (17) 百間川兼基遺跡竪穴住居3については、外周溝が床面より高いことから、屋内施設である可能性を考えている。(前掲註16文献)
- (18) 百間川原尾島遺跡では報告書ごとに竪穴住居の番号が与えられているため、報告書の番号を括弧内に示している。「百間川原尾島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56 岡山県教育委員会 1984
- (19) 「百間川原尾島遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88 岡山県教育委員会 1994
- (20) 宇垣匡雅「第1節弥生時代の遺構・遺物について」(前掲註19文献)
- (21) 平井泰男「弥生時代中期の土器について」(「加茂政所遺跡・高松原古才遺跡・立田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』138 1999)
- (22) 壺387は中期中葉と考えるべきかもしれない。
- (23) 岡山県の編年案だけではなく、具体的には、櫛描文の出現を前期の最終段階とする、あるいは櫛描文の出現が中期の始まりではなく、ヘラ描き文の多条化をもって中期の始まりとする考え方や、B種凹線文の出現を中葉の最新段階とする考え方などである
- (24) 鍛冶屋D遺跡のようにある程度まとまった出土状況を示す事例として久田原遺跡竪穴住居16・20がある。(前掲註6文献)

付 載

- 付載1 鍛冶屋D遺跡古代水田の自然科学分析
パリノ・サーヴェイ株式会社
- 付載2 鍛冶屋D遺跡における放射性炭素年代測定
株式会社 古環境研究所
- 付載3 鍛冶屋D遺跡における自然科学分析
株式会社 古環境研究所

付載1 鍛冶屋D遺跡古代水田の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、鍛冶屋D遺跡の発掘調査により検出された古代水田層およびその上・下位層準における栽培植物の産状や古植生に関する情報を得ることを目的として、花粉分析と植物珪酸体分析を実施する。

1 試料

分析調査は古代の水田遺構が確認されている領域の調査区西壁で実施する。調査地点の堆積層の累重状況を模式柱状図として図1に示す。堆積層は、上位より1～11層に区分されている。9層が古代の水田耕作土に相当し、8層・7層も水田耕作土の可能性が指摘されている。

分析試料は、発掘調査担当者により6～11層の6層準から層位試料として塊状試料（試料1～6）が採取された。採取試料の岩質は、試料1が極細粒砂質泥、試料2が細粒～極細流砂混じり泥、試料3が極細粒砂質泥、試料4が腐植に富む砂混じり泥からなる数mm程度の集合体ないしブロック土（偽礫）からなる。試料5は細粒砂質泥、試料6は泥からなり、擾乱されている。

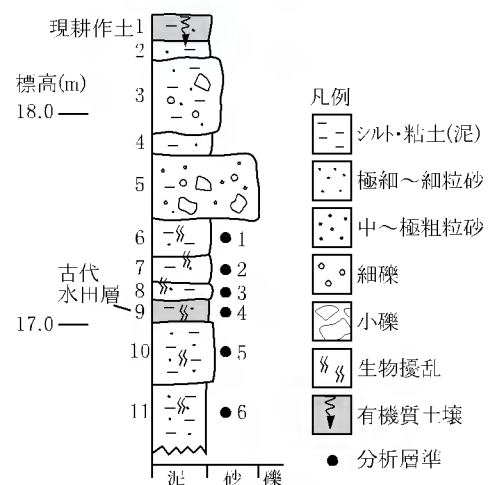


図1 調査地点の模式柱状図と試料採取位置

〈資料採取地点は、第39図★印〉

2 分析方法

(1) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウム処理、篩別、重液(臭化亜鉛、比重：2.3)分離、フッ化水素酸処理、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理の順に物理・化学的処理を行い、花粉・胞子化石を濃集する。分析残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成した後、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら、産出する全ての種類の同定・計数を行う。

(2) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。この残渣の一部をカバーガラス上に滴下・乾燥させた後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査しながら、その間に産出するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来する植物珪酸体(短細胞珪酸体)および葉身機動細胞に由来する植物珪酸体（機動細胞珪酸体）を、近藤（2004）などの分類を参考にしながら同定・計数する。また、分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量する。

結果は、産出した植物珪酸体の分類群と個数の一覧表と植物珪酸体の層位分布図として示す。産出

率は、短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で算出した。また、各分類群の含量密度（1g当たり個数）およびその層位分布図も合わせて表示する。

3 結果

(1) 花粉分析

結果を表1に示す。表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。分析を行った全試料で花粉化石数が少なく、僅かに産出した花粉化石の花粉外膜は破損・溶解しているものがほとんどである。産出した分類群は、木本花粉ではモミ属、ツガ属、マツ属、コナラ属アカガシ亜属など、草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節、ヨモギ属などである。

(2) 植物珪酸体分析

結果を表2・3、図2・3に示す。植物珪酸体は多産するが、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められるなど保存状態が悪いものが多い。

栽培植物のイネ属短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が全試料から産出し、初層に形成される穎珪酸体が6層・7層（試料1・2）から産出する。イネ属珪酸体の産出率と含量密度は層位的に変化する。

表1 調査区西壁の花粉分析結果

種 類	層名・試料番号					
	6層	7層	8層	9層	10層	11層
	1	2	3	4	5	6
木本花粉						
モミ属	-	-	6	4	-	-
ツガ属	-	-	1	3	-	1
マツ属複雑管束亜属	-	5	8	8	-	-
マツ属(不明)	2	3	4	16	-	-
コウヤマキ属	-	2	1	-	-	-
スギ属	-	-	-	1	-	-
ハンノキ属	-	-	-	1	-	-
コナラ属コナラ亜属	-	1	-	-	-	-
コナラ属アカガシ亜属	-	3	2	2	-	-
ニレ属-ケヤキ属	-	-	-	1	-	-
イボタノキ属	-	1	-	-	-	-
草本花粉						
サジオモダカ属	-	-	-	1	-	-
イネ科	-	3	3	6	-	3
カヤツリグサ科	1	1	-	5	-	1
サナエタデ節-ウナギツカミ節	-	2	-	1	-	-
アカザ科	-	-	-	1	-	-
ナデシコ科	-	-	1	-	-	-
セリ科	-	-	-	1	-	-
ヨモギ属	-	-	1	3	-	-
キク亜科	-	-	-	1	-	-
タンポポ重科	-	1	-	-	-	-
不明花粉	-	1	2	3	4	1
シダ類胞子						
ヒカゲノカズラ属	-	-	-	-	-	2
イノモトソウ属	-	-	13	17	2	21
他のシダ類胞子	16	19	26	63	14	121
合 計						
木本花粉	2	15	22	36	0	1
草本花粉	1	7	5	19	0	4
不明花粉	0	1	2	3	4	1
シダ類胞子	16	19	39	80	16	144
総計(不明を除く)	19	41	66	135	16	149

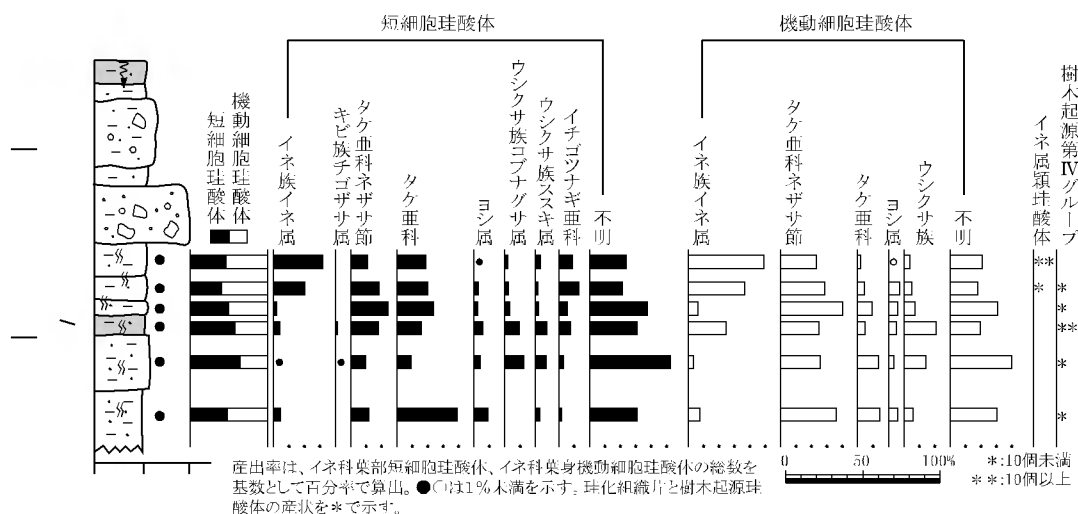


図2 植物珪酸体群集の層位分布（相対比）

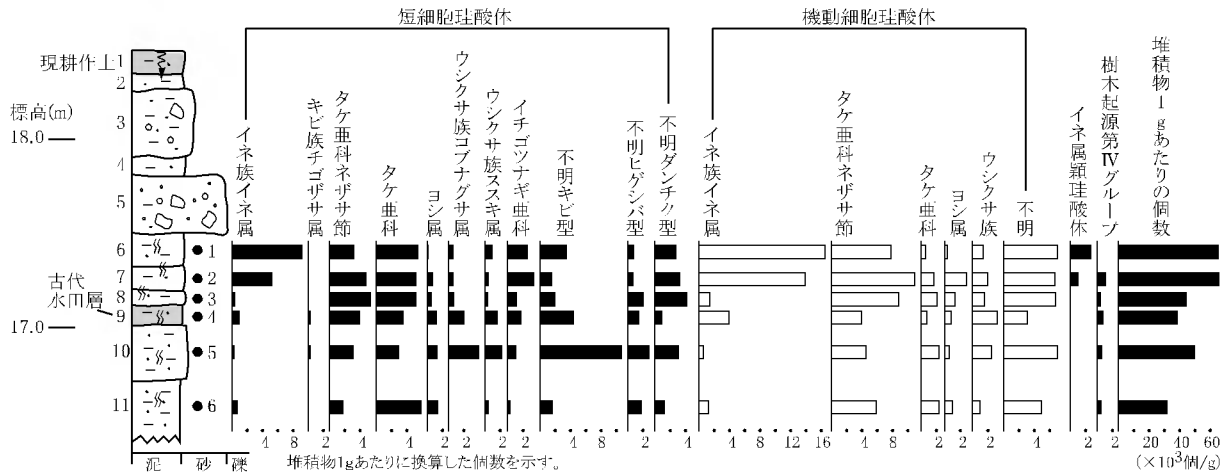


図3 植物珪酸体含量密度の層位分布

表2 調査区西壁の植物珪酸体分析結果

種 類	層名・試料番号					
	6層 1	7層 2	8層 3	9層 4	10層 5	11層 6
イネ科葉部短細胞珪酸体						
イネ族イネ属	61	37	3	16	2	5
キビ族チゴザサ属	-	-	-	5	2	-
タケ亜科ネザサ節	21	34	41	68	21	13
タケ亜科	36	37	40	60	20	43
ヨシ属	1	5	4	21	9	10
ウシクサ族コブナグサ属	4	4	5	35	27	-
ウシクサ族ススキ属	6	3	3	27	15	3
イチゴツナギ亜科	17	24	9	29	7	2
不明キビ型	23	11	15	75	73	12
不明ヒゲシバ型	5	5	16	25	19	13
不明ダンチク型	18	23	32	16	21	9
イネ科葉身機動細胞珪酸体						
イネ族イネ属	110	99	11	67	4	9
タケ亜科ネザサ節	52	78	68	67	31	43
タケ亜科	4	12	16	13	16	17
ヨシ属	2	20	10	14	4	7
ウシクサ族	9	14	12	56	17	7
不明	47	48	52	53	48	36
珪化組織片						
イネ属類珪酸体	18	7	-	-	-	-
樹木起源珪酸体						
第IVグループ	-	8	3	13	4	4
合 計						
イネ科葉部短細胞珪酸体	192	183	168	377	216	110
イネ科葉身機動細胞珪酸体	224	271	169	270	120	119
珪化組織片	18	7	0	0	0	0
樹木起源珪酸体	0	8	3	13	4	4
総 計	434	469	340	660	340	233

単位は個数である。

表3 植物珪酸体含量

種 類	層名・試料番号					
	6層 1	7層 2	8層 3	9層 4	10層 5	11層 6
イネ科葉部短細胞珪酸体						
イネ族イネ属	92	52	4	9	3	7
キビ族チゴザサ属	0	0	0	3	3	0
タケ亜科ネザサ節	32	48	53	40	31	18
タケ亜科	54	52	52	35	29	59
ヨシ属	2	7	5	12	13	14
ウシクサ族コブナグサ属	6	6	6	20	39	0
ウシクサ族ススキ属	9	4	4	16	22	4
イチゴツナギ亜科	26	34	12	17	10	3
不明キビ型	35	15	19	44	107	16
不明ヒゲシバ型	8	7	21	15	28	18
不明ダンチク型	27	32	42	9	31	12
イネ科葉身機動細胞珪酸体						
イネ族イネ属	165	139	14	39	6	12
タケ亜科ネザサ節	78	109	88	39	45	59
タケ亜科	6	17	21	8	23	23
ヨシ属	3	28	13	8	6	10
ウシクサ族	14	20	16	33	25	10
不明	71	67	68	31	70	49
珪化組織片						
イネ属類珪酸体	27	10	0	0	0	0
樹木起源						
第IVグループ	0	11	4	8	6	5
合 計						
イネ科葉部短細胞珪酸体	288	257	218	220	316	150
イネ科葉身機動細胞珪酸体	336	380	219	158	175	162
珪化組織片	27	10	0	0	0	0
樹木起源	0	11	4	8	6	5
総 計	652	658	441	385	497	318

含量値の単位は $\times 10^2$ 個/gである。いずれも10の位で丸めているが、合計は丸めない値の合計後の値を丸めている。

11層・10層（試料6・7）では産出率・含量密度ともに比較的低いが、古代の水田層である9層（試料4）では、産出率・含量密度ともに増加する。9層のイネ属産出率は、短細胞珪酸体で約4%、機動細胞珪酸体で約25%、含量密度は短細胞珪酸体が約900個/g、機動細胞珪酸体が約3,900個/gである。8層（試料3）では産出率が減少し、含量密度も急激に低下するが、7層（試料2）では再び急増・多産するようになり、6層（試料1）でさらに増加・多産するようになる。イネ属以外の種類では、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が分析を行った全層準で多産し、このほかヨシ属・ススキ属・コブナ

グサ属を含むウシクサ属、イチゴツナギ亜科などが産出する。これらの種類はイネ属のような急激な層位変化を示さない。

4 考察

(1) 調査区における稲作について

調査区西壁の6層～11層の堆積層からは、いずれの層準からも栽培種のイネ属を産出したが、特に多産したのは古代水田層とされる9層と、その上位の7層と6層である。考古遺跡における水田耕作土におけるイネ属の機動細胞珪酸体の含量密度は5,000個/g程度検出されることが多く、その含量密度が過去の稲作の指標となることが推定されている(杉山,2000)。また、現在の水田土層におけるイネ属機動細胞珪酸体の産出率は、10ha当り500kgのイナワラ堆肥を8年間連用した水田耕作土で16%以上を示したとの報告がある(近藤,1988)。今回の結果と比較すると、9層では含量密度がやや低いものの産出率は高く、7層・6層では含量密度・産出率ともに高く、各層形成期において稲作が行われていたことになる。ただし、明瞭な水田遺構が確認されていても含量密度の低い調査例も多数存在する(古環境研究所,1992 パリノ・サーヴェイ,2002・2007など)。これは植物珪酸体の堆積物中への取り込まれ方や堆積時・後の保存条件など、化石群集の形成過程(タフォノミー)が大きく関係しているものと思われる。そのため、堆積層の成因(堆積環境や土壌の発達状況など)に基づく、化石群集の形成過程を踏まえた評価が重要でかつ必要なことと考える。以下に分析試料の層相観察結果を踏まえた評価を行う。

今回調査を行った6層～11層のうち、6層～9層は砂質泥ないし泥質砂からなる数mm程度の集合体ないしブロック土(偽礫)からなることが、試料観察結果から窺える。特に古代の水田層である9層では腐植に富み、土壌構造の発達が顕著であった。これらの層相から、6層～9層は土壌発達する時期を挟む堆積環境で形成された可能性が考えられる。調査区全体の堆積層の累重状況について観察記載を行っていないので特定できないが、調査区全域において土壌発達が起きているとすれば、6層～9層から産出したイネ属植物珪酸体は、イネ属以外の植物珪酸体の層位的産状に大きな変化が認められないことを合わせ考えると、土壌発達期に取り込まれたものであることが推定される。特にイネ属含量密度と産出率が高かった9層・7層・6層では、耕作に伴って堆積物中に取り込まれたイネ属である可能性が高いことになる。7・6層では糊殻に形成される穎珪酸体も確認されていることも同調的な産状として捉えられる。一方、10層・11層は砂質泥～泥質砂からなり、擾乱されているものの6層～9層で確認された集合体ないしブロック土などは明瞭に観察されなかった。そのため、10層・11層は9層より上位の堆積層とは多少異なる堆積環境であった可能性がある。調査地点の立地環境や断面写真からは氾濫堆積物の可能性もあり、そうだとすると堆積物中のイネ属植物珪酸体は氾濫堆積物ともに運搬堆積したものであることになる。これらの点については、調査区における堆積層の分布や累重状況や堆積層の堆積・土壌構造の観察結果を含め、総合的に判断・評価する必要があり、今後の課題として認識される。

(2) 周辺植生について

11層～6層の植物珪酸体の産状をみると、ネザサ節を含むタケ亜科が全層準を通じて多産し、ススキ属やヨシ属・コブナグサ属なども随伴して産出する。これらの分類群のうち、ネザサ節を含むタケ亜科は自然堤防などの日当たり良好な比較的乾燥した場所に生育する種を含む。ススキ属には自然堤防などの比較的乾燥した場所に生育するススキのほか、増水時に冠水する河岸などに生育するオギが

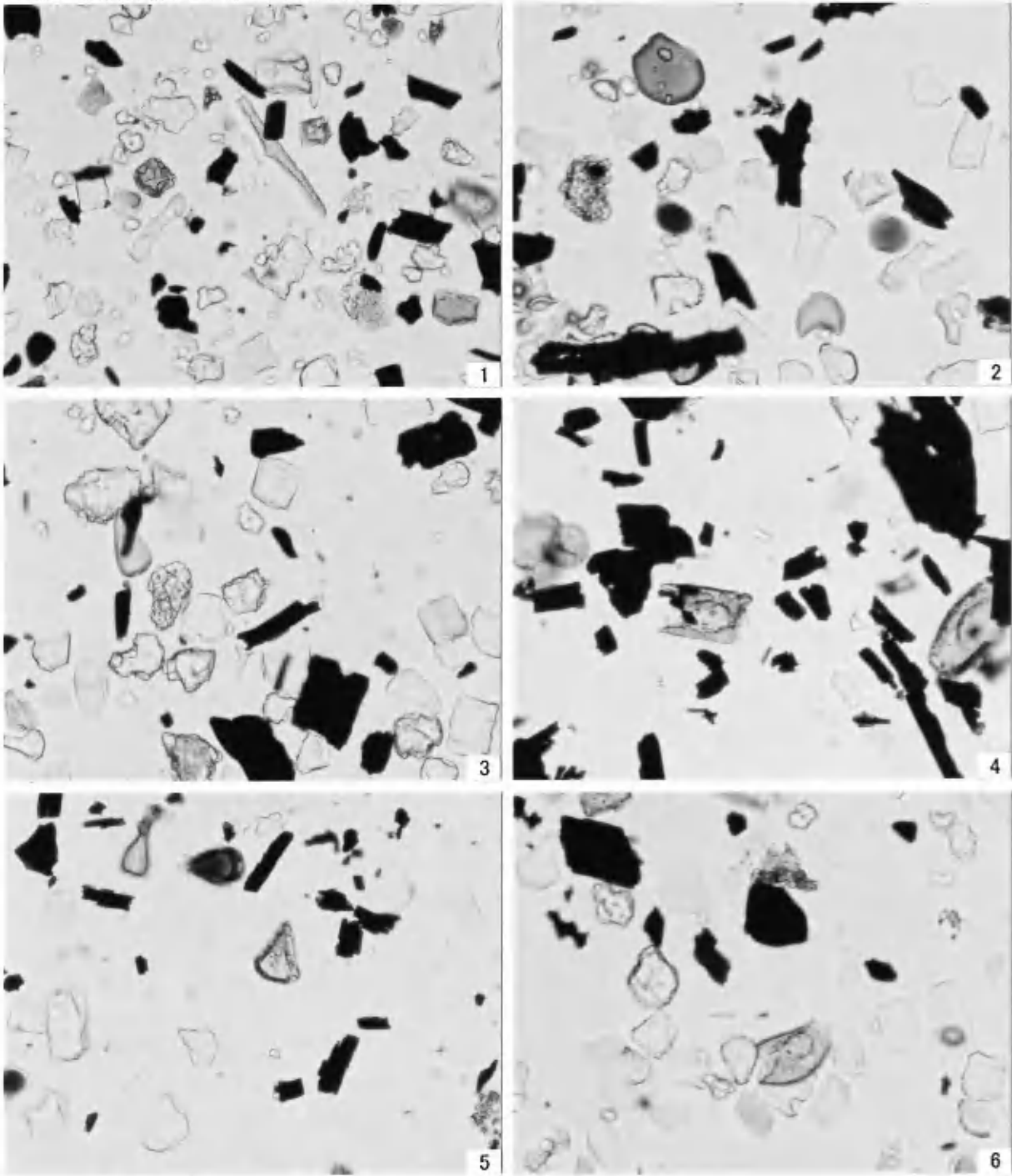
含まれる。ヨシ属には後背湿地に生育するヨシや河原などに生育するツルヨシが含まれる。上記したように9層より上位の堆積物は土壤形成期を挟在する堆積環境下で形成された可能性があり、土壤形成期の調査地点周辺には、ヨシ属やススキ属などが近接して生育していたことが推定される。すなわち、当時の調査地点周辺はガマなどが生育する水位の高い低湿地のような場所ではなく、増水時に冠水するものの、通常時は冠水していない酸化条件下にある場所であったことが推定される。このことは、花粉化石の産状とも同調的である。

一般に花粉化石は、土壤発達する酸化条件下では風化作用の影響により分解消失することが知られている(中村,1967;徳永・山内,1971)。僅かに産出した花粉化石をみると、広葉樹花粉に比較して風化に対する抵抗性が強いとされる針葉樹花粉やシダ類胞子が多産している傾向がある(中村,1967;徳永・山内,1971;三宅・中越,1998など)。草本花粉の種類も比較的分解に強い種類や、分解が進んでも形態的特徴が捉えやすい同定可能な種類がほとんどである。これらのことから、調査区内は基本的に乾いた場所であり、堆積時に取り込まれた花粉の多くが経年変化の過程で分解・消失し、分解に強い花粉やシダ類胞子が選択的に残されたと考えられる。したがって、産出した木本花粉のモミ属、ツガ属、マツ属、コウヤマキ属などの針葉樹、コナラ属アカガシ亜属等の常緑広葉樹、ハンノキ属、ニレ属—ケヤキ属などの落葉広葉樹、イネ科以外のカヤツリグサ科、サナエタデ節—ウナギツカミ節、ヨモギ属などの草本類が調査地点周辺の植生構成要素であったと考えられるものの、詳細な植生については今後の情報の蓄積をもって再評価していく必要がある。

引用文献

- 近藤 鍊三, 1988, 十二遺跡土壌の植物珪酸体分析. 銚師屋遺跡群十二遺跡—長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書一, 御代田町教育委員会, 377-383.
- 近藤 鍊三, 2004, 植物ケイ酸体研究. ベドロジスト, 48,46-64.
- 古環境研究所, 1992, プラント・オパール分析調査報告. 「二之宮千足遺跡 国道17号(上部道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(自然科学分析編)」, 建設省・群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団, 50-60.
- 三宅 尚・中越 信和, 1998, 森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態. 植生史研究, 6,15-30.
- 中村 純, 1967, 花粉分析. 古今書院, 232p.
- パリオ・サーヴェイ株式会社, 2002, 横手南川・横手湯田遺跡の自然科学分析. 「横手南川端遺跡・横手湯田遺跡 北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第11集 第1分冊(本文編)」, (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団, 133-155.
- パリオ・サーヴェイ株式会社, 2007, 自然科学分析. 「三重県松阪市嬉野新屋庄町所在 赤部遺跡 一般国道23号中勢道路建設地内埋蔵文化財発掘調査報告」, 松阪委教育委員会, 134-177.
- 杉山 真二, 2000, 植物珪酸体(プラント・オパール). 辻 誠一郎(編著)考古学と自然科学3 考古学と植物学, 同成社, 189-213.
- 徳永 重元・山内 輝子, 1971, 花粉・胞子.化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.

図版1 花粉分析プレパラート内の状況写真

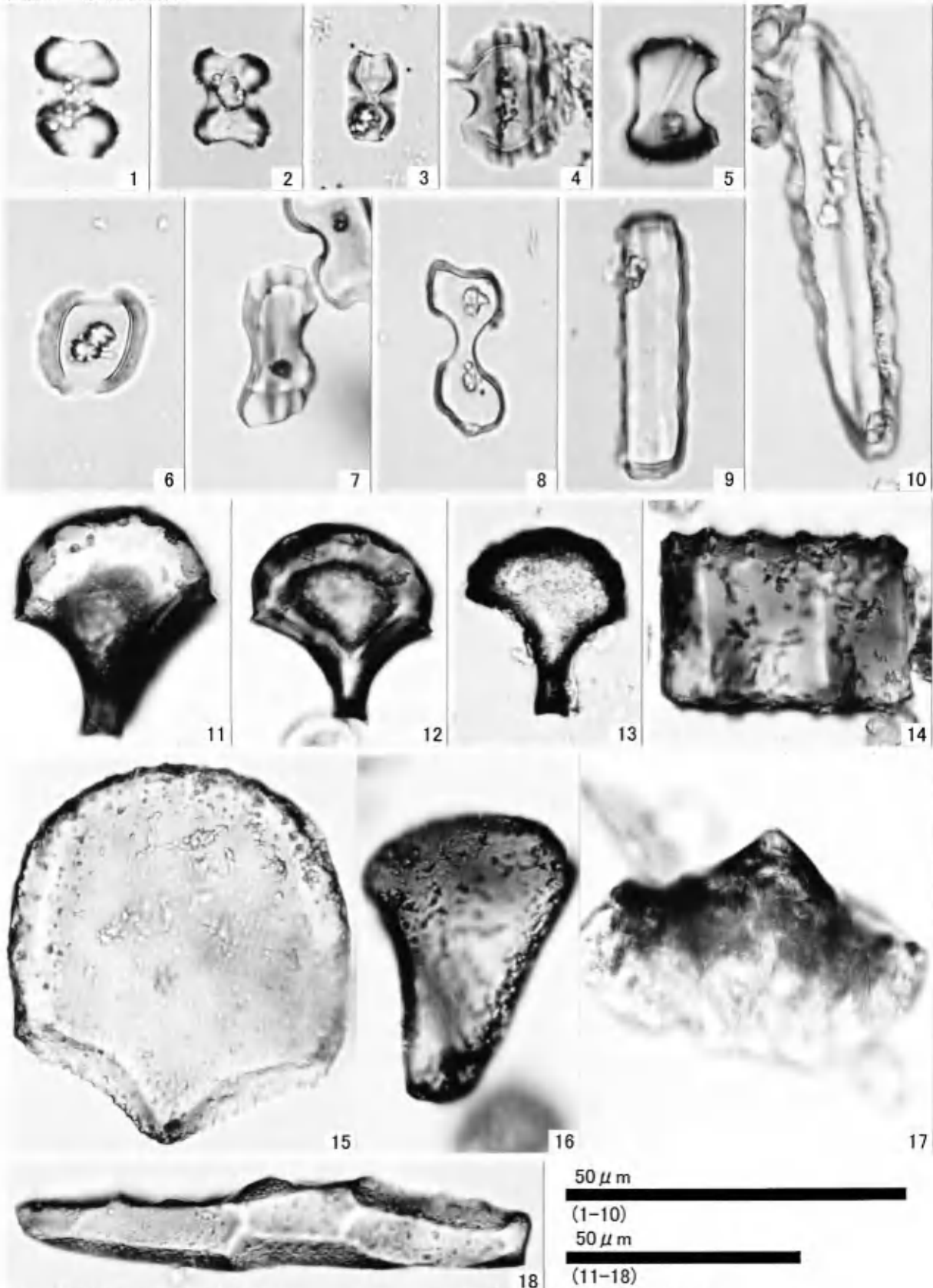


- 1. 状況写真(調査区西壁:1)
- 3. 状況写真(調査区西壁:3)
- 5. 状況写真(調査区西壁:5)

- 2. 状況写真(調査区西壁:2)
- 4. 状況写真(調査区西壁:4)
- 6. 状況写真(調査区西壁:6)

50 μ m

図版2 植物珪酸体



- | | |
|----------------------------|-----------------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体(調査区西壁;2) | 2. イネ属短細胞珪酸体(調査区西壁;4) |
| 3. イネ属短細胞珪酸体(調査区西壁;6) | 4. テゴザサ属短細胞珪酸体(調査区西壁;4) |
| 5. ネザサ節短細胞珪酸体(調査区西壁;4) | 6. ヨシ属短細胞珪酸体(調査区西壁;2) |
| 7. コブナグサ属短細胞珪酸体(調査区西壁;4) | 8. ススキ属短細胞珪酸体(調査区西壁;4) |
| 9. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(調査区西壁;2) | 10. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(調査区西壁;4) |
| 11. イネ属機動細胞珪酸体(調査区西壁;2) | 12. イネ属機動細胞珪酸体(調査区西壁;4) |
| 13. イネ属機動細胞珪酸体(調査区西壁;6) | 14. ネザサ節機動細胞珪酸体(調査区西壁;4) |
| 15. ヨシ属機動細胞珪酸体(調査区西壁;2) | 16. ウシクサ族機動細胞珪酸体(調査区西壁;2) |
| 17. イネ属籾珪酸体(調査区西壁;2) | 18. 樹木起源珪酸体第IVグループ(調査区西壁;2) |

付載2 鍛冶屋D遺跡における放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1. 試料と方法

試料名	本書出土遺構名（調査時名称）	種類	前処理・調整	測定法
No.1	流路6（5d区, No.5流路, No.3）	杭	酸-アルカリ酸洗浄, ベンゼン合成	Radiometric
No.2	流路6（5d区, No.5流路）	ドングリ	酸-アルカリ酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.3	流路6（5d区, No.5流路）	流木	酸-アルカリ酸洗浄, ベンゼン合成	Radiometric
No.4	流路6（5d区, No.5流路, No.8）	杭	酸-アルカリ酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.5	溝21（5d区, No.9溝, No.4）	杭	酸-アルカリ酸洗浄, ベンゼン合成	Radiometric
No.6	溝21（5d区, No.9溝, No.5）	杭	酸-アルカリ酸洗浄, ベンゼン合成	Radiometric
No.7	溝21（5d区, No.9溝, No.7）	杭	酸-アルカリ酸洗浄, ベンゼン合成	Radiometric
No.8	溝21（5d区, No.9溝, No.2）	杭	酸-アルカリ酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.9	溝21（5d区, No.9溝, No.6）	杭	酸-アルカリ酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.10	溝21（5d区, No.9溝, No.9）	杭	酸-アルカリ酸洗浄, 石墨調整	AMS

Radiometric：液体シンチレーションカウンタによる β 線計数法
AMS：加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）

(1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

(2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

(3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を $-25(\text{‰})$ に標準化することによって得られる年代である。

(4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。 1σ （68%確率）と 2σ （95%確率）は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の $1\sigma \cdot 2\sigma$ 値が表記される場合もある。

2. 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	¹⁴ C年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ¹⁴ C年代 (年BP)	暦年代 (西暦) (1 σ :68%確率, 2 σ :95%確率)
No.1	213366	2200±50	-26.5	2180±50	交点 : calBC200 1 σ : calBC360~280,240~170 2 σ : calBC380~80
No.2	213367	2990±40	-26.7	2960±40	交点 : calBC1190 1 σ : calBC1260~1110 2 σ : calBC1300~1030
No.3	213368	3140±60	-27.4	3100±60	交点 : calBC1390 1 σ : calBC1420~1300 2 σ : calBC1500~1210
No.4	213369	2350±40	-28.7	2290±40	交点 : calBC380 1 σ : calBC390~370 2 σ : calBC400~350,300~220
No.5	213370	2080±50	-28.0	2030±50	交点 : calBC40 1 σ : calBC80~ AD30 2 σ : calBC170~ AD70
No.6	213371	2090±40	-27.0	2060±40	交点 : calBC50 1 σ : calBC110~30 2 σ : calBC180~ AD30
No.7	213372	2160±60	-27.7	2120±60	交点 : calBC160 1 σ : calBC200~50 2 σ : calBC360~ AD10
No.8	213373	2170±40	-28.7	2110±40	交点 : calBC160 1 σ : calBC190~60 2 σ : calBC340~320,210~40
No.9	213374	2160±40	-28.1	2110±40	交点 : calBC160 1 σ : calBC190~60 2 σ : calBC340~320,210~40
No.10	213375	1970±40	-29.8	1890±40	交点 : calAD110 1 σ : calAD70~140 2 σ : calAD40~230

3. 所見

放射性炭素年代測定の結果、No.1の杭では 2180 ± 50 年BP（ 1σ の暦年代でBC360～280, 240～170年）、No.2のドングリでは 2960 ± 40 年BP（同BC1260～1110年）、No.3の流木では 3100 ± 60 年BP（同BC1420～1300年）、No.4の杭では 2290 ± 40 年BP（同BC390～370年）、No.5の杭では 2030 ± 50 年BP（同BC80～AD30年）、No.6の杭では 2060 ± 40 年BP（同BC110～30年）、No.7の杭では 2120 ± 60 年BP（同BC200～50年）、No.8の杭では 2110 ± 40 年BP（同BC190～60年）、No.9の杭では 2110 ± 40 年BP（同BC190～60年）、No.10の杭では 1890 ± 40 年BP（同AD70～140年）の年代値が得られた。

文献

Stuiver et al. (1998), INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.
中村俊夫 (1999) 放射性炭素法. 考古学のための年代測定学入門. 古今書院, p.1-36.



鍛冶屋D遺跡の年代測定試料（印は採取箇所）

付載3 鍛冶屋D遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 放射性炭素年代測定

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の ^{14}C 濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により ^{14}C 年代から暦年代に較正する必要がある。

ここでは、鍛冶屋D遺跡で出土した土器（付着スス）ならびに種実を対象として、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行った。測定にあたっては、米国のBeta Analytic Inc. の協力を得た。

2. 試料と方法

測定試料は、6区No.16河道（本報告書、流路17）より出土した土器（第80図169）に付着したスス1点と、6区No.16河道（本報告書、流路17）より出土した種実（同定の結果トチノキ）1点の計2点である。放射性炭素年代測定の手順は以下のとおりである。

まず、試料に二次的に混入した有機物を取り除くために、以下の前処理を行った。

- 1) 蒸留水中で細かく粉碎後、超音波および煮沸により洗浄
- 2) 塩酸 (HCl) により炭酸塩を除去後、水酸化ナトリウム (NaOH) により二次的に混入した有機酸を除去
- 3) 再び塩酸 (HCl) で洗浄後、アルカリによって中和
- 4) 定温乾燥機内で80°Cで乾燥

前処理後、試料中の炭素を燃焼して二酸化炭素に変え、これを真空ライン内で液体窒素、ドライアイス、メタノール、n-ペンタンを用いて精製し、高純度の二酸化炭素を回収した。こうして得られた二酸化炭素を鉄触媒による水素還元法でグラファイト粉末とし、アルミニウム製のターゲットホルダーに入れてプレス機で圧入しグラファイトターゲットを作製した。これらのターゲットをタンデトロン加速器質量分析計のイオン源にセットして測定を行った。測定試料と方法を表1にまとめた。

表1 測定試料及び処理

試料番号	試料	種類	前処理・調整
No.1	流路17	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄
No.2	流路17	種実 (トチノキ)	酸-アルカリ-酸洗浄

※AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

3. 結果

年代測定の結果を表2に示す。

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は国際的慣例によりLibbyの5568年を使用した（実際の半減期は5730年）。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に標準化することによって得られる年代である。

4) 暦年代 Calendar Age

^{14}C 年代測定値を実際の年代値（暦年代）に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正する必要がある。暦年較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値およびサンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新の較正曲線であるIntCal04ではBC24050年までの換算が可能である（樹木年輪データはBC10450年まで）。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ （68%確率）と2 σ （95%確率）は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。

表2 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	^{14}C 年代 ¹⁾ (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ ²⁾ (‰)	補正 ^{14}C 年代 ³⁾ (年 BP)	暦年代（西暦） ⁴⁾
No.1	232351	2910 ± 40	-25.5	2900 ± 40	交点：cal BC1080 1 σ ：cal BC1130 ~ 1010 2 σ ：cal BC1250 ~ 1240, BC1220 ~ 980
No.2	232352	3760 ± 40	-26.6	3730 ± 40	交点：cal BC2140 1 σ ：cal BC2200 ~ 2120, BC2090 ~ 2040 2 σ ：cal BC2280 ~ 2250, BC2220 ~ 2020

4. 所見

鍛冶屋D遺跡で出土した土器ならびに種実について加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定を行った結果、土器では2900±40年BP（2 σ の暦年代でBC1250~1124年、BC1220~980年）、種実では3730±40年BP（同BC2280~2250年、BC2220~2020年）の年代値が得られた。

文献

- Paula J Reimer et al., (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.
- 尾寄大真 (2005) INTCAL98からIntCal04へ. 学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジアNo.3 -炭素年代測定による高精度編年体系の構築-, p.14-15.
- 中村俊夫 (1999) 放射性炭素法. 考古学のための年代測定学入門. 古今書院, p.1-36.

II. 種実同定

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

ここでは、鍛冶屋D遺跡で出土した種実類の同定から、堆積当時の周辺植生を検討する。

2. 試料

試料は、鍛冶屋D遺跡より出土した水洗選別済みの種実類である。内訳は、6区No.16河道（本報告書、流路17）（縄文時代晩期中葉）の①から④の4点、7区No.34河道（本報告書、流路21）（縄文時代晩期中葉）の1点、6区No.32河道（本報告書、流路25）（弥生時代中期中葉）の1点、計6点である。

3. 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

4. 結果

(1) 分類群

樹木29、樹木・草本1、草本7の計37分類群が同定された。学名、和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定の根拠となる形態的特徴を記載する。

[樹木]

カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. 種子 イチイ科

茶褐色で長卵形を呈す。表面には縦方向の隆起が走る。断面は円形である。

イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* K.Koch 種子 イヌガヤ科

茶褐色で長楕円形を呈す。表面には顆粒状の隆起がある。断面は両凸レンズ形である。

ヤマモモ *Myrica rubra* Sieb. et Zucc. 核 ヤマモモ科

茶褐色で楕円形を呈し、両端がややとがる。一端にへそがあり、表面は粗い。断面は扁平である。

クマシデ属 *Carpinus* 果実 カバノキ科

灰褐色で狭卵形や狭楕円形を呈し、光沢はない。この分類群は表面に縦の筋があることで同定するが、ここでは保存状態が悪く縦の筋の確認が出来なかったため、属レベルまでの同定である。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. 堅果片 ブナ科

堅果は三角状扁円形を呈す。一側面は円みがあり、反対面は平らな形が多い。ここで同定されたものは全て破片である。

コナラ属アカガシ亜属(イチイガシを含む) *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* (include *Quercus gilva* Blume) 堅果・殻斗・幼果 ブナ科

堅果は黒褐色で楕円形を呈し、先端が壊れ欠損しているものが多い。先端の残るもののうち、花柱が直上かやや内側に向き、殻斗壁が厚く、殻斗が黒褐色でゆるやかな腕状を呈し、輪状紋があり、基部から先端に向かって直線的な腕状を呈するものは、イチイガシ *Quercus gilva* Blume に同定される。幼果は黒褐色で輪状紋の殻斗に包まれている。上端は花柱が突出しているものもみられる。

ムクノキ *Aphananthe aspera* Planch. 核 ニレ科

淡褐色で広卵形を呈し、一端に白色の突起がある。表面には微細な網目模様がある。断面は扁平～楕円形である。

ケヤキ *Zelkova serrata* Makino 果実 ニレ科

黒褐色で、側面観は腎形、上面観は円形を呈する。基部に円形のへそがあり、そこから灰白色の繊維が放射状に発達する。

ヤマグワ *Morus australis* Poir. 種子 クワ科

茶褐色で広倒卵形を呈し、基部に突起がある。表面はやや粗い。

サクラ属サクラ節 *Prunus* sect. *Pseudocerasus* 核 バラ科

黄褐色で楕円形を呈し、下端が大きくくぼむ。側面に縫合線が走る。表面はやや粗い。

フジ属 *Wisteria* 豆果片 マメ科

狭倒卵形で扁平を呈す。ピロード状に短毛を蜜生し、果皮は厚い。すべて破片である。

キハダ *Phellodendron amurense* Rupr. 種子 ミカン科

黒色で半円形を呈し、一側面に細長いへそがある。表面には微細な網目模様がある。

イヌザンショウ *Zanthoxylum schinifolium* Sieb. et Zucc. 種子 ミカン科

種子は黒褐色で楕円状球形を呈す。側面に長く深いへそがある。表面にやや大きな網目模様がある。

カラスザンショウ *Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et Zucc. 種子 ミカン科

黒色で楕円形を呈し、側面に長く深いへそがある。表面には大きい網目模様がある。

センダン *Melia azedarach* L. var. *subtripinnata* Miq. 核 センダン科

黒褐色で楕円形を呈し、一端は円孔となる。縦に5本の発達した稜が走る。

アカメガシワ *Mallotus japonicus* Muell. et Arg. 種子 トウダイグサ科

黒色で球形を呈し、「Y」字状のへそがある。表面にはいぼ状の突起が密に分布する。

カエデ属 *Acer* 果実 カエデ科

茶褐色で楕円形を呈す。翼はほぼ残存していない。果皮には弱い縦線が走る。断面は扁平である。

トチノキ *Aesculus turbinata* Blume 種子片・果皮片・幼果 トチノキ科

種子は黒色と茶褐色の部分とに分かれ、黒色の部分に光沢がある。ほぼ破片である。果皮は三片に分かれたものがほとんどである。黒色で楕円形を呈し、両端がややとがる。表面はざらついている。幼果は茶褐色で倒卵形を呈す。小さい物から大きいものまでみられる。

ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. 種子 ムクロジ科

灰黒色で円状球形を呈し、線形のへそがみられる。種子のまわりに一部果肉片が残存しているもの

もみられる。

ブドウ属 *Vitis* 種子 ブドウ科

茶褐色で卵形を呈し、先端がとがる。腹面には二つの孔があり、背面には先端が楕円形のへそがある。

ヤブツバキ *Camellia japonica* L. 種子 ツバキ科

種子は黒色で三角状楕円形を呈し、一端に点状のへそがある。

サカキ *Cleyara japonica* Thunb. 種子 ツバキ科

広卵状円形などを呈する。へその一端近くは嘴状。側面は長楕円形（やや両凸レンズ状）である。

ヒサカキ *Eurya* Thunb. 種子 ツバキ科

種子は心臓形を呈する。背面は長楕円状・狭三角形など種々な形がある。どの形もへその方に薄い。へそを中心に楕円形や円形凹点による網目模様が指紋状に広がる。

ミズキ *Cornus controversa* Hemsley 核 ミズキ科

黒褐色で横長の楕円形を呈す。表面には縦方向に深い筋が走る。

クマノミズキ *Cornus brachypoda* C. A. Mey. 核 ミズキ科

淡褐色で球形を呈す。表面に一本の広い溝がめぐり、数本の細い縦筋が走る。

エゴノキ *Styrax japonica* Sieb. et Zucc. 核 エゴノキ科

黒褐色で楕円形を呈し、下端にへそがある。表面に3本の溝が走る。

ハクウンボク *Styrax obassia* Sieb. et Zucc. 核 エゴノキ科

黒褐色で楕円形を呈し、下端にへそがある。表面に3本の浅い溝と、低い稜がある。

クサギ *Clerodendrum trichotomum* Thunb. 核 クマツヅラ科

暗褐色で倒卵形を呈す。断面は三日月形。腹部の一端には発芽口があり、背面の表面には大きな網目状の模様がある。

ニワトコ *Sambucus sieboldiana* Blume ex graedn 種子 スイカズラ科

黄褐色～茶褐色で楕円形を呈す。一端にへそがある。表面には横方向の隆起がある。

[樹木・草本]

ウコギ科 *Araliaceae* 種子

淡褐色ないし茶褐色で、半月状を呈する。断面は扁平、向軸側はほぼ直線状になり、肺軸側には浅い溝が2～3本走る。表面はざらつく。

[草本]

カヤツリグサ科 *Cyperaceae* 果実

黒褐色で倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。

カナムグラ *Humulus japonicus* Sieb. et Zucc. 種子 クワ科

黒色で円形を呈し、断面形は両凸レンズ状である。側面には心形を呈するへそがある。

イシミカワ *Polygonum perfoliatum* L. 果実 タデ科

黒色でやや光沢がある。円形を呈し、一端にへそ部がある。断面は円形に近い三角形である。完形ではあるが潰れている。

タデ属 *Polygonum* 果実 タデ科

黒褐色で先端がとがる卵形を呈す。表面にはやや光沢があり、断面は三角形である。

マルミノヤマゴボウ *Phytolacca japonica* Makino 種子 ヤマゴボウ科

黒色で扁平楕円形を呈す。一端にくぼみがあり、ここから褐色の突起が出る。表面には光沢があり滑らかで、指紋状の模様がある。

ツヅラフジ *Sinomenium acutum* Rehd. et Wils. 種子 ツヅラフジ科

馬蹄形を呈する。中央部の中心に小さい穴を持つ大型凹みがある。凹みの縁は高く、腎臓状円形である。全縁は狭翼状の稜になり、中心部の腎臓状円形の縁とは互いに連結する隆条が直角に列生する。

ノブドウ *Ampelopsis brevipedunculata* Trautv. var. *heterophylla* Hara 種子・種子片 ブドウ科

茶褐色で広卵形を呈す。腹面に「ハ」字状の孔が2つあり、背面のカラザは長く伸びる。

・不明種実

残りが悪く、表面が観察できないため不明種実とする。

・不明幼果

未成熟の幼果であり、発達しておらず特徴が観察できないため不明幼果とする。

・不明

種実かどうか不明のため、不明とする。

(2) 種実群集の特徴

・ 6区No.16河道 (本報告書、流路17) (縄文時代晩期中葉)

1) ①

カヤ2、イヌガヤ4、クマシデ属24、コナラ属アカガシ亜属148、ムクノキ24、ケヤキ190、サクラ属サクラ節22、フジ属16、キハダ42、イヌザンショウ3、カラスザンショウ38、センダン21、アカメガシワ29、トチノキ138、ムクロジ90、ブドウ属5、ヤブツバキ11、ミズキ12、クマノミズキ2、エゴノキ240、クサギ2、カナムグラ1、マルミノヤマゴボウ1、ツヅラフジ1、ノブドウ1が同定された。

2) ②

カヤ4、イヌガヤ2、ヤマモモ1、クマシデ属4、クリ4、コナラ属アカガシ亜属139、ムクノキ8、ケヤキ42、サクラ属サクラ節16、フジ属2、カラスザンショウ17、センダン15、アカメガシワ18、トチノキ119、ムクロジ111、ヤブツバキ3、ミズキ3、クマノミズキ2、エゴノキ61、カナムグラ1、イシミカワ1、ツヅラフジ2、ノブドウ1が同定された。

3) ③

カヤ5、イヌガヤ4、クマシデ属1、コナラ属アカガシ亜属267、ムクノキ18、ケヤキ2、サクラ属サクラ節6、フジ属10、キハダ1、カラスザンショウ6、センダン21、アカメガシワ5、トチノキ195、ムクロジ125、ヤブツバキ2、ミズキ5、クマノミズキ4、エゴノキ51、カナムグラ1が同定された。

4) ④

カヤ3、イヌガヤ2、ヤマモモ1、クマシデ属2、コナラ属アカガシ亜属88、ムクノキ4、ケヤキ19、サクラ属サクラ節7、フジ属8、キハダ15、カラスザンショウ2、センダン14、アカメガシワ3、

カエデ属1、トチノキ53、ムクロジ75、ヤブツバキ3、ミズキ2、クマノミズキ1、エゴノキ178、カヤツリグサ科2が同定された。

・ 7区No.34河道（本報告書、流路21）（縄文時代晩期中葉）

コナラ属アカガシ亜属9、トチノキ26、ムクロジ3、エゴノキ5が同定された。

・ 6区No.32河道（本報告書、流路25）（弥生時代中期中葉）

コナラ属アカガシ亜属11、ケヤキ5、ヤマグワ2、キハダ4、カラスザンショウ1、アカメガシワ6、トチノキ11、ブドウ2、サカキ4、ヒサカキ2、エゴノキ15、クサギ1、ニワトコ5、ウコギ科6、タデ属4、ノブドウ1が同定された。

5. 種実群集から推定される植生と環境

(1) 6区No.16河道（本報告書、流路17）（縄文時代晩期中葉）

樹木がほとんどであり、多い分類群からコナラ属アカガシ亜属（イチイガシを含む）、トチノキ、エゴノキ、ムクロジ、ケヤキ、センダン、カラスザンショウ、アカメガシワ、ムクノキ、サクラ属サクラ節、フジ属、クマシデ属、ミズキ、ヤブツバキ、カヤ、イヌガヤ、クマノキズキ、ブドウ属、クリ、イヌザンショウ、ヤマモモ、クサギ、カエデ属と続く。

最も多いコナラ属アカガシ亜属はイチイガシを含み、照葉樹林の主要素である。次に多いトチノキ、エゴノキ、ムクロジは河畔および河畔の湿地に生育し、ケヤキ、カヤ、イヌガヤもそれに連なる適潤地に生育する。カラスザンショウは二次林要素であり、アカメガシワ、ミズキ、クマノミズキ、クマシデ属も自然度が低い環境にも生育し、二次林要素にもなる。キハダ、サクラ節、ヤブツバキは森林に普通に生育する。センダンとヤマモモは沿岸の森林に生育する。草本は極めて少なく、カヤツリグサ科、カナムグラ、イシミカワ、マルミノヤマゴボウ、ツヅラフジ、ノブドウがあり、林縁の要素とみられる。

以上のことから、6区No.16河道（本報告書、流路17）（縄文時代晩期中葉）の周辺地域は、樹木が多く森林状態であったとみなされ、コナラ属アカガシ亜属を主とする照葉樹林が示唆される。周辺は特に低地から低山の主要相であるイチイガシ林の原生林（一次林）が分布し、キハダ、サクラ節、ヤブツバキもその要素である。河畔には、トチノキ、エゴノキ、ムクロジ、ケヤキを主にカヤ、イヌガヤが生育し、河川堆積である本試料に多く反映されたとみなされる。特に幼果を含むコナラ属アカガシ亜属（イチイガシを含む）とトチノキは、現地性が高いか近接して多量に生育していたことが示唆される。近隣に人為干渉によりカラスザンショウ、アカメガシワを主にミズキ、クマノミズキ、クマシデ属の二次林が形成されていた。また、沿岸部の森林に生育するセンダンとヤマモモが含まれる。

(2) 7区No.34河道（本報告書、流路21）（縄文時代晩期中葉）

すべて樹木であり、多い分類群からトチノキ、コナラ属アカガシ亜属、エゴノキと続く。数量が少ないが6区No.16河道（本報告書、流路17）（縄文時代晩期中葉）と同じ群集とみなされる。

(3) 6区No.32河道（本報告書、流路25）（弥生時代中期中葉）

やや樹木が多く、エゴノキ、コナラ属アカガシ亜属、トチノキ、アカメガシワ、ケヤキ、ニワトコ、キハダ、サカキ、ヤマグワ、ブドウ属、ヒサカキ、カラスザンショウ、クサギと続く。草本ではタデ

属、ノブドウが出現する。エゴノキ、トチノキ、ケヤキ、ヤマグワは河畔の要素で、コナラ属アカガシ亜属、サカキ、ヒサカキは照葉樹林要素ある。アカメガシワ、ニワトコ、カラスザンショウ、クサギは二次林要素である。数量が少なく性格はつかみにくい、縄文時代晩期中葉と類似し、河畔林、照葉樹林、二次林が分布し、草本は少ない。

6. まとめ

鍛冶屋D遺跡では、とくに6区No.16河道（本報告書、流路17）より多量の樹木を主とする種実遺体が検出された。照葉樹林の主要素であるイチイガシを含むコナラ属アカガシ亜属が最も多く、次いで河畔および河畔の湿地から適潤地に生育するトチノキ、エゴノキ、ムクロジ、ケヤキが多く、二次林要素であるカラスザンショウがやや多かった。周辺地域は、樹木が多く森林状態であり、低地から低山の主要相であるイチイガシ林の原生林（一次林）が分布し、河畔にトチノキ、エゴノキ、ムクロジ、ケヤキが分布し、人為干渉によりカラスザンショウ、アカメガシワなども増加していた。7区No.34河道（本報告書、流路21）（縄文時代晩期中葉）および6区No.32河道（本報告書、流路25）（弥生時代中期中葉）もほぼ同様の環境の可能性はあるが、検出された種実遺体の数量が少なく、明らかな傾向をみるには至らなかった。

参考文献

- 笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.
南木睦彦（1992）低湿地遺跡の種実，月刊考古学ジャーナルNo.355，ニューサイエンス社，p.18-22.
南木睦彦（1993）葉・果実・種子，日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p.276-283.
渡辺誠（1975）縄文時代の植物食，雄山閣，187p.

表1 鍛冶屋D遺跡における種実同定結果

学名	分類群	和名	部位	6区No.16				7区	6区
				①	②	③	④	No.34	No.32
Arbor		樹木							
<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.		カヤ	種子	2	4	5	3		
<i>Cephalotaxus harringtonia</i> K. Koch		イヌガヤ	種子	4	2	4	2		
<i>Myrica rubra</i> Sieb. et Zucc.		ヤマモモ	核		1		1		
<i>Carpinus</i>		クマシデ属	果実	24	4	1	2		
<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.		クリ	堅果片		4				
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i> (include <i>Quercus gilva</i> Blume)		コナラ属アカガシ亜属 (イチイガシを含む)	堅果	148	139	267	88		
			堅果片	(++)	(++)	(+++)	(++)	7	
			殻斗	(++)	(++)	(++)	(++)	4	
			幼果	(++)	(++)	(+++)	(++)	2	
<i>Aphananthe aspera</i> Planch.		ムクノキ	核	24	8	18	4		
<i>Zelkova serrata</i> Makino		ケヤキ	果実	190	42	2	19	5	
<i>Morus australis</i> Poir.		ヤマグワ	種子					2	
<i>Prunus</i> sect. <i>Pseudocerasus</i>		サクラ属サクラ節	核	22	16	6	7		
<i>Wisteria</i>		フジ属	豆果片	16	2	10	8		
<i>Phellodendron amurense</i> Rupr.		キハダ	種子	42		1	15	4	
<i>Zanthoxylum schinifolium</i> Sieb. et Zucc.		イヌザンショウ	種子	3					
<i>Zanthoxylum ailanthoides</i> Sieb. et Zucc.		カラスザンショウ	種子	38	17	6	2	1	
<i>Melia azedarach</i> L. var. <i>Subtripinnata</i> Miq.		センダン	核	21	15	21	14		
<i>Mallotus japonicus</i> Muell. et Arg.		アカメガシワ	種子	29	18	5	3	6	
<i>Acer</i>		カエデ属	果実				1		
<i>Aesculus turbinata</i> Blume		トチノキ	種子片	67	50	77	32	20	
			果皮片	34	37	105	36	5	
			幼果	37	32	13	14	1	
<i>Sapindus mukorossi</i> Gaertn.		ムクロジ	種子	90	111	125	75	3	
<i>Vitis</i>		ブドウ属	種子	5					
			種子片					2	
<i>Camellia japonica</i> L.		ヤブツバキ	種子	11	3	2	3		
<i>Cleyera japonica</i> Thunb.		サカキ	種子					4	
<i>Eurya japonica</i> Thunb.		ヒサカキ	種子					2	
<i>Swida controversa</i> Sojak		ミズキ	核	12	3	5	2		
<i>Cornus brachypoda</i> C.A. Mey.		クマノミズキ	核	2	2	4	1		
<i>Styrax japonica</i> Sieb. et Zucc.		エゴノキ	核	240	61	51	178	5	
<i>Clerodendrum trichotomum</i> Thunb.		クサギ	核	2				1	
<i>Sambucus racemosa</i> L. subsp. <i>sieboldiana</i> Hara		ニワトコ	核					5	
Arbor-Herb		樹木・草本							
Araliaceae		ウコギ科	種子					6	
Herb		草本							
Cyperaceae		カヤツリグサ科	果実				2		
<i>Humulus scandens</i> Merr.		カナムグラ	種子	1	1	1			
<i>Polygonum prfoliatum</i> L.		イシミカワ	種子		1				
<i>Polygonum</i>		タデ属	果実					4	
<i>Phytolacca japonica</i> Makino		マルミノヤマゴボウ	種子	1					
<i>Sinomenium acutum</i> Rehd. et Wils.		ツヅラフジ	種子	1	2				
<i>Ampelopsis brevipedunculata</i> Trautv. var. <i>Heterophylla</i> Hara		ノブドウ	種子	2	1				
			種子片					1	
Total		合計		1068	576	729	512	43	
		不明種実		2	4			2	
Unknown		不明幼果		13	12		70		
		不明		4		2		11	
備考 (その他)		昆虫片、木片、芽、葉片、石、 マンネンタケ科		(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	

草 本

樹木・草本

樹 木

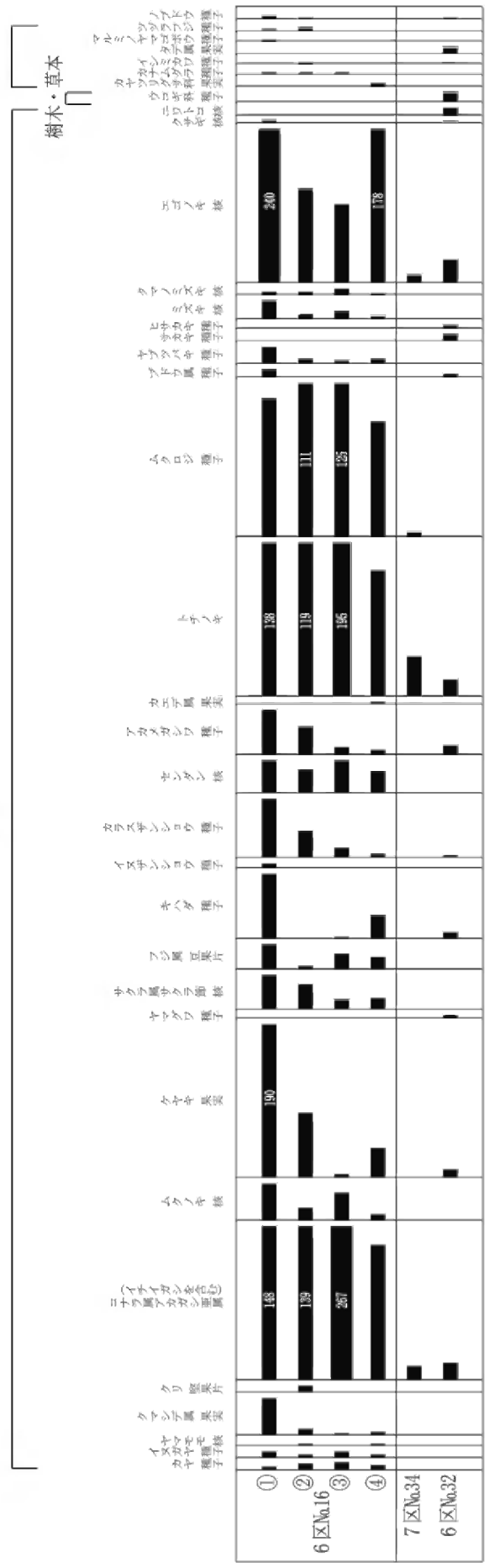


図1 鍛冶屋D遺跡における種実ダイアグラム

(□：多い _：やや多い)

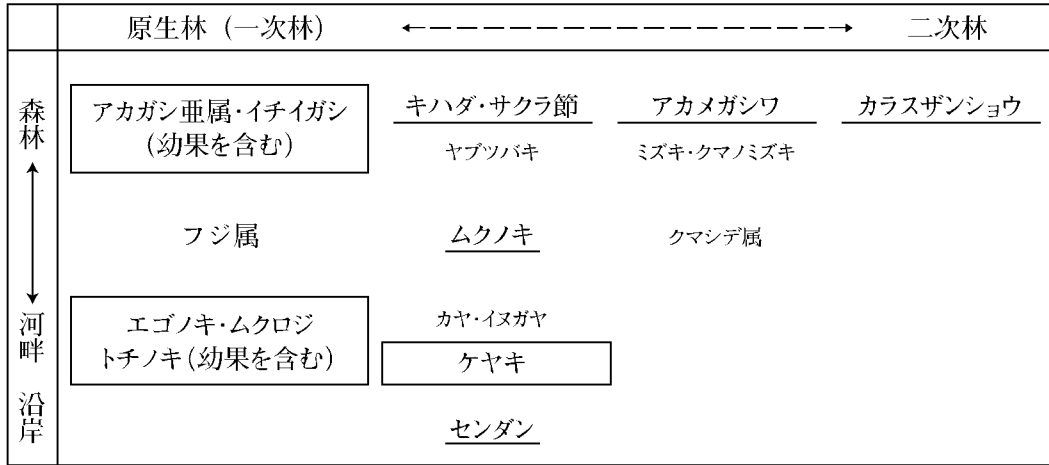
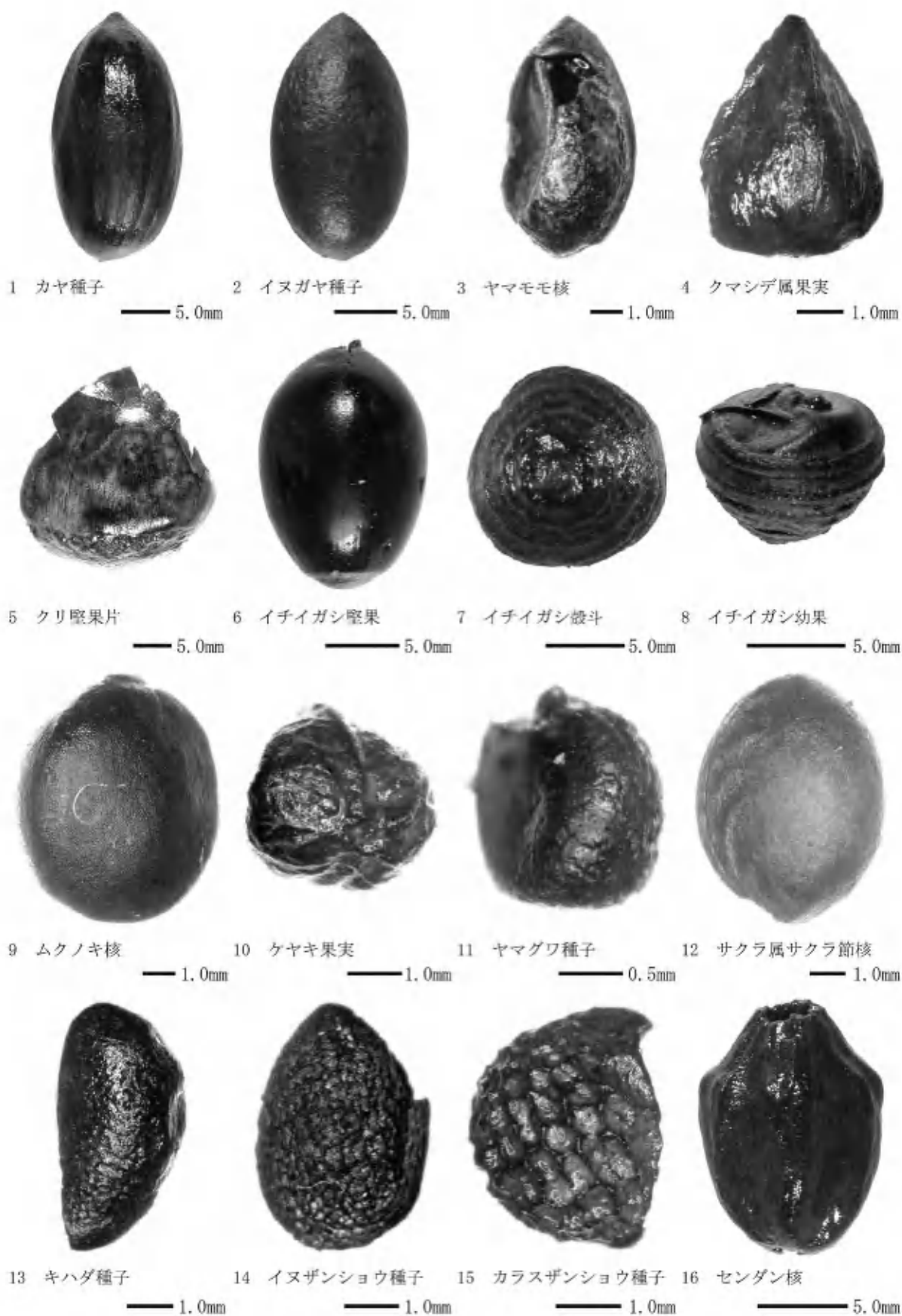
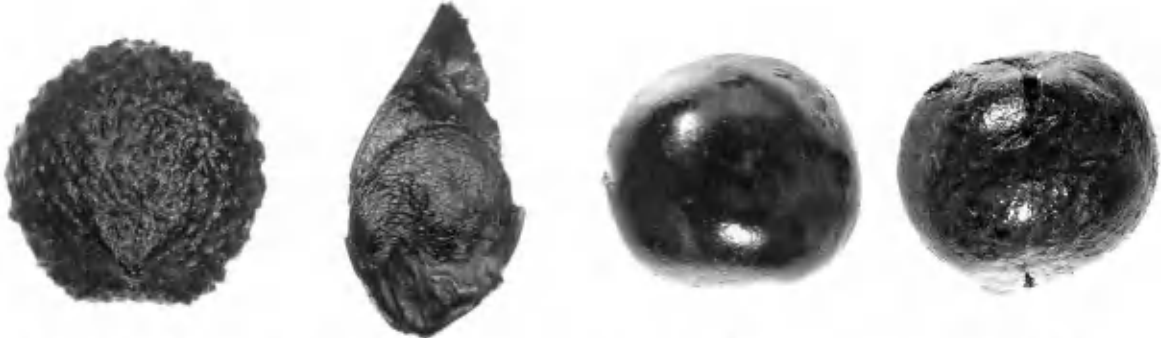


図2 鍛冶屋D遺跡縄文時代晩期中葉の主要植物(種実遺体)の生態性

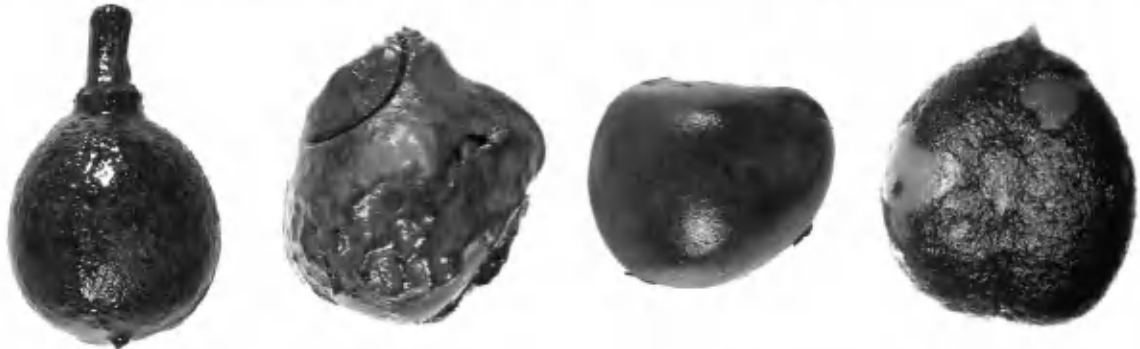
鍛冶屋D遺跡の種実 I



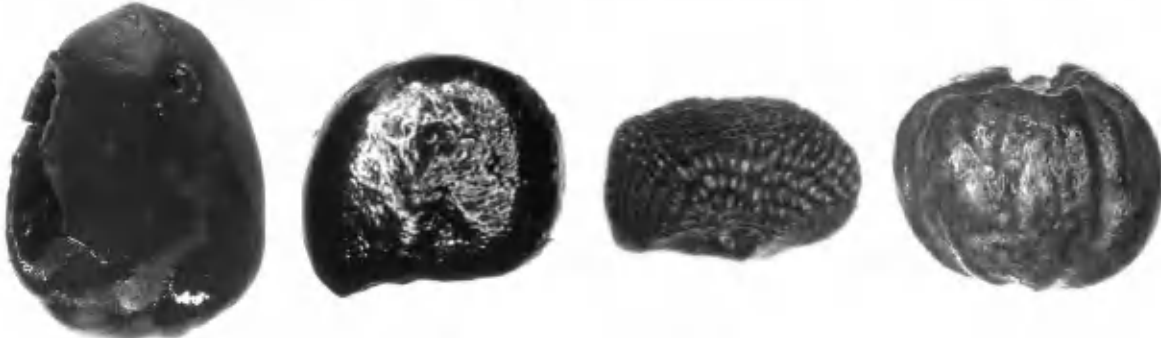
鍛冶屋D遺跡の種実 II



17 アカメガシワ種子 1.0mm 18 カエデ属果実 5.0mm 19 トチノキ種子 5.0mm 20 トチノキ果皮 5.0mm



21 トチノキ幼果 5.0mm 22 ムクロジ果実 5.0mm 23 ムクロジ種子 5.0mm 24 ブドウ属種子 1.0mm



25 ヤブツバキ種子 5.0mm 26 サカキ種子 1.0mm 27 ヒサカキ種子 0.5mm 28 ミズキ核 1.0mm



29 クマノミズキ核 1.0mm 30 エゴノキ核 1.0mm 31 クサギ核 1.0mm 32 ニワトコ核 1.0mm

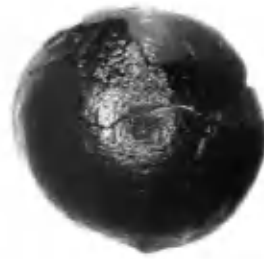
鍛冶屋D遺跡の種実 III



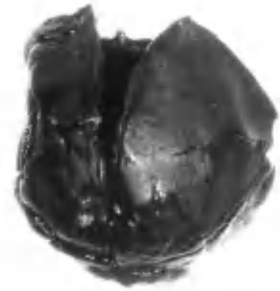
33 烏コギ科種子
0.5mm



34 カヤツリグサ科果実
1.0mm



35 カナムグラ種子
1.0mm



36 イシミカワ種子
1.0mm



37 タデ属果実
1.0mm



38 マルミノ
ヤマゴボウ種子
1.0mm



39 ツツラフジ種子
1.0mm



40 ノブドウ種子
1.0mm



41 フジ属豆果片
10.0mm



42 フジ属豆果片
10.0mm

第3表 遺物観察表

1 土器観察表

掲載番号	種別	器種	特徴	色調	胎土
1	縄文土器	深鉢	外面ユビオサエ?。内面ナデ。	灰白 (10YR8/2)	粗砂
2	縄文土器	深鉢	口唇部刻目?。口縁部外面沈線と円形刺突。	にぶい黄橙 (10YR7/3)	粗砂
3	縄文土器	深鉢	口頸部外面二枚貝条痕のち刺突文、爪形文、内面ナデ。	灰黄褐 (10YR5/2)	細砂
4	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。内外面ナデ?。	にぶい黄橙 (10YR7/2)	細砂
5	縄文土器	深鉢	波状口縁。口唇部刻目。外面タテの刺突文。	灰黄褐 (10YR6/2)	細砂
6	縄文土器	深鉢	外面剥落、横方向の爪形文。	灰白 (2.5Y7/1)	細砂
7	縄文土器	深鉢	口縁端部内面凹線?。内外面ナデ。	灰黄褐 (10YR5/2)	粗砂
8	縄文土器	深鉢	口縁端部内面凹線。内外面ナデ。	灰黄褐 (10YR5/2)	細砂
9	縄文土器	深鉢	口頸部と体部の境外面に沈線、体部外面ケズリ。	灰白 (2.5Y8/1)	細砂
10	縄文土器	深鉢	口頸と体部の境外面に沈線、体部外面ケズリ。	灰黄褐 (10YR5/2)	細砂
11	縄文土器	深鉢	口唇部沈線。	灰黄 (2.5Y7/2)	細砂
12	縄文土器	深鉢	口唇部沈線1条。外面沈線3条。	灰黄 (2.5Y7/2)	細砂
13	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。外面二枚貝条痕、貼付刻目突帯。	灰黄褐 (10YR6/2)	粗砂
14	縄文土器	深鉢	口縁端部内外面沈線。口頸部と体部の境外面に沈線。	灰白 (2.5Y8/1)	粗砂
15	縄文土器	深鉢	口縁部外面タテの多条沈線。	灰黄 (2.5Y7/2)	細砂
16	縄文土器	深鉢	内外面ナデ?。	にぶい黄橙 (10YR7/3)	微砂
17	縄文土器	深鉢	口縁端部内面刻目?、沈線1条。	灰黄褐 (10YR4/2)	微砂
18	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。口頸部外面二枚貝条痕、内面ナデ。	黄灰 (2.5Y6/1)	微砂
19	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。口頸部と体部の境外面に横方向の刺突文。	暗灰黄 (2.5Y5/2)	微砂
20	縄文土器	深鉢	外面横方向の爪形文、ケズリ。	灰黄 (2.5Y6/2)	細砂
21	縄文土器	深鉢	口縁端部外面に貼付刻目突帯。	灰黄褐 (10YR5/2)	微砂
22	弥生土器	高杯	外面磨滅。内面ハケメ。	橙 (5YR6/6)	微砂
23	須恵器	高杯	内外面ヨコナデ。	黄灰 (2.5Y5/1)	微砂
24	弥生土器	壺	口唇部凹線、竹管文。	にぶい橙 (7.5YR7/4)	細砂
25	弥生土器	壺	口唇部凹線2条。口縁端部欠損。	灰白 (2.5Y8/1)	細砂
26	土師器	甕	口縁端部外面クシ描き沈線7条。体部外面上半ハケメ、下半ミガキ、内面ユビオサエ、ケズリ。	灰白 (10YR8/2)	微砂
27	土師器	甕	口縁端部外面クシ描き沈線9条。肩部体部外面刺突2個。体部外面ハケメ、ミガキ、内面ユビオサエ、ケズリ。	にぶい橙 (7.5YR7/3)	細砂
28	土師器	壺	頸部外面工具痕?。体部外面ハケメ、内面ユビオサエ、ケズリ。	にぶい黄橙 (10YR7/2)	粗砂
29	土師器	高杯	外面ハケメ。内面ケズリ、ハケメ。	灰黄 (2.5Y7/2)	細砂
30	弥生土器	甕	口唇部凹線1条。体部内面ケズリ。	灰白 (10YR8/2)	細砂
31	弥生土器	甕	口縁端部凹線2条。体部内面ケズリ。	橙 (5YR7/6)	細砂
32	弥生土器	甕	口唇部凹線3条。体部外面タテのミガキ、内面ケズリ。	灰白 (2.5Y7/1)	細砂
33	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。体部外面ハケメ、内面ユビオサエ、ケズリ。	橙 (7.5YR7/6)	細砂
34	土師器	高杯	杯部外面ハケメ、黒斑、内面ハケメのちナデ。	灰黄 (2.5Y7/2)	細砂
35	土師器	高杯	杯部内外面ナデ。脚部外面板ナデ?。穿孔3個。	橙 (7.5YR7/6)	細砂
36	土師器	壺	口縁端部外面凹線。頸部と体部の境に円形。頸部内面ミガキ。体部外面ミガキ、内面ケズリ。	にぶい黄橙 (10YR7/3)	細砂
37	弥生土器	甕	口唇部凹線1条。体部外面磨滅、内面ケズリ。	にぶい黄橙 (10YR7/2)	粗砂

掲載番号	種別	器種	特徴	色調	胎土
38	弥生土器	壺	外面：頸部タテハケメのち9条の沈線、肩部ヨコミガキ。内面：指オサエ。	灰白 (2.5Y8/2)	細砂
39	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。体部内面ケズリ。	にぶい橙 (7.5YR6/4)	細砂
40	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。体部外面ハケメ、内面ケズリ。	にぶい黄橙 (10YR7/2)	粗砂
41	弥生土器	甕	口唇部凹線4条。	にぶい黄橙 (10YR7/3)	細砂
42	弥生土器	甕	口唇部凹線2条。体部内面ケズリ。	にぶい黄橙 (10YR7/3)	粗砂
43	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。体部内面ケズリ。	灰白 (10YR7/1)	細砂
44	弥生土器	甕	内面ケズリ。	灰黄 (2.5Y7/2)	細砂
45	弥生土器	?	口唇部2条の凹線。外面：凹線とクシ描き波状文。	にぶい橙 (7.5YR7/4)	微砂
46	弥生土器	鉢	外面：口縁部指オサエ、体部ハケナデ。内面：指オサエとナデ。	にぶい橙 (7.5YR7/4)	粗砂
47	弥生土器	高杯	脚端部凹線2条。外面クシ描き文、内面ケズリ。	灰黄 (2.5Y7/2)	細砂
48	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。体部外面不詳、内面ケズリ。	にぶい黄橙 (10YR7/2)	細砂
49	弥生土器	甕	口唇部凹線2条。体部外面ハケメ、内面ケズリ。	灰黄褐 (10YR6/2)	細砂
50	弥生土器	甕	口縁部凹線3条、ヨコナデ。体部外面剥落、内面ケズリ。	にぶい黄橙 (10YR7/3)	粗砂
51	弥生土器	甕	口唇部凹線3条。体部外面ハケナデ、内面ユビオサエ、ハケメ。	灰黄 (2.5Y7/2)	細砂
52	弥生土器	鉢	口縁部ヨコナデ。体部外面磨滅、内面ミガキ。	灰黄 (2.5Y7/2)	粗砂
53	土師器	甕	口唇部クシ描き沈線。体部内面ケズリ。	灰白 (2.5Y8/1)	微砂
54	弥生土器	高杯?	口縁部外面ハケメ、内面ミガキ。	橙 (5YR6/6)	粗砂
55	土師器	高杯	脚部外面ミガキ、内面シボリ、ミガキ。	灰黄 (2.5Y7/2)	細砂
56	土師器	高杯	杯部内外面ハケメ、穿孔3個。	にぶい黄橙 (10YR7/3)	細砂
57	須恵器	杯	内外面ヨコナデ。外面自然釉。	灰白 (N7/0)	微砂
58	須恵器	杯	天井部ケズリ、他はヨコナデ。	灰 (N4/0)	微砂
59	須恵器	杯	内外面ヨコナデ。	灰 (N6/0)	微砂
60	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。	にぶい黄橙 (10YR6/3)	微砂
61	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。底部外面ナデ?。	にぶい黄橙 (10YR6/3)	微砂
62	須恵器	甕	体部外面平行タタキ、内面同心円タタキ・平行タタキ。	暗青灰 (5BG4/1)	細砂
63	土師器	小皿	口縁部ヨコナデ。底部外面ヘラ切り、板目。	にぶい橙 (7.5YR6/4)	微砂
64	土師器	小皿	口縁部ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	にぶい橙 (7.5YR7/3)	微砂
65	土師器	小皿	口縁部ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	にぶい橙 (7.5YR7/3)	微砂
66	土師器	小皿	口縁部ヨコナデ。底部外面糸切り。	灰白 (10YR8/2)	微砂
67	須恵器	甕	外面格子目タタキ。内面平行タタキ。	灰 (N5/0)	微砂
68	土師器	小皿	口縁部ヨコナデ。底部外面磨滅。	にぶい黄橙 (10YR7/3)	微砂
69	土師器	椀	内黒?。貼付高台。	にぶい黄橙 (10YR6/3)	微砂
70	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。底部外面ナデ?。	にぶい橙 (7.5YR7/4)	微砂
71	土師器	杯	体部内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	にぶい黄橙 (10YR7/4)	細砂
72	土師器	椀	体部内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	にぶい黄橙 (10YR7/3)	細砂
73	土師器	椀	内外面ヨコナデ。貼付高台。	浅黄橙 (10YR8/3)	精良
74	土師器	杯	内外面ヨコナデ。貼付高台。	にぶい橙 (7.5YR6/4)	細砂
75	土師器	小皿	底部外面ヘラ切り。口縁部に煤付着。	にぶい黄橙 (10YR7/3)	細砂
76	土師器	高杯	脚部外面多角形の面取り。外面丹塗り。	灰白 (2.5Y8/2)	微砂
77	土師器	椀	内外面ヨコナデ。底部外面糸切り?	にぶい橙 (5YR7/4)	精良
78	土師器	椀	内外面ヨコナデ。貼付高台。	橙 (5YR6/6)	精良
79	土師器	椀	内外面ヨコナデ。貼付高台。	橙 (5YR7/8)	微砂

掲載番号	種別	器種	特徴	色調	胎土
80	土師器	椀	内外面ヨコナデ。貼付高台。	にぶい黄橙 (10YR7/3)	細砂
81	土師器	椀	口縁部ヨコナデ。貼付高台。内外面磨滅。	にぶい橙 (7.5YR7/4)	微砂
82	土師器	鍋	口縁部ヨコナデ。体部内外面粗いハケメ。	にぶい褐 (7.5YR6/3)	微砂
83	土師器	?	口縁部内外面ハケメ。体部内外面ハケメ。	浅黄 (2.5Y7/3)	細砂
84	須恵器	杯	見込みに沈線。底部外面ヘラ切り。貼付高台。	灰白 (N7/0)	微砂
85	須恵器	杯	口縁部ヨコナデ。貼付高台。	灰 (N6/0)	微砂
86	須恵器	杯	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。貼付高台。	灰白 (5Y8/1)	微砂
87	須恵器	杯	内外面ヨコナデ。貼付高台。	灰 (N6/0)	細砂
88	須恵器	杯	口縁部ヨコナデ。貼付高台。	灰白 (N7/0)	微砂
89	須恵器	杯	内外面ヨコナデ。貼付高台。	灰白 (N7/0)	微砂
90	須恵器	杯	内外面ヨコナデ。貼付高台。	灰白 (N7/0)	細砂
91	須恵器	杯	内外面ヨコナデ。貼付高台。	灰白 (N7/0)	微砂
92	須恵器	杯	内外面ヨコナデ。貼付高台。	灰白 (N7/0)	微砂
93	須恵器	杯	内外面ヨコナデ。貼付高台。	灰白 (N7/0)	微砂
94	須恵器	杯	口縁部ヨコナデ。貼付高台。	灰 (N6/0)	細砂
95	須恵器	杯	口縁部ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。貼付高台。	灰 (N6/0)	細砂
96	須恵器	椀	体部内外面ヨコナデ。底部外面糸切り。	灰白 (N7/0)	微砂
97	須恵器	椀	体部内外面ヨコナデ。底部外面糸切り。	灰白 (5Y8/1)	細砂
98	須恵器	壺	肩部外面貼付突帯2条。外面自然釉。	青灰 (5B5/1)	細砂
99	緑釉陶器	碗	削出高台。見込みに沈線1条。	灰白 (N7/0)	微砂
100	緑釉陶器	椀	削出高台。高台に刻目?。	灰オリーブ (5Y6/2)	微砂
101	灰釉陶器	耳皿	内外面ヨコナデ、釉。	明オリーブ灰 (2.5GY7/1)	微砂
102	灰釉陶器	椀	貼付高台。見込みは無釉。	灰白 (N7/0)	微砂
103	瀬戸焼	瓶子	外面に花文。	灰白 (N7/0)	微砂
104	白磁	碗	見込みは環状に釉をかき取っている。	灰白 (N8/0)	緻密
105	須恵器	脚付盤?	ナデ。	灰 (N6/0)	微砂
106	須恵器	瓦塔	ヨコナデ。	灰 (N5/0)	微砂
107	須恵器	円面碗	脚部に切り込み (透かし)	灰 (N6/0)	微砂
108	瓦	平瓦	凸面縄目タタキ。凹面布目、ナデ。	灰白 (2.5Y8/1)	粗砂
109	瓦	平瓦	凸面格子目タタキ。凹面布目。	灰 (N6/0)	粗砂
110	瓦	平瓦	凸面縄目タタキ。凹面布目、工具ナデ。	灰白 (2.5Y7/1)	粗砂
111	瓦	平瓦	凸面斜格子目タタキ。凹面布目。	灰黄 (2.5Y7/2)	粗砂
112	瓦	平瓦	凸面縄目タタキ。凹面布目。	灰褐 (5YR5/2)	粗砂
113	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面縦の知突文、内面ナデ。	灰黄色 (2.5Y7/2)	細砂
114	縄文土器	深鉢	口縁端部蒲鉾状突起、刻目。口頸部外面爪形文。	灰黄色 (2.5Y6/2)	細砂
115	縄文土器	深鉢?	口縁端部刻目。口頸部外面縦の知突文、内面ナデ。内面二枚貝条痕。外面剥落のため不詳。	灰黄色 (2.5Y6/2)	細砂
116	縄文土器	深鉢	口頸部外面横方向の爪形文。内面ナデ。	灰黄色 (2.5Y6/2)	細砂
117	縄文土器	深鉢	内外面とも磨滅のため不詳。くぼみ底。	灰黄色 (2.5Y7/2)	細砂
118	縄文土器	浅鉢	内外面剥落のため不詳。口縁端部内面貼付突帯。	褐灰色 (10YR5/1)	微砂
119	縄文土器	浅鉢	内外面ミガキ。口縁端部内面貼付突帯。	褐灰色 (10YR4/1)	微砂
120	縄文土器	浅鉢	内外面ミガキ。口縁端部内面貼付突帯。	灰黄褐色 (10YR5/2)	微砂

掲載番号	種別	器種	特徴	色調	胎土
121	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面ナデ、縦の爪形文、横の爪形文。体部外面ケズリ、内面ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	微砂
122	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面ナデ、波頂部から縦の爪形文、横の爪形文、内面ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	微砂
123	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。波頂部から縦の爪形文。口頸部外面横の爪形文。	にぶい黄色 (2.5YR7/3)	粗砂
124	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面横の爪形文、内外面ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	粗砂
125	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面ナデ、波頂部から縦の爪形文、横の爪形文。波頂部内面沈線。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	微砂
126	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面横の爪形文、内外面ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	微砂
127	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面ナデ、横の爪形文。体部外面ケズリ。内面不詳。	にぶい黄色 (2.5YR6/3)	微砂
128	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部内外面ナデ？。	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	細砂
129	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面縦の爪形文。	灰黄褐色 (10YR5/2)	微砂
130	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面二枚貝条痕、内面ナデ。	灰黄褐色 (10YR6/2)	微砂
131	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部内外面ナデ。	黒褐色 (2.5Y3/1)	微砂
132	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部内外面ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	微砂
133	縄文土器	深鉢	口縁端部。口頸部外面二枚貝条痕？、内面ナデ。	灰黄色 (2.5Y7/2)	細砂
134	縄文土器	深鉢	口頸部外面ナデ、横の爪形文。体部外面ケズリ。内面不詳。	灰黄褐色 (10YR5/2)	微砂
135	縄文土器	深鉢	口頸部外面縦の爪形文、横の爪形文。体部外面ケズリ、内面ナデ。	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	微砂
136	縄文土器	深鉢	口頸部外面横の爪形文。体部外面ケズリ、内面二枚貝条痕？。	にぶい黄色 (2.5YR6/3)	微砂
137	縄文土器	深鉢	凹み底。外面ケズリ。	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	細砂
138	縄文土器	浅鉢	突起部分。	灰黄色 (2.5Y7/2)	微砂
139	縄文土器	浅鉢	内外面ミガキ。	黄灰色 (2.5Y4/1)	微砂
140	縄文土器	深鉢	口縁部外面刻目貼付突帯、内面縄文 (RL)。	暗灰色 (N3/0)	細砂
141	縄文土器	深鉢	外面粗剛な縄文、内面ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	微砂
142	縄文土器	深鉢	外面磨消縄文。	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	微砂
143	縄文土器	深鉢	外面巻貝条痕、沈線文、内面巻貝条痕。	灰黄褐色 (10YR6/2)	細砂
144	縄文土器	深鉢	外面沈線、磨消縄文？、内面ナデ。	灰黄色 (2.5Y6/2)	粗砂
145	縄文土器	深鉢	体部外面巻貝条痕、内面ナデ。	灰黄褐色 (10YR6/2)	細砂
146	縄文土器	深鉢	体部外面磨消縄文、内面ナデ。上下・傾き不詳。	灰黄色 (2.5Y6/2)	細砂
147	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口縁部外面円形刺突文、横の沈線文。	灰黄色 (2.5Y6/2)	微砂
148	縄文土器	深鉢	外面沈線、磨消縄文、内面ナデ。	灰黄褐色 (10YR4/2)	細砂
149	縄文土器	浅鉢	口縁部外面凹線文、内面ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	微砂
150	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面ナデ、縦の爪形文、横の爪形文、内面ナデ。体部外面ケズリ。	灰黄褐色 (10YR6/2)	微砂
151	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面ナデ、波頂部から縦の爪形文、内面ナデ。	灰黄色 (2.5Y7/2)	微砂
152	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面ナデ、横の爪形文、内面ナデ。体部外面ケズリ。	灰黄色 (2.5Y6/2)	細砂
153	縄文土器	深鉢	口縁端部。口頸部外面ナデ、横の爪形文、内面ナデ。	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	細砂
154	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面ナデ、横の爪形文、内面ナデ。	灰黄色 (2.5Y7/2)	粗砂
155	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。体部外面二枚貝条痕、内面ナデ。内面ナデ？。	褐灰色 (10YR6/1)	微砂
156	縄文土器	深鉢	口縁端部ユビオサエ状刻目。口頸部内外面ナデ？。	灰黄色 (2.5Y6/2)	微砂
157	縄文土器	深鉢	体部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ナデ。	明赤褐色 (5YR5/6)	微砂
158	縄文土器	深鉢	内外面磨滅のため不詳。	灰白色 (10YR8/2)	細砂
159	縄文土器	深鉢	体部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ユビオサエ、ナデ。	灰白色 (10YR8/2)	細砂
160	縄文土器	深鉢	内外面ミガキ。	褐灰色 (10YR4/1)	微砂
161	縄文土器	浅鉢	内外面ミガキ。	灰黄色 (2.5Y6/2)	微砂

掲載番号	種別	器種	特徴	色調	胎土
162	縄文土器	浅鉢	口縁端部突起有り。口縁部穿孔1個。体部内外面ミガキ。	黒褐色(2.5Y3/1)	微砂
163	縄文土器	浅鉢	口縁部内面貼付突帯。体部内外面ミガキ。	暗灰黄色(2.5Y5/2)	微砂
164	縄文土器	浅鉢	内外面ミガキ。	褐灰色(5YR4/1)	微砂
165	縄文土器	深鉢	口縁部外面磨消縄文、内面ナデ。	灰黄褐色(10YR5/2)	粗砂
166	縄文土器	深鉢	口頸部外面巻貝条痕、煤付着、内面巻貝条痕のちナデ。	褐灰色(10YR4/1)	細砂
167	縄文土器	深鉢	外面磨消縄文。	灰黄褐色(10YR6/2)	微砂
168	縄文土器	深鉢	外面不詳。内面巻貝条痕か。底部外面ナデ。	にぶい黄橙色(10YR7/3)	粗砂
169	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目、突起有り。口頸部外面二枚貝条痕、内面ナデ。体部外面二枚貝条痕?、煤付着、内面ナデ。	にぶい黄橙色(10YR6/3)	微砂
170	縄文土器	深鉢	口頸部外面二枚貝条痕、爪形文。体部外面二枚貝条痕、内面ナデ。	灰黄色(2.5Y7/2)	細砂
171	縄文土器	深鉢	口頸部外面ナデ?、横の沈線。体部外面ケズリ、内面ナデ。	灰黄色(2.5Y6/2)	細砂
172	縄文土器	深鉢	体部外面二枚貝条痕?、内面二枚貝条痕?。内外面煤府直。	暗灰黄色(2.5Y5/2)	細砂
173	縄文土器	深鉢	口頸部内外面二枚貝条痕?。体部外面ケズリ、内面ナデ。	灰黄色(2.5Y6/2)	細砂
174	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面ナデ、縦の爪形文、横の爪形文、内面ナデ。	灰黄色(2.5Y6/2)	細砂
175	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面波頂部から縦の爪形文。	灰黄色(2.5Y6/2)	細砂
176	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面二枚貝条痕?、波頂部から縦の爪形文、内面ナデ。	にぶい黄橙色(10YR7/2)	微砂
177	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面波頂部から縦の爪形文、ナデ。波頂部内面沈線。	灰黄色(2.5Y6/2)	微砂
178	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面二枚貝条痕、波頂部から縦の爪形文、波頂部内面沈線、内面ナデ。	にぶい黄橙色(10YR5/3)	微砂
179	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面縦の爪形文、横の爪形文。体部外面ケズリ。	にぶい黄橙色(10YR5/3)	細砂
180	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面波頂部から縦の爪形文、ナデ。波頂部内面沈線。	黒褐色(10YR3/1)	細砂
181	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面波頂部から縦の爪形文。	灰黄褐色(10YR6/2)	微砂
182	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面波頂部から縦の爪形文。	にぶい黄橙色(10YR6/3)	細砂
183	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面波頂部から縦の爪形文、ナデ、内面ナデ。波頂部内面沈線。	黄灰色(2.5Y4/1)	微砂
184	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面縦の爪形文、内面二枚貝条痕?。	にぶい黄色(2.5YR6/3)	細砂
185	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面ナデ、波頂部から縦の爪形文。	灰黄褐色(10YR5/2)	微砂
186	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面ナデ、波頂部から縦の爪形文、内面ナデ。	にぶい黄橙色(10YR6/3)	細砂
187	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面ナデ、縦の爪形文、横の爪形文、内面ナデ。	灰黄褐色(10YR4/2)	粗砂
188	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面波頂部から縦の爪形文、ナデ、内面ナデ。	にぶい黄橙色(10YR7/3)	細砂
189	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面ナデ、波頂部から縦の爪形文、内面ナデ。	褐灰色(10YR6/1)	細砂
190	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面波頂部から縦の爪形文、ナデ、内面ナデ。	暗灰黄色(2.5Y5/2)	微砂
191	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面波頂部から縦の爪形文、ナデ、内面ナデ。	灰黄褐色(10YR5/2)	細砂
192	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面波頂部から縦の爪形文、ナデ、内面ナデ。	灰褐色(7.5YR4/2)	細砂
193	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面ナデ、波頂部から縦の爪形文、内面ナデ。波頂部内面沈線。	灰黄褐色(10YR5/2)	微砂
194	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面波頂部から縦の爪形文、二枚貝条痕?、煤付着、内面ナデ。	褐灰色(10YR4/1)	微砂
195	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面波頂部から縦の爪形文、ナデ。波頂部内面沈線。	灰黄色(2.5Y6/2)	細砂
196	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面ナデ、波頂部から縦の爪形文、内面ナデ。	灰黄色(2.5Y6/2)	微砂
197	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面ナデ、横の爪形文、内面ナデ。	暗灰黄色(2.5Y5/2)	細砂
198	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面ナデ、横の爪形文、煤付着、内面ナデ。	にぶい黄橙色(10YR7/3)	粗砂
199	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面ナデ?、横の爪形文、内面ナデ。体部外面ケズリ。	暗灰黄色(2.5Y5/2)	細砂
200	縄文土器	深鉢	口縁端部欠損。口頸部外面ナデ、横の爪形文、内面ナデ。体部外面ケズリ。	暗灰黄色(2.5Y5/2)	微砂
201	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面ナデ、横の爪形文。	灰黄褐色(10YR6/2)	微砂
202	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面二枚貝条痕?、横の爪形文、内面ナデ。	灰黄褐色(10YR5/2)	微砂

掲載番号	種別	器種	特徴	色調	胎土
203	縄文土器	深鉢	口頸部外面ナデ、横の爪形文、内面ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	灰黄色 (2.5Y7/2)	細砂
204	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面ナデ、縦の爪形文、横の爪形文、内面ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	微砂
205	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面二枚貝条痕、横の爪形文、内面ナデ。体部外面ケズリ。	灰黄色 (2.5Y6/2)	微砂
206	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面ナデ、横の爪形文。口頸部内面二枚貝条痕？。	灰黄色 (2.5Y4/2)	細砂
207	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面ナデ、縦の爪形文、横の爪形文、内面ナデ。	灰黄色 (2.5Y7/2)	細砂
208	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面二枚貝条痕、横の爪形文。	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	細砂
209	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面ナデ、横の爪形文、内面ナデ。	黄褐色 (2.5Y5/3)	微砂
210	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部内外面ナデ？。	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	細砂
211	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部内外面ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR5/3)	細砂
212	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面ナデ、横の爪形文、内面ナデ。	灰黄褐色 (10YR4/2)	微砂
213	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部内外面ナデ。	黄灰色 (2.5Y6/1)	微砂
214	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面二枚貝条痕？、内面ナデ。	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	細砂
215	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面二枚貝条痕、内面ナデ。	黄灰色 (2.5Y5/1)	細砂
216	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部外面二枚貝条痕、内面ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	微砂
217	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口縁部上端横の刻目。外面煤付着。	灰黄褐色 (10YR5/2)	微砂
218	縄文土器	深鉢	口頸部外面ナデ、横の爪形文。内面ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	微砂
219	縄文土器	深鉢	口頸部外面横の爪形文。体部外面ケズリ、内面ナデ。	褐灰色 (10YR5/1)	微砂
220	縄文土器	深鉢	口頸部外面ナデ、横の爪形文。内面ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	微砂
221	縄文土器	深鉢	口頸部外面ナデ、横の爪形文。	灰オリーブ色 (5Y4/2)	微砂
222	縄文土器	深鉢	口頸部外面ナデ、横の爪形文。体部外面ケズリ、内面ナデ。	灰黄色 (2.5Y7/2)	細砂
223	縄文土器	深鉢	内外面不詳。	黒褐色 (2.5Y3/1)	細砂
224	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。体部外面ケズリ、煤付着、内面ナデ。	灰黄褐色 (10YR6/2)	細砂
225	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。体部外面二枚貝条痕、内面ナデ。	灰黄褐色 (10YR5/2)	細砂
226	縄文土器	深鉢	口縁端部ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	細砂
227	縄文土器	深鉢	口縁部外面横の爪形文。体部外面ユビオサエ、ナデ、内面ナデ。	灰黄色 (2.5Y7/2)	微砂
228	縄文土器	鉢？	口縁部穿孔1個。内外面ユビオサエ、ナデ。ナデ。	灰黄色 (2.5Y7/2)	微砂
229	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。体部外面二枚貝条痕か、内面ナデ。	暗灰黄色 (2.5Y4/2)	細砂
230	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。内外面ナデ。	黒褐色 (10YR3/2)	粗砂
231	縄文土器	深鉢	口縁部ナデ、体部外面ケズリ。	灰黄色 (2.5Y6/2)	細砂
232	縄文土器	深鉢	体部外面二枚貝条痕、内面ナデ。底部外面ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR5/3)	細砂
233	縄文土器	深鉢	体部外面ケズリ、内面ナデ、炭化物付着。底部外面ケズリ。	灰黄褐色 (10YR5/2)	細砂
234	縄文土器	深鉢	底部内外面ナデ。	灰色 (5Y6/1)	細砂
235	縄文土器	深鉢	体部外面ケズリ、内面ナデ、炭化物付着。底部外面ケズリ。煤付着。底部外面磨滅のため不詳。	灰黄褐色 (10YR5/2)	細砂
236	縄文土器	深鉢	体部外面ケズリ、内面ユビオサエ、ナデ。底部外面ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	細砂
237	縄文土器	深鉢	体部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR5/3)	細砂
238	縄文土器	深鉢	体部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ナデ。	灰黄褐色 (10YR5/2)	微砂
239	縄文土器	深鉢	体部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ナデ。	にぶい黄色 (2.5YR6/3)	細砂
240	縄文土器	深鉢	体部外面ケズリ、内面ユビオサエ、ナデ。底部外面ナデ。	灰黄褐色 (10YR6/2)	微砂
241	縄文土器	深鉢	体部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ユビオサエ、ナデ。	褐灰色 (10YR4/1)	粗砂
242	縄文土器	深鉢	体部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。	にぶい黄橙色 (10YR5/3)	細砂
243	縄文土器	深鉢	体部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	細砂
244	縄文土器	浅鉢？	体部内面ミガキ？、外面ナデ？。	黒色 (2.5Y2/1)	微砂

掲載番号	種別	器種	特徴	色調	胎土
245	縄文土器	深鉢	外外面ケズリ？。	灰黄色 (2.5Y6/2)	細砂
246	縄文土器	深鉢	内面ユビオサエ、ナデ、外面磨滅のため不詳。	灰黄色 (2.5Y7/2)	細砂
247	縄文土器	浅鉢	鱗状突起。内外面ミガキ。口縁部穿孔1個。	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	微砂
248	縄文土器	浅鉢	口縁部内外面ミガキ。体部内外面ミガキ。	黒褐色 (2.5Y3/1)	微砂
249	縄文土器	浅鉢	外面ケズリ、内面ミガキ。	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	細砂
250	縄文土器	浅鉢	内外面ミガキ。	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	細砂
251	縄文土器	浅鉢	口縁部ヨコナデ、穿孔1個残存。体部外面磨滅のため不詳、内面ミガキ。	黒褐色 (2.5Y3/1)	微砂
252	縄文土器	浅鉢	リボン状突起の一部か、内面に沈線。体部内外面ミガキ。	灰色 (5Y6/1)	細砂
253	縄文土器	浅鉢	内外面ミガキ。	褐灰色 (10YR5/1)	微砂
254	縄文土器	浅鉢	内外面ミガキ。	灰白色 (5Y7/1)	微砂
255	縄文土器	浅鉢	鱗状突起。内外面ミガキ。	黒褐色 (2.5Y3/1)	微砂
256	縄文土器	浅鉢	鱗状突起。内外面ミガキ。	黄灰色 (2.5Y6/1)	細砂
257	縄文土器	浅鉢	波状口縁。内外面ミガキ。	黒色 (2.Y2/1)	細砂
258	縄文土器	浅鉢？	口縁部外面ヘラガキ沈線文、突帯、内面ナデ。	黒褐色 (2.5Y3/1)	微砂
259	縄文土器	浅鉢	口縁部内外面ミガキ。体部内外面ミガキ。	黒色 (7.5Y2/1)	細砂
260	縄文土器	浅鉢	口縁部ヨコナデ。体部内外面ミガキ。	黄灰色 (2.5Y5/1)	微砂
261	縄文土器	浅鉢	口縁部内外面ミガキ。体部内外面ミガキ。	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	細砂
262	縄文土器	浅鉢	口縁部内外面ミガキ。体部内外面ミガキ。	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	細砂
263	縄文土器	浅鉢	リボン状突起。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	細砂
264	縄文土器	浅鉢	口縁部ヨコナデ。体部外面ミガキ。	黄灰色 (2.5Y4/1)	微砂
265	縄文土器	浅鉢	口縁部内外面ミガキ。体部外面ミガキ、内面ナデ。	黒色 (5Y2/1)	細砂
266	縄文土器	浅鉢	内外面ミガキ。	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	微砂
267	縄文土器	浅鉢	口縁部ヨコナデ。体部外面磨滅のため不詳、内面ミガキ。	灰黄色 (2.5Y6/2)	細砂
268	縄文土器	浅鉢	体部内外面ミガキか。	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂
269	縄文土器	鉢	外面ケズリ、内面ナデ。	にぶい黄色 (2.5YR6/3)	細砂
270	縄文土器	鉢	口縁部刻目。外面ケズリ？、内面ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	微砂
271	縄文土器	鉢？	体部内外面ミガキ。口径、傾き不詳。内傾接合か。	黄灰色 (2.5Y6/1)	細砂
272	縄文土器	深鉢	口縁部刻目。口縁部外面二枚貝条痕、内面ナデ。体部外面ケズリ、内面二枚貝条痕。口縁部と体部の境に爪形文。	褐灰色 (10YR6/1)	細砂
273	縄文土器	深鉢	外面沈線、磨消縄文、内面不詳。	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	細砂
274	縄文土器	深鉢	口縁部刻目。口頸部外面二枚貝条痕、内面ナデ。	灰黄褐色 (10YR5/2)	細砂
275	縄文土器	深鉢	口縁部刻目。内外面とも磨滅のため不詳。	灰黄褐色 (10YR5/2)	細砂
276	縄文土器	深鉢	口縁部刻目。内外面とも磨滅のため不詳。	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	微砂
277	縄文土器	深鉢	口縁部刻目。内外面とも磨滅のため不詳。	灰白色 (10YR8/2)	細砂
278	縄文土器	深鉢	口縁部刻目？。口頸部内外面ナデ。	灰黄褐色 (10YR6/2)	細砂
279	縄文土器	深鉢	口縁部刻目。口頸部内外面ナデ。体部外面ケズリ。爪形文。	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	細砂
280	縄文土器	深鉢	口縁部刻目。内外面とも磨滅のため不詳。	灰黄褐色 (10YR4/2)	細砂
281	縄文土器	深鉢	口縁部刻目？。内外面とも磨滅のため不詳。	灰黄褐色 (10YR5/2)	細砂
282	縄文土器	深鉢	外面爪形文。体部外面ケズリ。内面磨滅のため不詳。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	細砂
283	縄文土器	深鉢	口頸部外面二枚貝条痕、内面ナデ。体部外面ケズリ。爪形文。	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	微砂
284	縄文土器	浅鉢	内外面とも磨滅のため不詳。	黄灰色 (2.5Y4/1)	微砂
285	縄文土器	浅鉢	内外面ミガキ。	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	微砂
286	縄文土器	浅鉢	内外面ミガキ。	灰黄褐色 (10YR6/2)	微砂

掲載番号	種別	器種	特徴	色調	胎土
287	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目?。内外面とも磨滅のため不詳。	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	細砂
288	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。内外面とも磨滅のため不詳。	灰黄褐色 (10YR5/2)	細砂
289	縄文土器	深鉢	口縁端部磨消縄文、沈線。内外面ナデ。	灰黄色 (2.5Y7/2)	粗砂
290	縄文土器	深鉢	外面磨消縄文。内外面とも磨滅のため不詳。	灰褐色 (7.5YR6/2)	粗砂
291	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口頸部内外面ヨコナデ。	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	細砂
292	縄文土器	深鉢	口頸部外面ナデ、横の爪形文。体部外面ケズリ。	にぶい黄色 (2.5YR6/3)	細砂
293	縄文土器	深鉢	凹み底。外面ケズリ。	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	微砂
294	縄文土器	深鉢	凹み底。内外面とも磨滅のため不詳。	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	細砂
295	縄文土器	浅鉢	内外面とも磨滅のため不詳。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	微砂
296	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目不詳。口縁部刻目貼付突帯、ヘラ描き沈線。	灰黄色 (2.5Y6/2)	細砂
297	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。口縁部刻目貼付突帯。	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	粗砂
298	縄文土器	深鉢	内外面ナデ。外面山形沈線文。	灰黄褐色 (10YR5/2)	微砂
299	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。山形突起部分、内面沈線。内外面ナデ、外面縦の爪形文。	灰黄褐色 (10YR5/2)	細砂
300	縄文土器	深鉢	口縁端部刻目。内外面とも磨滅のため不詳。	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	粗砂
301	縄文土器	深鉢	口頸部外面二枚貝条痕、爪形文。体部外面ケズリ。内面ナデ。	灰黄色 (2.5Y4/2)	粗砂
302	弥生土器	壺	頸部外面指頭瓦痕文突帯、クシ描き文、内面ナデ。	灰白色 (10YR8/2)	微砂
303	弥生土器	壺	頸部外面クシ描き沈線文、内面ナデ。	灰黄色 (2.5Y7/2)	細砂
304	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	粗砂
305	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。体部外面ミガキ内面、内面指押え、ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	細砂
306	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。体部内外面とも磨滅のため不詳。	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	細砂
307	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。体部内外面とも磨滅のため不詳。	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	細砂
308	弥生土器	甕	内外面とも剥落のため不詳。	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	細砂
309	弥生土器	甕	外面ミガキ?、内面指押え、ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	微砂
310	弥生土器	甕	外面ミガキ?、内面ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	粗砂
311	弥生土器	壺	外面ミガキ、内面指押え、ナデ。	灰黄色 (2.5Y7/2)	細砂
312	弥生土器	甕	外面ミガキ、内面指押え、ナデ。	にぶい黄色 (2.5YR6/3)	細砂
313	弥生土器	壺?	外面ミガキ。内面ナデ、指押え。	浅黄色 (2.5Y7/3)	微砂
314	弥生土器	鉢	内外面とも磨滅のため不詳。くぼみ底。口縁部外面刺突文。	灰白色 (2.5Y7/1)	微砂
315	弥生土器	鉢	外面ミガキ、内面指押え、ナデ。ハケメ。口縁部2孔1組の穿孔。	灰白色 (2.5Y7/1)	微砂
316	弥生土器	高杯	外面ミガキ内面、内面指押え、ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	細砂
317	弥生土器	甕	内外面とも剥落のため不詳。	灰黄色 (2.5Y7/2)	細砂
318	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。体部外面ハケメ、内面ヘラケズリ。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	粗砂
319	弥生土器	甕	外面ミガキ?、内面ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	細砂
320	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。体部外面剥落のため不詳、内面指押え、ナデ。	灰白色 (10YR8/2)	粗砂
321	弥生土器	甕	内外面ヨコナデ。	灰黄色 (2.5Y7/2)	微砂
322	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	微砂
323	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。体部外面ハケメ。外面煤付着。	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	微砂
324	弥生土器	甕	外面ミガキ?、内面指押え、ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	微砂
325	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。頸部外面指頭瓦痕文突帯、内面ナデ。	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	細砂
326	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	細砂
327	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	細砂
328	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。口縁部外面スス。	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	微砂

掲載番号	種別	器種	特徴	色調	胎土
329	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。頸部外面指頭圧痕文突帯、内面ユビオサエ、ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	微砂
330	弥生土器	壺?	外面ヘラミガキ、内面ユビオサエ、ナデ。	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	微砂
331	弥生土器	鉢	外面ミガキ。内面剥落のため不詳。口縁部穿孔2孔一対。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	粗砂
332	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。内外面とも磨滅のため不詳。	橙色 (7.5YR6/6)	細砂
333	弥生土器	壺	頸部外面指頭圧痕文突帯、肩部ハケメのち外面クシ描き文。内面ハケメ、指押え。	灰白色 (7.5Y8/2)	細砂
334	須恵器	平瓶	口縁部ヨコナデ。	灰白色 (10YR7/1)	微砂
335	弥生土器	壺	口縁端部刻目。頸部外面貼付突帯、内面ナデ。	灰黄色 (2.5Y7/2)	微砂
336	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。体部内外面とも磨滅のため不詳。	灰白色 (2.5Y8/2)	細砂
337	弥生土器	甕	外面ミガキ内面?、内面指押え、ナデ。	灰黄褐色 (10YR6/2)	微砂
338	弥生土器	甕	外面ヘラミガキ?、内外面とも磨滅のため不詳。	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	細砂
339	弥生土器	甕	外面ヘラミガキ、内面ユビオサエ、ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	微砂
340	弥生土器	鉢?	内外面ユビオサエ、ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	粗砂
341	弥生土器	?	内外面とも磨滅のため不詳。	橙色 (5YR6/6)	微砂
342	須恵器	杯身	内外面ヨコナデ。	褐灰色 (5YR6/1)	微砂
343	須恵器	甕	外面平行タタキ、内面青海波文。	赤灰色 (7.5Y5/1)	微砂
344	須恵器	甕	外面平行タタキ、内面青海波文。	赤灰色 (7.5Y5/1)	微砂
345	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。体部外面ハケメ、内面指押え、ナデ。	橙色 (5YR6/6)	微砂
346	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。体部外面ハケメ、内面ヘラケズリ。	橙色 (5YR7/6)	細砂
347	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。外面磨滅のため不詳、煤付着。	灰黄褐色 (10YR6/2)	細砂
348	弥生土器	甕	外面ミガキ内面、内面指押え、ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	微砂
349	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。口縁端部刻目。	灰黄色 (2.5Y7/2)	細砂
350	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。口縁端部刻目。頸部外面刻目突帯。	黒褐色 (2.5v3/1)	微砂
351	弥生土器	壺	頸部外面指頭圧痕文突帯。内面ヨコナデ。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	細砂
352	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデのち内面ヘラミガキ。体部外面ハケメ、内面ヘラミガキ。	灰白色 (5Y7/1)	微砂
353	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。内外面とも磨滅のため不詳。	灰白色 (2.5Y8/2)	微砂
354	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。内外面とも磨滅のため不詳。	黄灰色 (2.5Y6/1)	細砂
355	弥生土器	甕	外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリか。底部内面ユビオサエ。	灰黄色 (2.5Y7/2)	細砂
356	弥生土器	甕	外面ヘラミガキ、内面ナデ。	灰黄褐色 (10YR6/2)	細砂
357	弥生土器	甕	外面ヘラミガキ、内面ナデ。	灰黄色 (2.5Y6/2)	微砂
358	弥生土器	壺	外面ヘラミガキ、内面ユビオサエ。	灰黄色 (2.5Y7/2)	細砂
359	弥生土器	壺?	体部内外面ヘラミガキ。底部外面ユビオサエ。	灰白色 (2.5Y8/2)	細砂
360	弥生土器	壺	口縁端部刻目。口縁部内面刻目突帯。頸部外面ハケメのち指頭圧痕文突帯、内面ユビオサエ、ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	細砂
361	弥生土器	壺	口縁部、頸部ヨコナデ。体部外面ハケメ。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	細砂
362	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。頸部外面ハケメ、クシ描き波状文。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	細砂
363	弥生土器	壺	頸部外面ハケメのち指頭圧痕文突帯、クシ描き沈線文。頸部内面ユビオサエ、ナデ。	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	粗砂
364	弥生土器	壺	頸部外面指頭圧痕文突帯、肩部外面クシ描き文、刺突文。体部下半外面ミガキ。内面ナデ、ユビオサエ。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	粗砂
365	弥生土器	壺	口縁端部刻目。頸部外面指頭圧痕文突帯。体部外面クシ描き沈線文・刺突文、内面ユビオサエ、ハケメ。	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	細砂
366	弥生土器	鉢?	頸部外面ハケメのち刻目突帯、クシ描き波状文。頸部内面ユビオサエ、ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	細砂
367	弥生土器	甕	口縁端部刻目。口縁部ヨコナデ。体部外面ハケメ、内面ハケメ。	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	細砂
368	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。体部外面上半ハケメ、下半ヘラミガキ。体部内面ヘラミガキ。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	細砂
369	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。体部外面上半ハケメ、内面ハケメのちヘラミガキ。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	微砂

掲載番号	種別	器種	特徴	色調	胎土
370	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。体部外面上半ハケメ、下半ヘラミガキ。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	細砂
371	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。体部外面上半ハケメ、下半ヘラミガキ、刺突文、内面ユビオサエ、ヘラミガキ。	灰白色 (10YR8/2)	微砂
372	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。口縁部内面ヘラミガキ。体部外面ハケメ、内面ヘラミガキ。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	微砂
373	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。体部外面上半ハケメ、下半ヘラミガキ。体部内面上半ユビオサエ、ナデ、下半ヘラミガキ。	灰白色 (2.5Y7/1)	微砂
374	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。体部外面上半ハケメ、刺突文。体部内面磨滅のため不詳。	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	微砂
375	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ、高杯外面上半ハケメ、刺突文、下半ユビオサエ、ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	細砂
376	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。体部外面ハケメ、刺突文、内面ナデ？。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	細砂
377	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。体部外面上半体部、刺突文、内面上半ハケメのちヘラミガキ。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	微砂
378	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。体部外面上半は、刺突文、下半ヘラミガキ。体部内面ユビオサエ、ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	細砂
379	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。頸部外面上半ハケメ、刺突文、下半ヘラミガキ。体部内面ハケメのちヘラミガキ。	褐灰色 (10YR6/1)	微砂
380	弥生土器	甕	体部外面ヘラミガキ、内面下半ハケメ。底部外面ユビオサエ、ナデ。	橙色 (5YR6/6)	粗砂
381	弥生土器	甕	体部外面ヘラミガキ、内面ヘラミガキ。底部内外面ユビオサエ、ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	微砂
382	弥生土器	甕	外面ヘラミガキ、内面ナデ。底部焼成後穿孔。	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	微砂
383	弥生土器	甕	外面ヘラミガキ、内面ナデ。底部焼成後穿孔。	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	微砂
384	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ、2個一対の穿孔。内外面とも磨滅のため不詳。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	微砂
385	弥生土器	高杯	内外面とも磨滅のため不詳。脚部内面ユビオサエ、ナデ。円盤充填。	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	細砂
386	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ、斜格子文。口縁部刻目。頸部外面ハケメ、内面ナデ。	灰黄色 (2.5Y4/2)	微砂
387	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。頸部外面刻目突帯、クシ描き沈線文、内面ユビオサエ、ナデ？。	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	細砂
388	弥生土器	壺	口縁部斜格子状沈線。頸部外面指頭瓦文突帯、クシ描き沈線文。	灰白色 (5Y7/1)	微砂
389	弥生土器	壺？	口縁部ヨコナデ、穿孔2個。体部外面ヘラミガキ、内面ユビオサエ、ヘラミガキ。	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	微砂
390	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。体部外面ハケメ、内面ユビオサエ、ハケメ。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	粗砂
391	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。体部外面ハケメ、内面ユビオサエ、ハケメ。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	粗砂
392	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。体部外面ハケメ、内面ヘラミガキ。	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	微砂
393	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。体部外面上半刺突文、ハケメ、下半ヘラミガキ、内面ヘラミガキ。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	粗砂
394	弥生土器	壺？	口縁部ヨコナデ。体部外面ハケメのちヘラミガキ、内面ユビオサエ、ナデ。	灰黄褐色 (10YR6/2)	細砂
395	弥生土器	甕	外面刺突文、ヘラミガキ、内面ヘラミガキ。底部焼成後穿孔。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	微砂
396	弥生土器	壺？	外面ヘラミガキ、内面上半ハケメのちユビオサエ、下半ナデ。	灰黄褐色 (10YR6/2)	細砂
397	弥生土器	高杯	外面貼付突帯、ヘラミガキ？。内面シボリ痕。透かし穴。	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	細砂
398	弥生土器	鉢	口縁部ヨコナデ、内面ユビオサエ、外面刻目突帯。	黄灰色 (2.5Y6/1)	微砂
399	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。体部外面ハケメ、内面ヘラミガキ。	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	微砂
400	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。口縁部刺突文。体部外面クシ描き平行沈線文。	明赤褐色 (5YR5/6)	細砂
401	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	細砂
402	弥生土器	甕	外面ヘラミガキ？、内面ナデ。	灰白色 (2.5Y7/1)	微砂
403	弥生土器	甕	内外面とも磨滅のため不詳。	灰白色 (2.5Y8/1)	細砂
404	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ。	浅黄褐色 (10YR8/3)	細砂

2 土製品観察表

掲載番号	挿図番号	出土遺構名	器種	計測値 (mm)		重量 (g)	色調	胎土	焼成
				最大長	最大幅				
C1	51	溝 30	土錘	55.1	20.1	19.9	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	微砂	良
C2	62	その他	土錘	61.3	34.9	75.0	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良

3 石器観察表

掲載番号	挿図番号	出土遺構名	器種	法量 (mm)			重量 (g)	材質
				最大長	最大幅	最大厚		
S1	9	流路3	石鏃	17.0	17.5	3.0	0.56	サヌカイト
S2	〃	〃	石鏃	16.0	14.5	3.0	0.47	〃
S3	13	その他	スクレイパー	77.0	37.5	7.0	12.90	〃
S4	〃	〃	石匙	67.5	45.0	5.0	16.70	〃
S5	〃	〃	石鏃	25.5	12.0	4.5	1.30	〃
S6	33	溝21	石核	112.5	75.5	15.5	82.60	〃
S7	〃	溝20	石核	149.0	76.0	16.0	152.50	〃
S8	〃	〃	石匙	66.5	18.0	4.0	5.70	〃
S9	76	流路17	スクレイパー	89.0	53.0	13.0	68.88	サヌカイト
S10	〃	〃	スクレイパー	62.0	57.0	11.5	35.65	サヌカイト
S11	〃	〃	スクレイパー	45.0	53.0	8.0	18.65	サヌカイト
S12	〃	〃	スクレイパー	48.5	62.0	6.5	17.79	サヌカイト
S13	〃	〃	スクレイパー	70.0	34.0	7.5	18.93	サヌカイト
S14	〃	〃	スクレイパー	55.0	34.0	11.5	35.14	サヌカイト
S15	〃	〃	楔	66.5	47.0	15.0	40.74	サヌカイト
S16	〃	〃	楔	79.0	39.0	10.5	36.37	サヌカイト
S17	〃	〃	楔	48.0	39.0	7.0	14.43	サヌカイト
S18	〃	〃	RF	37.5	36.0	5.7	8.11	サヌカイト
S19	〃	〃	RF	44.0	38.0	10.0	16.32	サヌカイト
S20	〃	〃	RF	51.0	27.0	6.5	10.54	サヌカイト
S21	〃	〃	UF?	47.5	46.0	9.0	17.60	サヌカイト
S22	77	〃	磨製石斧	93.0	40.5	14.5	87.07	蛇紋岩
S23	〃	〃	磨製石斧	55.0	35.0	23.0	48.78	蛇紋岩
S24	〃	〃	石鏃	120.0	45.0	20.0	146.70	緑色片岩
S25	〃	〃	石鏃	105.0	69.0	15.5	151.37	流紋岩
S26	〃	〃	磨石?・敲石	139.5	113.0	60.0	1451.74	
S27	〃	〃	磨石?	120.0	19.0	74.5	1390.29	流紋岩
S28	〃	〃	磨石?	128.0	94.0	59.0	1246.43	安山岩
S29	〃	〃	敲石	110.0	94.5	62.0	955.81	流紋岩
S30	〃	〃	敲石	90.5	88.0	39.0	460.77	閃緑岩
S31	〃	〃	石錘	78.0	66.0	28.0	190.18	流紋岩
S32	〃	〃	?	90.0	59.0	32.5	215.48	粘板岩
S33	87	流路18	石匙	62.0	43.0	9.5	21.72	サヌカイト
S34	96	その他	石匙	72.5	37.0	8.0	25.48	サヌカイト
S35	〃	〃	石鏃	12.0	13.5	2.0	0.21	サヌカイト
S36	104	土壙20	スクレイパー	93.5	47.0	10.0	37.13	サヌカイト
S37	107	土壙21	スクレイパー	79.2	41.0	8.5	30.49	サヌカイト
S38	110	土壙25	石錘	27.5	11.5	4.5	1.49	サヌカイト
S39	111	土壙26	石鏃	21.5	16.5	3.5	0.93	サヌカイト
S40	121	土壙35	RF	45.0	35.0	11.0	12.19	サヌカイト
S41	126	溝38	石鏃	24.0	16.0	3.5	1.02	サヌカイト
S42	140	流路24	石鏃	38.0	21.0	6.5	4.28	サヌカイト
S43	〃	〃	石鏃	24.5	17.0	4.5	1.22	サヌカイト
S44	141	流路25	石斧転用敲石?	79.0	68.0	32.0	284.41	安山岩
S45	〃	〃	石錘	99.0	88.0	19.5	209.72	流紋岩
S46	〃	〃	石匙	76.0	45.0	8.0	31.81	サヌカイト
S47	〃	〃	スクレイパー	61.5	36.5	7.0	18.31	サヌカイト
S48	〃	〃	スクレイパー	71.0	51.5	7.5	29.04	サヌカイト
S49	143	流路27	敲石	203.0	71.0	80.0	1538.12	安山岩
S50	146	〃	石匙	65.5	53.0	9.5	24.32	サヌカイト
S51	〃	〃	スクレイパー	51.0	38.0	7.0	14.69	サヌカイト
S52	〃	〃	RF	50.5	29.0	6.8	8.64	サヌカイト
S53	149	流路29	石鏃	18.5	16.5	2.5	0.59	サヌカイト
S54	〃	〃	石鏃	19.0	15.0	2.8	0.67	サヌカイト
S55	〃	〃	石鏃	22.0	16.0	4.5	1.44	サヌカイト
S56	〃	〃	石鏃	24.0	17.9	4.0	1.16	サヌカイト
S57	〃	〃	石鏃	23.0	4.2	3.0	0.86	サヌカイト
S58	〃	〃	石鏃	20.7	14.0	2.3	0.67	サヌカイト
S59	〃	〃	石鏃	25.0	13.5	3.0	1.05	サヌカイト

4 金属器観察表

掲載番号	挿図番号	出土遺構名	器種	材質	計測値 (mm)			重量 (g)
					最大長	最大幅	最大厚	
M1	70	その他	釘?	鉄	35.8	12.5	6.1	8.7
M2	〃	〃	〃	〃	45.3	12.7	4.5	6.8
M3	〃	〃	馬鍔?	〃	76.6	15.2	8.9	17.6

第4表 新旧遺構名称対照表

新遺構名	旧調査区名	旧遺構名
竪穴住居 1	6 D	No 12・13・14・15・18・19 竪穴住居・溝
掘立柱建物 1	6 D	No 26 掘立柱建物
掘立柱建物 2	7 C	No 25 掘立柱建物
柱穴列 1	6 D	No 27 柱穴列
井戸 1	2	No 1 井戸
井戸 2	3 a	No 13 井戸
土塼 1	4 c	No 5 たわみ
土塼 2	4 c・4 d	No 4 土塼
土塼 3	5 c	No 18 土塼
土塼 4	1	No 5 土塼
土塼 5	1	No 8 土塼
土塼 6	1	No 7 土塼
土塼 7	1	No 6 土塼
土塼 8	1	No 3 土塼
土塼 9	1	No 1 土塼
土塼 10	2	No 10 土塼
土塼 11	2	No 8 土塼
土塼 12	2	No 9 たわみ
土塼 13	2	No 17 土塼
土塼 14	2	No 16 土塼
土塼 15	2	No 15 土塼
土塼 16	2	No 13 土塼
土塼 17	2	No 5 土塼
土塼 18	2	No 19 土塼
土塼 19	6 C	No 6 土塼
土塼 20	6 A	No 33 土塼
土塼 21	6 C	No 10 土塼
土塼 22	6 C	No 9 土塼
土塼 23	6 C	No 5 土塼
土塼 24	6 C	No 11 土塼
土塼 25	6 C	No 4 土塼
土塼 26	6 C	No 3 土塼
土塼 27	6 D	No 25 土塼
土塼 28	6 D	No 24 土塼
土塼 29	6 D	No 21 土塼
土塼 30	6 D	No 20 土塼
土塼 31	7 A	No 33 土塼
土塼 32	7 A	No 9 土塼
土塼 33	7 A	No 11 土塼
土塼 34	7 A	No 10 土塼
土塼 35	7 A	No 15 土塼
土塼 36	7 B	No 5 土塼
土塼 37	7 C	No 23 土塼
土塼 38	7 C	No 28 土塼
集石 1	2	No 3 集石
火処 1	2	No 2 焼土
土手状遺構 1	5 b	No 22 土手状遺構
水田 1	5 d	No 15 水田?
水田 2	3 b	No 14 水田・溝
たわみ 1	3 c	No 6 たわみ
たわみ 2	5 c	No 20 たわみ
たわみ 3	5 c	No 21 たわみ
たわみ 4	3 a	No 1 たわみ
落ち込み 1	6 A	No 29 落ち込み
たわみ 5	3 b・3 c	No 4 たわみ
落ち込み 2	6 D	No 22・23 たわみ
土器溜り 1	6 C	No 1 土器溜り
溝 1	3 a・3 d	No 12 溝
溝 2	3 a・3 d	No 11 溝
溝 3	3 a・3 d	No 10 溝
溝 4	3 a・3 d	No 3 溝
溝 5	3 c	No 5 溝
溝 6	3 c	No 7 溝
溝 7	3 c	No 8 溝
溝 8	4 a	No 8 溝
溝 9	4 b	No 16 溝
溝 10	4 b	No 17 溝
溝 11	4 c	No 1 溝
溝 12	4 c	No 2 溝
溝 13	4 c	No 3 溝

新遺構名	旧調査区名	旧遺構名
溝 14	4 d	No 15 溝
溝 15	4 d	No 14 溝
溝 16	5 c	No 17 溝
溝 17	5 c	No 16 溝
溝 18	5 c・5 d	No 3 溝
溝 19	5 d	No 8 溝
溝 20	5 d	No 12 溝
溝 21	5 d	No 9 溝
溝 22	5 d	No 10 溝
溝 23	5 d	No 11 溝
溝 24	5 d	No 4 溝
溝 25	1	No 2 溝
溝 26	2	No 7 溝
溝 27	2	No 18 溝
溝 28	2	No 12 溝
溝 29	2	No 21 溝
溝 30	2	No 6・20 土塼
溝 31	3 a・3 d	No 9 溝
溝 32	5 b	No 6 溝
溝 33	5 b	No 7 溝
溝 34	4 e	No 7 溝
溝 35	5 d	No 2 溝
溝 36	5 c	No 19 溝
溝 37	5 d	No 1 溝
溝 38	6 A	No 30 溝
溝 39	6 A	No 31 溝
溝 40	6 C	No 2 溝
溝 41	7 A	No 13 溝
溝 42	7 B	No 1 溝
溝 43	7 B	No 3 溝
溝 44	7 B	No 4 溝
溝 45	7 C	No 21 溝
溝 46	7 C	No 22 溝
溝 47	7 C	No 20 溝
溝 48	7 C	No 17 溝
溝 49	7 C	No 16 溝
溝 50	7 C	No 24 溝
溝 51	7 C	No 8 溝
溝 52	6 C	No 3 溝
溝 53	7 A	No 30 溝
溝 54	7 B	No 7 溝
流路 1	4 a	No 10 流路
流路 2	4 a・4 b	No 9 流路
流路 3	4 c	No 6 流路
流路 4	4 d	No 13 溝
流路 5	4 d・4 e	No 12 流路・No 11 溝 (流路)
流路 6	5 d	No 5 流路
流路 7	3 a・3 d	No 2 流路
流路 8	2	流路 6
流路 9	2	流路 5
流路 10	2	流路 3
流路 11	2	流路 4
流路 12	2	流路 7
流路 13	2	流路 2・No 23 溝
流路 14	2	流路 1・No 22 溝
流路 15	6 A	No 36 河道
流路 16	6 A	No 37 河道
流路 17	6 B・6 C	No 16 河道
流路 18	6 C・6 D	No 35 河道
流路 19	7 A	No 37 河道
流路 20	7 A	No 31・32 河道
流路 21	7 A	No 19・29・34・39 河道
流路 22	7 A・7 B	No 2・14・35 河道
流路 23	7 C	No 27・28・29 河道
流路 24	6 A・6 B	No 28 河道
流路 25	6 B	No 32 河道
流路 26	6 A	No 34 河道
流路 27	6 C	No 7 河道
流路 28	7 A	No 30 河道
流路 29	7 A	No 12 下がり



調査区（I区）（空撮、北西から）

図版 2



1 井戸 1 (北東から)



2 井戸 1 (北東から)



3 井戸 1 (北東から)



1 井戸 2 (南東から)



2 溝 2 (北東から)



3 溝 3 (北東から)

図版 4



1 溝4 (東から)



2 溝5 (北から)



3 溝5礫堆積状況
(北から)



1 溝 9・10 (南西から)



2 溝 11 (北西から)



3 溝 17・18 (南東から)

図版 6



1 溝 19 ~ 23 (南東から)



2 溝 19 ~ 23 (北東から)



3 溝 21 杭列 (東から)



1 溝 21 杭列 (南から)



2 溝 24 (北西から)



3 水田 1 下面 (東から)

図版 8



1 水田2 (西から)



2 流路6 (西から)



3 流路6 東壁 (南から)

1 流路6杭列
(南東から)



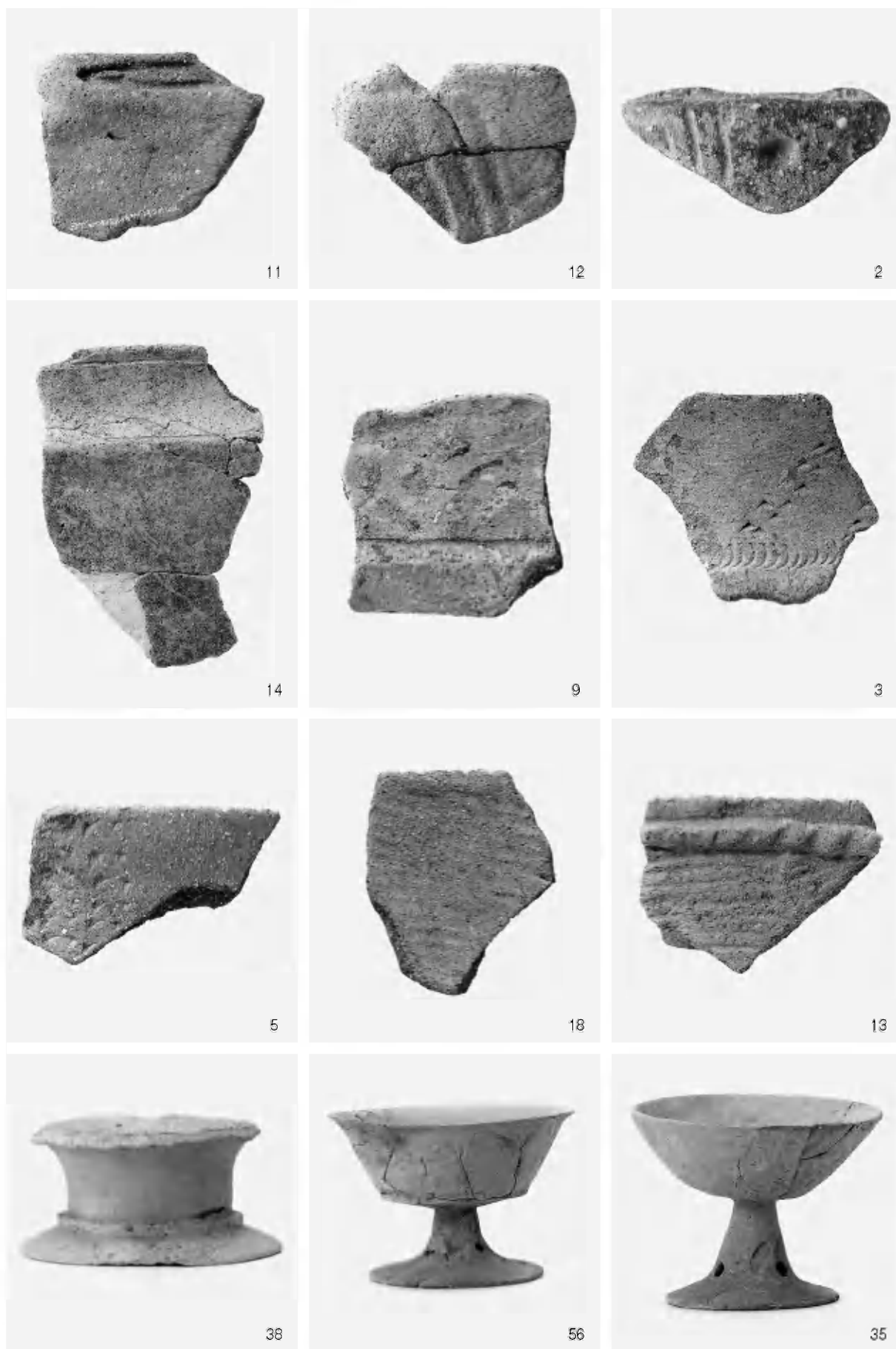
2 流路9・10
(北東から)



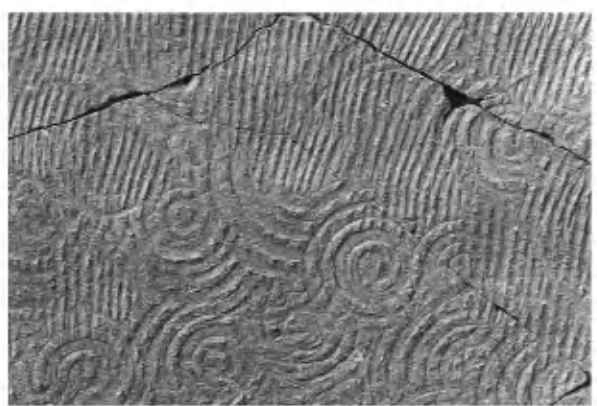
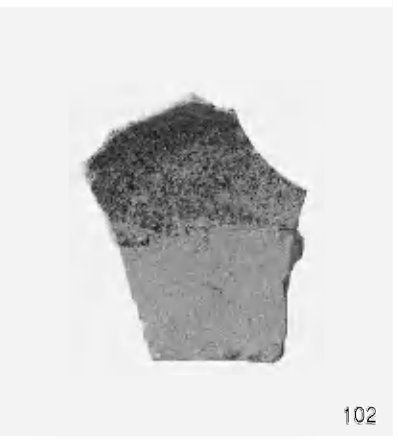
3 流路12東壁
(南西から)



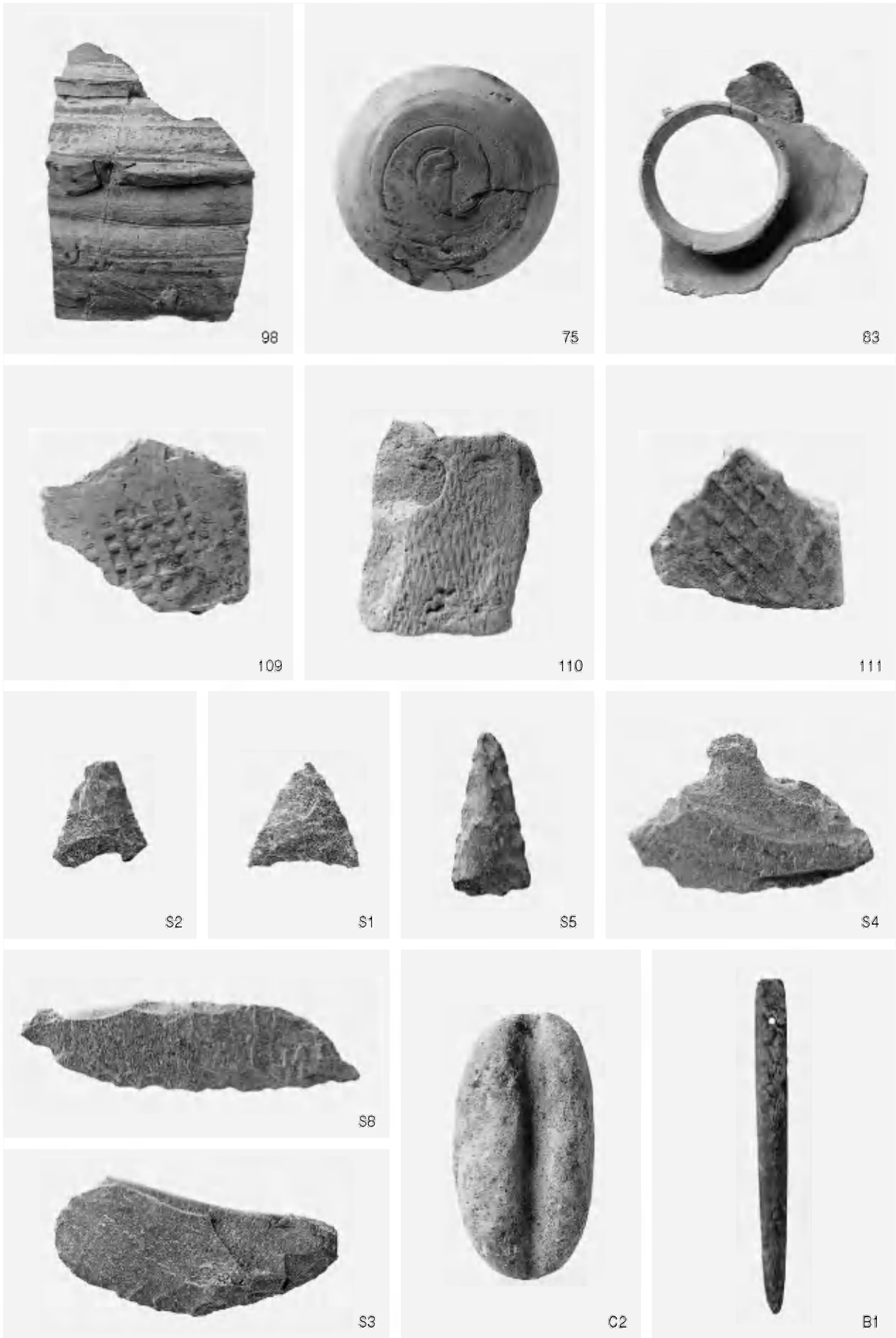
图版 10



I 区出土遺物①



图版 12



I 区出土遺物③



1 流路 15 (南東から)



2 流路 17 (南から)



3 流路 17 (南から)

図版 14



1 流路 17 (南西から)



2 流路 17 (南東から)



3 流路 19・28
(北西から)



1 流路 21 (南から)



2 流路 22 (北西から)



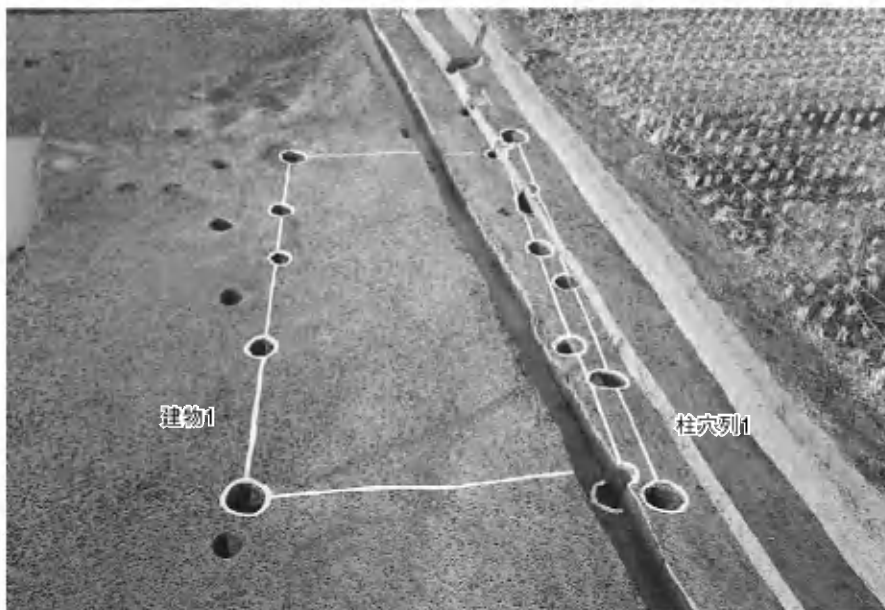
3 流路 23 (北から)



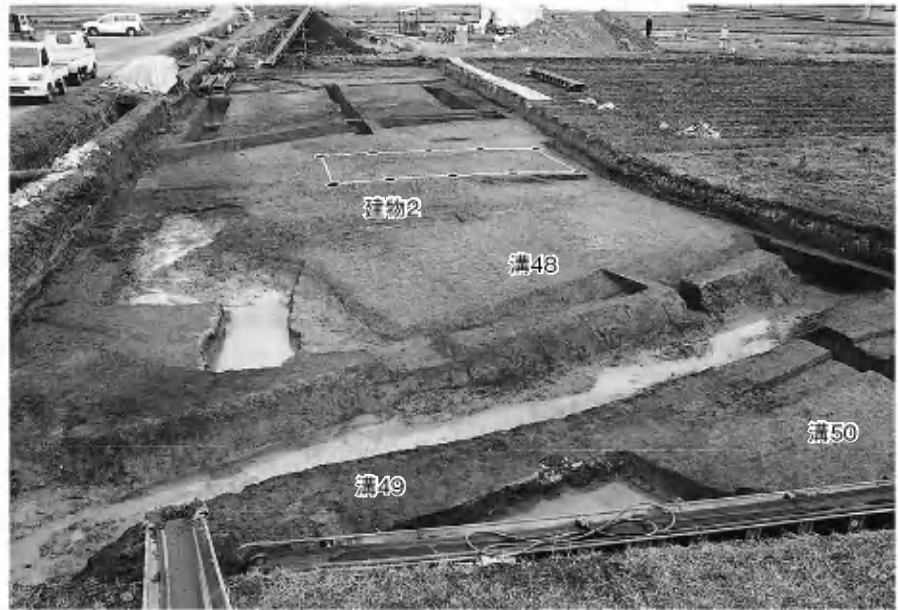
1 竪穴住居 1 (空撮)



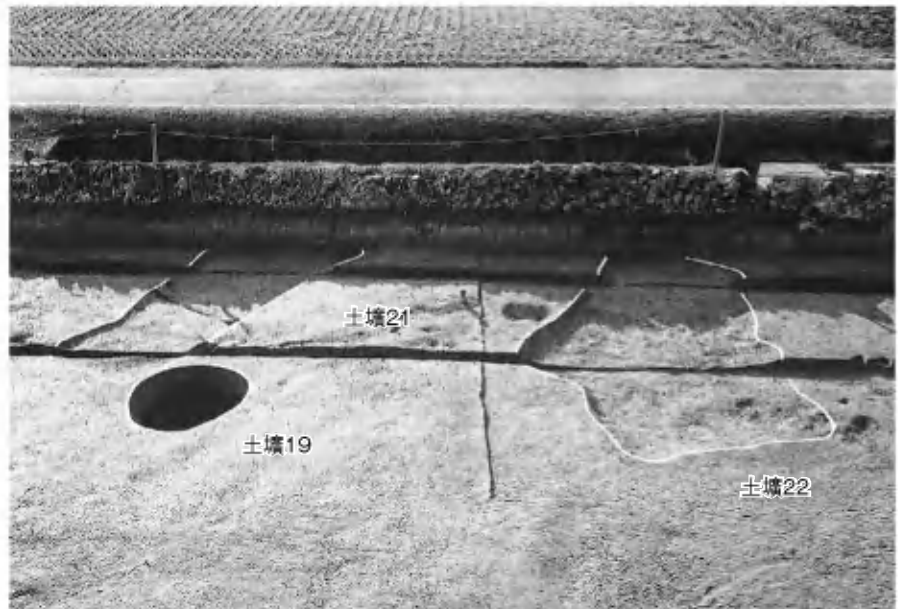
2 竪穴住居 1 (南から)



3 建物 1・柱穴列 1
(南から)



1 建物2・溝48・49・50 (南から)



2 土坑19・21・22 (北東から)



3 土坑25 (北西から)

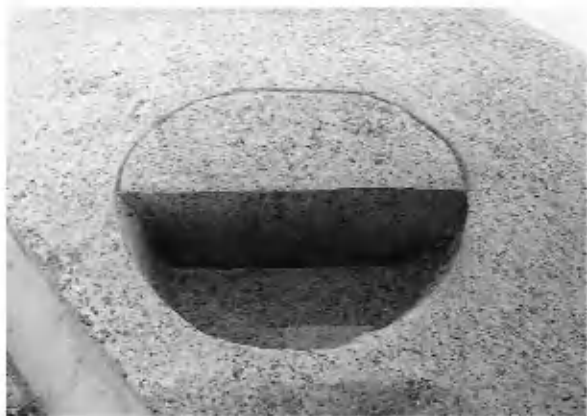
図版 18



1 竪穴住居 1 中央穴 (南東から)



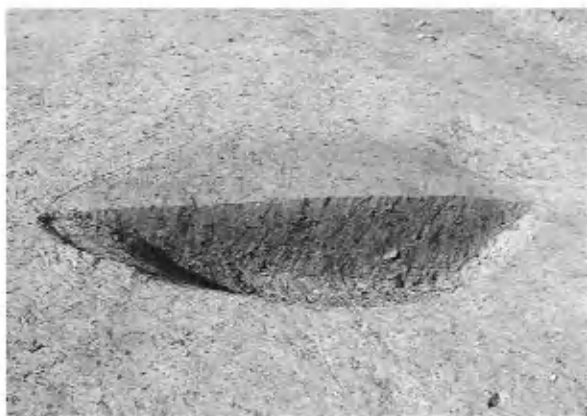
2 竪穴住居 1 P 5 (東から)



3 土壇 19 (南から)



4 土壇 23 (北から)



5 土壇 26 (東から)



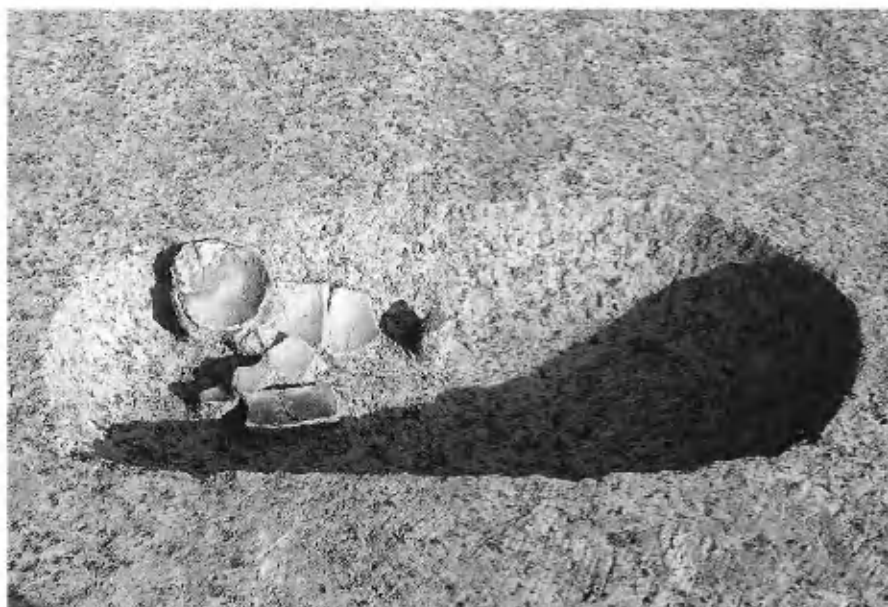
6 土壇 27 (南東から)



7 土壇 29 (西から)



8 土壇 30 (西から)



1 土壙 32 (西から)



2 土壙 34 (東から)



3 土壙 36 (北東から)

図版 20



1 溝 46 (東から)



2 溝 47 (西から)



3 溝 49 (西から)



1 流路 24 (北西から)



2 流路 24・25 (北から)

図版 22



1 流路 24 木材溜り
(北西から)



2 流路 24 東壁(西から)



3 流路 24・26(北東から)



1 流路 27 (北から)



2 流路 27 土器溜り
(北から)



3 流路 27 土器溜り
(西から)

図版 24



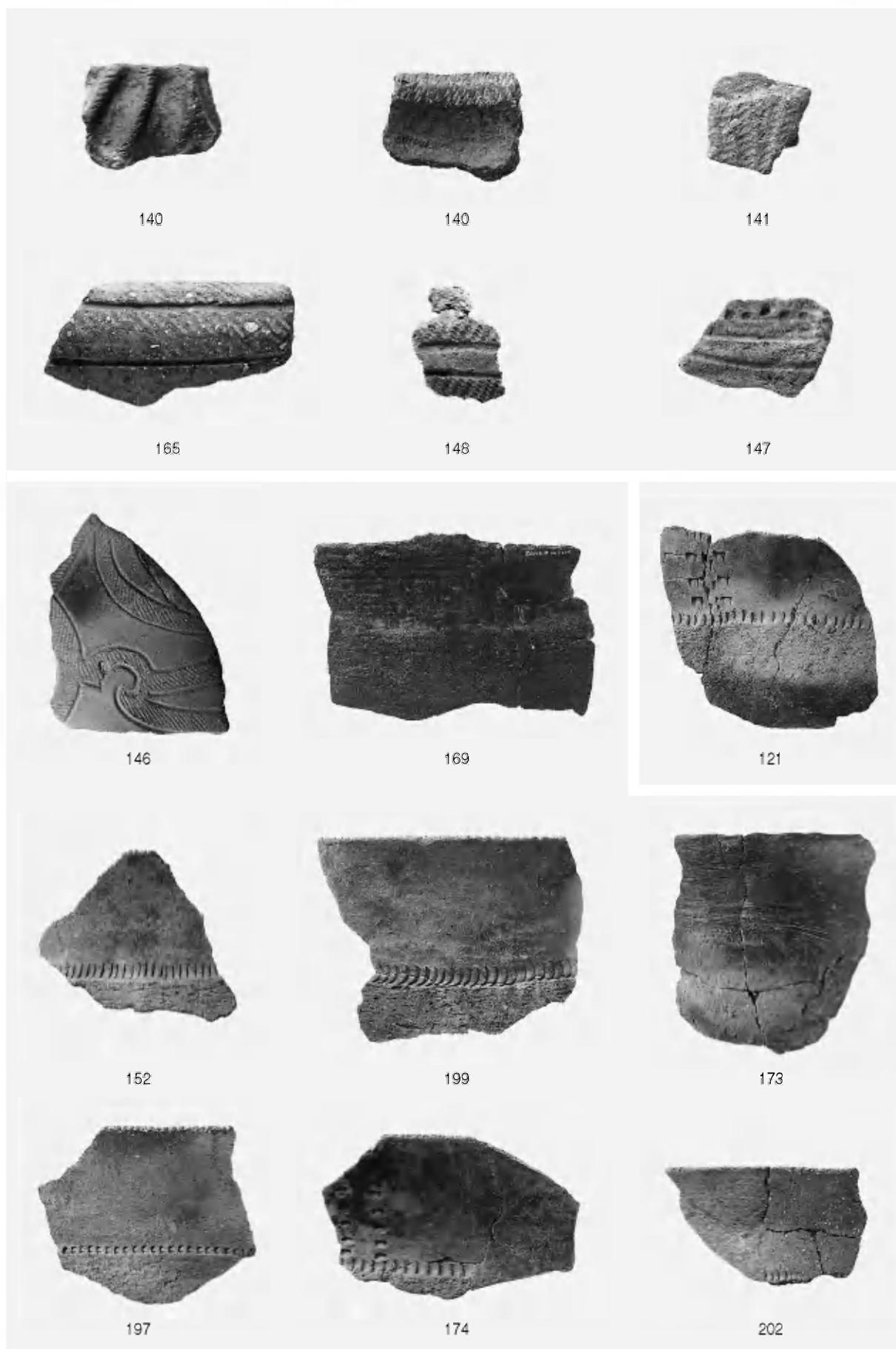
1 流路 28 (南から)



2 流路 29 (南東から)

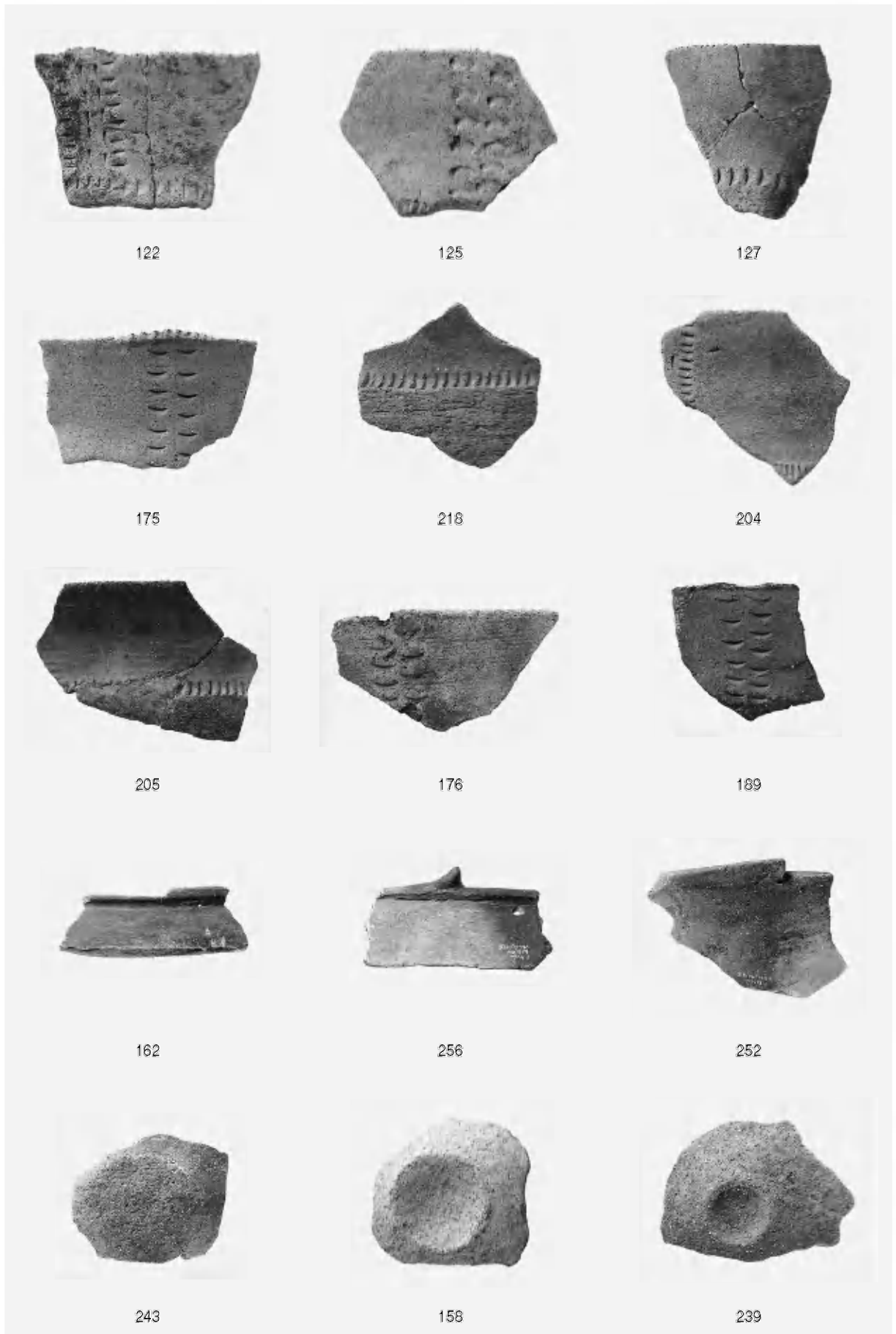


3 落ち込み 1 (西から)

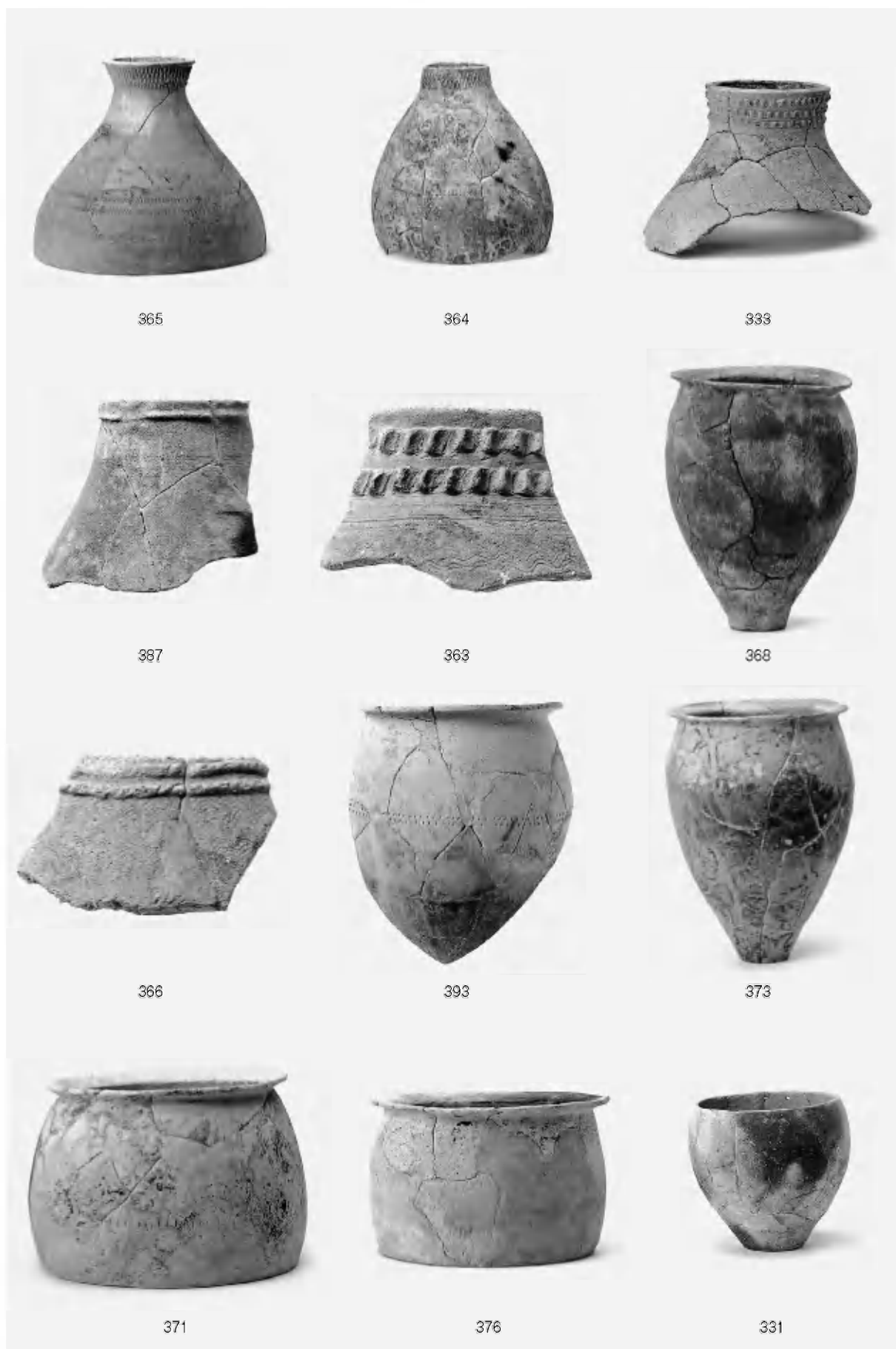


II 区出土遺物①

图版 26

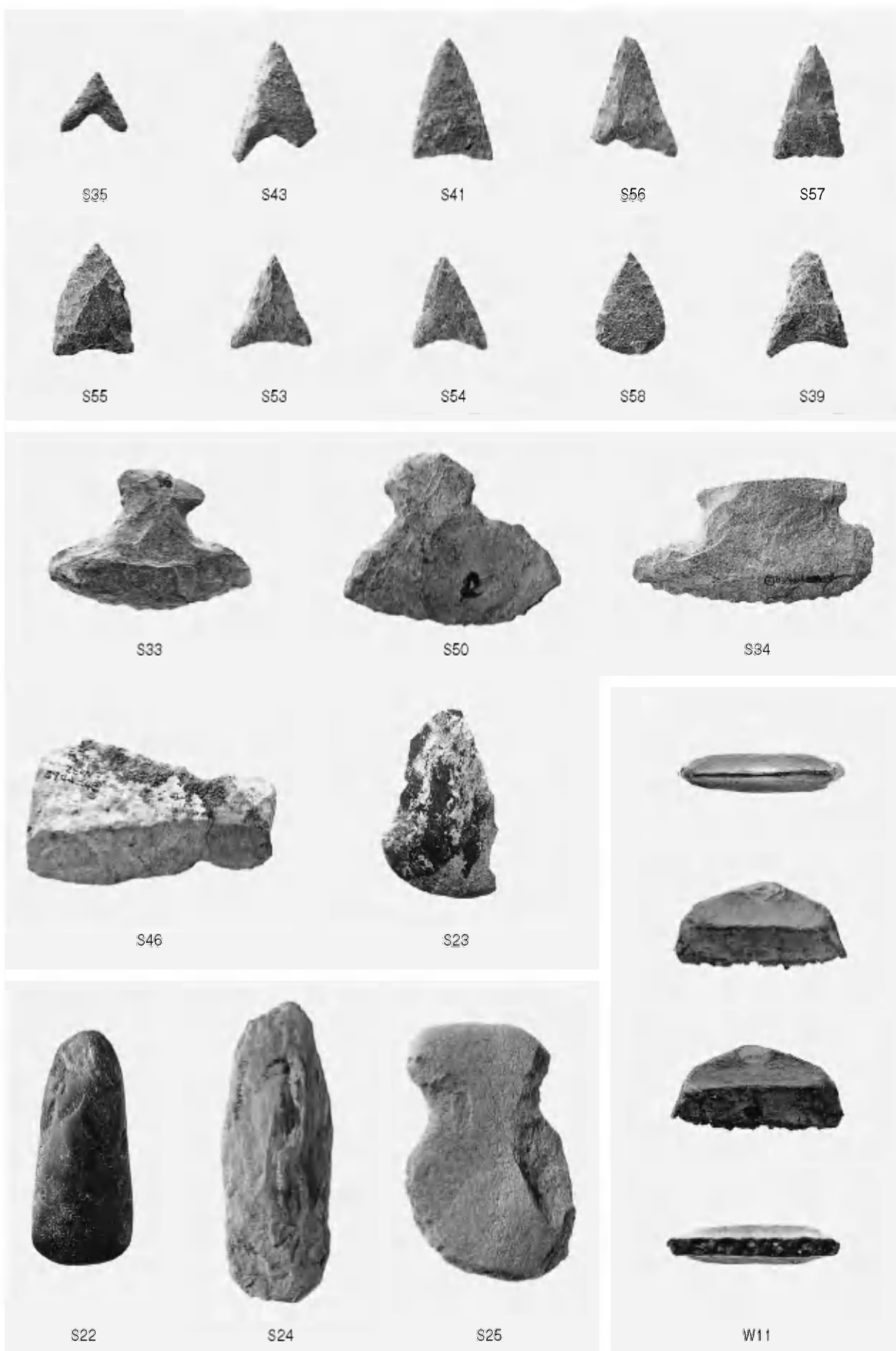


II 区出土遺物②



II 区出土遺物③

图版 28



II 区出土遺物④

報告書抄録

ふりがな	かじやDいせき							
書名	鍛冶屋D遺跡							
副書名	主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）道路改築に伴う発掘調査							
巻次	6							
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	219							
編著者名	平井泰男・山磨康平・大橋雅也・河合忍・石田爲成							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山市西花尻1325-3 TEL086-293-3211 http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm							
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山市内山下2-4-6 TEL086-224-2111							
発行年月日	西暦2009年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かじやいせき 鍛冶屋D遺跡	おかやましせとちよう 岡山市瀬戸町 かじや 鍛冶屋446ほか	33201	333210099	34° 45′ 31″	134° 4′ 8″	2005. 4.1~2006.3.31 2006.11.1~2007.3.31	13,890	道路改築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
鍛冶屋D遺跡	集落・自然 流路	縄文 弥生・古墳 古代・中近世	竪穴住居・掘立柱 建物・土壇・井戸・ 溝・自然流路		土器（縄文土器・弥生土 器・土師器・須恵器） 石器 鉄器 木製品		縄文～弥生時代の集 落・縄文～古墳時代の 自然流路・縄文時代の 竪櫛	
要約	<p>鍛冶屋D遺跡は、岡山県東部を流れる吉井川中下流域西岸部の狭小な平野部に所在し、調査地の北隣りには白鳳時代創建の吉岡庵寺が位置している。事前の分布調査により古代から中世の遺物の散布地が確認され、南半部では確認調査により遺構の密度は低いものの縄文時代から近世にかけての複合遺跡であることが周知されていた。</p> <p>二次にわたる調査の結果は、調査区南半部のⅡ区では縄文時代晩期の土壇1基を検出し、後期から晩期の土器、石器、自然遺物を含む自然流路を多数検出した。このうち流路17からは縄文時代としては県下2例目の漆塗り竪櫛が出土した。</p> <p>弥生時代の遺構では、Ⅱ区で中期の竪穴住居、掘立柱建物、土壇等を検出し同時期の流路からはまとまった土器の出土が認められた。調査区北半部のⅠ区では、後期後半の洪水砂で埋没した用水路と灌漑施設を検出した。また古墳時代後期の流路も検出した。</p> <p>古代では、須恵器・土師器を含む包含層が認められ、平安時代の須恵器甕を井筒に転用した井戸を検出した。この他に条里制に関連する可能性のある土手状遺構等も検出した。</p>							

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 219

鍛冶屋 D 遺跡

主要地方道佐伯長船線（美作岡山
道路）道路改築に伴う発掘調査 6

平成21年 3月19日 印刷

平成21年 3月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6

印刷 サンコー印刷株式会社
岡山県総社市真壁871-2